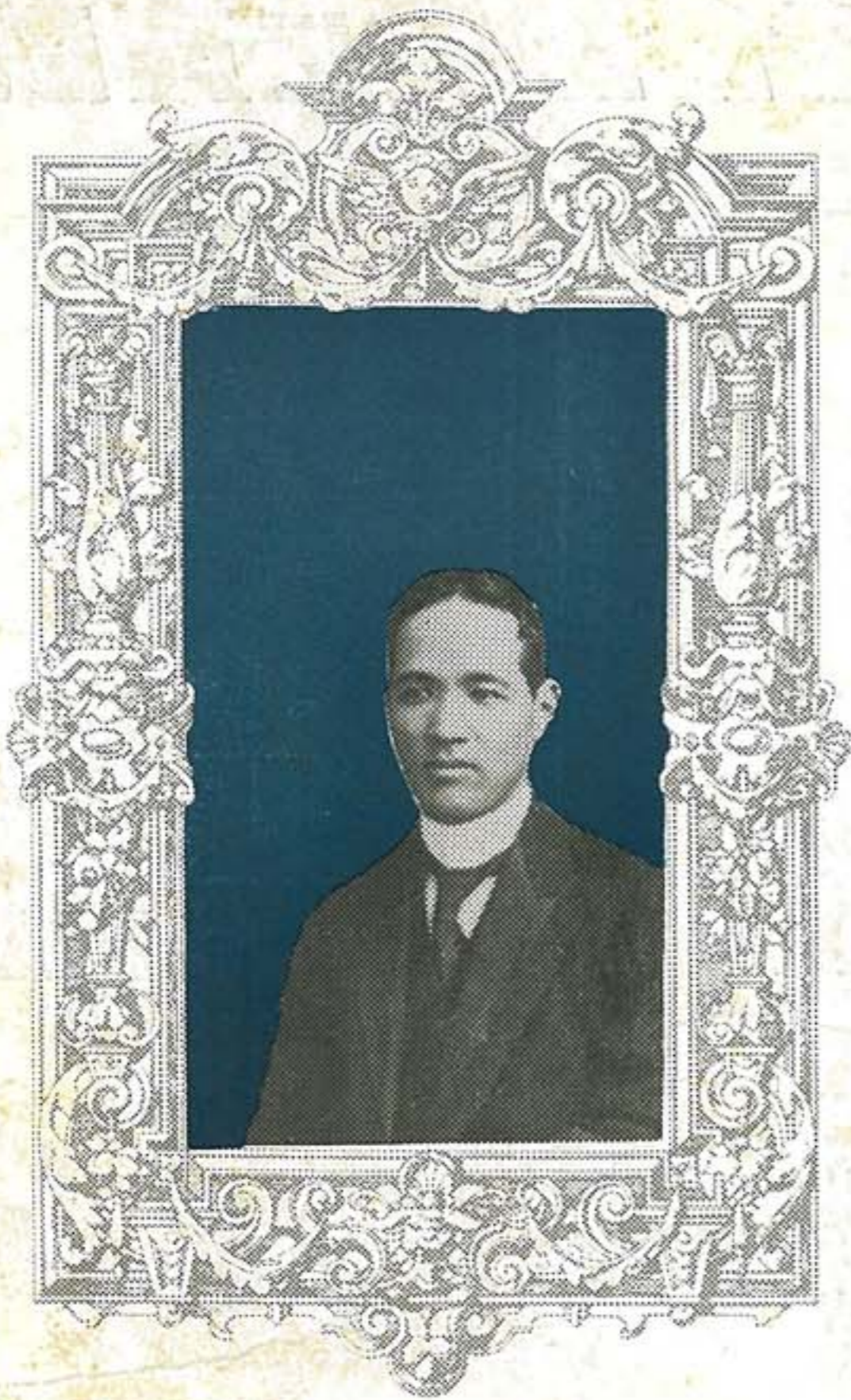


6563 154



大西猪之介教授特集号

緑丘

小樽商大同窓会誌
1969 NO. 64・65

昭和四十四年四月二十五日発行（隔月発行）

緑丘 第六五・六六合併号

発行所

兵庫県西宮市清水町一―一六
養目英三
緑丘
編集部



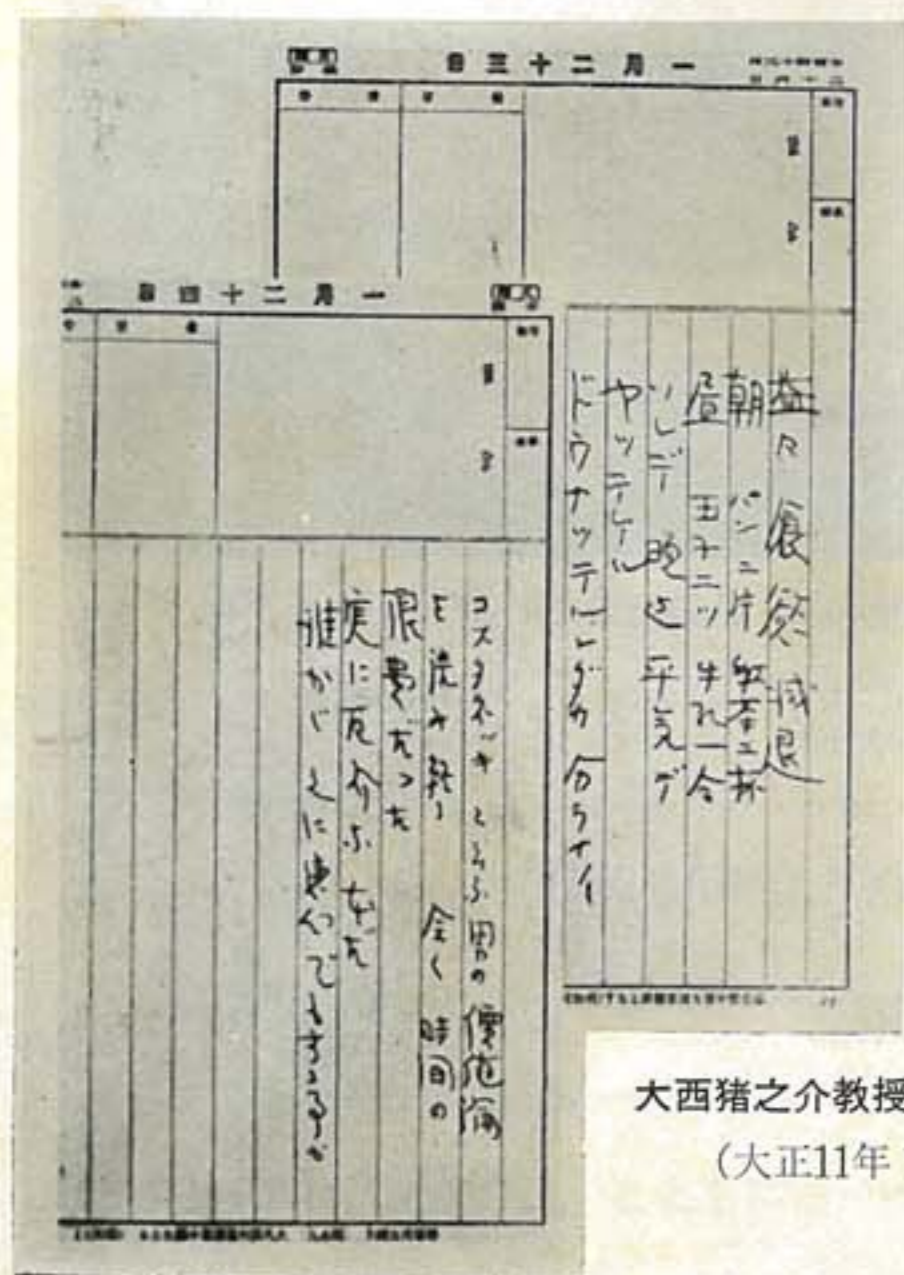
サッポロビールは 最初のうまさが続く

サッポロビールが90年の歴史のうちに育て上げた名酵母M₂。それが純粋なうまさをつくります。いやなニガ味やくどさがありません。だから何杯飲んでもうまさが続く。一度ぜひほかのビールと飲み比べて下さい。

味は本場の————ミュンヘン・サッポロ・ミルウォーキー

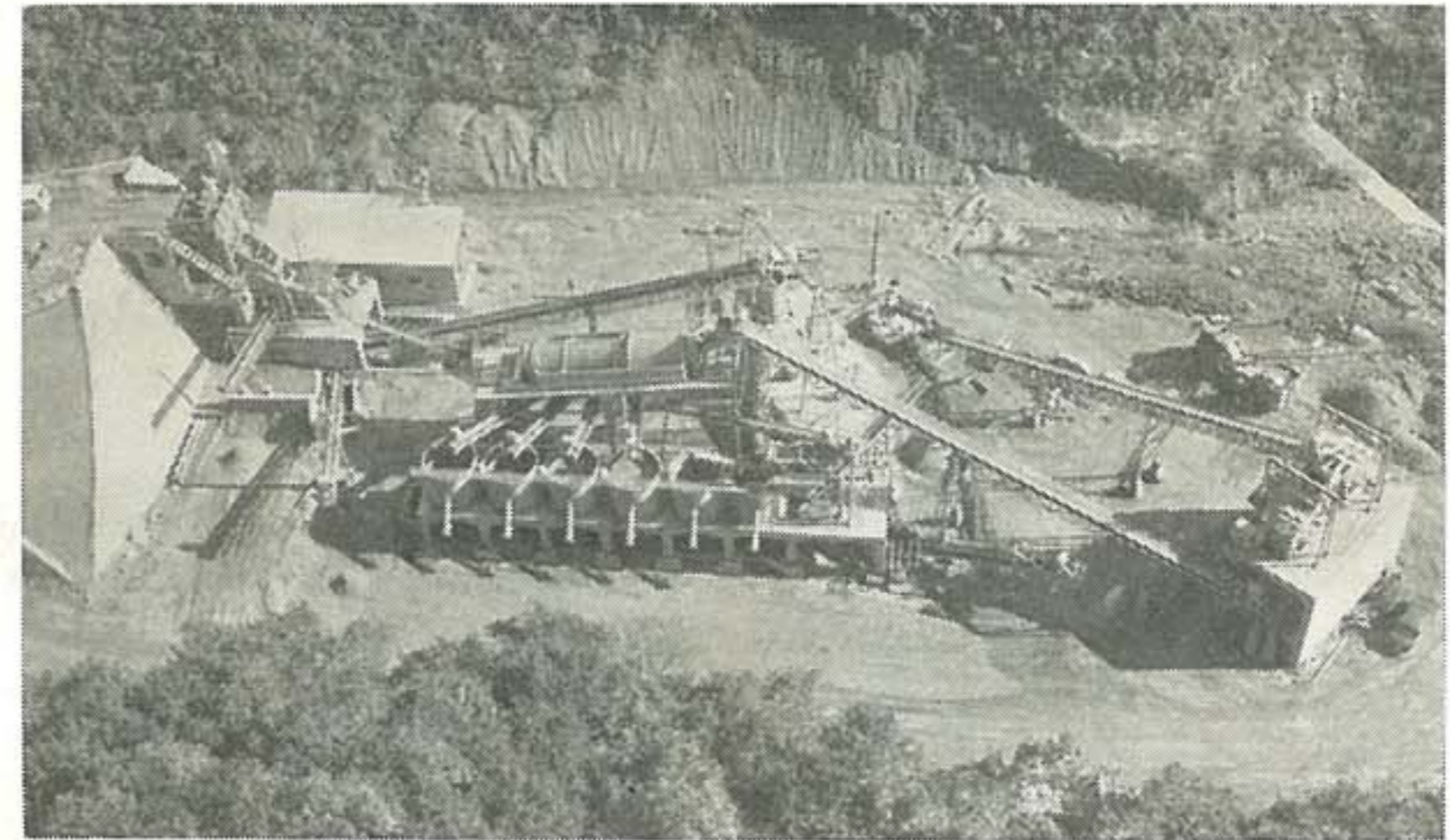


大西猪之介教授逝去の前年に於ける御家族
(大正10年5月)



大西猪之介教授病中日記
(大正11年1月23日)

国土総合開発に貢献する



KYCフロンテ

一営業品目一 砕石プラント アスファルトプラント バッチャースケール
砂利攪別プラント クラッシャー ベルトコンベアー
バッチャープラント コンクリートミキサー

KYC光洋 機械工業株式会社

代表取締役社長 奥村正美(昭17卒業)

本社 大阪市北区南同心町1丁目31番地 電話大阪(358)3521(大代表)

大阪支店 電話大阪(358)3521(大代表)	仙台支店 電話仙台(25)4441~3
東京支店 電話東京(254)5601~5	名古屋営業所 電話名古屋(221)7037~8
広島支店 電話広島(61)5101~3	高松営業所 電話高松(61)4391~3
福岡支店 電話福岡(43)6461~4	鹿児島営業所 電話鹿児島(2)3055・1650
札幌支店 電話札幌(24)9594~6	

《大西猪之介教授特集号 目次》

大西猪之介教授略伝

母校の伝統に脈々として流れる大西精神……………緑丘会理事長 佐々木 周 ……1

日本経済学史における大西経済学の地位……………亜細亜大学教授 猪 谷 善 ……2

つぐない難い日本経済学界の損失……………一橋大学名誉教授 高 垣 寅次郎…9

大西全集の編纂を回顧して……………駒沢大学大学院教授 南 亮三郎…10

先生の一通の手紙と私……………小樽商科大学初代学長 大 野 純 ……12

大西さんについて……………名城大学教授 椎 名 幾三郎…14

大西猪之介教授を憶う……………札幌商科大学学長 室 谷 賢治郎…15

緋絨着たる若武者……………東海大学教授 菅 谷 重 平…16

「囚はれたる経済学」の復版を願う……………商学博士 西 野 嘉一郎…18

大西猪之介先生を語る……………学習院大学 大 谷 敏 治…20

大西「社会主義論」を読んで……………広島大学名誉教授 中 野 清 ……30

ロング・ロング・ハンカチーフ……………映画評論家 津 村 秀 夫…34

「1冊の本—囚はれたる経済学」……………一橋大学教授 板 垣 与 ……35

読書力増進への啓発……………下吹越 栄 吉(大3)…36

断 簡 零 墨……………金 吉 忠 吉(大9)…37

忘れ得ぬ名講義—大西先生のおもいで

大西猪之介経済学全集を傍に置いて……………間 室 守 親(大8)…38

よき師にめぐり逢う……………西 村 百太郎(大8)…38

先生の講義に魅了される……………谷 本 明 次(大8)…39

婦朝直後の一ヶ月……………安 本 登 緑(大7)…39

和服を愛された先生……………湯 川 励(大8)…39

吉田松蔭木像に教授の面影が……………宮 崎 省 三(大3)…39

伊豆の旅(遺稿)……………板 倉 誠(大9)…40

思い出—断片風に……………佐 藤 武 市(大9)…42

「ミル」の原書……………大 泉 宗 次(大10)…43

大西教授を送った日……………越 崎 宗 一(大11)…44

大西先生の追悼会……………大 泉 行 雄(大11)…45

弁論部長としての大西先生……………宮 地 邦 介(大11)…46

伊 達 姿……………神 沢 重 治(大11)…48

長橋病院同病記……………野 界 作 成(大13)…48

「伊太利亜の旅」とともに……………中 田 新 平(大11)…49



小樽高商教授時代(大西全集5巻から)



神戸高商時代(大西全集10巻から)



(後列右から) 著 書・帝国主義論, 囚はれたる経済学, 伊太利亜の旅, 人口と国力
追憶号・大西教授の思い出(北方日本社版1925)

(前列右から) 愛読書・DIE RELIGION VON GEORG SIMMEL
Politischen Oekonomie
THE PICTURE OF DORIAN GRAY ; OSCAR WILDE
Kant. Sechzehn Vorlesungen
gehalten an der Berliner Univesität
von
Georg Simmel.

私の日記から……………	小橋 庸三(大11)…49
恩師考 大西猪之介先生……………	神戸 健之助(大12)…50
慾望……………	服部 兵吾(大13)…50
大西先生の御命日に……………	佐藤 信雄(大12)…51
大西随想……………	菅野 祐治(大12)…52
古い切り抜きから……………	西川 正己(大15)…54
大西さんのこと…緑丘新聞から……………	故 浜 林 生之助 教授…54
思い出づる事ども……………	故 相 沢 正 美(大11)…56
「伊太利亜の旅」の復版を望む……………	西川 正己(大15)…58
大西猪之介経済学全集(解説)……………	森 川 正 明(昭12)…60
大西猪之介経済学全集発刊のころ……………	水 垣 敏 正(昭5)…64
大西猪之介教授追悼座談会……………	66
辞を厚くして小樽赴任を乞う……………	小樽高商初代校長 渡 辺 龍 聖…75
子弟の教養と学問の研究とに捧ぐ……………	小樽高商二代校長 伴 房次郎…76
「大西猪之介経済学全集」紹介……………	東大名誉教授 大 内 兵 衛…85
大西先生に現われた6人の女性……………	東海大学教授 菅 谷 重 平…86
哲学者「大西」……………	法学博士 下 村 海 南…91
序言(大西猪之介経済学全集)……………	東京商大教授 徳 田 徳 三…93
「大西猪之介経済学全集」に寄す	
文明批評家としての大西君……………	法学博士 関 一…95
下宿を訪ねて語る……………	慶応義塾長 小 泉 信 三…96
大西全集は永遠の芸術品……………	法学博士 上 田 貞次郎…96
「囚はれたる経済学」と遺稿について……………	元小樽高商教授 手 塚 寿 郎…97
「大西教授の思い出」(北方日本社刊)から	
いい答案には140点など……………	宮 崎 省 三…99
ボンにて……………	早 川 三代治…100
大西君に就いての思い出……………	坂 西 由 藏…102
不思議な思い出……………	橋 本 博 介…103
大西猪之介君を追憶して(「人口と国力」から)……………	法学博士 津 村 秀 松…105
帝国主義論序文……………	107
大西猪之介全集刊行配本順序……………	107
大西先生の著作の批評……………	107
「緑丘」44年度申込者氏名……………	108

大西猪之介教授略伝

西、瑞西、更には「燃ゆるか如き憧憬」の伊太利を訪ずれ、クローチエ、パンタレオニ等の門を叩く傍ら心ゆくまで西歐文化の精髓を味わい、亜米利加を経て帰朝す。時に大正六年八月であった。

帰朝後、教授の主力は専ら講学に注がれて居たが、其の傍ら『囚はれたる経済学』の続篇——『生と学との距離』——を起稿し、小樽高商経済学教授就職講演の一節と副題して大正七年三月以降の国民経済雑誌に発表してより各種の評論雑誌に筆を断たず。教授の思想漸く円熟の域に達す。八年十月『伊太利亜の旅』を著わし、九年一月『囚はれたる経済学』を上梓す。其の警抜なる着想、峻厳なる論理、偉大なる批判的綜合力は、絢爛の筆致、大胆にして端的なる自己表現と相俟って今猶お読書子を魅了せずしては已まぬ。尚お、教授は留学前より社会政策

「日本に於ける開港を最もよく生きよ」(「アソシエーション」)とあり、晩年に於ける教授の主たる関心事は『経済原論』『経済史』及び『経済政策』の大成に在り、只管に彫刻を打ち加えつつあった。『経済史』は略ぼ意に満ちたるもの如くであったが、遂に業央ばにしてまた立つ能わざるに至ったのである。わが経済学界の先達、すでに教授に許すに斯界の鬼才をもってせらる。天藉すに齢をもってせるならんには、やがては赫奕たる一里塚を、斯学發達の道程に建立する天才たり得た事であらう。

(附記) 本略伝は、評論集『人口と国力』附録小伝、その他の資料に基づいて編纂者の新たに草し、夫人及び令妹の校合を経たものである。

大西猪之介教授略伝

故教授大西猪之介は明治二十一年十二月二十八日京都の一商家に生まる。父岩次郎、母友、その四男三女のうち、教授は次男である。長兄夭折の爲め父の意は専ら教授をして其の家業を継がしむるにあつたが、母は其の才気の敏なるを愛でて常に薫育を怠らず、幼少より漢学の師に就かしめ、且つ夫に勧めて教授の切なる志を遂げしむるに至つた。

明治三十一年三月京都滋野尋常小学校尋常科の課程を卒え、京都市立簡易商業学校を経て三十八年三月京都市立商業学校本科を卒業。同年四月神戸高等商業学校に入学して四十二年三月卒業。経済学に対する教授の深き趣味は、此の間列したる津村秀松博士の国民経済学講筈に於て培われ、心算かに其の研究に一生を捧げんことを希うに至つた。乃ち四十二年九月更に笈を負うて東上し東京高等商業学校専攻部に入つて経済学を専攻す。

教授その学窓に在るや、俊敏なる生得の頭脳に加うるに異常の克己力行をもつてす。雄勁の文章、流麗の辯舌夙くに聞こえ、学力また常に儕輩を抜く、師の嘱望と友の畏敬とを一身に聚め得たるは固より、其の所である。

明治四十三年九月専攻部在学中、津村博士編纂国民経済叢書第一冊として処女作『帝國主義論』を発表す。時に年齒僅かに二十三、而かも其の稿案は既に神戸高商卒業前後に成りいたるに拘らず、論構の雄大にして引証の広潤精到なる、当年、識者の認むる所となつた。これに踵いで姉妹篇『社会主義論』を起稿す。世未だ熟せずとして指導教授関一博士の、後転じて福田徳三博士の筐底に蔵めらる。

明治四十四年七月その専攻部を卒うるや、聘せられて小樽高等商業学校講師となり、大正二年一月教授に任命せらる。此の間、経済原論、経済史、経済政策を講述する傍ら、国民経済雑誌を籍りて絶えず研究を問い、また『経済大辞書』に二十数項に亘たる学説及び伝記を執筆す。因みにその前後、諸評論雑誌に散見せらるる「小西虎雄」とは教授の仮名であつたのである。

大正二年一月海外留学の官命に接し、国民経済雑誌に「囚はれたる経済学」の雄篇を残して故国を去る。初め独逸ボン大学にてディーツェル教授に理論経済学を学び、後ストラスブルグ大学に転じてジムメル教授に私淑し、深く其の哲学思想より影響を受く。然るに歐洲戦乱の勃発は教授をして永く其の地に留まるを許さず、急遽旅装を整え、和蘭を経て英吉利に逃がる。『歐洲戦時の経済』その他の論策は此の地にて成れるものである。通じて四年半の歳月、具さに研鑽を積みたる教授は、仏蘭西、瑞西、更らには「燃ゆるが如き憧憬」の伊太利を訪ずれ、クローチエ、パンタレオニ等の門を叩く傍ら心ゆくまで西歐文化の精髓を味わい、亜米利加を経て帰朝す。時に大正六年八月であつた。

帰朝後、教授の主力は専ら講学に注がれて居たが、其の傍ら「囚はれたる経済学」の続篇——「生と学との距離」——を起稿し、小樽高商経済学教授就職講演の一節と副題して大正七年三月以降の国民経済雑誌に発表してより各種の評論雑誌に筆を断たず。教授の思想漸く円熟の域に達す。八年十月「伊太利亜の旅」を著わし、九年一月「囚はれたる経済学」を上梓す。其の警拔なる着想、峻厳なる論理、偉大なる批判的綜合力は、絢爛の筆致、大胆にして端的なる自己表現と相俟つて今猶お読書子を魅了せずしては已まぬ。尚お、教授は留学前より社会政策

学会の幹事たり、而して国民経済雑誌に於ける其の大会記事は主として教授の筆に成れるものである。

講学及び著述以外に於ける教授の社会的活動は、相繼ぐ各地にての講演、及び思想的団体別けても小樽啓明会の指導であつた。これに依つて地方文化の開発振興に貢献するところ尠からず、「大西」の名は北門の人々に親しめるものの一つとなつた。

大正八年十一月、水梨岩太郎長女美穂子を容れて夫人とし、九年十二月一女を挙ぐ。貞子と名づく。

大正十年十二月、社会政策学会大会出席の機会をもつて湘南地方に高臥し、不慮、腸チブスを得て帰樽。爾来気分勝れざりしも自から其の悪疾を悟らず医師また之を知らず、単に感冒の手当を為すに止まり、力めて食い、且つ病を押して登校、平生に異なるところ無し。而かも一月下旬病兆漸く歴然、遂に小樽伝染病院に移る。二月八日、病遽かに革まり午後十時三十分永眠す。訃報一度び到るや全校愕然として色を失ひ、学界また深く其の訃を悼む。二月九日茶毘に附し、東京青山墓地に葬むる。

享年三十五歳。法号を大智院教督西順善道居士という。

教授は一面何人をも恐れざる強き闘争的個性の所有者であり、秋霜烈日寸毫も仮借せざる科学的真理の追求者であつたが、他面濃やかなる情操、豊かなる芸術的天分の保持者でもあつた。科学者の冷静と芸術家的熱情の融合渾一、其れが教授の真面目であつた。その語学上に於ける造詣は深くして英、独、仏、伊の諸欧語に通じ、その学は博くして常に自家専門の経済学に止まらず、哲学、社会学、文学に涉り、その鑑賞は美術、音楽、演劇にまで及んだ。もつて、教授の調和的にして多方面なる趣味性格の一面を描き得よう。

教授の講筈に列なるものは、その該博の智識、透徹の論理に皆齊しく襟を正し、時には持てる筆忘れて、進り出する教授の灼熱したる人生觀的断想に陶醉するのであつた。当年小樽高商学生間に行われたる談論の中心は多く教授に依つて与えられた学問的論題にかかり、その特色ある音声と抑揚すら何時しか一部学生の做うところとなつた。

教授の学問は同時に教授自身の生活であつた。経済原論に、経済政策に、教授の常に発足し又到達せる論点は、学理と政策との區別——「生と学との距離」であつたが、此の難問に答ふるに、教授は強く歩み来たれる己れ自身の生活をもつてした。而して教授が自己の生活信条としてその門弟に遺した最期の言葉は、「日々生きる瞬間を最もよく生きよ。」と云うことであつた。

晩年に於ける教授の主たる関心事は『経済原論』『経済史』及び『経済政策』の大成に在り、只管に彫刻を打ち加えつた。『経済史』は略ぼ意に満ちたるものの如くであつたが、遂に業央ばにしてまた立つ能わざるに至つたのである。わが経済学界の先達、すでに教授に許すに斯界の鬼才をもつてせらる。天藉すに齡をもつてせざるならんには、やがては赫奕たる一里塚を、斯学發達の道程に建立する天才たり得た事であらう。

(附記) 本略伝は、評論集「人口と国力」附録小伝、その他の資料に基づいて編纂者の新たに草し、夫人及び令妹の校合を経たものである。

私は明治四十五年三月に、郷里の河内、富田林中学を卒業して小樽高商に入學した。田舎者で何も判らないのに、当時、商業数学も独乙人フット先生から英語で教わるので面喰って居たのであるが、大西先生からは経済原論を原書で読みながら講義を聴いた。

仲々難解で、夜に日をついで勉強に追われたものである。それにつけても、今時の学生諸君は抗議集会とか、何とか、よく其の様な余裕が、どうしてあるのかと不思議に思う。

最近実方学長の「学問を忘れた大学生」と言うパンフレットを頂戴して、学生諸君が其の本分をデビエートして居ると云う御所論に共感した。大学生諸君、特に母校小樽商大の学生諸君が、青春の時を悔なく学問に励まれる事を切望する。

大西先生の追憶から横道に外れたが、当時大西先生の講義を聴き入って、恍惚として先生の風貌に魅せられて居た様に思う。

やはり、先生は稀に見る天才であったのだと考えられる。それにしても、私は一生の中に、此のような先生の教えを受けることが出来たのは、余程の幸運に恵まれたものと思つて感謝して居る。

当時、先生は二十五・六才であられたのであろう。私は二十才であった。東京高商の専攻科を出られ、講師として、渡辺校長の懇望により、多分外国留学

母校の伝統に脈々として

流れる大西精神

緑丘会理事長 佐々木周一

の条件付で、赴任して参られたのであろう。

兎に角、先生から経済学を勉強せよと言うような、説示の欠片も聞いた事はないのであるが、先生の講義を聴き先生に接して居ると、自然に読書し勉強せねばならぬと言う一種の雰囲気は圧倒せられたものである。

しかし、之は当時、私ばかりでなく全校全部の学生が、そうであったのであって、偉大な先生の感化というものは恐ろしいものである。

二年生の後半に入って、愈々先生が歐洲へ留学せられる事になり、其の送別の席上「囚はれたる経済学」と言う名題で、別れの辞を述べられた事を記憶して居る。当時、寄宿舎を廻って、寄宿舎別に送別会が開催せられたのであるが、大西先生の御話の後に渡辺校長の送別の辞があつて、経済学者でない渡辺校長が大西先生の所論に論評を加えられた。

私は第二回目の送別会に参列したのであるが、大西先生は「囚はれたる経済学」の話に入るや、其の冒頭に渡辺校長の校閲、訂正、第二版、最も過誤なき状態で所論を進めると説き出された。機智に富み、且つ上長間の美わしい関係が流れて感動したものである。

有名な「放たれたる経済学」と言う著書は、この送別会の席上に発表された「囚はれたる経済学」と表裏一体をなす訳で、其の構想実に妙を得て居る次第である。

私は学園を去つて、海外勤務となり、先生との関係は疎遠となつたので、其の後、警咳に接する機会がなかつたのであるが、朝日新聞社が招聘を申込んだと言う噂を風の便りに聞いたのである。若し其の事が実現して居て、先生の卓見を其の美文、名文で綴られたなら、世間一般が拍手喝采し、又社会全般に裨益すること大であつたであらうと思ふ。

天が無情にも、此の英才を若くして、奪い去つたことは、何としても痛恨の限りであつた。

先生の様な偉大な学者は仲々出現しないのであろうが、母校の伝統の中に、何かの形で脈々として流れて居る事を私は信ずる者であり、又、先生の教化の偉大さを称えんと共に、母校の教官に先生のあつた事を私は大いに誇りとする次第である。(昭和四三・一〇・八)

大西猪之介経済学全集十一巻をひもといて短時日の間に日本経済学史上における、その地位を評価することは仲々困難な仕事である。しかしこれを私が敢てする所以は日本経済学百年史を一応自分流に組立てて、その建築の上においてこの英才の占めた地位を外側から規定しようというのである。勿論個々の業績についての内面的評価については評価者自身の専門的知識にまたねばならない。特に人口論を以て経済原論の指導理念とした大西経済原論の構想については、日本人口学研究者の頂点に立ち、しかも故人と縁浅からざる南亮三郎教授の分析をまたねばならない。私はこの小論執筆に際し主として大西猪之介

日本経済学史における

大西経済学の地位

亜細亜大学教授 猪 谷 善 一

(元東京商科大学教授)

経済学全集第五巻、第六巻、第七巻を占めたその経済史的研究についてふれた。日本は産業経済的成長については世界の「ワンダー」といわれ、ロンドン・エコノミストをして二回にわたり日本研究をなさしめた。しかし文化的所産に対する国民大衆の認識は極めて低い。大学教授の専門的著述もその生存中は学生を対象として購読されるが、一度死去し或は定年などの理由から教壇を去るにおいては、そのすぐれた著述も忽ち散履のごとく古本市場へ捨てられて顧みられない。勿論例外もあるが、私はしばしば恩師の名著がこの有様であるの事情において忍びず、何冊も重複して購入しわが書庫に収めた。況んや死後全集本として存在するのは日本経済学百年の歴史においても真に稀である。福田徳三全集は先生の生前においてその名声天下を風靡していた時に、御自分で企画

経済学者というからには経済学を一生の専攻課題として研究し、その成果を発表すればよいのであるが、日本には日本独特の概念規定がある。それは経済学を大学で教授することが一つの要件となる。ジャーナリストとしての街の経済学者という語もある。また官庁、銀行会社に勤務している経済学専攻者に対しては、官庁エコノミスト、調査マンなどという言葉もある。この小論ではこれらの諸君は一応はぶく。

幕末から明治初期にかけて西欧経済学（アメリカ経済学もふくむ）を輸入し、西欧経済学を翻訳した人々は日本では第一世経済学者のいわば恩師であった。これらの恩師は大学教授（大学の数もすくない関係もあって）なることよりは、日本近代化にとって一層重要な任務を持っていた。その仕事に没頭しながら傍ら経済学を教授してその後輩指導をやったのである。この後輩のうちから第一世経済学者は出るのである。

私はこの第一世経済学者たちの恩師については別に研究したから、ここでは詳論しない（詳しくは猪谷善一稿、明治経済学史の一節、亜細亜大学諸学紀要、第十三号所収論文参照）。

西周（一八二九—一八九四）、津田真道（一八二九—一九〇三）の二人は文久二年、幕府からオランダに派遣せられて、ライデン大学教授シモン・ヴィセリングについて西欧経済学を勉強した。ヴィセリングは二冊本の経済学教科書をかいているので、それをテキストとして毎週二回その自宅に通い講義をきいた。しかしこのテキストは浩翰であるから翻訳の約束をしていた津田が果さなかった。テキスト自体は日本に持ち帰えられ津田真道の子息津田弘道から慶応大学図書館に寄附されて現在も無事である。私も一覽した。西、津田の両名は経済学の紹介については必ずしも熱心でなかったが、憲法、政治学、国際法、統計学などについてはその受講した講義を二人で手別けて翻訳し、明治の文化啓蒙に寄与している。この二人の持参したと思われるヴィセリングが英語からオランダ語に重訳したイギリス経済学者イリスの経済学教科書が、西、津田と開校教授として同僚である神田孝平（一八三〇—一八九八）の手許で邦訳された。これが慶応三年に出版された「経済小学」である（重訳本の原典が、慶応大学図書館に見当らぬ。故に以上は私の推定となる）。

三人の官学者に対し二人の街の学者がいた。福沢諭吉（一八三四—一九〇一

せられ実行された。死後実現されたものには村瀬春雄先生の村瀬保険全集（二巻、大正十五年）、堀江帰一全集（十巻、昭和四年）、上田貞次郎全集（未完）左右田喜一郎全集（五巻、昭和六年）、櫛田民蔵全集（五巻、昭和十年）、河合栄治郎全集（十一巻、昭和二十六年）、その他河上肇全集、矢内原忠雄全集、小泉信三全集（刊行中）などがあるにすぎない。

この意味において大西猪之介教授は偉材をいだいて夭折したとは謂え、恩師先輩の津村秀松、関一、左右田喜一郎の慈愛の腕に抱かれ、懇情密なる敬友高島佐一郎、大西経済学を理解することの頗る深い愛弟子南亮三郎を擁して、その生前印刷された著書、論文は固より、加えて教壇よりなされた講義ノートを、大西猪之介経済学全集十一巻に収録せしめたのであって、学者としては真に稀有に恵まれたことである。全集本に輝く陸離たる見解は三十五才の若さで世を去った英才の見解であり、更にこの上に五十年の思索と練磨を与えてリファインしたならば、その論作はいかに日本学界を裨益したであろうかを想像することが我々をしてその夭折を悲しませるのである。

大西猪之介教授は明治二十一年の出生である。私は大体の分類として明治二十年前後から明治三十年前後に出生した経済学者を日本経済学者の第二世と数える。

東大出身では土方成美（明治二十三年）、河合栄治郎（明治二十四年）、本位田祥男（明治二十五年）、一ツ橋出身では高垣寅次郎（明治二十三年）、高瀬莊太郎（明治二十五年）、金子鷹之助（明治二十五年）、三田出身では高橋誠一郎（明治十七年）、小泉信三（明治二十一年）、増井幸雄（明治二十一年）、早稲田出身では北沢新次郎（明治二十年）、上坂西三（明治二十一年）、阿部賢一（明治二十三年）、京大出身では高田保馬（明治十六年）、本庄栄治郎（明治二十一年）などが大西教授に年令的に近いコンテンツポラリーの経済学者である。是等の諸経済学者について私自身のパーソナルなコンタクト、その著作を通じて知った知識などを基礎として若干のイメージを紹介したいと思う。ただし大西経済学もこの第二世経済学に属するからである。

第二世経済学者の概念構成を明確にするために、そもそも第一世経済学者と一体何であるかについて語らねばならない。

と田口卯吉（一八五五—一九〇五）である。前者は上野の森にこもった彰義隊に対する官軍の砲撃の巨音をききながら、ウェーランドの経済学教科書を学生に講述したという。後者はロンドンのエコノミストにヒントを得て東京経済雑誌を明治十二年に創刊し経済学の民衆化に貢献した。

西、津田、神田、福沢、田口の翻訳したり、紹介した西欧経済学の原典は一口にいえばイギリス流のクラシカル・スクールであった。明治維新政府が近代化のモデルとしたドイツ流、アメリカ流の保護政策とは距離があった。福沢なり田口の論文を読むと明治政府にたてをつくための経済学という印象を受け

る。この距離を抹殺してドイツ流の歴史派経済学を輸入して、東大学生に講義し、多数の経済行政エキスパートを養成し、その手で官僚経済学を作りドイツ流の産業及び労働保護政策を実行せしめたのは田尻福次郎であった。

田尻福次郎（一八五〇—一九二二）は旧鹿兒島藩士であり、嘉永三年の出生であるから西、津田、神田、福沢よりは十五才以上も若い。田口よりは五年の先輩であるが、田口の方が実際社会で活動したのが早かった。田尻は最初政府から派遣された留学生であるが、制度の変更で学費が杜絶え苦学して、アメリカ合衆国に滞在すること九年、ハイ・スクールを経て、エール大学に留学し、マスター・オブ・アーツの学位を得た経済学の専攻者である。エール大学のサムナー教授が推薦したのであるうか、ロッシェルの経済原論アメリカ版訳本二冊を繕読して得るところがあった。明治十三年帰朝してかつて在校したことのある慶応義塾の福沢諭吉の紹介により、大蔵卿として明治政府に勢威ならびない大隈重信の知遇を得て大蔵省に就職した。同時に東京大学の講師として自分も心酔しているロッシェル経済原論を講義したのである。この講義は聴講学生に影響するところ大であった。聴講学生の一人はいわゆる「ロッシェルの学風は従来の理論経済学に代うに、実証研究を以てし、経済史実の研究に目を注いだものであって、本邦経済史学界に於てこれを講述したことは一劃期をなすものであろう」（平沼淑郎、経済学学習時代の思い出、早稲田大学経済史学会編、経済史学第三号）。

聴講学生の何人かは卒業後ロッシェル経済原論（アメリカ版）を巧みに解説し、あるいは部分訳して、自分の著書として出版している。（例えば平沼淑

郎、通信教授経済学、明治十九年)。日本の経済学説研究者はロッシェル経済原論との対比を怠ったために、これらの経済学者の著作を非常に学術程度の高い業績として評価する誤りをおかした(例えば堀経夫、新修明治経済学史、昭和二十三年、吉田秀夫、日本人口論の史的研究、昭和十九年)。

田尻福次郎の本職は大蔵省官史であり、累進して課長、局長、次官となり、やがて会計検査院長、東京市長を歴任する。その功績により貴族院議員に勅選せられ男爵を授与され、さらに子爵にも昇格する。しかし東京大学、東京専門学校(後の早稲田大学)、東京高等商業学校(後の一ツ橋大学)、自分も創立者の一人である専修学校(後の専修大学)において講師として経済学、財政学を講義することを一日としてやめなかった。

その著書も「財政と金融」をはじめとして多数にのぼる。ゼボンス「貨幣論」ソールド・ロージャス「経済史眼」などの翻訳もあるが、いずれも忠実な全訳でなく解説的翻訳である。これから述べる第一世経済学者にして田尻の講義を聞かざるものはなく、田尻の著書を読まざるものはなかった。

田尻は東大講師として、経済学を講義すると共に多数の人材を簡抜して自分の勤めている大蔵省に送りこんだ。そして機会ある毎に彼等に専修学校などで経済学、財政学、商業学を講義させ、またその著書の出版を勧説した。当時東大において経済学は法科大学の課目であり、学位もまだ経済学博士はなく、みな法学博士であった。この学位は大別して総長推薦と博士会の選挙と論文審査の三種類があった。多くの田尻門下生は日本で第一番目に経済学の分野から法学博士となった田尻先生のとを追って、順次法学博士になった。恐らく博士会における田尻の推挙力大なるものがあつたであろう。大学教授である経済学者を別として、経済学の分野から本職の大蔵省などの政府官吏で法学博士を得たものは次のときのものであつた。添田寿一(明治十七年東大卒業、明治三十一年大蔵次官、明治三十二年博士会推薦)、阪谷芳郎(明治十七年東大卒業、明治三十三年大蔵総務長官、明治三十三年博士会推薦)、水町聖彦(明治二十二年東大卒業、明治四十年大蔵次官、明治四十一年博士会推薦)、井上辰九郎(明治二十三年東大卒業、明治三十五年日本興業銀行理事、明治四十年博士会推薦)、小林丑三郎(明治二十七年東大卒業、明治四十年台湾総督府財務局長、明治四十年博士会推薦)など。

東京大学に對抗して経済学、商業学の分野において独立国の誇りを示したのには高等商業学校であつた。明治三十五年神戸高等商業学校が設立されるまでは全国唯一の官立高等商業学校として早くから商業大学設立を念願とした。明治三十四年二月二十四日たまたまヨーロッパに留学中の一ツ橋関係者がベルリンに会合して商業大学設置の必要を決議した。決議者は神田乃武、福田徳三、関一、石川文吾、石川巖、津村秀松、滝本美夫、志田鉦太郎の八教授であつた。

この八名の留学生のうち半数はベルギーから馳せ参じた。関一、津村秀松、石川文吾、石川巖である。当時ベルギー国アントワープ高等商業学校は商業学の権威ある研究機関として、多くの一ツ橋留学生を引きつけていた。その先駆者の一人は村瀬春雄(一八七一一九二四)であり、明治二十二年高等商業学校を中途退学してベルギーへの留学の途を選んだ。矢野二郎校長の実務的商業学にあきたらずしてより高い理論的商業学の研究にこがれた結果の挙であつた。優秀な成績でアントワープを卒えると共に直ちに母校教授になったが、明治二十八年には早くも退官して帝國海上火災保険会社の幹部に迎えられた。しかし母校講師として保険学を講ずることは死の間際まで続く。この次に述べる福田徳三に次ぐ一ツ橋出身者としては第二号の法学博士号所持者となる。生前の講義は村瀬保険全集一巻に集大成された。その門下生より田崎慎治、藤本幸太郎、加藤由作、椎名幾三郎などの保険学者が出た。村瀬は本職の教授でない、別に本務があるが、度々おこる一ツ橋の紛争には兄貴分としての内面的取りまじめに貫録を示している。(村瀬先生に關しては猪谷善一稿、村瀬春雄先生の手沢本、その他「村瀬春雄博士の面影」昭和三十九年収録論文参照)。

東大における金井の地位を持ち、経済学的貢献度においては金井以上の実績を示したのは福田徳三(一八七四一九三〇)であつた。

母校卒業後文部省留学生としてドイツに渡りミュンヘン大学においてブレンタノに認められ、ドクトル論文「日本経済史論」(ドイツ語、坂西由蔵による邦訳版もある)を刊行して帰朝した。そのゼミナールよりは左右田喜一郎、坂西由蔵、田崎仁義、大塚金之助、手塚寿郎、井藤半弥、赤松要、大熊信行、中山伊知郎、宮下孝吉などのすぐれた経済学者を出した。

福田徳三の同時代経済学者は一ツ橋において佐野善作(一八七三一九五二)と、関一(一八七三一九三五)の二人であつた。しかしこの三人は必ずし

東京大学の経済学は田尻福次郎による歴史派経済学の導入によって至大の影響をうけた。さらに外国人教師としてドイツ経済学者が招かれた。その前には日本美術の紹介者として著名なフェノロサがハーバード大学卒業後、ただちに渡来し明治十一年乃至十九年まで奉職した。哲学や社会学と一緒に経済学も講義した。ジョン・スチュアート・ミルの経済原論を講義したのである。しかるに明治十五年になるとドイツからラートゲンが来朝し、二十三年まで滞在した。彼は新歴史派経済学に属する経済学者であり、滞日研究の一として「日本の国民経済」一巻をかき、シュモラー研究叢書の一冊として出版した。同書は当時法科大学の学生であつた金井延が資料蒐集の助手をやっている。序文にも金井の名前が引用されている。ラートゲンのあと、引き続きドイツからエッゲルト、ヴェンチーヒと続くのである。

ロッシェルは旧歴史派経済学の代表者であつたがもう古い。現実のドイツは新歴史派経済学時代であつた。ワグナー、シュモラー、ブレンタノの名前がドイツから渡来したドイツ人教師により伝えられた。経済学を一生の専攻テーマとして研究しようという若い学徒は、直接ドイツに渡航して新歴史派経済学者から教えを受けんと思う。その第一号は金井延(一八六五一九三三)であり明治十九年ドイツに留学し、ワグナー、シュモラーのゼミナールにも出席した後明治二十三年に帰朝した。帰朝後法科大学教授となり「社会経済学」一巻を著述した。河合栄治郎はその娘婿である。東大経済学部独立に際し河合は本位田祥男と共に農商務省から転職した。土方成美はすでに法科大学助教であり新学部に移属したのである。

学習院教授として経済学を講じ、工場法施行資料としての「職事情」を桑田熊蔵、広部周助と共に全国を歩いて調査し後に住友の別子銅山支配人に転身した久保無二雄(一八六八一九三六)も、明治二十年ドイツに渡航して十三年間もドイツに滞在し専ら経済学を学んだ。終りの頃はシュモラーに師事した。和田垣謙三(一八六〇一九一九)、新渡戸稲造(一八六二一九三三)高野岩三郎(一八七一一九四九)、山崎覚次郎(一八六八一九四五)、河津運(一八七五一九三九)なども相前後して留学し、この流れに裨したのである。

も仲が善くなかつた。津村秀松、関一の門下生である飯島幡司の語を引用すれば「この三人は学生時代からの友達でありながら必ずしも仲のよい間柄ではなかつたようである。関先生はむしろ神戸の津村博士と親しく交つておられた。それが縁になつて津村さんの岳父にあたる小山健三さんの斡旋で先生(関)が大阪へ来られることになつたのだと聞いている。小山さんは文部次官から三十四銀行(同行と鴻池銀行と山口銀行が合併して現在の三和銀行となる)の頭取に移つて来た人で、大阪財界に重きをなす存在であつた」(関市長小伝、八四頁、昭和三十一年)。

三人が表面上決裂する前に福田徳三は、松崎蔵之助校長と喧嘩して明治三十七年休職となり、関一は大正三年大阪市助役として転身して行った。唯一人兄貴分として母校に頑張つた佐野善作は蠟光亀(一八七六一一九四〇)、三浦新七(一八七七一一九四七)、上田貞次郎(一八七九一九四〇)という数年若い後輩と提携して母校の昇格運動や、母校昇格後の措置を推進せねばならなかつた。上田貞次郎日記にいう、「一ツ橋の指導的人物は前に関、福田、佐野の三人であり、次いで堀、三浦、上田の三人であつた。前の三人は何れも秀才、世才の秀でた人物ではあつたが相互に相和せざるが為、無用の混乱を起した。後の三人をこれと比較するに三浦の学問は外面的では福田に及ばず、堀の事務も佐野に及ばず、上田は関の如き辛辣さを欠いているが、併し私心を去って共同の事業の爲めに尽すという誠意に於ては、三人とも前の三人を凌いでいたと思う」(上田貞次郎日記、大正八年一昭和十五年・七〇頁)。

やがて佐野善作は一ツ橋出身者として大正三年初代高商教授となり、さらに昇格後の大正九年に初代商大校長となつた。堀、三浦、上田の三幕僚教授を従えて一ツ橋には暫く静穏の日が続く。三浦ゼミナールは少数精鋭主義といふのか三浦という不世出の日本的ランプレヒトの遺録をつがねばならぬ学者は、寥々たるものである。村松恒一郎、上原専録を数えるにすぎない。学問を続けようという学生はほとんど全部上田ゼミナールに参集した。学園強化の必要上これらの学生の中から多くの人材が第二世経済学者として学校に残り、海外留学に派遣された。上田ゼミナール出身者で母校教授になつたものには太田哲三、上田辰之助、金子鷹之助、緒方清、増地庸治郎、猪谷善一、山中篤太郎、美濃口時次郎、小田橋貞寿などの多きにのぼる。

佐野善作も井浦仙太郎、内藤章、高垣寅次郎、高瀬莊太郎、山口茂を母校に呼び入れた。堀光亀は後進学者の養成に成功せず僅に渡辺大輔、伊坂市助が母校に残った。

明治三十五年第二官立高等商業学校が神戸の名を冠して設立された。既に一ツ橋教授として優れた行政手腕と豊かな人材擁力を示した水島鉄也が校長に任命せられ、津村秀松、内池廉吉、原口亮平、田崎慎治などという一ツ橋出身の新進学者が神戸高商教授として育って行った。

津村秀松(一八七六一一九三九)は和歌山の人、明治九年生まれ、三十一年高商卒業、三十三年専攻部卒業である。設立予定の神戸高商教授として卒業後留学し新設高商において経済学を講じた。そして三十才に達した明治四十年には「国民経済学原論は国民経済学中の至難に属す。されば欧米の学者は其齢五十にしてこれを出し、六十にしてこれを出し七十にして初めてこれを出す。我れ今漸く而立に達し此書を出す。内に省みて忸怩たる無き能はざる也」という序文をつけて上下二冊本、一四三頁の大著「国民経済学原論」を公刊した。流麗光彩の大著述であって、新歴史派経済学者が執筆したいろいろのテキストを要領よくまとめた。神戸の就任と共に、かつて一ツ橋高商校長であり、今や三十四銀行頭取である小山健三の娘久子と結婚した。

関一は津村より三年年長の兄貴分であるが、さきにもふれたごとく津村とは性格が合うのか非常に昵懇であった。関一の代表作工業政策も津村秀松の代表作国民経済学原論もその論述の仕方において、結論の出し方においてある種の類似点がある。兩名共に海外留学生時代のある年月をベルギーに送った。

経済学者として最も油の乗っていた津村の経済学を大西猪之介が神戸高商生として三ヶ年親炙した。このことは津村秀松編国民経済叢書第一冊として出版された大西猪之介の処女作「帝國主義論」に附せられた津村秀松執筆の序文に明快に指摘されている。いわく「大西君は京都の人、聞くに経済学の研究に志あり。日頃多年研鑽の結果を齎し来って示さる。……言々悲壯、語々痛切、愛國の熱淚滂沱たるものを覚ゆ。而も徒らに大言壯語するものにあらずして、一々史実に照し、統計に徴して以て確固たる論拠あるもの、寔に学者研究の体度を失せざるものと謂可し」と。

大西も「帝國主義論」の参考文献解説のところで津村教授に次のごとく感謝

る可からざる貴い記憶の主であることは、私は敢て断言する。同君が関博士ゼミナールに於ける隠忍的二ヶ年の学問的生活の賜であると。

大西全集が完成せられた暁、恐らく私の愛読禁じ能わざるであろうと思われるものは何れも、関博士の感化に帰す可きもので其の以前以後のものには到底然る能わざるものであろうと思う。大西君が津村博士の感化を最も多く受けられたことは、同君のために残念此上もなき事と私は確信する。また後に至りて左右田博士の影響を其の善い方面よりは寧ろ悪い方面に於て——甚だ多く受けられたことも残念なことである。私は其の最も善い時代に於ける大西君の一著作たる、此の社会主義論——其れは大西君の著作としては決して第一位に置かるべきものでないは言う迄もないが——が、同君の全集中に組み入れられることを衷心の喜を以て歓迎するものである。(大西猪之介経済学全集、第十巻収録)。

この序文は昭和二年二月二十四日の日附を有し、福田先生が一ツ橋の学内問題で荒れ気味の時節にかかれた原稿であるが、さりととは思いつつ歯にきぬきせぬ珍らしい序文とはなつた。

福田という学界の権威者から「学問も人間も余り好きでない」ときめつけられては、一ツ橋に残ることは思いもよらない。母校の神戸高商においても福田の愛弟子である坂西由蔵が、津村と対抗するだけの実力者となつていたと想像されるからそちらに帰参することも叶わない。幸い小樽高商の校長渡辺龍聖という救いの主が現われる。大西が示した外国留学という条件も呑んでくれてここに緑丘は白馬天を馳らんと意気に燃えた大西猪之介を新進教授として迎えた。四年半という外国留学を終えてから新鮮卓抜な講義が雄弁に緑丘において語られ若人の血をわかす。さらに小樽において彼は北海道の新興財閥である栗林五朔の右腕とうたわれた水梨岩太郎の娘美穂子と幸福な結婚生活に入り、この世における唯一の遺子貞子をもうけた。

緑丘はこの熱血の青年学徒を尊敬し心酔し、大西全集出版可能のバック・ボーンとなり、その死後五十年近い今日においても同志が「大西猪之介先生特集号」発刊の計画を持つというのであり、まこと近頃聞くことのできない学界、いな、人間社会の美譽を示してくれる。

の辞を捧げている。「神戸高等商業学校の経済学教壇は教授(津村)あるに依りて其生命を發揮す。余の嘗て同校に学ぶや其講筵の末席に列するの光榮を有する事前後通じて三ヶ年経済学上の智識の基礎、総て皆この間に築かる。……浅学非才敢て自ら掃らず、拙稿を以て大方の識者に教を乞うの勇氣と大膽とに至つては、此の如き恩師の在らずに非ずむば到底余の有せざる所、本書の中若し二脈の生命の文字以外に流るるものあらば、其は謹むで教授の学恩に帰せむとする処也」(全集本、第九巻、五七六頁)と。この大西の処女作は神戸高商から東京高商専攻部に移った在学中の明治四十三年九月に出版せられ江湖の喝采を博した。白面の一書生にこの大著述あることを天下の識者に示した。しかし津村秀松より専攻部指導教授として紹介された関一は、大阪市役所に転身の交渉中であり、卒業論文の審査は福田徳三に廻された。

和歌山出身者はなんの因縁か由来福田徳三と相容れなかった。滝本美夫はもと福田と非常によく、同県人の上田貞次郎を推挽して、ドイツより帰朝直後の福田に対して上田の才能を認めしめ上田を母校に残すのに成功したが、滝本自身いつしか福田と離れ申西事件のあと、母校教授を辞職し恐らく津村秀松の口ききであろう、津村の岳父小山健三が頭取である三十四銀行に入行して台北支店長として内地を離れて行った。同県人の下村宏は銀行員の代用品はいくらでもいる、財政学者滝本は容易に得がたい人材であると惜しんでいるが、その通り。しかも台湾で発病し内地に帰って病死した。上田も福田の松崎蔵之助校長衝突事件に際し、福田から自分の味方でない、いな、松崎のスパイであるという誤解を受け暴力を受ける。

爾来二人の間には冷い空気が流れる。津村秀松に対しても福田はいろいろと悪感情を示した。この津村の愛弟子であり、また自分と相容れない関一ゼミの大西の卒業論文に対して尋常でない処遇がなされた。大西の「社会主義論」と題する卒業論文は福田の手中に私蔵せられ、大西全集の編纂者の格別の努力によって、福田から取り戻しこれを全集中に公刊し得た。この間の事情は福田自身が露骨に直截に述べている。いわく、「正直に云えば私は大西君の学問も人物も余り好きではない。同君の余りにも一方的に鋭い而して余りに細い物の見方や歯切れが善い様に見えて、其の余り歯切れのよくない物の言い方は、私は決して共鳴し得ない処である。然し其の大西君が個人としては私に取って忘

私は大正六年に一ツ橋に入学したから大西猪之介という評判の高い偉材のパースナルな印象を持たない。「囚はれたる経済学」や「伊太利亜の旅」の読者として自分なりに大西経済学を評価しただけであった。大正十二年の夏休みに恩師上田貞次郎先生が、北海道庁に招待されて全道何ヶ所かの都会地で「日本の産業革命」という題目で巡回講演された。東京商科大学助手に任命されたばかりの学者の卵である私は、先生の命令でカバン持ちの旅行に出た。先生が私に北海道見物をさしてやろうという思いやりであったと思う。室蘭で栗林五朔氏が一夕先生と私を招待してくれた。何とかいう粋な料亭の奥座敷で栗林氏から大西教授の死去にいたるまでの巨細を聞き、大望の中道にして倒れた不運の若い経済学者を想い貫い泣きをした。先生もそうであつたらう一緒に早々と宴席を引きあげた。

以上私は、第一世経済学者と第二世経済学者につき、東大と東京高商、神戸高商につき述べた。さらに早稲田、慶応、京都大学、北海道大学などの経済学者についても論及したい心構であったが、スペースは既に超過した。さきを急ごう。

四

幕末西欧経済学を日本に翻訳し、紹介した先覚者と同様に第一世経済学者の仕事もおおむね西欧経済学者のテキストの翻訳が多かった。第一世経済学者のNO.1である金井延の「社会経済学」はシェンベルヒの翻訳であるという批判に対し、娘婿の河合榮治郎は「たとえ翻訳だとしても明治年間の社会科学書で、結局翻訳に類似しないものが幾許あるうか」と抗弁した。福田徳三は語学に強い関係もあってその経済学講義の種本は時代により変わった。明治年代の学生諸君はマシヤル経済原論の講義を受けたのであり、その講義はやがて一巻の「経済学講義」(明治四十二年)となつた。私が学生時代に聞いた講義はリーフマンの経済原論(大冊二巻本)であり、先生は原書を教壇上に置きながらペラペラまくって流暢に講義された。翻訳経済学を最も嫌った上田貞次郎先生自体も私の学生時代に「商工経営」を担当されたが、まだ御自分の体系が完成されていなかったのであらうか、シュモラー経済原論中の企業論の部分を翻訳して講義されていた。こういう関係もあって第一世経済学者には翻訳書または解説書が多い。例示すればジョン・スチュアート・ミル原著、天野為之訳高

等経済原論、明治二十四年。ワグナー原著滝本美夫解説ワグナー氏財政学、明治三十七年。フィリップovich原著賀賀重解説、経済原論及び経済政策、明治四十五年などがある。

二世経済学者としては何とかして自分の経済学を作りたいという意欲に燃える。しかし恩師である一世経済学者の命令で手習いに翻訳から出発する。手習いを卒業してまともな体系を作ったものもあるが、一生を手習い時代で終るものもある、千差万別である。二世経済学者の翻訳を挙げれば、ゼボンス原著小泉信三訳経済学純理大正二年、セー原著増井幸雄訳経済学大正十五年、マーション原著大塚金之助訳経済原理大正十五年、レキシス原著田辺忠男訳経済原論大正十三年、レーダー原著有沢広己、大森義太郎訳理論経済学概論大正十五年、クルノー原著中山伊知郎訳富の理論の数学的原理に関する研究昭和二年、レオンワルラス原著手塚寿郎訳純粋経済学要論昭和八年などがある。

二世経済学者の早いものは第一次大戦以前に西欧にわたり、戦争の勃発に遭って右往左往した。大西は大正二年ドイツに留学し、ボン大学のドイツ語、ストラスブルグ大学のジンメルに私淑したが、第一次大戦の勃発と共にイギリスに、さらにフランスに最後にイタリアで勉強する。そして大正六年八月に帰朝した。小泉信三も大西と同年の明治二十一年生まれであり。明治四十三年慶応の政治科を卒業して母校に残り大正元年九月留学して、滞独中開戦に会いロンドンに逃げ出し、二世経済学者中の異色の存在である大西と小泉はロンドンで会いしばしば議論を交わしている。大西は福田に嫌われ、小泉は福田のベットでありまことに面白い取り合わせである。

二世経済学者のおそいものは第一次大戦と共に西欧に留学しインフレや社会運動の目ぐるましい動乱を自ら体験する。マルキシストになるものも出てくる。一ツ橋の大塚金之助、金子鷹之助、孫田秀春らの諸君は西欧を襲ったインフレで文庫を手離すことになったカール・メンガー家と交渉し、左右田博士の寄附金で購入に成功し日本に持って帰る。一ツ橋、いな、日本経済学界の宝庫はかくしてできた。

二世経済学者は経済学の隣接部門から経済学強化の援兵を仕入れた。第一は哲学であって、新カント派特にリッカートの自然科学と文化科学に対する認

識論を経済学に導入した。これはもと左右田博士の滞独中のドイツ文の二書「貨幣と価値」「経済法則の論理的性質」で試みられたところであり、滞独十年から大正三年帰朝した左右田博士は帰朝後の講演や論文で、新歴史派経済学にのみなじんできた経済学徒に対し新鮮な強烈な光線をあてられた。大西は最も強くその影響下に立った。その留学前の論文、帰朝後の論文（一書にまとめられ「囚はれたる経済学」という）にその影響は滲み出ている。しかもドイツ留学中には「貨幣の哲学」の著者ジンメルに師事し、その経済哲学的厚さはさらに高くなった。

しかし大西全集中に収録された経済史上中下三巻を読むと、経済哲学的色彩はさまで強くない。むしろシュモラー、ゾンバルトなど新歴史派経済学者、イギリス歴史派の巨将のアシュレーの著書論文に関するすぐれた紹介が多い。日本経済学界は百年間において理論経済学界においては無論のこと、経済史学界においても急速な成長をとげた。西洋経済史についていうと原典に依拠した個々の学者の独創的見解にまで進歩した。大西経済史三巻はその包括力の幅において、研究の対象の厚さにおいて断じて最近経済史学の進歩におくれをとらぬ。

また大西経済史は比較経済史の重要性を指摘している。西洋のギルドと、日本、支那のギルドの相違を指摘したり（大西全集、第六巻、三一七頁）、日本の都市経済と西欧都市経済の相違を指摘したり（囚はれたる経済学、二五九頁）している。彼に仮すに若干年の歳月を以てするならば、比較経済史の方面においても貴重な研究をなしたであらうと思われる。

二世経済学者にして心理学から経済学の強化を試みるものあり（高垣寅次郎）、社会学から経済学、商業学の高度化を計るものあり（高田保馬、高瀬莊太郎）数学を経済学に応用して、数理経済学を樹立せんとするものあり（中山伊知郎、杉本栄一）歴史学から経済学特に経済史学の拡大強化を計るものあり（西洋史からは本位田祥男、野村兼太郎、日本史からは本庄栄治郎、黒正巖、土屋喬雄、猪谷善一）、二世経済学者の努力は多方面、多種類であり、これがいづれの形態で現代の経済学につながる。

しかしさきに言及したごとく、二世経済学者にして第一次大戦中の社会思想、社会運動の激動期に生活して、恩師の排撃したマルキシズムに心酔するも

のが現われた。第二次大戦はこの影響をさらに深刻化し、現代経済学は二世経済学による新経済学の建設とは別に、思想上からマルキシズム経済学と非マルキシズム経済学の二つの陣営を作ってしまった。

つぐない難い日本経済学界の損失

大西猪之介教授追悼記

一橋大学名誉教授

高垣寅次郎

小樽高商の初代校長渡辺龍聖先生は、その大任をおびて同校の創立にあたられたとき、他の学科に関することは知らないが、経済学、商学については、多くは若い優秀の学者を一橋の卒業生のうちに求められた。だから小樽の創立当時の教官のなかには、私の友人や或いは先輩が少なくなかった。その伝統の影響からであろうか、私も三年間だったと思う、貨幣論の集中講義に出かけて、楽しい多くの思い出をもっている。またその後も二三度講演に行った記憶がある。

大西猪之介教授と高島佐一郎教授とは、私より二年先輩の親友であった。こゝに大西教授とは神戸高商時代からの交際で、ともに津村秀松先生に私淑していた。雄弁家で、名文家で、学生の中では群をぬいて、誠にはなばなしい存在であった。短かい一生にあれだけの業績を残すことは、ほんとうに稀有のことである。明治四十四年に東京高商専攻部の、関一先生のゼミナールを出た。当時は今のようマスプロの時代ではないから、指導の先生やクラスが違っても、同じ道を歩むものには自ずから親密な繋がりがあった。

大西教授は小樽に赴任すると一年半、大正二年一月には早くも外国留学の官命を受けた。これは異数のことであって、学校が同君に期待するところの如何に大きいかを示すものである。ところが第一次大戦のために、永くヨーロッパ

大西経済学が今にして健在ならば、現代におけるこの二つの経済学上の対立を何んと批評するであろうか。我々は「囚はれたる経済学」を一九六八年の現実の立場で再読三読するの有意義を思う。（一九六八・一〇・一〇稿）

に留まることができなくなり、同君が多くの期待をかけたドイツをはなれ、イギリス、フランス、イタリアなどを歴訪し、アメリカを通して大正六年八月に帰朝した。

当時まで日本の留学生は、ヨーロッパに行くのがつねであったが、戦雲乱れ飛ぶなかで、勉強のできるわけではない。高島教授や私は戦乱の収まるのを待つにたえず、先ずアメリカに渡ってハーヴァード大学に落ちついた。そのときに大西教授は、帰国の途中ハーヴァードに寄られて、短かい期間ではあったが、一緒に思い出も楽しく過したことがあった。私どもの話といえたいい学問のことに連なる。

その後私は休戦条約の成立を待ちかねて、戦いの跡のまだ新しいイギリスに渡り、さらに大陸に移って、大正九年の商大昇格に間に合うように帰国した。大西教授とはそれから、年に一度の社会政策学会で、小樽から上京されるのを待ち受けて、語り合うのを楽しみにした。当時の社会政策学会は、今のようによくの学会があるわけではなく、日本で唯一の経済学者の集りで、それに参加できるのは若い学者の誇りであり、多くの先輩から学問上の刺戟を受ける何よりの良い機会であった。

学会の大会はたいい年の暮ちかく、冬休みになってから開かれる。小樽か

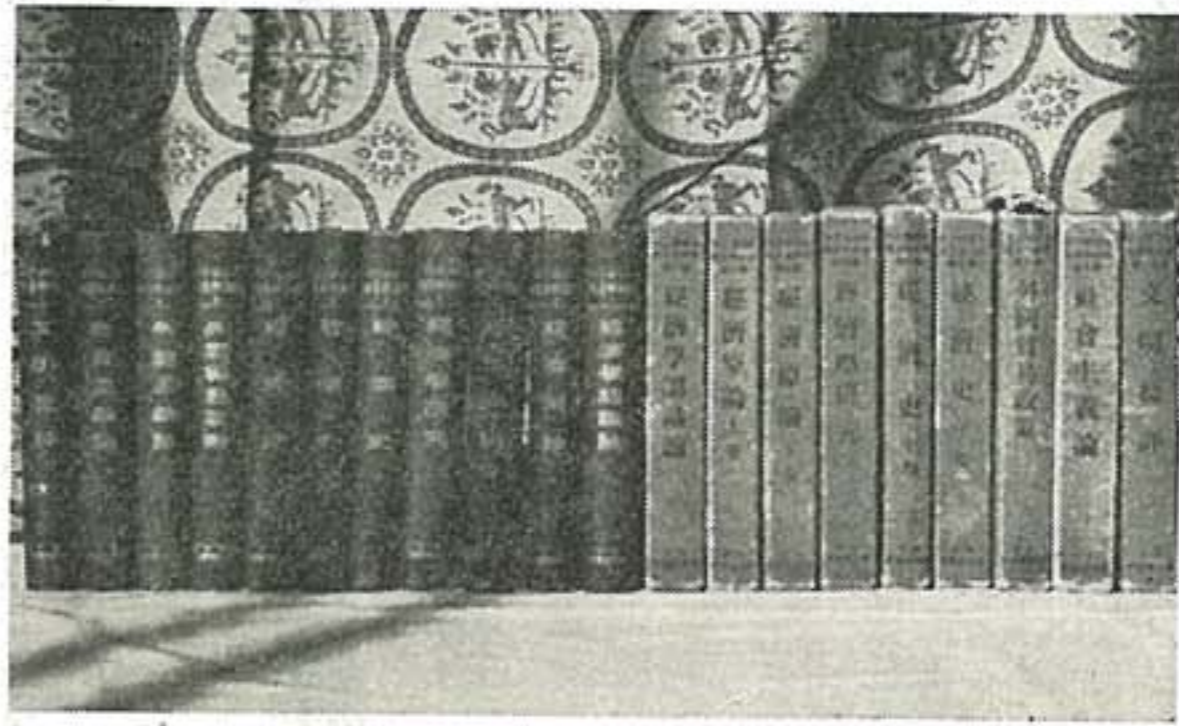
ら出席される教授にとって、それは何よりの楽しい機会であつたらう。大正十年の暮の大会であつた。大西教授はそれに出席して、正月の休みを熱海で過した。帰校の途中会ったときには、からだの調子が良くないといつていた。今から考えるとそのときすでに、食事にも注意し、静養を要する状態にあつたのである。自重されることを勧められて別れたが、小樽に帰るとそのまま病床について、それが最後となり、再び会う機会はなくなった。あたら天才を惜しいこと、今でもそれを残念に思う。

当時の学生諸君が、大西教授からどのような影響を受けたかは、十分に想像することが出来る。壮快な弁舌、鋭い論理、態度から風手まで、悉く諸君の記憶に残っているにちがいない。年若うして、そのもっている可能性を十分に現わすことができないで、なくなった人は誠に惜しい。囚はれたる経済学や伊太利の旅は、私の印象にまだ強く残る。小樽高商は大西教授の逝去によって、ほんとうに偉大な学者を失った。日本の学界にも、それはつくぬい難い大きな損失であつた。

大西全集の編纂を回顧して

駒沢大学大学院教授

南 亮三郎



大西全集編纂の裏話でも、というご下命である。大した裏話もあるはずはないが、満四十年前を回顧して二、三、書きとどめておこう。

はじめにいつておきたいのは大西先生と私とのつながりである。本来は深いつながりがあるはずだが、実際はほんの短かいふれ合いで終つた。

深いつながりというのは、先生は京都出身で、その京都の商業学校時代の英語の先生が私の入学したときには校長さんであつたが、担当はやはり英語で、授業時間によく「大西」のことを話された。大正五年の春に、当時としては遠い北海道まで出かけて行ったのは一にその「大西」に引かれたためである。懐中には、むろん、校長さんから大西先生への添状があつた。

しかし、小樽へ行ってみると、大西先生は留学中であつた。翌六年の八月に帰朝されたはずだから、出校されたのはその年の秋からであらう。私は二年に

在籍していた。先生のしかし講義は私たちのクラスでははじまらず、やっと教室でお目にかかったのは三年のとき、しかも科目は「商業政策」であつたと記憶する。

もっとも私は、大西先生が帰朝されてまもなく、その止宿先の直行寺というお寺の一室に招かれたり、またその当時組織した近畿会という会合に大西先生をひっぱり出したりして小樽公園の桃太郎だんごを食べたりした記憶がある。しかし教室では、深いつながりが生じなかつた。

ただ三年のときの卒論は先生から指導を受けた。私の選んだ題目は「社会主義研究」というとてもない奴で、先生からBernsteinを借りて読み出した。そのとき先生は私に、「君、社会主義をやるのもよいが、一生涯、めしが食えなくなるのを覚悟してかかり給え」といわれた。まったく世の中は、そんな時代であつた。

Bernsteinをやつていた大正七年に「米騒動」がおこり、日本の社会は大きな動揺を経験した。その張本人として続々検挙されたのは「社会主義者」であつた。多感な青春がこの暴挙に義憤を感じたのは自然で、私は一文を草して地方新聞に投じた。「社会主義者を検挙する前に」というのが、その新聞に掲げられた一文の題名であつた。

この一文は波紋をおこした。いわゆる筆禍事件で、地方裁判所で起訴された。「めしが食えなくなる」という大西先生の警告が早くも適中したのである。卒論も、講義も、もうおしまいであつた。私は再起を考えていたが、大西先生にはご迷惑のかかるのを案じて、ぶつとりと足を遠のけた。

三年が終つてから私は「実践助手」とかいふ名儀で学校に残つた。当時の校長さんたちの特別な計らいにちがひなかつたが、考え方によっては一種の軟禁であつたかも知れない。しかし一年間の助手生活は、私自身に、はかり知れないプラスをもたらした。私は何もしないで図書館の本を読み、そして大西先生の講義をききに歩くのが日課となつていたのである。

そんな経路をへた私が、東京商大に進み、そのうえ左右田哲学の門をたたくに至つたのは若干の理由がある。しかしそれは、まったくの私事にわたるの



(左右田博士)

であつた。私はとびつくようにこの論文試験に応じた。多分後者を選んだのであらう。「大西——左右田」の線はこうして連続することができた。

ところが、東京遊学を終えて小樽に戻つた大正十二年の春には、大西先生はもう亡くなつておられた。翌十三年の二月には先生の三周忌記念講演会を企画して、私自身も「人口法則と生存権論」の公開処女講演を行なつた。その頃から先生の遺稿整理に心を傾けていたが、本格的な編纂作業に着手しえたのは、左右田博士の発議があつた大正十五年の夏であつた。

先生の全集は翌昭和二年の五月から刊行され出し、それから一年間に全十一巻を完結した。いま、思い返してみると、この全集が盛況裡に完結しえたことについては主體的、客觀的にめぐまれた条件をそなえていた。主體的には、何と言つても左右田博士の熱心な発議、監修があつたためである。そこへ持つてきて、高島佐一郎教授の友情あふるる協力があつたためである。

客觀的には、當時は決して出版に好都合とは言えなかつた。大正七年には各地で米騒動がおこつており、大正十二年の関東大震災はぶきみな不安を財界にくすばらせていた。しかし、それだけに世人は真剣に社会科学の知識と思想のよりどころを求めていた。有名な円本時代はこういう状況を背景に成立したのである。大西猪之介経済学全集は円本ではなかつたが、きわめて順調に出版の波にのり出した。

印税はすべて遺族のお手に渡される契約であつたので、実際に何程の出版部数となつていたものか私たちは全然知らなかつたが、小樽校の内外から寄せられた反響は大きいものであり、ひろく読書界に歓迎されたことは疑いがない。欲を言えば、先生の日記類や手紙類などもと考えられたが、「私事にわたる

ものは除こう」という左右田博士のご指示にしがたがって割愛した。ただ、いま思い返しても惜しいと思うことは、小樽校に保存されている「大西文庫」のいろいろな本の巻末に、先生自身がドイツ文で書きこまれた寸評的な読後感を集めなかつたことである。「sehr lesbar」とか「inhaltslos」とかの評言がある。先生の研究や思索のあとをたどろうとするものには、よい手掛りとなるであろう。

小樽高商での「経済原論」は、大西先生の亡きあと、一時、大熊信行教授が担当しておられた。同氏が病氣のため大正十二年の秋に退職されてから三転して私の担当となった。手塚寿郎教授がいつの頃に留学から帰られたのかははっきり記憶しないが、当時の原論講座は一年と二年と連続して置かれていたの、手塚教授が帰られてからは、手塚教授と私が持上りの形式でその講座を担当した。

私の原論講義は第一章「人口」からはじまった。そしてそのまま「人口論」が私の生涯の仕事となった。一橋大学の小平教授（小樽校出身）はいつの頃かの一文の中で、人口論は小樽高商の「お家芸」だと書いておられたことがある。少なくとも私に関するかぎり、この評言はまことに至妙というのほかはない。

昭和三十五年、私は長い人口論生活の総決算のつもりで、数巻にわたる「人口学体系」の述作に着手した。その第一巻は同年の五月に刊行されたが、その

巻頭につきのような献辞をしるした。

かみ去りて年久しい二人の旧師—ひとり著者に人口論の種をまき、ひとり著者に学問のきびしさを、たのしさをおしえ賜わりし大西猪之介教授の三十八年忌、左右田喜一郎博士の三十三年忌を記念し、追慕の情新たにこの巻をみたまにささげる。

著者

その五月のある日、私は飄然と大西先生のご遺族をたずね、体系の第一巻を先生の仏前にささげた。大西全集の編纂以来、じつに三十数年ぶりの訪問であった。

奥さまのご健在は何よりうれしかった。帰りぎわにお庭で会ったいかにも健康そうなお婦人は、全集編纂の当時七つか八つの小さいお嬢さんだった先生の一つぶ種の貞子さんであった。お母さんの美穂子夫人から、貞子ですよ、と言われなければ、私は咄嗟に思い出せなかつたに違いない。

しかし私は、貞子夫人のお顔を見たとき、はっと心に打つものを感じた、くるとした理的なお眼と、天才を思わせる秀でた額—大西先生のありし日の面影とそっくりではないか。

それからまた十年近くもお目にかかつていない。儀礼を忘れたご無沙汰ぶりである。やがて数年の後、人口学体系を完結したら、ゆるりとお邪魔できる日もあるだろう。そしてそのときには、故先生そっくりなお孫さんを見て驚くかも知れない。

(大九)

先生の一通の手紙と私

小樽商科大学初代学長

大野純一

この頃、私は流れ去った過去をかえりみると、現在ここに斯うしているとゆうことは、いくつかの人生の三叉路を経て到達したものであり、若しもその三叉路において自分が現に行ってきたとは違う選択をしていたならば、思いもおよばぬ人生行路を辿り現在とは全くかけはなれた立場にいたことであろう、と考えることがしばしばある。

私は大正十一年三月から昭和三十七年三月に至るまで、小樽高商↓小樽経専↓小樽商大と四十有余年の間緑丘学園に奉職し、私の一生は緑丘に始まり緑丘に終わった、とも云えるのである。

私の生涯と緑丘学園とのこのように深き因縁は二つの大きな三叉路を経て結ばれたのであった。

その一つは小松中学校から小樽高商へ入学したと云うことであり、いま一つは一橋専攻部を経て小樽高商に勤めるようになったと云うことである。

この二つのうち、前者は全く運命的なものであった。中学の卒業試験の直前父がたまたま旅先の小樽で病を得て危篤状態に陥ちいたので早速小樽にかけつけたのであるが、父の病状が思わしくないので卒業試験を受ける暇もなくそのまま小樽に留まっていたのである。そのうちに地元高商の入学試験が迫って来たので周囲の人のすすめもあったので、高商に事情を話して仮りに受験を許して貰ったのである。—後に卒業見込書を提出するという条件のもとに—現在では想像も出来ない便宜的な取扱いをしてもらったものである。これが緑丘学園に到る三叉路の一つであった。全く偶然な運命によるものである。

他の一つの三叉路における選択は専攻部卒業の際における大西猪之介先生からのお手紙によって決せられたのである。当時私は左右田喜一郎先生のゼミナールの一員であり、卒業後は某銀行へ入社する積りで教務へその旨申し込んであった。その頃多くの会社銀行等は書類送達の上面接だけで採否を決めていた。確か十二月だったと思うが、その銀行から面会日を指定して来た。ところが、それと前後して、大西先生から一通の封緘葉書（今の郵便書簡のこと、便箋封筒を兼ねそなたものに切手が印刷されている）が到着した。何気なく開いて見ると次のような要旨のものであった。

今後、一國の経済の動向は単に一國だけを切り離して考えるべきではなく、常に世界経済の一環として観察すべきである、そのためには各國の貨幣制度並びに外國為替を独立の講義として開設すべきである。就いては小樽に帰ってこの科目を担当する積りはないか。若しその意志があれば、自分宛に至急返事をして貰い度い。諸条件殊に留学の問題については自分に一任され度し。

と云うのであった。私は留学の可能性と母校に帰り得る喜びとで、早速左右田先生に相談し、銀行の方は辞退させて貰い、微力乍ら先生の指導のもとに当該科目を勉強して行き度いので是非お願いいたしますとの返事を差上げた。斯うして、私と緑丘学園との結びつきは大西猪之介先生の一通のお手紙によって決定的となったのであった。若しもあの時先生のあのお手紙がなかったらば、私は今頃は現在とは全く異なるところに辿りついていただであらう。

註 大正末期から昭和の初期にかけての金本位制の動揺、世界恐慌の襲来等を考えるとき、先生の先見の明に敬服せざるを得ない。

斯うして私は母校に勤務することになったのであるが、運命は誠に残酷であった。四月小樽に赴任するに先立ち、先生は急逝せられたのである。この訃報に接したとき私は悲歎と云うよりも、ただ茫然自失し独り断崖絶壁につき放されたような思いがした。當時を偲ぶときいまだに暗澹たる気持になる。

先生は明哲な頭脳と輝かしき文筆の才によってわが国経済学界の鬼才（左右田先生の命名？）と称せられ、北辺の小樽の街の一角から中央の論壇に對し常に堂々たる論陣をはっておられたのである。

先生の夭折は緑丘学園のみならずわが国経済学界の一大損失であった。尚、小樽高商の未来図については、大西先生は熱心な大学昇格論者であった。先生のこの理想は当時全学生にも反映し、しばしば校内で昇格問題の学生大会が開かれた。これには渡辺校長もいささか当惑されたようであるが、校長は大学と専門学校は上下の關係にあらざ目標を異にする對等の学校であると称して、運動の火の手をおさえていたのであった。

(大八 小樽商大名譽教授)

大西さんごっころ

名城大学教授

椎名 幾三郎

大正九年四月から十一年二月まで大西さんといっしょに小樽高商で学究生活をつづけていたので、その間の思い出を記すことにする。

大西さんは実に弁舌さわやかな人だった。講演や講義では勿論、座談に於てもそうだった。物知りで才気喚発だった。書生上りの私などは、大西さんが学問ばかりでなく、俗界の世情にも通じていることに驚いたものである。

大西さんは学問に自分が熱心であるばかりでなく、学問を研究する者を尊重し、大切にしてくれた。以下、私事にわたって恐縮だが、その例をあげよう。

私が小樽高商に赴任して間もなく就任の講演をした。講演部長大西さんの司会だった。私は「先輩諸学者に対する若干の批難」という題で、めくら蛇におちず、保険学界の大家連中の誤った諸見解を指摘し攻撃した。その講演がすむと大西さんは直ちに壇上に馳せ上って叫ばれた。「近來稀にみる大講演である。自分は演説をきくとその人に対してそれまで持っていた尊敬の念を減少するに反し、今日は椎名君に対して持っていた尊敬の度を減じ得ない。この学校にこの人を迎いだしたのは、まことに誇りである」と言われた。

また、私が他校に転ずることのないよう、種々配慮されていた。当時、小樽高商は武田、大西両氏がコンビになって運営されていたようである。渡辺校長は対世間的の俗事や名古屋高商創立事務で多忙であり、伴さんは温厚で超然としていたからだと思う。従って、大西さんは伴さんに対して、

ツケツケ物を言った。ある教授会では「あなたの試験では点が甘いから、生徒は勉強しない」という調子だった。試験の点については、大西さんは極めて辛い方だった。十点や二十点もザラにあった。然し、大西さんは、そんな低い点をとった生徒を必ず落第させるとは主張しなかった。全科目の平均点がよかつたら、及第させることに賛成した。

大西さんは活動写真や芝居には大いに興味をもっていたようだが、それほどしばしば見に行くようではなかった。お宅へ訪ねると、奥様を交えてトランプに興じられた。いつもツー・テン・ジャックだったようだ。

大西さんは健康には注意深い人だった。潔癖と言はれるほどだった。一日に五六回は手を洗うとのことだった。また、毎日時間を定めて散歩もされた。酒は飲まず、煙草も吸わぬ人であった。その人が病気にかかり夭折したのだから、まことに青天の電雷の如く、私たちは驚いたものである。まことに痛惜の至りである。

浅黒い顔、広い額、ガッシリとした体軀、和服姿の大西さんは私にとって、まことになつかしい。

大西さんの学界に於ける偉業や小樽高商に対する大きな貢献については、適任者がそれらを語って下さるでしょう。(元小樽高商教授)

大西猪之介教授を憶う

札幌商科大学学長

室谷 賢治郎

大西猪之介教授についての特集号に執筆するよう請われたのは、かなり以前のことであった。ところが、生前の大西教授には一度もお目に懸かったことのない私として、追憶を書けと云われても、書きようが無い。今回は黙秘通過できるかと内心慰勞のつもりでいたところ、編集部から速達便で私の大正十四年二月十四日に執筆した活字文——北方日本社版「大西教授の思ひ出」中の一編——のコピーを届けて来ての投稿督促である。私は四十年前の旧稿に対し転た感慨に耽らせざるを得ない。

仮令お目に懸かったことは無いにせよ、大西教授は私にとって一橋学園における先輩であり、緑丘学園における先輩である。教授の幾多の論著は、若かりし日の私を陶酔せしめたものである。いまま教授の「伊太利亜の旅」は、私の一番手近の書齋から離さないものである。

大西教授が小樽長橋の避病院で永眠されてから、早くも半世紀近くの歳月が流れた。その間、日本は振古未曾有の大戦争に敗退し、学問・技術・思想等に著大な変革を招き、特に社会諸科学に関する研究態度には著しい変貌が示される。故教授をいま在らしめなば、経済学説や社会学論に如何なる新風を吹き込まれるか、渴望したいところである。教授の永眠された時の年齢は三十五の壮りであるから、いま存命せられるとすれば嬰孺たる八十才である。小汀利得氏と対談させるとなると、恐らくは細川隆元氏よりも徹底した議論の花を咲かせ

ることでもあろう。大西教授の明文麗筆は既に定評のあるところである。「凡手到底及べカラ

ズ」と私のゼミナールの師左右田喜一郎博士が嘗て書かれた。ただ残念なことに、戦後の日本の国語教育・国字問題の謬った政策から、現在の学生で故教授の文章を完璧に味読し得る者果して幾人ぞと質したのである。

大西教授の蔵書は、知られる通り小樽商大の附属図書館に大西文庫の名の下に、手塚文庫・シエル文庫等と共に保存されているが、この中には Rare books に数えられる貴重な文献が少くない。例えばアダム・スミスの「富国論」原本の初版、マルサスの「人口論」の初版と第二版とか、カール・メンガーの「国民経済学原理」の初版とか、特に伊太利亜のパンタレオニから直接署名して受贈した書物とかは、その中の若干に過ぎない。私が緑丘学園に奉職した大正十二年には、これ等の蔵書は未整理のまま書棚に列べてあったが、その前に立っては私に幾度も長大息を洩したものである。古書もいまではリプリントの技術が発達したため、比較的容易に入手し得るようになったけれども、戦前は稀覯書の不廉の価格など到底話にならぬものであった。

緑丘学園を巣立って現在学界に盛名を馳せている人々は、いま茲に氏名を記さないけれども、全国における各学園に比較して毫も遜色が無い。否、優位を誇るに足ると思う。その因って来る源泉に、大西猪之介教授とその業績のあることを私は堅く信ずる者である。

昭和四十三年十月十八日・川端康成氏のノーベル文学賞受贈のニュースを知りて—— (小樽商大名譽教授)

緋織着たる若武者

東海大学教授

菅谷重平



左右田先生の大西先生観

「伊太利亜の旅」と「囚はれたる経済学」とは相前後して出版されたので、両者を一括して左右田喜一郎先生が書評を国民経済雑誌に載せられた。その中に「これまでの経済学者を、ひとりひとり拉し来て、論じ来たり、評し去るのさま、まことに緋織着たる若武者が、むらがる敵地に切り入って、左に払らひ右に難ぐ思いあり」という意味の短文があった。大西先生が当時の学界における姿が、そのままたくしの脳裏に浮んでくる。

当時を回想すれば、中央の学界には福田徳三先生と河上肇博士のマルキシズム論争が、雑誌「改造」の上で派手に行われていた。普通のジャーナリズムなら、もし一方が福田先生をかつげば、別の雑誌社が河上博士をかつぐであろうが、改造社の山本実彦社長は尋常一様の出版社の社長じやない。みずから筆をとれば、憂国の至情を露呈させて青年同志を感激させる理想家でもあり、政治家でもあったので、福田、河上をひとりて操縦していた所謂ヤリ手であった。

論争というものはハタで見れば極めて面白いものである。鬪鶏や闘犬や角力を見るよりも面白い。しかし鬪鶏や闘犬なら見ているほうで勝ち負けがわかるが、学界の論争となると、一般大衆には角力や闘犬のようにハッキリと勝ち負けはわからない。そこで第三者の批評や審判が要ることになる。改造社の山本実彦はすぐ大西先生に目をつけて、両者の論争を批判させて、改造を売ろうと、電報で依頼して来た。

先生はこれをごとわった。わたくしは惜しい事をするものだ、書けないでは無い、十分書けるのに、もったいない事をするものだ、とその時思った。わたくしも、今の年頃になれば、こんな他人の論争の渦中に飛び込むようなバカなことをしない位の事はわかるが、大西先生は若かった。しかし今頃の評論家のように飛びつかない。よく周囲の事情を見廻わっていた。名前は猪之介でも猪突する人ではなかった。

中央の学界から眼を道内に移すと、札幌には高岡熊雄博士あり、それに森本厚吉博士がアメリカ仕込の派手な社会活動とアメリカ経済学を以て札幌の学生を陶酔させていた。しかし、この札幌の学生達も大西先生に対する「あこがれ」は強いものがあつた。札幌の農大生に会うと、よくきかれたことは「大西先生とはどんな人ですか」という事であつた。緋織着たる若者の姿が少しはわかつて貰えるかしら。

学者と寿命

大西先生が留学を了えて小樽に帰って来たのは、わたくしが高商の二年になった時で、逝くなられたのは、わたくしが一橋を出る年であつたから、正味五年しか講義をされなかつた勘定になる。この間、先生の講義の原稿と雑誌へ寄稿したものと、海外留学以前に国民経済雑誌へ寄稿したもの、神戸、東京高商

の卒業論文を併せせたものが、大西猪之介全集ということになるが、内容から見ても、外形から見ても、実によくこれだけのものができたと驚嘆する。

先生は三十六歳で逝くと思つていた。そして英吉利産業革命史論を書いたA・トインビーも同じ年で逝くのだが、緑丘誌を見ると三十四才になつている。この三十四才は満年齢であり、先生の逝く頃は数え年であつたから三十六才という事であつたが、トインビーよりも二つ若くして逝くはつたが仕事はトインビーよりも沢山やつている。

すると、大西先生からフルに三年間教えをうけることができたクラスは、わたくしより一級下の大谷敏治さんのクラスと、その次のクラスだけで、アトは二年間か一年しか教えを受けられなかつたことになる。従つて大谷さんとその次のクラスの地位、先生に恵まれた人は無い、ということになる。

少し独断になるかも知れないが、大西先生が最も将来を嘱目していた人の一人は、大谷敏治さんであつたとわたくしは、今でも思つている。大谷さんは小樽をトップで卒業した大秀才だ。この人が一橋の入学試験に落ちた。

何故落ちたか。大谷さんが出来なかつたからではもちろん無い。

わたくしは小樽高商が一橋で完敗した直後、東京で高島佐一郎先生と何かの機会に会つた。その時、高島先生は福田先生から聞いたことだといつて、「入学試験の答案を見ていると、どこの高商から来た学生かがすぐわかる。小樽から来た学生は、すぐ「赫として燃え上る赤き理想のゾルレンの炎が、冷かるべき現実のザインの青き色を焼きつくさむとするにおいては「一なり」式の答案を書いているので困る。これは大西病だ」といつていたそうである。

この福田先生の言葉は、そのままでも、何等かの形で大西先生の耳に這入つていた筈である。先生が一橋の入学試験の完敗を非常に気にかけていられたことは確かだ。

福田先生にしてみても大西先生が福田先生の論敵津村秀松博士の高弟であるから、坊主憎けりやケサ迄憎い、ということもあつたかも知れないが、それよりも、緋織着たる若武者が後から押し上がつてくるのを見てみると、大きい脅威であつたに違いない。それに、あの囚われたる経済学の流麗な筆致は、名文家であつた福田先生と雖も遠く及ばないものなので福田先生も恐らく大きい嫉妬を感じていたのではなからうか。それが大谷さん達を落第にしてみましたの

ではなからうか。とに角小樽の学生は、「囚はれたる経済学」の大部分を殆んどが原文で暗記してしまつていた。それほど先生は学生の人気を集めていた。しかし、何分にも教えていた期間が短かつた。「緑丘」に大西先生の特集号の編纂が遅れたのはこのためである。とわたくしは思う。わたくしも最近学校の教師という職業を本格的に始めている。これで気がついたことは教師というのは、素晴らしいユニークな学説をもち、国際語で自分の意見を出版するのではない限り、いくら才があつても十分に社会から認められるものではない。その代り少々才が劣つても長い間教職にいれば学生からは親しまれるものである、ということがわかつた。芸術家、特に画家のようなものは、年齢と仕事とは必ずしも比例しないが、学者の場合は教え子の数が矢張り大きい問題になる。

先生に心残りのもの

わたくしは、大正五年に旧制中学を出て最初医者になろうと思つて、その年第一高等学校三部の入学試験をうけたが落第した。受験生をしているうちに、フト神田の古本屋で先生の「帝國主義論」を見て、立ち読みをしているうちに感動して、買って帰つて、翌日の昼過ぎまで寝ずに読み明かした。これで人生の方針を一変して、経済学を小樽でやる事にしたものである。この事はほかの所で書いたから、今は、その事に触れないが、先生がわたくしの人生を決定してくれた人であることは確かである。わたくしは経済学を学んだことを少しも後悔していない。ほかの学問をやつたのでは、今日のわたくしは生れなかつた、とすら思つている。

先生が逝くなつた知らせがあつたとき、一橋に在学していた友人達は、わたくしに代表して葬儀に列席してくれないか、という交渉があつたがわたくしは断つた。

それは、小樽へ入学した年、第二寄宿舎(?)から疑似チブスが發生した。そこでわれわれはオチオチ試験勉強も出来んから、夏休みにして試験の実施を九月に延期してくれんか、という嘆願書を学校に出した。そのとき、わたくしは嘆願書を出しても、試験勉強をしていれば、嘆願書が却下されたとき、試験をうけることになつてしまふから、試験勉強をしないで、嘆願書の貫徹をはか

らねばダメだ、といって、みずからそれを守った。
嘆願書は却下され、試験を受けることになった。わたくしは無準備で試験をうけて、全部注意点を取った。

これはイヤな思い出になっている。大西先生の葬儀に参列できなかったのもこの思い出がチャットと頭をかすめたからであった。これは先生に済まなく思っている。葬儀の模様を在校生から聞いたとき、お嬢さんはまだ何も知らずに、抱かれて黙っていたことが参列者の涙をそそった、ということであった。

四、五年前、わたくしは日経連の依頼をうけて小樽に講演に行った。そのアト緑丘の母校に行つて、まっ先きに図書館へ行つて、手塚文庫と大西文庫を見た。そして

「大西文庫の中に埃太利のカール・メンガーが伊太利のパンタレオニーに、彼の「経済学の基礎」を贈ったものを、更にパンタレオニーから大西先生に贈られたものがある筈だから、見せてくれ、といつて探して貰つて見て来た。パン

囚はれたる経済学

大西猪之介著

の複版を願う

商学博士 西野嘉一郎

私が高商へ入学したのは大正十二年で、大西先生は既にこの世になく、先生の講義を聞いたのではないが、学生時代先生の著書「囚はれたる経済学」を通じて、その思想が今日なお私の物の考え方に定着していることを思い、編輯子の乞われるまま筆をとつた次第である。

書棚からはこりまみれになつた本書「囚はれたる経済学」をとりだし、そのなつかしい最初の言葉「経済学は囚はれたり、之を捕うるもの名は時に倫理

タレオニーの手紙が本の扉の処に貼つてあった。この文庫は、大西美穂子寄贈という印が押されていた。もうひとつ、先生は大谷敏治さんのクラスが一年のときベブレンの企業の理論を英書講読で使われていた。わたくしはこの本は今年読んでも難かしい本だと思つてゐる。これを先生がどのように使われていたのか。英書講読のようなものは、今はカケ出しの先生がやること位にしか思つていないが先生はこれをやらされた。事実わたくしも高垣寅次郎先生からA・マシーナルの産業貿易論を講読して貰つた経験がある。この時の高垣先生は学生達にだけやらせていたが、大西先生はどういう風にやったものか、ベブレンを何故採用されたものか、恐らく日本の学界で一番早くベブレンを紹介した人ではなからうか、という事と、先生の評論はベブレンの思想に負うものが可なりある、であろう事を確かめたいと思ひ乍らも、雑事にまぎれて出来ないでいることである。
(大九 関東特殊製鋼株式会社前会長)

となえ、時に予言と称し、時に又政治という。其名こそ如何ともあれ、赫として燃え上る赤き理想 Sollen の炎が、冷たかる可き現実 Sein の青き色を焼きつくさむとするに於ては一つなり。一故に曰く経済学は囚はれたり」と。
この名句を私は学生時代に幾たびか口ずさみ弁論大会に引用したことか。本書が出版され約五十年にもなつたが、Sein と Sollen の混同、戦いが経済学ばかりでなくすべての科学がその線上にあり、将来も永久に続くであろうことを考えると、先生の学問に対する態度を思い浮べずにはおられない。

本書を今一度とどころとひろい読みしてみると、その中には幾多の哲学を蔵している。先生は本書を通して論じたいことは経済学を Sollen の世界から隔離しようとする努力であり、先生の言葉をもってすれば「放たれたる経済学の確立」であった。それが後編「生と学との距離」となつて生まれてきたのであるが、これまた経済学を Sein として捉え、不変妥当性を求むれば波斯王が臨終の床にある学者より教えられた如く、二十年間の研究千五百巻の人類史も「人は生れ、人は苦しみ、人は死して候ふ」という三語につきると先生はこの序論に示されている。そうして「一時に向つての真理はあれど、永遠に向つての真理は存し得ぬ事となる。在るは総て相対の真理にして、絶対の真理でない事となる。もし強ても絶対の真理を求むるならば、世に絶対的なる真理はないという絶対的真理だけある事となる。」としてヘーゲル哲学に批判を与え「高遠なる理論とは事実より高遠なる理論であり、卑近なる理論とは事実より卑近なる理論である」と結論されておられるのである。本書が出版されて約五十年、今日の経済学は著しい発達をなし、高遠なる理論をもって卑近なる事実の解析に多くの学者が努力し、また努力しつつある。しかし「かくあり」(Sein)と「かくありたい」(Sollen)との混同が企業経営や政治の上には勿論のこと、学問の世界にも大手をふつてかっ歩している事実をみると、先生が約五十年前「真理の一方性」、「生に即せむとする学」や「生の為の学」をあらゆる先哲の理論を引用しながら、哲学史と経済史とを連結せられた企画は今なお脈々と経済学界の中に生きてゐるものと考えられる。私は企業経営の面においてもまた経営学を学ぶときにも Sein と Sollen の混同を反省し、まず「かくある」という現実をみつめてそこから「かくありたい」という理想をつかまえることに常に努力してきた。これは学生時代にいくたびかバイブルの如く精読した先生の「囚はれたる経済学」のおかげであることにはいまさら考えさせられる。

当時の経済学の四天王とは神戸高商の坂西由蔵、京都帝大の河上肇、東京商大の福田徳三、小樽高商の大西猪之介の諸先生といわれていたと聞いている。その代表的著書がこの「囚はれたる経済学」である。本書はさきにものべた如くすぐれた哲学史であり経済学史でもある。今大西猪之介先生の特集号を刊行するに当り、せめてこの代表作を複版することができないものかと心から願うものである。
(大15 佛芝浦製作所社長)

skin dew

前にお休み、朝と
にきいてください
に含まれた
成分コラーゲンが
あなたのお肌
に与え
るおいを
もちます



Paris • London • New York
Helena Rubinstein
ヘレナ・ルビンスタイン
取締役社長 加地幸一 (大12)



大西猪之介先生を語る



学習院大学
大谷敏治

まえがき
不朽の道標
「囚はれたる経済学」
大正九年—一九二〇年
その周辺—学界の人と作品
その社会的背景
教師と学生
その原書講読
その講義
「伊太利亜の旅」
文明批評
講演とエッセイ
先生と生活
先生と私



関一教授を囲む教え子たち
左から二人目大西猪之介氏（東京高商時代）

まえがき
学生時代はもろろんのこと、ずっと英語の教師をしていてその後、経済学など、本格的に勉強したことのない筆者が、経済学者としての大西猪之介先生を、うんぬんするなどということは、まことにおおそれたこと、いかにあつまかしい筆者也、幾度か、ためらったことである。この道には、亡き先生から、直接の教えも受け、ご自身、経済学者であられ、また大西先生の全集をみずから編集せられて、文字どおり、先生の遺録を嗣がれた南亮三郎博士が、おられる。くだっては、現に緑丘の経済原論担当、そして「特集・手塚寿郎先生の追憶」に、手塚経済学を論ぜられた麻田四郎教授がおられる。また、いまは、多少途はち

がっても、その若き日に、その心の糧の一つとして、大西文庫にも傾倒せられた、政治経済学の、板垣一博士、また、故先生の経済学の講義に列してのち、みずからの途、商業学を展開された大泉行雄博士がおられる。そして、経営学者たり、教授たり、さらには文筆の人たる、それこそ大西先生の、歩かれたであろう途をそのままに歩いていられる—いや、大企業の経営者であり、また官界の中樞の座も占められた点で、師匠以上の—菅谷重平博士も、おられる。

しかし、こうした方々が、みな、なにかの都合で、この点を書かれないう、他に別のテーマで、珠玉の文章をよせてはおられるのだが。もちろん、猪谷善一博士が、まことにユニークな「我が国、明治・大正経済学界人脈図」を、ものとしてくられた。貴重・稀有な文献として、日本経済学界史に残るものである。しかし、それはまた、あまりにも生ま生ましい、人と人とのあいだの息吹きが、温かく、また冷たく、いきづいていて。

そこで、筆者は、編集子のたつての求めにこたえて、経済学者大西猪之介先生を、その活躍せられた時代の、日本の社会の背景と、当時の経

濟学界のなかに、顧みてみようと思いた。ことはまことに大きい、そして、筆者は、前述のとおり、学生時代も、その後の生活でも、一度も経済学を、本格的に学んだことのないものである。これはただ、専門学校三ヶ年の生活に、たまたま故先生の講義に連なる幸せに浴したものが、その当時、これをどうみていたか、またその後、ゆくりなく、英語の教師として「英語と経済生活とのかかわり」を一生の勉強としてきたものが、いま顧りみて、故先生を、当時の日本の社会と、経済学界とのなかにどうみていたか、思いだしてみよう、そしてその現在の意味を考えようとの、勝手きわまる試みである。ただし、恨みは、筆者、こうしたことに不馴れであり、材料の持ち合せもない。また身辺公私の多事は、このおそれ多い作業に、専念することをゆるさない。誤りや足りないうところの多いことを、よく知っている。

「のいづる日を待望しつつ」。もしかりに、まずくいつても、それこそ大西先生の口吻をまねるなら、経済学者をうんぬんするのは「筆者の本業ではないんですから」（いまからでもまだ）経済英語の学者たらんとする筆者へのお叱りは、「囚はれたる経済学」ならぬ——「経済英語原論」（仮題）のでるまで「しばらくお預けしたいと、願いたてまつる。」

不朽の道標

岩波書店刊の、「近代日本総合年表」、大正九年（一九二〇年）のところ、第二四三頁、「学術・教育・思想」の欄のトップに、一月五日附で「大西猪之介（囚はれたる経済学）」とある。

これは、なかなかのことである。いわゆる明治百年を記念して、行われた事業には、ずいぶん愚劣なものもあったが、一八五三年から一九六七年までを扱ったこの「近代日本総合年表」は、伊藤整氏の言葉をかりるなら、「たしかに画期的な出版物にちがいない」、そして「この大きな仕事の問われるところは、選ばれた項目とその扱いについての価値判断、または価値判断の体系ではないかと思う」が、その点、「昭和四二年までを扱った最近のところでは、色々な現象について批判が安定しない層が末尾の方に含まれているのは致し方ない」が、「明治、大正期の人物、事件については、一般に判断が安定しているせいか、扱いに興行があって、うなずかせる処置

が多い」と、同氏は評しておられる。（朝日ジャーナル、第十一巻第四号、昭和四十四年（一九六九年）一月二十六日号「本」批評と紹介」欄、括弧内は、同氏の評語より）。この大作の「まえがき」にいうように、この年表は「二百余年の鎖国によって国際的交流から遮断されてきた日本が、余儀なく受け入れたこの開国を契機として国際社会に身を投じ—中略—近代国家として、再生し成長していった過程」において、「世界史の大転換期と組み合わせられたこの日本の歴史的転換が、政治、経済、学術、教育、思想、芸術の分野で、国外のそれらと、どのように照応しつつ、行われたかを、概観して、これを通じて、この歴史の時間的・縦断的な推移と、それぞれの時期の同時代的・横断的な姿とを、一望の中に収めようとの試み」である。いわば、明治百年の歴史における、文字どおり不朽の道標を、年次ごとに建てたものである。そうとすれば、この年表において、「大西猪之介（囚はれたる経済学）」が、存在をえたということ、は、新しい日本形成のこの百年において、まさに「これら各界に受け入れられた、安定した価値判断を、かちえたもの」と、いえるであろう。

囚はれたる経済学

「囚はれたる経済学」が、宝文館から刊行されたのは、大正九年（一九二〇年）一月五日のことであるが（実際の発売は、前年大正八年の年末）、この年、大正九年（一九二〇年）の日本経済学界を顧みると、一月の十日に、例の森戸事件がおこっている。これはいまさらいうまでもない、東京帝国大学経済学部の研究機関誌「経済学研究」の創刊号にのった、森戸辰男助教授の「クロボトキンの社会思想の研究」が、その筋の忌避するところとなり、執筆者が、発行人大内兵衛助教授と共に、新聞紙法違反で起訴された事件である。（三月三日、東京地方裁判所で判決、森戸助教授は禁固二ヶ月）。そしてこの年の経済学界のめぼしい収穫としては、雑誌「我等」（大正八年（一九一九年）二月、長谷川如是閑・大山郁夫らによる創刊、一九三〇年二月十二巻二号で終刊）にのった、欄田民蔵の論文「マルクス学における唯物史観の地位」があり、竹越与三郎・日本経済史、高島素之訳マルクス資本論の刊行（大鏡閣）がある。また、この「年表」のこの年の欄にはのっていないが、当時慶應義塾のホープ、小泉信三教授の、「社会問題研究」（大正九年六月、岩波書店刊）と「政治学説と社会思想」（同年九月国文堂刊）がある。いづれも、ラッサールなどを中心としたドイツ労働運動や、サンジカリズムなど社会思想をあつかった論文集であった。（そして手塚寿郎教授の「ゴッセン研究」もこの年の出版である）。だからとくにこの方面に関心をもったものは別として、一般学生の机上には、純粋に経済学の分野ではないにしても、この年に上梓されたものとして、坂口昂・概観世界思潮、西田幾多郎・意識の問題、波

多野精一・宗教哲学の本質及其根本問題、和辻哲郎・日本古代文化があり、そして、厨川白村・「象牙の塔を出て」、や「十字街頭を往く」などがあった。いずれも当時の学生の愛読のものであった。（のちに知ったこの年の刊行物に、太田亮・姓氏家系辞書がある）。では「囚はれたる経済学」の、この年の、また、この「年表」での、存在理由は、いったいなにか。著者自らが言われるように、「囚はれたる経済学」は「経済学の過去の全部を認識論的に分析討論しようとしたもので、経済学の理論そのものでも、また経済生活の歴史でも政策論でもない、そうした学問の実体・内容の展開はむしろ将来にまつべきものであった。ことにそれは、五年の海外留学をなかに含んで、すでに、何年かにわたり、月刊国民経済雑誌に連載されたものである。手塚寿郎先生が引用された、飯島幡司先生の評語をかりるなら、それは、「石橋五郎さん（当時京都大学、神戸高商の地理学教授）から貰った南洋みやげの珈琲に等しい」ものであったろう。（全集第十一巻文明批評収載その項参照）。しかしそれだけに、著者自らのいうように「経済学研究法の研究に志す人は、遅かれ早かれ、一度は此幼稚なる思想の階段をも通過せねばならぬ」ものであった。（いや実をいえばあるいは、このようなものにかかざるうことなしに、端的にいきなり、経済の実体、生活そのものの分析・解明から出発すべきであるのかもしれないが）———そういう意味

で、この「囚はれたる経済学」は、ひとり経済学の分野と限定することなしに、むしろ人文科学・社会科学全体の根本問題をとりあつたものとして、ひとつの、先駆者の記念碑であった。全集の第一巻「経済学認識論」に収録された左右田喜一郎、高島佐一郎、南亮三郎、三博士の、本書についての直接の評言、および第十一巻「文明批評」末尾の、関一博士以下諸先生の、「大西猪之介経済学全集」へ寄せられた言葉がこれを裏書きしている。

大正九年— 一九二〇年

それではいったい、この年、大正九年（一九二〇年）は、どんな年であつたらうか。興味あるのは、慶応・早稲田などが、この年にはじめて大学令（旧）による大学となり、東京高商も、専攻部を改組して、この年四月に、東京商科大学となつたことである。また、第一次世界大戦の講和条約が、この年によく批准されながら、シベリヤ出兵の不利からいれゆるニコラエフスキの日本軍殺戮事件が、また第一回普通選挙要求大示威行進や、わが国最初のメーデーが行われて、約一万の労働者が参加した。一方で日立製作所の独立（資本金一千万円）や日本

曹達（資本金七十五万円）が創立されながら、三月十五日、東京・大阪の株式市場大暴落をきっかけとして第一次大戦後の恐慌がはじまり、銀行の破綻がつづいた。八幡製鉄所の大ストライキが二月にわたつてつづいたのち、ようやく労働九時間三交代制が実現した一方、賀川豊彦の著「死線を越えて」が、改造社から出て、ベスト・セラーとなり、そして海外では、一月早々に国際連盟が発足しながら、四月にはポーランド軍が革命後のソビエト・ロシアに侵入し、中国では、日本軍のあと押しする段祺瑞の安徽派と英米の後援する直隸派の両軍閥の戦争がはじまつた。国の内外の情勢は、はなはだ流動的であつたのである。ちなみにこの年、日本美術院展に、速水御舟の「京の舞妓」が出品され、ロマン・ロランのジャン・クリストフの邦訳、米国のシンクレア・ルイスの大河小説メイン・ストリートのでたのもこの年、そして、ドイツで、水性ガスから常圧で石油を合成した、いわゆるフィッシャー法の成功したのもこの年であつた。いわば第一次世界大戦という、人間世界未曾有の變動が収つて、その余波が全世界をゆり動かしていた時期であつた。

その周辺— 学界の人と作品

当時、経済学・商業学の勉強は、高等商業学校の、専売であつた——といつては、言い過ぎであらうか。すくなくとも制度のうえでは、経済学、商業学の講義は、全国五つの官

立高商の誇るところであつた。専攻部をもつ東京高商に福田徳三、内池廉吉、佐野善作、三浦新七、石川文吾、上田貞次郎、堀光龜、井浦仙太郎、吉田良三、左右田喜一郎、藤本幸太郎、内藤章の諸先生らがおられ、神戸高商に、津村秀松、田崎慎治、原口亮平、坂西由蔵、滝谷善一、増井光蔵、長崎高商に武藤長蔵、田崎仁義、そして小樽高商に坂本陶一、武田英一、国松豊、そして専攻部明治四十四年（一九一一年）卒業の、大西猪之介、高島佐一郎の諸先生がおられた。「東京高商専攻部の卒業年次が、このあとにつぐ丸谷喜市（神戸高商、明治四十五年）大正二年の高垣寅次郎（東京高商）、同年十二月の飯島幡司（神戸高商）、大正四年の大野辰見（大阪高商）、大正五年の上田辰之助、大塚金之介、高瀬莊太郎の諸先生（いずれも東京高商）および以降の諸先生で、当時すでに学界におられたかたがたは、省略する」。

高商以外では、堀江婦一博士、賀勸重博士のもと、当時新進として的小泉信三教授を加えた慶応義塾、天野為之、塩沢貞昌両博士に加え、商業学の小林行昌、倉田庫太、上坂西三の諸教授を擁した早稲田もそれぞれまだ、専門学校としての理財科と、政治経済科であつて、大学令による大学となつたのは、「囚はれたる経済学」のでた大正九年のことであつた。

和田垣謙三博士、金井延博士、高野岩三郎博士、山崎寛次郎博士のおられた東京帝国大学、田島錦治博士、財部静治博士、河田嗣郎博士、

河上肇博士のおられた京都帝国大学も、経済学関係の諸講義は、まだそれぞれの法学部のなかで行われ、経済学部として独立したのは、東大が四月一日、京大が五月二十九日、共に一冊本としての「囚はれたる経済学」上梓に先きだつ一年、大正八年（一九一九年）のことであつた。

研究発表の機関誌としても、東大関係の「経済学論集」が創刊されたのは、前述のように、この年の一月「囚はれたる経済学」の刊行と前後したもので、それまでは、東京帝国大学関係の国家学会雑誌と、京都帝国大学関係の経済論叢、そして、神戸高商から津村秀松博士によって、明治三十九年（一九〇六年）六月に始められた国民経済雑誌があるだけであつた。

経済学関係の、単行本をみても、大正九年までのものとしては、理論的・体系的なものとしては、明治四十年（一九〇七）にでた津村秀松博士の、国民経済学原論上・下二巻のほかには、福田徳三博士の国民経済講話乾・坤の二巻、大正六年（一九一七年）と大正八年（一九一九年）刊、それにさきだつ同先生によるマシーナルの解説、国民経済講義があるくらいのもので学生の関心はむしろ、大正五年（一九一六年）にでた河上肇博士の貧乏物語や、同じ著者の社会問題管見（大正七年、一九一八年刊）に集まるか、または大正六年（一九一七年）刊の左右田喜一郎博士の経済哲学の諸問題に啓発されて、その前年であつた田辺元訳・ポワンカレ・科学の価値とか、中川（山内）得立訳のリッケルト・認識の対象

とか、西田幾多郎・善の研究（明治四十五年・一九一二年）思索と体験（大正四年一九一五年）、自覚に於ける直観と反省（大正六年、一九一七年）などに、集つていたといつてよい。

もちろん東京帝大の教授山崎寛次郎博士による貨幣銀行問題（明治四十五年、一九一二年刊）といつたおそろしく重厚な論述もあり、また上田貞次郎・株式会社経済論（大正二年、一九一三年刊）といつた、その当時から古典あつかひされた名著もあつたが、若すぎた学生たちには、なんとといってそれらはあまりにも地味にすぎた。

まして、神戸正雄・租税研究（大正八年、一九一九年）なども、その特殊性のゆえにか、図書館でかいまみた古典、田尻稲次郎博士・財政と金融（明治三十四年、一九〇一年）や、金井延博士の社会経済学（明治三十五年、一九〇二年刊）などと共に、その名を頭の隅にとどめるだけであつたらしい。むしろ、操山・大西祝博士の西洋哲学史や、紀平正美・認識論（大正四年刊）、田辺元・科学概論（大正七年一九一八年刊）などが読まれたものではなかつたか。

大正十年（一九二一年）天野貞祐訳カント純粋理性批判上、刊行、倉田百三・愛と認識との出発、七月、バートランド・ラッセル来日、十二月石原純・相対性原理。そして福田徳三先生の社会政策と階級闘争、阿部次郎の人格主義のたのが、大正十一年（一九二二年）、小泉信三・価値論と社会主義が大正十三年（一九二四）に出た。河上肇・資本主義

経済学の史的発展の刊行は何年であつたらう。いずれにせよ大正九年より前ではない。

その社会的背景

大正三年（一九一四年）八月にはじまつた第一次世界大戦は、大正七年（一九一八年）十一月に、休戦となつて、戦闘行動は終つたが、ロシアの大革命、ドイツや東ヨーロッパの混乱がつづき、講和条約の調印も、大正八年（一九一九年）夏までもちこされた。

参戦はしたものの、戦禍の巷からはなれて、火事泥ならぬ経済の余得を満喫して、成金という新語を生んだわが国は、この頃にもまだ戦中、戦後の経済ブームに酔つていて、株式・商品市況の好況がつづいたが、大正九年、一九二〇年三月十五日、株式市場大下落、経済界混乱はじまる。この大戦中および戦後の好況の時期に、わが国にもはじめて、近代的意味の人権問題、労働問題、婦人問題が起つた。つまり日本の近代化が、社会的、思想的に、はじまつた。

すなわち、大西先生が、その秋九月に小樽に赴任せられた明治四十四年（一九一一年）の一月に、幸徳秋水らの、いわゆる大逆事件の処刑と共に、しゅんとなつてしまつたところの自由民権・社会主義の運動が、社会主義の運動はまだタブーとしながらも、この期間から、デモクラシイの運動、労働運動、婦人運動のかけをとり、にわかには盛んとなつた。

こうして、明治四十四年（一九一一年）、青鞥社の結成につづいて、翌大正二年（一九一三年）一月、平塚雷鳥女史の「新しい女」があり、雑誌太陽に毎号、与謝野晶子女史の評論が連載された。普通選挙の要求や、労働争議については、前段にふれた。そして、大正七年（一九一八年）七月、北陸の一漁村魚津町におこつて、たちまち全国に広がつた米騒動は、現象的には収つたものの、デモクラシイの運動そのものは、大正五年（一九一六年）、大西先生在海外）一月の中央公論に発表された論文、吉野作造「憲政の本義を説いて、その有終の美を済すの途を論ず」をのろしとして、福田徳三先生その他の論策をよびおこし、この両先達を主唱者として大正七年（一九一八年）には、「世界の大勢に逆行する頑冥思想の撲滅を期して」黎明会が結成された。東京帝大に新人会が生れたのも、この年の十二月である。そして翌大正八年二月には東大から高野岩三郎博士が所長となつて、大原社会問題研究所が設立され、また長谷川如是閑・大山郁夫らによって雑誌我等が創刊されて、この年一月創刊の河上肇博士の個人雑誌社会問題研究に、新しいものが附加された。

ジャーナリズムの世界でも、既存の月刊誌、太陽（博文館刊）と、中央公論のほか、山本実彦によって、大正八年（一九一九年）四月に雑誌改造が、ついで六月、前述黎明会の同人によって、雑誌解放が、創刊され、そのほか中外というもので、多くの論者に主張・論争の舞台

教師と学生

こうした社会的背景に、当時の学生が、みな敏感に反応していたかどうか、筆者はしらない。

なにしろ当時の小樽は、まだ文字どおりの北辺の地方都市である。世界大戦のおかげで、月に一・二隻の外国船は青豌豆やインチ材を積み取りにやってくるはきていたものの、津軽

海峡をこえての中央、東京との交通は、まだ二十七・八時間かかってい

当時の学生の構成は、いまとちがうところが多かった。出身の地方が

名に夢中になつた西村久蔵君のよう

しかし、大西先生は、教室ではもちろん、

先生は、明治四十四年(一九一一年)七月東京高商専攻部を卒業され

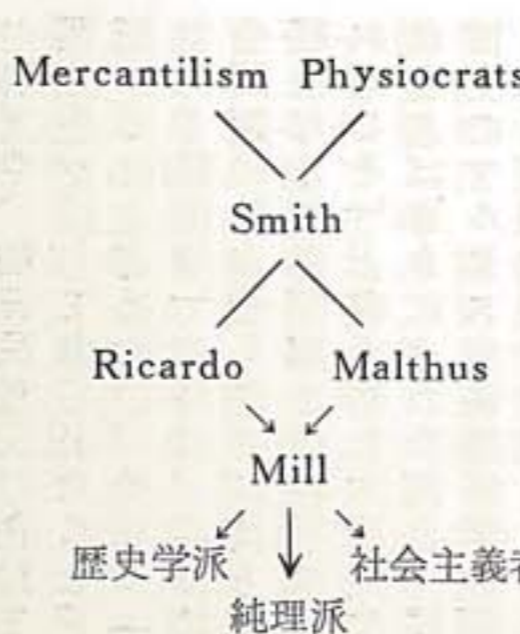
その原書講読

先生は、明治四十四年(一九一一年)七月東京高商専攻部を卒業され

教授に任せられて海外留学、初めドイツのボン大学でディツェル教授に

先生が緑丘で担当されたのは、経済原論と経済史、そして外国貿易政策

大正十一年(一九二二年)三月卒業のクラスは、第一年目に原書講読を



その本をはじめに、前置きもなにもない、自己紹介もない。茶色の

読んでから思えば、前記の絵ときは、この本のなかに展開された古典

文(一八四八年)、第一編・生産編

「囚はれたる経済学」の出たあとも「伊太利亜の旅」の出たあとも、教

先生の原書講読は、独特であつた。大正八年(一九一九年)四月、

built (p. 16) のところに Athens, acropolis の一部、入口の部分、

その講義

先生の講義は、経済原論と経済史として貿易政策。そのうち経済史については、本誌で猪谷善一博士が触れていられた。筆者らのクラスを第一回として大正九年度、次いで大正十年度の三回（この年度は未完）。全集編纂者の小引によると、晩年先生がもっとも力を注いだもので、他の著作に先だって、近く自から上梓の意図をもたれたものという。上・中・下三冊、A5版全一、六〇〇頁の大作である。再び全集編纂者の語をかりるなら、「其の一橋学園の日以降永く私淑し来たれるゾムバルトへの著しき傾倒の」見受けられるとはいえず、古代社会から、ローマ、基督教をへて、中世初期における原住民の定住形式の問題、すなわち村落団体が莊園制度かを考証・評論し、ついで、中世の都市商業および手工業の組織特徴を明らかにして、中世の経済心理に及び、やがて近世国家・技術および貴金属の生産に現われた市民的財産の成立・新需要の発生を説いて資本制社会の成立へ、そしてフランス革命以後の最近世界を説いて、当時激動のさなかにあったロシアの産業および貿易にいたるものであった。半世紀も昔の日本で行われた「経済史」ゆえ、原史料にもとづいての考証、せんさく、立論ではないが、諸家の豊富な史的素材を丹念に蒐集・整理しつつ、全人的な豊かな歴史的領會をもつてのした、天衣無縫の芸術作品を、聴く思いあらしめたものであった。「囚はれたる経済学」のなかに示された歴史観の裏証であろうか。

ちなみに先生はこの講義でラムブレイトおよび三浦新七先生の名をあげられた。外国貿易政策の講義は、大正九年度（筆者らのクラス）の三学期と、次のクラス大正十年度に行われた。「外国貿易の意義」、「その利益」にはじまって、貿易の均衡、保護の手段、幼稚産業保護、農産関税、衰頽工業保護という章別で、不勉強な筆者の受けた印象では、徹底的自由貿易主義論であった。若き日の作、帝国主義論を、まったく脱したものであった。試験問題に「自由貿易の真理なる所以を論ぜよ」というのがあった。もちろん経済理論としてのことである。手塚寿郎先生の紹介されたマノイレスコの生産力説によるリカード批判などではない時のことである。さて経済原論の講義。これは先生留学前の一年四ヶ月および留学直後の準備期間一年七ヶ月を除き、大正八年（一九一九年）度、大正九年度（一九二〇年）および大正十年度（一九二一年）の三回行われ、その最後のもは、完結をみずして終わったものである。先生がもっとも力を注がれたもので、まさに「囚はれたる経済学」に自から提出した問題とその解答を、これひとつに体现・展開されたものであった。開口第一に「如何なる觀念より出發して或る學問の研究を始めるかは事全く論者の自由也。筆者は今人口より出發す」という一句からして、どきもを抜かれた。そして津村博士原論の、財の意義・種類を説いて、有形財とい無形

財とい、とか、またその他の、当時の原論にあった財の意味の吟味を、精神体操とよばれた、その表現に拍手した。思うに先生の原論の中心は、第三章純生産物にあった。これを増加するものが生産で、しからざるものが不生産であった。そして不生産という語になんの価値判断もない。ただ純生産物の大きさが人口扶養力を決定する、あるいは人口が同一とすればその生活程度を決定する、あるいは遊民階級の質・量を決定するといふ一人口と国力という考え方がでてくる。経済原論をひとつの精密科学にまで仕上げた経済学五十年の進歩は、いまこの大西経済原論を、経済諸量の相関をもつて、経済の循環と拡大との条件をたずねるもの、とはいえないが、財の意義とか種類とかの分類を無用な「精神体操」とみた若いものたちは、この面白い講義に脱帽し、拍手した。ただししゃべりつづけられる毎回の講義を、丹念にノートして、さらにまた浄書して整理していた級友もあつた。しかし、その当時に、筆者として、疑問のないことはなかった。たとえばまた「純生産物」という独特の章節があるが、なにかそれが固定的な大きさ、量のように思えた。ところがこれに支えられる生産者の生活充足、遊民の質・量は変動する、その関係はどうなるのか。ことに講義の後半、所得の分配というところ、所得の概念とその変遷を説かれ、財産所得と勤勞所得、貨幣所得と實際所得を説かれたのちに「流れとしての経済生活」という考え方を

を導入されたとき、前の純生産物という考ええ方と、どう結びつけるのかと、疑問に思ったことを思いだす。当時はまだ、経済生活の循環と拡大とか、安定と進歩とか、経済の静態と動態という言葉を先生は使われなかった。ともあれ、しかし、この経済原論、全集の上・下二巻は、「経済学」への先生の答えでなければならなかった。それが先生の生前に上梓されて、十分な討論がなされなかったのは、先生ご自身の恨みであろう。もっとも、当時マーシャルを先頭として、クルノー、ワルラス、パレートをつぐ近代経済学の息吹きは日本でも、もうふきそめていた。ちなみに大西先生はエドウィン・キャナンの Wealth を高く評価しておられたようである。先生はまた、この講義のなかで、よく学問としての経済学は、かくかくと説明する。いかにあるべきかをいわない。それは政策、人生観の問題なり、といわれた。前述の社会の変動、労働者の生活に、かくかくの対応をと考えたものたちは、これをときに先生は単怯であるとさえゆうた。それが真理の一方性、それが学者であると先生は昂然と答えられた。

伊太利亞の旅

大正八年（一九一九年）秋、筆者らが二年目在学习、ヴェブレンの講義と、原論の講義に手をやいていた秋、そしてその年の五月以来、先生

の庇護による小樽啓明会主催の講演会などに聴講して、すこし先生の身辺に馴れたころ、「伊太利亞の旅」が刊行された。B6版黄色の表紙に、美しい写真の沢山はいったこの本は、悪童どもを驚させた。なかの物語りの二、三、評論の一、二はもう啓明会の講演で聴いたものであったが、その内容は、まったく人の魂を捉えた。ヨーロッパの文化は、イタリアの文化は、こうして味わうものか、こんな考え方もあるのかと思わせた。文章がすこし飾りすぎ、ときに夏目さんの複製もあることは、気にいらぬが、とにかく魅了された。その書評は、左右田喜一郎博士が、国民経済雑誌第二十八巻第四号にのせられた大西教授著「伊太利亞の旅」と「囚はれたる経済学」につくる。

当時、こうした紀行文のかたちをかりたエッセイ、物語はすくなかつたし、とくに南欧のものは、鵜外漁史のほんやく、即興詩人、浜田青陵博士の「希臘紀行」しか知らなかつた筆者は、その冬休みに忙しい家業の手伝いの暇を盗んで、むさぼりよんだ。そして、「私のようにゆきずりの旅人としてでなしに、本気になつてイタリアを研究する人がでてよいのではないか」との一文をながく心にとめた。のちに神戸に五百旗頭教授などがでられたとき、ああ、やはりと思つたり、手塚寿郎先生がイタリア語をはじめられたとき、やっぱり、と思つたものである。ヨーロッパへ旅行した人で、この本を携えてイタリアを訪れた人も多い。社会学者、関西大学の岩崎卯一博士も

そのひとりである（座談会記事参照）筆者も、一九六〇年、ユネスコ研究員として、オーストラリア半年の勉強をおえて、南アフリカからロデシア、ケニヤ、スーダン、エジプトとアフリカを北上し、ギリシャのアテネからローマへはいった時、CIT 附近の安宿に一夜を明かした翌朝、いちばんさきに訪れたのは、ボルゲーゼの美術館であった。先生の一文「ボルゲーゼの朝」をおぼえていたからである。涙が流れた。この本がでて間もなく先生は結婚された。

文明批評

教室のなかでは、近寄ることもできない先生に、親しく口のきける機会があつた。それは先生が部長をしておられる弁論部主催の講演会のことである。学生が何人かやつたり、当時は演説といつたときに新任の先生、手塚寿郎先生や、椎名幾三郎先生や、中村賢二郎先生やが、就職講演として、話される。たとえば「限界利用均等の法則」、例えば「先輩諸学者への非難」など。そのあとに、先生のコメントがある。それが面白いと評判で、筆者も二年生になつたとき、大正八年その席にてみた。菅谷重平さんや、筆者と同じクラスの鈴木義雄、西村久蔵、下条三郎、中川久平、佐藤正雄といった連中が、さかんに先生と話している。筆者は、うらやましく、しかしもっぱら聴き役で席の隅に坐っていた。

翌年、大正九年（一九二〇年）、夏休みを利用して、大西先生のいい

だして、巡回講演というものが行なわれた。

旭川、帯広、釧路、北見、網走、岩見沢と廻る。大西先生、手塚先生、そして鈴木、西村、下条、佐藤中川、筆者、二年生の伴。手塚先生は黙々と本を読んでおられる。大西先生はみんなを相手にトランプ遊び。そして原稿の手入れ。この時、北見（当時は野付牛町）のあと、網走町のたつての懇請で、この土地を追加入して、みんな種がなくてこまつた時、先生のやられたのが、ルーヂンからバザロフヘーツルゲネフを通じて観たる露国文化史の一節—大変な評判であった。まず駅へ汽車がつくと万雷の花火、立看板に小樽高商・大西猪之介博士来る。この講演は、のちに雑誌「解放」にのつて、江湖の絶讃を博した。

講演とエッセイ

新しい気分
明治四十五年五月 小樽高商
第一回開校記念式講演
（全集第十一巻 文明批評）
生活難は人間の宿命である
大正元年十月 実業の世界所載
（全集第四巻 経済学研究）

勤俣の意味

大正六年十一月四日釧路の講演
（全集第四巻 経済学研究）
貨幣に現れたる人生の種々相
大正七年六月 「太陽」所載
（全集第四巻 経済学研究）
人口と国力
大正八年七月 北海道庁講演
国民経済雑誌 第二十七巻第四号所載
（全集第四巻 経済学研究）
ルーヂンからバザロフへ
「ツルゲネフを通じて観たる露国文化史の一節」
大正八年十月 「解放」所載
（全集第十一巻 文明批評）
勤弥の途と源之助の途と
大正九年二月大正日々新聞所載
（全集第十一巻 文明批評）
旧い文化と新しい文明と
—北米合衆国の文明批判—
大正九年五月「雄弁」所載
（全集第十一巻 文明批評）
奴隷の道德と貴族の道德
大正九年五月 巡回講演
（全集第一巻 経済学認識論）
宗教と科学特に経済学
大正九年八月 仏教聯合会講演
（全集第一巻 経済学認識論）
闘争の心理
大正十年一月 「解放」所載
（全集第七巻 経済史 下）
社会政策の形而上学
大正十年三月 「改造」所載
（全集第三巻 経済原論 下）
経済価値と倫理価値と
大正十年六月 「中外」所載
（全集第二巻 経済原論 上）
生の宗教と死の宗教

大正十年七月 文部省通俗講演
 会
 (全集第一卷 経済学認識論)
 丸齋の心理
 婦人問題の一考察
 大正十年七月 「野依雜誌」所
 載
 (全集第十一卷 文明批評)
 婦人問題概観
 遺稿、一部は大正十一年二月中
 旬 大阪毎日新聞所載
 (全集第十一卷 文明批評)
 遺稿

(全集第十一卷 文明批評)
 先生には、このほかに歐洲大戦で
 ドイツからイギリスへ逃れられた
 時、彼の新聞を熟読分析しての
 「歐洲大戦記」-雑誌「外交」第一
 巻第二号-第十一号所載、のち、全
 集第七巻経済史下 収録がある。
 「自ら歴史を作りつつある時代は、
 自ら歴史を書く権利をもたぬ。此の
 原則を無視して書かれたるものを我
 々は際物と総称する。筆者は最も際
 物を嫌ふ一人である。然も歐洲大戦
 記を草せむとする―明かに矛盾であ
 る」との書き出しにはじまり、総論
 ・独逸軍の策戦計画からおこした、
 A5版一三〇頁の長篇は、軍団の配
 置図あり、要塞の見取り図あり、舞
 台は独・白・仏にわたって、まさに
 歐洲大戦第一期の戦略・戦術・戦闘
 の描写、批判であつて、のちの大軍
 事記者伊藤正徳を思わせるものがあ
 る。読むたびに筆者は、先生、い
 つ、こうしたものを、ものされたの
 であらうと思議でならない。
 先生を新聞界にひきだそうとの動

きがあった(筆者は在学中は知ら
 ず)いろいろの事情で神戸商大へも
 戻れないと悟られた先生の心は、そ
 れでも、「夏は涼しく冬は温い」六
 甲山の麓をこい慕っていたという。
 あたかも、大正七年(一九一八年)
 大阪朝日新聞の論説中、「白虹日を
 貫く」の一句が不敬の意ありとい
 わゆる白虹事件となり、主筆鳥居素
 川以下社友長谷川如是閑、大山郁夫
 らが退いた事件があつたが、その鳥
 居素川が大正日々新聞を翌大正八
 年(一九一九年)おこして、大西先
 生を町重に招いたという(これも当
 時筆者知らず)、先生はこれを謝し
 て、一文、「勸弥の途と源之助の途
 と」をのせられた。その後、下村海
 南博士が朝日新聞副社長に就任した
 ときも、まず招こうとしたのは大西
 先生であつたという(いずれも座談
 会記事参照)。
 先生は、あの不幸な病で斃れられ
 なくとも、ながく学界にとどまられ
 たかどうか。
 それにしても、先生の遺稿、文字
 どおり未発表、最後の一文、歿後全
 集第十一巻文明批評にのせられたの
 が、「医者不親切」とは、いかな
 る人生の皮肉であらうか。(座談会
 記事参照)。

先生は、規帳面であられた。週に
 三日か三日、学校に来られる。さま
 づ午後一時頃。けつして休まれない。
 三時頃レッスンがすんで会議や
 なにかない日は、きまつたコースの
 散歩。地獄坂をおり、妙見川のほと
 りから旧日本銀行のあたりを一周り
 されて、それから復路はきつと花園
 公園のなかへ。公園で野球などをや
 っていると、しばらくじつとそれを
 みておられる。そしてにっこり笑つ
 て、また、ステッキをふって歩かれ
 る。カントの散歩。
 先生は質素であられた。いつも紋
 付羽織にはかま。茶色の帽子をかぶ
 り、ステッキをもつておられた。か
 ばんなどもたない。大型報告用紙に
 書かれた講義案は、風呂敷に包んで
 おられた。講演旅行もお着物、うす
 いねずみ色のトンビーインパネス―
 をきておられた。車中のたべものも
 学生といつしよ。宿でも酒は召しあ
 がらなかつた。(この旅行にお伴し
 た悪童どもも、みなもういない)。
 旅行から帰つてから、各地で世話
 になつた人たちへ、先生が、自分の
 著書、「囚はれたる経済学」を贈ら
 れた。贈×××氏 小樽高商弁論
 部と、クラスの能筆家砥上朝雄君が
 筆でかいた。
 先生に独特の言葉づかいがあつ
 た。詳しくは全集をみられたい。あ
 るいは「伊太利亜の旅」、「囚はれた
 る経済学」、または「人口と国力」
 を。
 先生に独特の文字づかいがあつ
 た。英語、ドイツ語のTをツであら
 わす。スツラスブルグ、ドイツェル
 であつた。先生の用語例が、当時緑
 丘ではやつた。しかし、申し訳ない
 が先生のこの用語例は、筆者は好ま
 なかつた。大正七・八・九年ころの
 先生の講演、文章は素朴であつた。
 先生のお宅へは、卒業の年、大正
 十年一月に、卒業論文、自由主義論

先生と生活

先生は、規帳面であられた。週に
 三日か三日、学校に来られる。さま
 づ午後一時頃。けつして休まれない。
 三時頃レッスンがすんで会議や
 なにかない日は、きまつたコースの
 散歩。地獄坂をおり、妙見川のほと

先生は、規帳面であられた。週に
 三日か三日、学校に来られる。さま
 づ午後一時頃。けつして休まれない。
 三時頃レッスンがすんで会議や
 なにかない日は、きまつたコースの
 散歩。地獄坂をおり、妙見川のほと

先生と私

本稿を終るにあたり、筆者は、い
 ままで秘めた罪を懺悔して、亡き大
 西先生、今は亡き、また今なお在ま
 す、諸先生、同窓の諸君子に、心か
 ら詫びねばならぬ。それは、座談会
 の記事、菅谷重平博士が指摘され
 た「大谷さんは、大西先生にマイナ
 スになつた」の一事である―一言
 もない。
 しかし、これは全く筆者ひとりの
 せいであつて、先生のせいでもなけ
 れば、先生と先生をめぐる学界の人
 びとの間柄のことからでもない。そ
 の証拠に、筆者のクラスからも、卒
 業の年に竹村吉右衛門、杉田庚子
 郎、野村英一の諸氏が、東京商科大
 学に入學しており、翌年には、同じ
 く大西先生に受講の大泉行雄、小林
 北一郎、越崎宗一、野沢愛親の諸君
 が、またつづいて筆者のクラスの沼
 尻真一郎、宮林新三郎の諸氏が、門
 脇逸司、萩原謙造その他の諸氏と入
 學しておられる。
 もともと、筆者の学部行きそのも
 のが無理であつたのだ。あらゆる意
 味で。
 東北海道の片田舎の小さな商家に

先生は、規帳面であられた。週に
 三日か三日、学校に来られる。さま
 づ午後一時頃。けつして休まれない。
 三時頃レッスンがすんで会議や
 なにかない日は、きまつたコースの
 散歩。地獄坂をおり、妙見川のほと

生れた筆者は、中学すらも望めな
 かつた。新設の商業学校をうけて、卒
 業のうちは、家業をつぐべく、期待
 もされ、運命づけられていた。それ
 を少年の筆者を借んで中学へと家父
 を説きつけてくれた人がおり、さら
 に中学がすむとき、その校長が、も
 うひとつ上の学校をと、家父を説い
 てくれた。筆者が緑丘に願書を出し
 たのは、願書締めきりの日で、それ
 から何日か、夢中で受験勉強をした
 のであつた。
 丘に登つた筆者、クラス中の最年
 少、懐ろもいつも乏しかった。本も
 買えず、煙草・酒ものめず、寄寓先
 の情によつていた。(寮を二日で出
 たのも、寮は金がかかるからであつ
 た)。教科書はどうか買つたが、
 さきにあげた本どもは、図書館のも
 のであつた。そのうえ、外国語部の
 ことや、音楽部のことにも夢中であつ
 た。どうやら学業についていけたの
 は、僥倖であつた。しかし先生によ
 る講義の受講、読書と思索は、もう
 ひとつ、学問とはなにか、もっと勉
 強したいと思つた。就職は考へて
 もいなくなつた。折から家業はまさに
 倒産の寸前、一月中旬、意を決して
 長文を家父におくり、さらに寄寓先
 の老主に書いた。そして許されて上
 京したのは試験の前日、準備もなに
 もない。福田徳三博士の本も二年
 前、読み流しただけである。前年ま
 では、外部からの学部入学は推薦
 制。試験によつたのは、この年から
 のこと。そしてこの年、一橋の競争
 は激しいものであつた。
 泣き言とひびいては、なおさら恥
 かしい。試験のなかも忘れた「一

物一価の法則」というのがあつたよ
 うに思う。
 生れてはじめてのお江戸の春に背
 いて筆者は、父母の郷里、越後の片
 田舎へ旅した。マントもなかつた。
 その旅のなかで、一年か二年おくれ
 のスペイン風邪にかかつた。医者も
 いない田舎、氷のかわりにむろに積
 んであつた雪で頭を冷やした。急性
 肺炎。やつと危機を脱したのちの咯
 血、微熱、盗汗、典型的なルンゲン
 ・ツベルクローゼ。そのまま滞留。
 その年の暮れ、相州茅ヶ崎のサナト
 リウムに入院。大正十一年二月八
 日、先生長逝の日は、絶対安静、家
 人も、友人も、病める身をきずかつ
 てか、なにも知らせてくれなかつ
 た。筆者がこの痛恨事を知つたのは
 継続する熱がややつたその年の夏
 のことであつた。その前年、危機を
 脱してペンもつことを許された第一
 信で、先生に心から、すみませんと
 書いたのに対して、くよくよしない
 で、これでもよみなさいと送つてく
 だすつた本、その本もこの戦争中に
 疎開して、巣鴨駅で焼いた荷物の中
 で失つてしまつた。往事茫茫。しる
 しおわつて先生の学恩に深く謝した
 てまつる。
 先生は、こわかつた。しかし本当
 にいろいろ教わつた。人間いかに生
 きるべきかと―授業の最後の言葉
 は、こゝろあつた―
 「諸君は、私がよく、それは人生
 観の問題だというとき、不満の意を
 もらした。私の人生観は―今こそ言
 おう、私の人生観は私の生活、諸
 君、生きる瞬間をもつともよく生き
 よ。」

1日・2日の旅に出ましょう
 小さな旅



洞爺
登別



ホテル(政府登録)
万世閣

洞爺万世閣 5-2171
登別万世閣 4-2266

札幌案内所 25-8570・チェーンホテル=定山溪グランドホテル

大西「社会主義論」を読んで

広島大学名誉教授 中野清一

一、「はしがき」を含めて

私もが緑丘の門を始めてくぐった時には、大西先生は既に不帰の人になっておられた。だから私も先生の訃報に接することは出来なかつた。それどころか、小樽に生まれ、高商入学までの小学校・商業学校何れも小樽であつた私だが、小樽の町で先生のお姿をおみかけしたとさえない。先生のお名前はオランダの私立商業(当時の北商、今は北照高校)の生徒として正法寺門前の隅にちぢまっていた私でも知っていた。「囚はれたる経済学」は、緑ヶ丘の頂上にそびえ立ち私共オランダ商業学校(当時はダラ商と市民の間では通称されていた)生徒たちのとも手が届きそうもない高さで屹立している小樽高商のシンボルそのもののように思えた。

「緑丘誌」を粒粒辛苦しつつ既に六十四号まで刊行し続けてきた墓目英三兄にいささかでも協力するのが「緑丘団結」を願つてやまぬ私の義務、という理由も勿論あるのだが、かりにこの理由を別としてもなお二つの理由が私のペンをかりたてる。その第一、私事にわたつて恐縮だが、この四年近く私は「支配と服従」という様な場で現われる社会関係の基礎に設定して社会関係の組織化を試み、その上、あわよくば社会変動論をまともあげようと私なりに努力してきた。経済の周期、成長、変動のとらえ方の中で、「外部経済要因」として経済学者なら見定めてかかるものを、経済を包みつつ、だからこそ経済の唯中へと滲透してやまぬものとしてとらえなおそうと、それこそドンキ・ホーテになりかねぬ冒険をやらかそうとしていた。その必要もあつて社会主義思想の流れを今一度勉強し直し始めた。終戦後間もなく横浜経専の教壇に立つようになつた頃、私の担当は「社会思想史」だったから、サン・シモン、プランキー、バクーニンなどの他にリカルドとその社会主義思想の上での後継者たち、そしてヘーゲルについてのメモをとり終えた上でマルクスに向つた。それもマルクスの初期の

作品と晩年近くの友人たちにあてた手紙に重点をおくようなメモのとり方をした。マルクス以後のうつり変わりについては「国家」をめぐつての、ベルンスタイン、スタムラー、アドラーたちとロシヤのレーニン、スターリンとの係わり合いに中心をすえてメモをとっていた。そのメモの半分は今も手許にあるのだが、他の半分はこの二月二十六日以来、「封鎖中」の立命館大・恒心館内の私の個人研究室に置いたままになっている。その封鎖されているメモの中には、ベルンスタイン、ラッサール、アドラー、ゾンバルトについてのものであり、その何れにもやはり横浜で読み耽つた大西先生の「社会主義論」からのメモが書き込まれている。後でも書くが大西「社会主義論」とベルンスタインやゾンバルトとの関連は甚だ深い。

その大西メモを思い出しつつ、墓目兄からの借覧中の昭和二年版「社会主義論」の頁を繰っていく中に、私の念願に自ら浮び上つてきた一つの連続ではないのか、ということである。この頃は社会主義に関する類書は数え切れぬほど多い。しかし今から五十八年前の一月、構想を新らたにして春を迎えた頃には半分ほど書き上げられていた大西社会主義論と近頃の社会主義論との間に、六十年近い歳月を噴かせるほどの巨大な進歩はあるといえはあり、無いといえは無いにひとしい。大西先生の原稿が完成してから六年ほどしてソヴェト社会主義連邦の成立があり、第二次大戦の勃発があり、更には「技術革

新」もあり、産業社会、工業社会から脱工業社会、情報社会、知識社会への「大転換」さえ見られ、さては世界の多くの国々でのヤングパワー、スチューデントパワーの嵐が吹きまわっている最近ではあるが、ドラッカーの近著の標題を商魂たくまし極まる訳者には気の毒だが、一九一年と一九六九年との間には断絶の名に値するほどの社会主義調の「革新」は殆んど無い。ドラッカーの真意が、連続をそれとなくふまえての「不連続」の指摘にあつたように、大西社会主義論と現代社会主義論との間には六十年を通じての基調における連続がある。勿論前者がすべての点で完璧だとは義理にも言えわれないが、今もなお読み直して受け継ぐべき重要な示唆がかくされていく。その点を私なりに書きつけてみたいのである。

今一つの理由。母校小樽高商大に現に学びつつある後輩に当る学生諸君たち、母校の若い世代の卒業生諸君たちを特に念頭に思い浮べつつ第二の理由を書く。小樽高商・商大ナショナリズムを説こうとする気持は私には一かけらもないが、母校開設以来の、社会思想の上での二つの巨星、大西先生と手塚さんの他ならぬ緑ヶ丘での比類のない努力と成果から多くのことを学びとってほしいと願う。お二人は単純な文獻渉獵者ではなかつた。ワルラスへの手塚さんの接近がワルラスの「正義論」に魅惑されたかも知れぬように、大西先生の社会主義論は、幸徳秋水らの大逆事件に死刑の判決が下つた頃に筆

を起し、「貧民済生」のために宮中から一五〇万円下付という状勢の中で書き進められていった。若しホブソンの「帝国主義論」やヒルファヂングの「金融資本論」を知っているなら、前者からは九年足らず、後者が公刊された翌年には大西先生の社会主義論が完成した、という事実にも注目すべきだろう。古いものだから無視するとか、外国のものでないとかつまらぬとか、同じ日本でも東京や京都でなくて北辺の小樽でのことだから軽視するといふのでは、大阪市立大から好んで北辺に赴かれ母校の運営に腐心しておられる実方学長の努力に対応する道につながらぬと思われる。

二、「社会主義論」の性格

「社会主義論」は東京高商専攻部卒業論文として明治四十四年六月、貿易科実習室の主任教授、関一博士に提出された。大西全集第九巻に収められている「帝国主義論」脱稿の余勢を駆って一気に書き上げたものである。関ゼミナル二年間の業績がこの論文合せて千頁に近い点を思うと才能もさることながら大変な努力に驚嘆するばかりである。この二大論文に手を染めるまでの経緯については「社会主義論」の「序」に簡潔な説明がある。関博士から初めに与えられたテーマは「穀物関税」だったので、大西先生は「農業保護政策の批評を中心として日本主義論」を手がけるつもりだった。ところがその後間もなく、京大の神戸博士が「穀物関税論」を公刊したし、神戸高商時代の恩師津村博士も「商業政策論」を公けにするという話を聞いて

「余の計画全く挫折し了んぬ」と嘆息しておられる。

しかし大西先生は幾許もなく再起取るの不可なるを信じ、幾度か思返して遂に「社会主義論」に取組もうと決意するに至つた。この経緯についての大西先生自身の叙述を讀んでいくうちに先ず念頭に浮び上つてきたのは福田徳三博士の大西先生についての紹介や批評(全集第十巻中に序言として収録されている)の中の、いわば「酷評」とも言うべき部分である。「正直に云へば私は大西君の学風も人物も余り好きではない。同君の余りに一方的に鋭い而して余りに細い物の見方や歯切れが善い様に見えて其の余り歯切れのよくない物言いは、私の決して共鳴し得ない処である」と福田博士は書き流している。

この一種の人物評が当たっているかどうかは大西先生に一度も接しえなかつた私には判断できない。しかし「酷評」のように思えてくるのは、先きに引用した大西先生自身の筆による「穀物関税論」から「社会主義論」へのテーマ転換の姿勢から見てのことである。尤も、先輩や恩師二人が同じテーマに取組んだということでテーマ転換を決定したという辺りは大西先生の「意地っばさ」、独自の「負けず嫌い」を伝えているように思えるし、この点の解釈如何では福田博士の「余りに細い物の見方」という批評をうらづける資料になりかねない。しかしそう見るにしもそれでは「狭き問題を取るの不可」を自ら記した大西先生の表現は

どう理解したらいいのだろうか。

それは別としても「社会主義論」は「ただ一貫せる社会主義的思想の根本的潮流の説明」に主眼をすえて書かれた。だから止むを得ない場合を除いては「社会主義的運動」には筆を向けていないし、「社会主義者列伝」でもない。大西先生は言い切っている。

なお大西先生はこの論文を念入りにあくまでも「未定稿」と呼んだ。五百頁近い一篇をまとめたものの、あらためて読み直してみると「欠陥」出して、自ら之を見るに忍びず」と「未定稿」と呼んだ理由を謙虚に書いている。「欠陥」は自ら気がつかれたからこそ、今後も「永く此研究を継続して、此小稿を訂正し、増補し、一度は之を完成せざんば止まざらむとす」と先々の遠大な抱負を記している。それと同時に、この抱負表白に直ぐ続いて注目すべき一節が書かれている。曰く「若し夫れ、時勢幾度か変遷し、失われたる言論の自由の回復せらるるの時來らむか、余は必ずや未定稿の三字を脱したる社会主義論を再び机下に呈すべし」。

注目すべきこの一節の含蓄をくみとるためにはこの一文が書かれた一九一一年六月前後の様々な時の動きを想起する必要があるだろう。その四年前に「平民主義」を公刊した幸徳伝次郎(秋水)は、大西先生序文が書かれた丁度一年前に大逆事件で検挙された。幸徳秋水逮捕の二か月後には石川啄木の「時代閉塞の現状」が公けにされた。一九〇五年日露戦争終結後間もなく始まった紡績業

三、「社会主義論」の狙いどころ

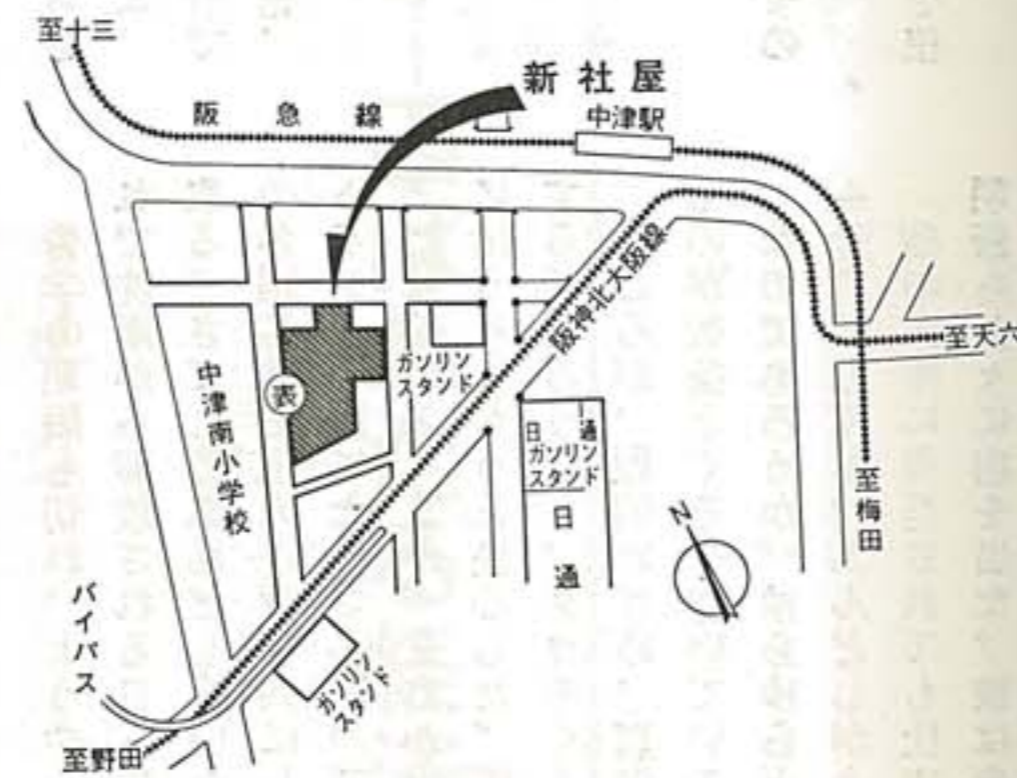
「社会主義論」は七章から成り、他に「結論」を加えて結んでいられる。大西先生の眼に映つた「社会主義的思想の根本的潮流」には四つのものがあった。「空想的社會主義」、「歴史的社会主義」、「サンヂカリズム」「修正派的社会主義」がそれで、それぞれに第四、第五、第六、第七の各章をあてられているが、敘述の重点は第五章の「歴史的社会主義」、即ち「マキニズム」に置かれており、五百頁近くの約半分はマキニズムの敘述である。「歴史的社会主義」と名づけたのはゾンバルトからの示唆が大きく作用しているように思えるが、マルクス(大西先生の表現ではマークス)の協力者エンゲルスの「科学的社會主義」という銘の打ち方に対して「科学的」という形容を拒否しようとしたベルンスタインの姿勢からも多くを学びとつたことでもあつただろう。大西先生は、「科学的社會主義の診断は物の見事に失敗せり」と書き、科学的ではないがさりとて空想的でもない、診断には誤りがあつたが歴史の動きと密

新 社 屋 竣 工



営 業 科 目

- | | | | |
|--------------------------|----------------------------------|---|--|
| 日立商品 | 日立汎用機 | 日立冷凍機 | 電 気 工 事 |
| 各種電機器具
各種動力機
各種電機具 | 各種搬送機械
各種ポンプ
各種風機
各種圧縮機 | 各種冷凍機
各種冷蔵庫
各種除湿機
各種空調機
各種応用品 | 各種工事設計
各種配電設備
各種配電設備
各種配電設備
各種配電設備 |



日 本 電 氣 機 器 株 式 會 社

取締役社長 天 野 雅 司 (大正15年)

本 社 ☎531 大阪市淀区中津南通4丁目7-5 TEL大阪(452)1271(大代表)
夜間(452)1271~5

神戸営業所 ☎652 神戸市兵庫区三川口町3丁目12-4 TEL神戸(55)3393~5

着しようとしていた点ではまさに歴史的な社会主義と呼ぶべきものと考えたのである。「マークスの社会主義の根柢は剰餘価値論にあらずして唯物史観論にあり」と見た姿勢も歴史史的という形容を選んだ根柢になつたのである。

四潮流を次々にとりあげていく第四章以下に先がけて、無産者(第一章)、無産者階級(第二章)、社会主義の意義及特性(第三章)の三章を設定している。

かような順序をふんで「社会主義論」をよし未定稿としてであれまじめ上げようとした大西先生の狙いどころはどこにあったのであろう。

(一)「資本制社会の安住の地を得ざる無産者階級」の「現実の経済状態」こそ社会主義思想を産み出した、と見た大西先生は、社会主義論の筆を先ず無産者や無産者階級の「生活状態・精神状態」の「描写」から動かし始めた。

(二)無産者論と無産者階級論とを別々の章で取扱おうとしたのは大西先生なりの「階級の自覚論」が背景にあったように思える。一般によく知られているように、マルクスには「階級それ自体」と「自らのための階級」の二段階の区別論があった。大西先生も勿論この区別論を充分に読み抜いた上で、既に「潜在的階級」と「顕在的階級」という新たな表現をそれぞれに当てはめようとしていた。それでは潜在的から顕在的に移行させるものは一体何か。この点の説明は現代でも諸説紛々としておる有様だが、六十年近く前に大西先生が提示した解答は興味深いものがある。

「質に差なき事砂の如き無産者は能く融合する。独立して力なきを知られる無産者は団集の力を自覚す。」と記している。この場合の「質に差なき事砂の如き」という表現の意味は次の叙述の中に自ら理解されてくるだろう、曰く(資本制の嵐は古来幾千年人類の培い来りし共同生活の枝葉をば一つ又一つと吹き落したれ共、その吹き落された枝と葉は自らにしてその嵐によって又一つ所に積まれたり。大都会即ち是れ。大工場即ち之。その相共に働く幾千とも知れぬ輩は皆是れ自己と同じく郷土なく、家族なく、種族なく、財産なく、広き天地の間に孤立せる輩なり。……彼は茲に自己と運命を均しうする同輩ある事を思ふ。)

(三)資本制社会のもとで「安住の地を得ざる無産者階級」は「各がじし空想的社会主義の福音に随喜」したもののそれとて「暫しの夢」でしかなかった。やがて「歴史的な社会主義の偉大なる教理に支配され、漫々たる湖水の如き勢を呈するに至る」。しかし「冷酷なマルクス批評の嵐は其堤の壊るる」に及んで、「急激なる社会主義的潮流はサンヂカリズムに走り、穏和なる社会主義的潮流は修正派に注ぎ、残れるものは沈滞腐敗を重ねて正統派と称ふ」大西先生は四潮流の交替・残存の有様をこのようにとらえた。

(四)「社会主義論」の巻末に近づいて大西先生は大胆卒直な宣言を掲げる。「社会主義的社会的到来の必然なるを証明せんとする企は破られたり。サンヂカリズムは未だ未完成品にして修正派の思想は円熟せず。之

を一言にして尽せば社会主義論の総ては亡びたる又は亡ぶ可き運命を荷ふ。」

(五)「社会主義の謬妄」の指摘につとめた大西先生ではあったが、「社会問題の存在は理論を超越したる眼前の事実」と記し、社会主義思想とは別途に社会主義運動という表現を駆使し「無産者の生活状態」が現在のままに続く限り、これを「本源」とする社会主義運動もまた次々に立ち現れる、と考えた。その上で大西先生は大西調ともいうべき名文で次のように書きつける。「人よ、乞うらくは警察力を以て社会主義的思想の撲滅を図るなかれ、暴力を以てその鎮圧を企つるなかれ。蒸汽の圧力は通風機を閉したりとて減ずるものにあらず、精神は只精神によるの外消す可からず。」

(六)ではどうすればよいのか、「吾人は如何なる手段を以て之に對すべきか」と自問した大西先生は「答えて曰く社会政策即ち是れと」大西社会主義論の最後の目標は社会政策論の提示にこそあったのである。

追記||私の最初の予定では、大西社会主義論の特長ともいえるべきものを要約して紹介した上で、現代という時点からの照明をあてることで、活用しうる点を、指摘したり、筋の一貫していない点は批判を試みるつもりであった。しかし既に長くなって終ったし、第一、「緑丘誌」にふさわしくなくなる点をおそれて以上で筆を納めることにした。

(大一一五 元小樽高商教授)

飲む杯は君のはら

★サッポロビヤホール
ニュー・ミュンヘン

new Küncher

本 店	大阪・梅田	TEL 361-6545
北 大 使 館	梅田・安田信託ビル9F	TEL 312-9151
南 大 使 館	南・法善寺前本通り	TEL 211-7248
神 戸 大 使 館	三ノ宮・生田筋	TEL 39-3556

ロング・ロング・ハンカチーフ

津村秀夫

(映画評論家)

大西猪之介はヨオロッパ留学の間、日本から持参したふんどしを数本持ち歩いた。大正時代のはなしだから、当時の日本人としてあなたがち奇妙でもなかった。ただ彼のこまったのは、ふんどしの洗濯である。

まさか洗濯屋に出すわけにも行かず、いわんや下宿のおかみには洗わせられない。仕方がないから自分でこっそり洗濯していた。根が不精者だから、とかくふんどしがたまる。汚いのをトランクの底に秘めたまま眠らせておく。

西洋ダンスの引き出しなどに突っこんでおいて、もし主婦に発見されたらめんどろだ。ところが、一本づつ洗えば目立たないが、不精だからとかく三本、四本とためて洗う。それだけに干す場所がむづかしい。日あたりの良い場所ではないと意味がないが、家人に発見されやすい。干し場をさがすのに苦心惨憺、知恵をしぼっていたが、とうとうある日おかみに発見された。

「あれは何か？」

「ロング・ハンカチーフである。」

「日本人はどうして、あんなに長いハンカチーフを使うのか？」

「ロング・ロング・ハンカチーフ。」

「あれを洋服のどこに入れて持参するのか？」

太陽さんと輝く下で、数本のふんどしが長々と風になびいている。その

風情をしばらく眺めていた大西猪之介は返答に窮した。

「あれは家の中で使うロング・ハンカチーフである。外出の時は小さいのを使う。」

(1)

「……………」
おかみはゆらゆらとなびくロング・ハンカチーフをさも感服したような目つきで眺めていたが、

「それにしても日本人のハンカチーフは長いものだ」とつぶやく。

「あれは大変便利である。」

真っ赤になった大西猪之介はそそくさと立ち去った。

留学の期限も切れ、ようやく日本へ帰ることになった。船の中でやれやれこれ洗濯から解放される日も来たところだ。日本へ着くと先ず神戸に宿を取る。さてこのふんどしをいかに処分したものかと考えた。長い間ヨオロッパの各国各地を主人と行を共にした愛着のあるふんどし群である。洗わないのがトランクの底にたくさん眠っている。一挙に捨ててしまえと決心したが、さてどこに捨てるべきか。まさか女中に処分を命ずるわけにも行かない。裏の小川にほうりこもうと決心した。部屋の裏手にゆるい流れがあり、朝になれば消失するであろう、と、タカをくくって夜中にこっそり投げ捨てた。

ところが、翌朝めざめ、真先きに裏手の小川をのぞくと、あに計らんや白いものが数条とぐるを巻いている。流れがゆるいせいもあるが、何かに引っかかったのであろうか。ゆらゆらとゆれている。大西猪之介はぎょっとした。

「それにしても、ふんどしがとぐるを巻くとは……………驚いたな。」

宿の人々に発見されても仕方がないと観念した。退散するにしくはないので朝飯も匆々に宿を出た。彼はそのまま神戸高商時代の旧師の家を訪れた。夫人

に二、三日泊めてくれとたのみこんだ。

「ついでに奥さん、腹工合が悪いのでひとつオカユを作ってください。」

細君は笑った。

「外国から帰っていきなりオカユとは、相変らず大西さんらしく図々しいものですな。」

大西猪之介はそこでくだんのとぐるの話をして、夫人をまた笑わせた。

「いや、驚いたのなんのって、ふんどしがとぐるを巻いたところは壮観でしたよ。」

「バカおっしゃい。あなたはいつまでも子供みたいなことを言っていて、仕様のな

い人ですね……………」(四三・一〇・二二) (津村秀松博士令息)

囚はれたる経済学



「一冊の本—囚はれたる経済学—」

一橋大学教授 板垣 與 一

大西猪之介先生の著書を初めて手にしたのは、大正十五年の春四月、小樽高商に入学してから間もないころであった。入寮後の或る日、おなじ寮に住む三年生の同郷の先輩Oさんの部屋を訪ねた。第二外語の選択に迷っていた私は、特待生として寮生の尊敬をあつめていた彼に、独仏露語のうちいずれを選ぶべきか教示を仰ぐためであった。彼は即座に、あたかも権威あるものの如く露語を選べと薦めた。私は何の躊躇もなく先輩の言に同意した。

私の素直な態度に満足そうな微笑をもらしながら、彼は書架から一冊の本をぬきとって、私の目の前に投げ出した。おそろおそろその書物の中扉を開いた私の眼に映った文字は、大西猪之介著『囚はれたる経済学』であった。三日以内に読了して報告せよとの彼の言葉を背にして、私は蒼惶と部屋に引揚げ、端坐して読み始めた。

商業を卒えたばかりの私の幼稚な頭脳にとっては、それは全く難解そのものであった。私は一生懸命に読んだ。しかし悲しい哉、絢爛たる文章の綾に魅せられつつも、問題の所在や意味を理解することは不可能であった。ほのかに学問の道の険しさと悩みにふれたものの、それは全く未知の世界であった。

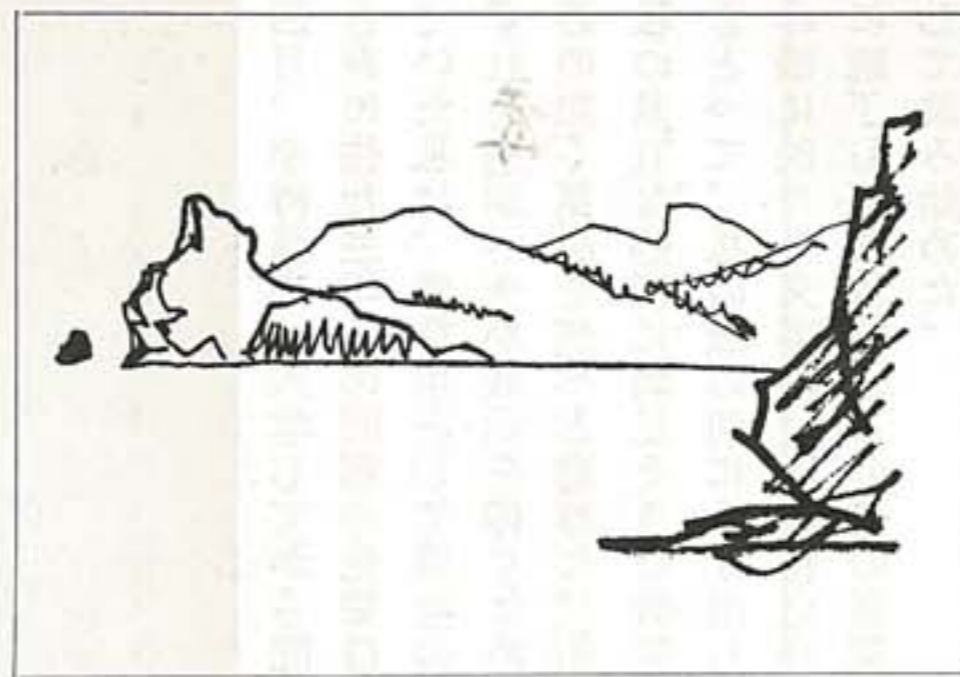
三日後、困惑した私の顔色を再び満足そうに眺めながら、「これならわかるだろう」と彼が投げ出した書物は、おなじ著者の『伊太利亜の旅』であった。私はむさぼるように、ほとんど徹夜せんばかりに一気に読了した。これは『囚はれたる経済学』とは打って違って、読み易くまた心楽しましめるものであった。

その翌日、私の晴れやかな顔を三度び満足そうに眺めながら、彼の書架からぬいて私の手に渡した書物は、法学博士福田徳三著『社会政策と階級闘争』であった。この本は私にとって必ずしもむずかしくて手に負えないものではなかった。ただし、巻末の批評集におさめられた河上肇博士の一文の中の「雄偉なる謬論」の一句が、私のイメージを混乱させ、またひどく傷つけたことだけが、妙に記憶に残っている。その後、『流通経済講話』からも大きな刺戟を受けたが、それはそれだけにとどまった。私の学問的興味は、むしろ小樽の学問的伝統に惹きつけられて、大西論文集『人口と国力』を読み、そして逐次刊行せられた大西猪之介経済学全集に傾倒し、やがて大西から左右田へ、左右田から新カント学派の哲学書へと、読書の中心が移ってゆくのであった。

(昭四)

読書力増進への啓発

下吹越 栄 吉



ことは出来ない」と、先づ靈肉一如の言葉から経済学はパンの方面に關することを研究する学問だとはつきり指教され、早い口調なので若い学生には世間の世俗のことに通じてないので、呂昇の三十三間堂とか赤坂の万龍、照葉という当時の名妓の比較価値観など飛び出し、ただ啞然として耳をそばだてたものだった。そんなふうで講義のあと皆してノートの読み合せにまごついたことだった。

或る時の修学旅行の感懐として山野の樹木の伐り株一米以上に及ぶものが残されてあるを見て、樹木も山野にあるだけでは経済価値はなく、伐採し市場に運び出されて始めて価値を生み出すのだから、人の労働が価値の源泉でしようとお尋ねしたのに対し、先生は即座に、そうだそれが「マルクス」の説く所で、所謂資本論の根底となつて居るのだ。この説がはたして真か否かを論究するのが吾人に与えられた課題だと教えられ、それから毎週二、三人の先生の住居にお尋ねし、また先生の学友の一人で当時日本銀行小樽支店に在勤の車谷様の御宅で、特別研修会を開催して下さつて河上肇博士の学説の

徹底をした研究指導をいただき大変啓発されたことは、今もって有難いことだったと感謝している。

特に読書法に就いて三、四百頁の原書を出されてこれを一週間内で読んでこい、五、六百頁位の小説など一時間位で読む様になれなどすすめられたので、読書力を増進さしていただいたことは非常なものが有り、今に有難いと思つて居るところだ。

小樽を去り先生にお会いをする機会に恵まれず、先生は遠く洋行され御帰朝されて「伊太利亜の旅」をいただき拝読させてもらつて、その名文と觀察の深さにいよいよ先生尊敬の念にかられたものだったが、突然先生御他界の報に接し名状しがたい淋しさ、いたわしさ、かなしみに打ちのめされたことであつた。当時日本経済学界の最高峰福田徳三博士、津村秀松博士、河上肇博士、左右田喜一郎博士、三浦新七博士諸先生の跡を継ぎ、それを一段進めて行かれるまだ若い新進気鋭な学者としての先生を失つたことは、学界にとり日本国家にとって一大損失であつた。殊に小樽高商にとつては誠に悲しい先生をなくしたので悲痛でならぬ。その後数年してから先生の長女の方が音楽学校の学生として満州に來られ、哈爾濱でも演奏会があつて、一夕御招きして一席先生を偲び語らつたこと、今はただなつかしい思い出となつて居る。

(大三)

断簡零墨

金 吉 忠 吉

該博な学識の先生の経済学の講義は執筆論文の下読み、推敲の感あり。浅学非才な自分はいつもノート採りに難渋し、お互にノートの整理の出来るであろう寮生活の学友を羨しく、思つたほどである。その頃国民経済雑誌に毎月発表せ

九月廿七日(土曜)夜下七時

小樽くろくろし

近代思想の「大」の巻

三浦新七

海濱の村のやいば 生徒よりこたへ

くろくろし 金持と認めろー

ある運がたいはれじいとやうため

一振ぶちると思へい、たぶん

くろくろし 先生は昔のくろくろしに似て

くろくろし

大九

切に保存している。

先生を偲ぶ参考資料としては所謂「断簡零墨」の類であろうが、自分には約五十年前の緑丘生活が走馬灯の様に髣髴とする。

一、御席筆を執つてものされたであらうこの一文に、先生独特の書体を、その字配りに、また一字一語の誤字訂正もない達筆の文章に先生の非凡の才を覗い知る。

二、一ツ橋の恩師三浦新七先生を小樽に招いて、同僚の先生方が一人でも多く聴いてもらおうと願う先生の温かきを感じる。

三、福田徳三先生始め一級の学者を招聘して、緑丘学園の向上に努められ、またその先生方に御願ひして市民のために講演会を催して、地方文化の向上に貢献せられたこと。

四、国際連盟運動の一翼として、福田徳三先生の講演会を小樽倶楽部に催したとき、司会者として壇上に現われた先生が洋服姿であつたので、満場の聴衆は一瞬アツと驚きの声を挙げ、盛んな拍手に変わったことを想い出す。帰朝後いつも和服姿のみの先生であつた。

五、「帝国主義論」から出発した先生の学問、実践は自由貿易論、国際連盟運動に転回したが、その後半世紀、数次の戦争を経て今日自由貿易の波がわが経済界を洗うとき、歴史は繰返すと思うと共に、この一文にある講演会で三浦新七先生が、歴史は同一次元を繰返すのでなくて、螺旋状に、より高い次元に於て繰返すと教えられたことを表記する。

(大九 不動産鑑定士補)

爽かな剃り心地

緑丘人のおヒゲ剃りには

資生堂スーパー・ポアン

ステンレス替刃

公認会計士
税理士

小島典春事務所

東京都千代田区九段北1-2-12

電話東京(03) (261) 2 9 3 8
(263) 4 5 8 7

忘れ得ぬ名講義 大西先生のおもいで

大西猪之介経済学 全集を傍に置いて

問室 守親

私は母校の教室で大西先生から講義をうけたというだけの関係であり、また特に先生と個人的に親しくしていただいた間柄でもなく、まして生来学者的素質のない私には五十数年を経た今日、先生について特記する資料の持合せもなく、当時の記憶も殆んど薄れがちになっているのが実に残念です。

とは申しても、あの有名な「囚われたる経済学」や名文できこえた「伊太利亜の旅」を読んだり、先生が亡くなられてから高島、南兩教授の手により美事に編集発行された「大西猪之介経済学全集」は全巻とも今もなお、私の書棚に大切に保存してあり、折りにふれてそれらを読むことで、何時でも先生の著書を通して先生に接することが出来ることはこの上なく嬉しい気がします。そして今その当時の記憶の一つとして先生の講義の時のことが目に浮かびます。

教室へ羽織袴の和服姿で先生は入

って来られ、懐中から教材と思われるものを、そのまま机の上において、それを見るでもなく読むでもなく、いきなり流暢な言葉で講義をされた時など、私は唯々聞きはれるとでもいうのでしようか、ノートなどでもいこうか、ノートのどこをどうするか、一時間二時間が過ぎても茫然として教室を出ることがしばしばでした。北斗寮にかえてノートを整理するのに全く一苦労したことを思い出しました。当時ほんとうに偉い先生だなアと感じ入ったものでした。

先生の和服姿といえば先日大正八年の卒業記念アルバムを開いてみましたところ、その中の一つに弁論部の写真がありますが、渡辺校長、武田、長谷川兩教授と並んで、大西先生も同部の部長として写っておられます。矢張り紋付羽織と袴の和服姿であり、手に何か本を持ってにこやかにほほえまれている懐かしい写真です。何か親しみ易い温かい感じの人物でしたが、その通りに写っています。

よき師にめぐり逢う

西村 百太郎

大正六年の夏、大西教授は留學を終えられ、帰朝せられました。第二期より私達のクラスも直接御指導を賜わる事となりましたので、その期待する処が非常に大きかったのであります。「帝国主義論」の著者であり、経済学界の鬼才であると評せられた先生の御講義は、どんなに素晴らしいものであろうかと、胸ふくらむ思いでありました。果して先生の徹底した理論と卓絶せる雄弁とは、私達を魅了せずには置きませんでした。

或る時先生は、岡本綺堂氏の「修禪寺物語」を朗読せられ、夜叉王の名人気質や、手工業に関する諸問題について語られました。あの和服姿の先生の面影が、昨日の事の様に思われて、懐かしさに胸一杯になつてくるのであります。

大正八年、私達は卒業したので、其後発行せられた「伊太利亜の旅」「囚われたる経済学」や「人口と国力」等を読ませて頂き、「経済学全集」によつて、私達が筆記したノート等を思い出して、御指導を受けた喜びを感謝せずに居られませんでした。

先生は唯に、経済学のみならず、文学、哲学等、広い範囲に亘つて評論を試みられ、宗教についても、深い研究がなされて居る事を知り全く頭の下る思いがしました。人生に於て、よき師にめぐり逢わせて頂く事は、無上の仕合せである

た。その姿がまた印象深い思い出の一つだ。学究人としていかに研究に意欲的であつたかを示す一面だと思ふ。

大きく期待された俊秀青年経済学者に天は無情、夭折されたことは、かえすがえすも残念なことである。美人薄命に、一脈相通するのかも知れない。

僕と同じクラスで、しかも緑町の素人下宿で机を並べて勉強した畏友南君（現駒沢大学教授南亮三郎博士）が大西先生の死後永い年月をいやして先生の遺稿を整理され、これが後に大西猪之介全集として刊行されたことを聞いていたが、不勉強の僕は、これを机上に収める機会を失した。そんな僕であるから偉大な業績を残された先生の全貌など、どうして知る由もないが、学生時代のなつかしい印象を思い出すまま綴ってみました。諸兄のご諒承を乞う次第であります。

吉田松蔭木像に 教授の面影が

宮崎 省三

昨年（十月二十九日から同十一月三日）東京・日本橋の三越本店で開催された毎日新聞社、明治神宮主催の「明治天皇展」に展示されていた吉田松蔭木像（足田雪州作、京都大学図書館所蔵）をながめていました。その横顔（額と口）が大西先生の横顔（額と口）によく似ていることを偶然発見し、学生時代に接した先生の面影をつくづく回想しました。

（大八）

先生の講義に魅了される

谷本 朋次

大西教授といえは「帝国主義論」と「囚われたる経済学」を自動的に想起するのですが、特に先生の御講義は忘れ難い出来事。中肉中背和服に袴という失礼ですが、風采のあまり上らない一見書生風の恰好、ところが開講一番講義の進むにつれて私達は先生の氣魄に圧倒されてしまふのでした。学問に対する厳しさが骨の髄に沁み通る思いでした。全心身が先生の御講義の雨でズブ濡れになり欲びで叫びたくなるような雰囲気になり、熱のこもった講義に酔いしれ、先生の御講義が終わると間髪を入れず一同拍手して先生を送つたものでした。

あれから五十年を経過した今日でも恰も昨今の事のような心持で一杯です。近頃の各大学のゴタゴタを新聞で見るたびに色々と考えさせられます。

帰朝直後の一ヶ月

安本 登録

私共五期生は先生御帰朝直後約一ヶ月御講義を受けたもので、その早や口には少々閉口しながらも潑刺、新鮮、明快而も聞く者の心胆をつか

む熱意には敬愛の念を深くするばかりでした。今でも早逝せられたことが勿体なく情けなくて仕方ありません。

和服を愛された先生

湯川 励

半世紀になんなんとする、昔のなつかしい先生の佛を偲んで駄筆をはこんでみます。ご承知のようにわが緑丘学園は、開校当時の高商時代から今日の大学時代に至るまで、いつの時代でも常によき校長、よき学長、よき教授陣に恵まれていることは、全国に定評がある。したがって卒業生の中にも、異色の人材が数多く出ている。

僕の緑丘時代は、大正五年から大正八年にわたる三年間で、当時の校長は渡辺龍聖先生であった。ドクトル・オブ・フィロソフィーで後で文学博士の称号をとられた。外人教師も十指を数え、語学の勉強にも恵まれていた。勿論教授陣も新進気鋭の、錚々たる方々ばかりであった。大西先生はそれらの中にあつて、青年経済学者として一きわ精彩をはなつ存在であった。当時は今とちがって、国立の大学や高商などは、ごく数が僅かである（国立とよばず官立と言つていたように思う）、どこの学校にどんな先生がいるかという事は、学生もよく知っていたものだ。

一ツ橋高商の福田徳三博士、神戸高商の津村秀松博士、京都大学の河上肇博士などが、当時経済学者の大

あの当時から教授と学生間、また学生同志は学内は勿論学外においてもスポーツに、娯楽に、いろいろな面で親しくしてました。いってみれば「血のかよつた学園」とでもいうのでしようか、特に学生同志は兄弟のようであつて、同じクラスは無難なこと先輩後輩は一応のけじめははつきりしていても常に一つの絆（きずな）によつて親しく結ばれていたように思いました。そして今もなおその精神が続いておりますが、これこそ緑丘の一つの大きい誇りではないかと思われまふ。

そして何時のまにか五十有余年という永い歳月が流れ、幾山河も越えつつ連綿として名門校の名を辱しめることなく続いて来た今日の小樽商科大学は、その間渡辺龍聖初代校長を始祖とし歴代の名校長、学長と、優秀な教授陣のもと、数百数千の英才、有能の士を世に送り出して来ました。また今も送り出しつつある輝やかしい歴史と伝統を持っておりまふ。

この永い半世紀の歴史また今後幾十、百年も続くであろう小樽商大の歴史の中で、あの三十四才という若さで実に惜しまれて亡くなられた学界の鬼才、わが恩師大西猪之介先生は一つの大きい星のように何時までも光り輝いて、我が母校の発展と名声と眞価を見守つて下さることと思ひます。

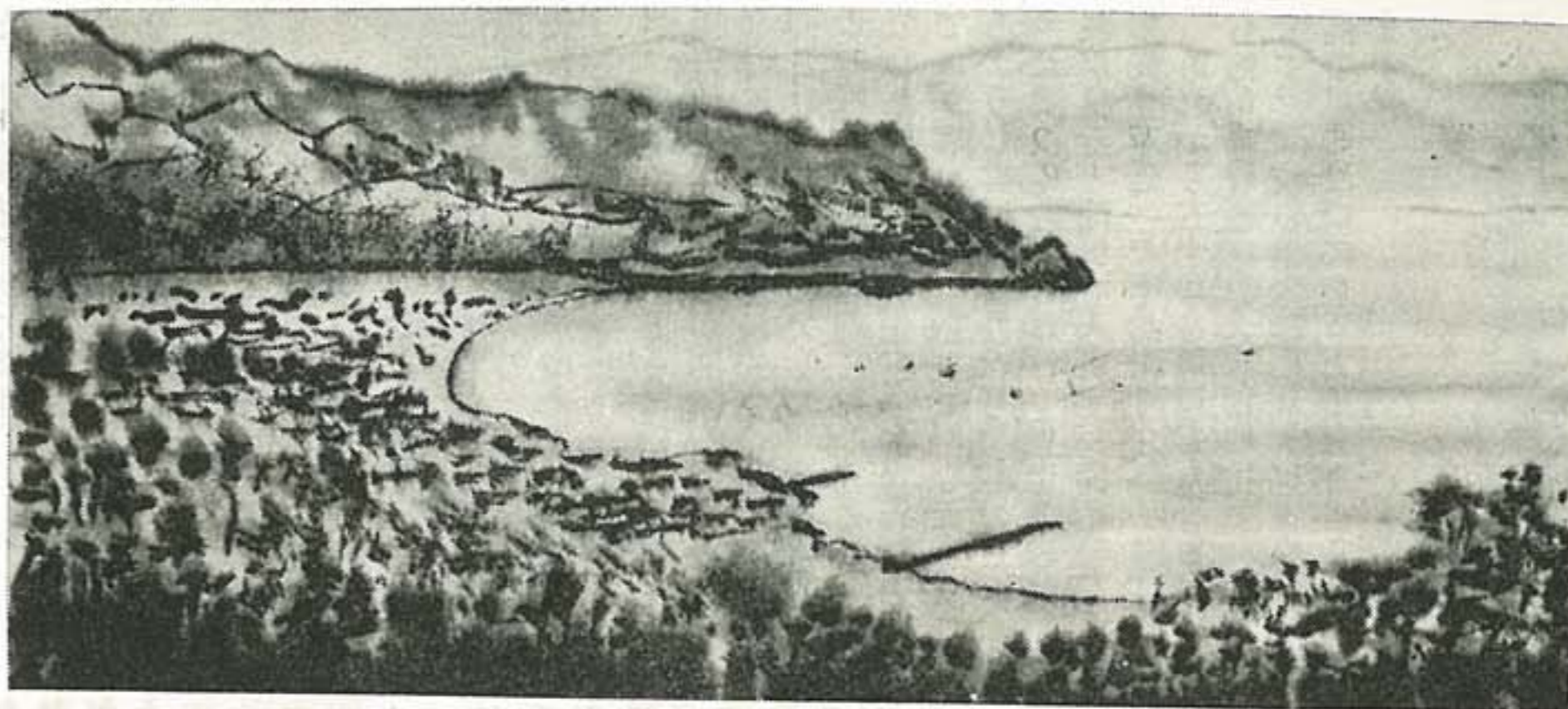
（大八）財団法人日本ユニセフ協会 常任理事

御所存在であつた。大西先生などは、その次の世代を担う有為な経済学者として、万人に矚目されていた。先生の神戸時代の卒業論文「帝国主義論」は一世を風靡した傑作だと聞いている。

先生は洋服よりも和服を愛されたように思う。先生が講義に出られる時は、いつも和服に袴をつけておられたように記憶する。静かに當時を回想すると、和服姿の瘦軀でしよ酒なお姿が眼の前に浮んでくる。その講義たるや、異彩を放つて学生を魅了し、滔々尽きるところを知らなかつた。学生がノートをとらうがとるまいが、そんなことにはいつさいおかまいなく、立板に水の如き講義振りであつた。遅筆の僕などはノートをとるのにはほとほと困つたものだ。しかし先生の試験は、あまりノートのことなどには拘泥せず、ポイントをつかめばパス出来たように思う。あまり香ばしい出来とは言えなかつた僕などは、先生に教わつたことは今は何一つ覚えておらず、僅かにマルクスとか、エンゲルスとかの経済学者の名前が頭に浮ぶ程度であるが、先生の講義の口調や、先生が口癖のようによく使われた言葉の一つに「少なからぬ場合に於て」という言葉などが耳に残つて、今なおなつかしく思い出され、印象が深い。

二年生の時であつたか、三年生の時であつたか、記憶は定かではないが、三浦新七博士がわが緑丘学園に三週間ばかりの経済史の出張講義に来られたことがあつた。大西先生はその間いつも教室の片隅に、静かに聴講されて、時々メモしておられ

伊豆の旅 (遺稿)



板倉 誠

「伊太利亜の旅」の大西先生を思ふ、伊豆の旅を御披露申し上げます。

大正十年も暮に近くなつてから先生は、はるばると北海道から御上京になられた。

先生の奥様は栗林商船の水梨専務の御嬢様であり、そのまた社長の栗林五朔大人とは近親で、私の前の御主人でもありました。当時栗林五朔大人は船成金でありまた有力な政治家でもありました。

大西先生と栗林大人とにお供して伊豆の旅をしても全く水臭い所はございません。差し当り当時の伊豆の風物情景を少し点描して背景を作ります。

小田原熱海間は軽便鉄道です。熱海の海岸を散歩すれば、匂い湯煙りが山の斜面や山腹に立ち昇つてました。熱海から網代までは崖の横腹あたりには人の通るだけの道があった。網代から伊東温泉までも同じ様に名ばかりの道で、伊東温泉が東京の奥座敷。それから先の伊豆東海岸は茨の道で物騒です。そこで西海岸へ向をかえて、天城山越えし

て修善寺温泉です。このあたりまでが一般にいわれた伊豆でした。

伊豆の山々は木々の青緑色が生々潑潑としています。後方には屏風を回らした様な箱根連山が並び、その上に一際高く雪で薄化粧した富士山が中空に聳えている。海岸は曲折面白く真鶴岬、網代崎、川奈岬、日蓮岬など相模湾に足を投げ出してしまふ。沖には初島がポツカリ浮かび、遠く雲煙の中に大島や房州を眺める。山高ければ海深く、箱根山と対照的に海も深く飽くまで清澄です。世塵を避けた別天地です。

その頃、堤内地漁業が相模沿岸から伊豆の沿岸へかけて、鱒の大謀網を何ヶ所も張り立てていました。

私は海の王者栗林御先代も大西先生も必ず喜ばせてあげる自信を固めて、網代にある古網漁場を御案内申し上げた。古網漁場というのは網代漁業組合が漁業権をもっています。私共はこの漁業権を借りるために空海(カラウミ)一ゾーンに対し、毎年八万三千円という当時の大金を支払いました。組合員は何もせずに素手でガバツとまとまった配当金があるので、寝ていて金をとる後生楽地でありました。組合員になりたいた転入希望者がこの寒村に押しかけて来ました。

扱て御案内を元に戻して漁獲実況です。お客様が波のしぶきに濡れたりまた追いつめられた魚の鱗やノロで御召物が汚れては申し訳ないので身仕度をして船に乗りこんで頂いて、腕利きの船頭衆に櫓を漕がせて沖合遠く乗り出しました。網のある所は長い孟宗竹を束ねて造つた浮を点々と置いて、東京駅のスッポリはいる位の海面を囲み、その中に蚊帳をさかさまにしたように網を吊して沈める。網の一方は口をあけて魚が乗りこめるように仕掛けてあります。

その日はサザ波で天気晴朗、獲物は鯛、メジロなど、旦那向の高級魚がドッサリとれた。お客様は眼を細くしてエビス様になった。人か神か黙して語らず。

捕えた獲物は船に積んだ、死んだ魚は立派で美しく芸術品です。人の死に姿などは比較にならない。若者衆のエンヤエンヤのかけ声と共に沖から戻つたお客様は伊東温泉に案内された。

伊東温泉は湯量も多く到る処の噴湯で、田舎丸出しのノンビリさです。お宿は看板旅館、暖香園です。栗林大人と先生と私は大きな天平風呂にはいりました。湯槽も流し床も柾木です。湯は透明塩類泉で足の指までよく見える。風呂付の番頭が流しおえて帰つてからが大変、ここで裸にふさわしく人間味溢れる漫談が始まりました。大人の顔を時々のぞきこんでは聞き入りました。話の花が次から次へと咲いたので、番頭も顔を出して策を持ってきましようかと笑つて帰つた。

私が伊豆の山には自然薯の上物があると話したら、大人は流石に通人で船に乗って自然薯のところが食べると、船に酔わないよと教えられた。その夜は昼間相模湾の底で育つた鯛チリです。庭からもぎ取つたばかりの夏蜜柑の酢で味付けしました。

大西先生はその晩夜通しといつていい程寝言の連発です。私は夜が明け物凄く寝言でしたよ。長い静養が必要だと思ひます。と申し上げた。小樽へお帰りになつてから東京堤商會の三浦良次支配人に連絡があった。三浦支配人は先生の学友で大変な切れ味を持つていた私の上司です。大西は疫痢だそう。それからまた大西が亡くなつたと聞かされたのが二月も末であった。

その後私が大西先生を殺した犯人だといふので風の便りに東京までこえた。前に申し上げました通り当時の伊豆の背景から御想像願えるように、ハイカラな病菌は一匹もない、清潔でしかも衛生的な土地柄です。先生が伊豆の旅から小樽へ帰るまでの距離もあり日数もかかっていません。

今ならそんなものは医者から見れば何んだい位の病氣です。当時先生崇拜にコリ固つていた大勢の学生は、医者の誤診で下剤を吞ませたので急に悪化して事切れたのが真相だと聞きました。先生の御長逝は本人御遺族はもとより、学園、学生、更に国家の損失で残念でありました。私の心配した寝言が疫痢病に負けたと思ひますよ。私の犯人説はあれか

ら四十七年たつたのに確定していません。果して犯人は板倉か。大西先生の御冥福を祈ること、益々切なるものがあります。

私は大西先生の学友の皆さんには不思議に近づきがあった。小樽事業界の雄、橋本博介さんにつれられて函館港のバーを梯子した。

霞む海峡に夕日が暮れりや
恋の港の灯がともる

なども楽しそうに歌われた。

私が京橋の人になつてからは鳩山一郎先生と肝膽相照らした早川家に早川宗一郎さんがおられた。学校、会社、社会とそれぞれの生活で年代こそ違え、順次御指導を頂いた先生の学友の間では、君などつけないで誰も私に大西がとか三浦がとか呼び捨てにいう。こうなると呼び捨ての方がスッキリした親睦感が出て来ます。(大九 故人)

小樽商大学長 加茂 儀一

大西猪之介先生、この大先輩こそほんとうに小樽商大の名譽を天下に喧伝せしめた偉大な存在でただだけに大いに大西先生特集号を期待しています。

この先生こそ日本のシュトゥルム・ウント・ドラングの時代における経済学のゲートでありました。私は大西先生が和辻哲郎氏に比較しても劣らなかつた教養高い日本人であつたことを誇りに思っています。私を小樽に赴かした大きい力は同先生の歩かれた土を踏むことでした。



千代田火災海上

企業と家庭を守りつづけて71年

- 本店：東京都中央区京橋1-3 (535) 4671
- 名古屋支店：名古屋市中区上前津町66 (331) 8411
- 大阪支店：大阪市東区大川町66 (203) 2161
- その他支店：全国主要都市

思い出—断片風に

佐藤 武市

「こしかたを知り、ゆくところを知るものは淋しきかな。かくて秋の雲はわれにかなしきなり」—有島武郎あのころに読んだ有島さんの「旅する心」にこうした意味の一節があった。大西先生のことを思いつつ私はふとこの秋の雲の一節を思い出した。

先生の講義を聴いたのは大正八年の一期からである。一期は商業政策であったが、人口と国力の問題は頗る明快でいまも記憶に新しい。二期からは商業史であった。第一時間目の黒板に先生は次のような英文(五十年前の記憶ゆえ字句などは確かではないが)をしるされた。

He who steals sheep from enclosure is punished.
He who steals enclosure from sheep is not.
羊から共有地を盗む者は罰せられない。
共有地から羊を盗む者は罰せられない。

この句の意味する社会正義感、商業史—先生は経済史と申されていた—を貫くテーマであったと思っ

二時間の講義のノートの整理に三時間あまりかかったことを懐しく思い出す(残念ながら、かの貴重なノートは一所不住の生活で紛失してしま

先生の経済原論はついに聴く機会がなかった。大正九年に「囚はれたる経済学」が出版され、第二寮から卒業記念として一本を贈られて、先生の経済学への一端に触れることができたことはよきこびであった。マルクスの研究が澎湃として起っていた時代、日本の学界が東西にわかれて論争の火華を散らしていた時代、そうした時代に先生は毅然として「経済学とは何ぞや」という経済学認識論の提起をされたことは、私はいまも高く評価するに吝でない。

マルクスを深く研究し、その長所を認めつつも、その短所を洞察されていた先生は、すべてのものに通暁することに由って、すべてのものを許そうとする境地に立たれていたように思う。こうして「囚はれたる経済学」、わけてその後篇をなす「生と学との距離」において、先生の人生観が学問という姿を借りて縦横に表現せられたのであると思う。「生と学との距離」は—私見をもってすれば—永遠に縮まることはないであろう。あるいは、先生をよく申された「提出せられ得べくして解決せ

られ得ない問題」であるであろう。なにものにも囚われまいということに先生は囚われていたと私は思う。

大正十一年のはじめ、私はそのころ兵役に服していた。弘前の歩兵第五十二聯隊の留守隊にいた。本隊はシベリア出征中。ある朝中隊長がじきじきに私を呼んでこれから外出しようといった。雪のある寒い朝であった。外套の上に短剣を帯びたことが記憶にある。中隊長がだまって私をつれて行った先は、なんと師団司令部の構内にある憲兵隊であった。誰もいないがらんとした一室で私を待ちうけていたのは憲兵将校であった。中隊長が私を紹介し、将校が二タ言三言中隊長とことばをかわしたあとで、

「ときに大西猪之介という人物をどう思う」と口を切った。突然のこと

「大西先生—私の母校小樽高商の」としかいえなかった。

「そのとおり、その大西を君はどう思う」といっているのだ」と私を睨むようにいった。そして

「国家をあやうくするような危険思想の持ち主、君はそう思わないか」とおっかぶせるようにいった。

「先生は決してそんなお方ではありません。むしろ愛国者であります。危険思想の持ち主ではありません。そんなことをおっしゃるのは色眼鏡をかけてものを見るからであります」と私はきっぱりといった。

「なに、色眼鏡、こいつ生意気なことをいとおる」と将校は中隊長の方を向いて苦が笑いだした。中隊長はこ

の辺でといったので、私は何ごともなく憲兵隊を退出することができた。半世紀も前のことであるが、憲兵隊が何のために私を呼びつけたのか今もって私には判らない。だいたいあんなに大西先生のお亡くなりになったことを知ったが、それは私が憲兵隊に出頭した前後のことのように記憶する。

わずか一カ年だけの講義を聴いただけの大西先生の思想は、私の一生に大きな影響を与えていることは疑う余地のないことである。先生は火のような情熱の人であった。また、水のように冷徹な一面も備えてお

ったが—
Marmor schon, Marmor kalte
(大理石の美、大理石の冷たさ)

という意味であった。こうした境地に達せられることを先生はひそかに欣求せられていたのかもしれない。

万国博を成功



EXPO '70

させよう

総合病院
日本生命済生会付属

日生病院

大阪市西区立売堀南通4-11
TEL 大阪 (06) 532-1561(代)

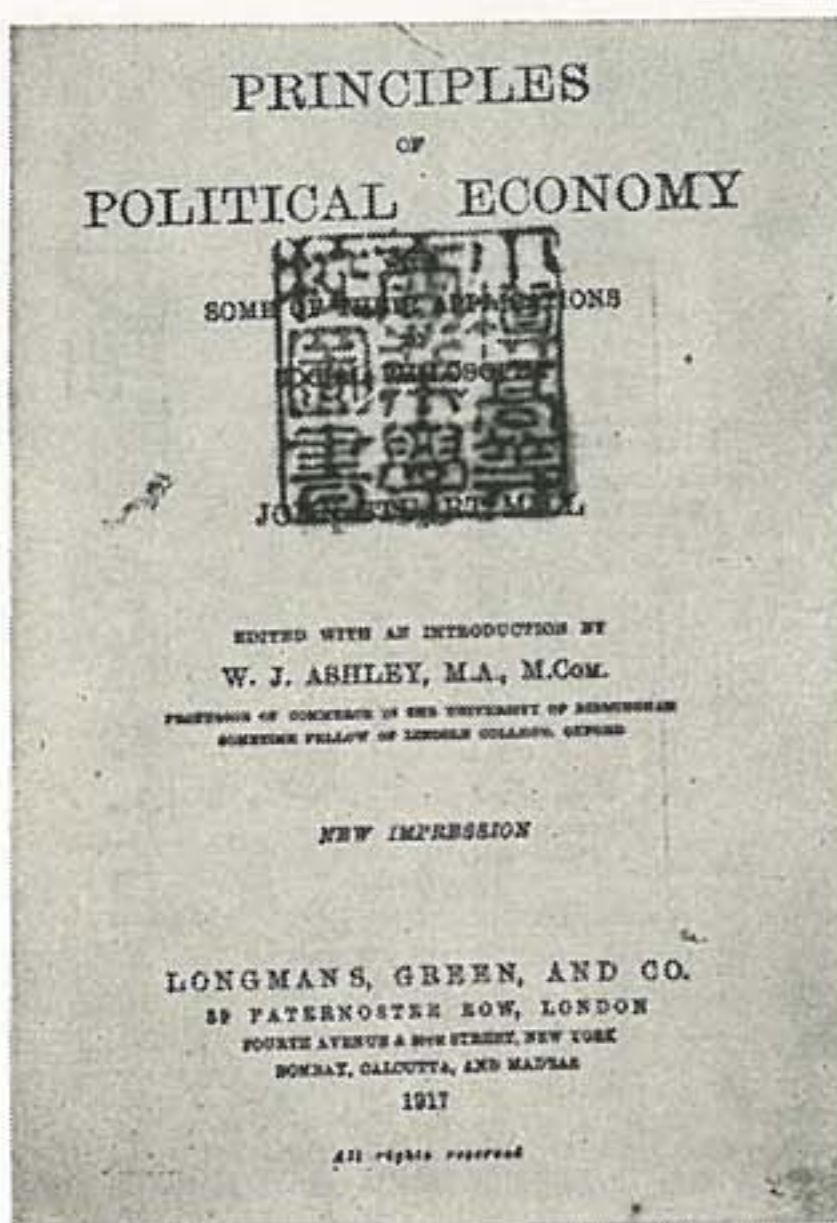
「ミル」の原書

大泉 宗次

今から半世紀ほど前の大正七年頃から数年間は、緑丘の第一期黄金時代といわれたように、よい先生に恵まれていた。先生たちは、それぞれの特色をもっておられたが、そのうちでも、経済原論担当の大西猪之介先生は異彩をはなち、学生達の敬慕を集めておられた。

黒くすんだ目に、頭髪をまん中からきれいに分け、羽織袴の和服姿で一〇六八頁にもおよぶ厚い John Stuart Mill の原書 "Principles of Political Economy" をかかえながら、合併教室の教壇に立たれた姿は今でもはっきりと目に浮んでくる。

来ならば小樽の如き地方の学園に赴任せんでも、中央学界に在って十分真価を発揮できる人だが、渡辺龍聖校長から、中央にいるより早く洋行させるから」との条件で来校した、ピカ一教授である。我々も入学早々 John Stuart Mill の経済原論を原書でやらされたので先ずもって度胆をぬかれた。明日、大西教授の時間があるとなると、その前の晩は何をおいても英和辞典と首っ引きで、原書の翻訳に熱心ならざるを得なかった。というのは、新入生全員が合併教室で先生の講義を聞くのだから、全員が集まっている中で、若し訳し方がまずいと「君はこの学校でするか、ハハーン、君の学校では英語を



教えておらんのですか」と全国の中等学校から集まっている連中の前で、母校の名が表明されて赤恥をかかされてはたまらんといいで、勉強するとうわけ。だが、ごく最近当てられたから大丈夫だ

後年、西田哲学の西田幾多郎先生とマルクス経済学の河上肇先生に接する機会を得たが、両先生とも、常に和服姿で教壇に立っておられたことが、大西先生と強い結びつきの印象をうけたものである。殊に、河上先生からは、大西先生に教えていただいたと同じ「ミル」の原書で講義を受けたので、大西先生のご懐しく感ぜられ、矢張り文字どおり前途有為の経済学者であると深く信じ接したときは痛惜してやまない気持ち胸がいばいであった。

「ミル」の原書を取り出し、頁をめくりながら追憶のペンを取ってみた。

注「」の中は同期の畏友故寺田弥一郎君の遺稿「自伝点描五十年史」から拝借紹介した。

(大10 日生病院顧問)

大西教授を送った日

越崎宗一



直行寺

大西教授の学問的事蹟については語る人が別にある。

僕ら大正十一年卒組は二年に経済原論を、三年に経済史の講義を受けた。津村博士の逸足、経済学界の鬼才而も欧州留学から帰った少壮大西教授は緑丘学園の人気の中心だった。講義は明快、その水の如く流れるような雄弁にうっとり、ノートをとることも屢々忘れた。而も象牙の塔にのみ立籠ることなく当時街の進歩的、思想団体啓明会主催の講演会などによく出られた。

教授の洋服姿は見たことがなかったように思う。和服に袴が殆んどだった。西哲カントが、故郷ケーニヒスベルクの街をよく歩いたのを見習われてか、教授は小樽の街を——而も表通りだけでなく克明によく裏通りや細い露地を歩かれた。結婚されてから生れたお嬢さんを抱いて散歩される姿も見られた。

教授のお宅へたった一度お伺いした記憶がある、三年になって卒業論文の相談に伺った。三方に並べられた高い本棚にギッシリ本が詰まって

いる日本間だった。論文を書くのもいかに勉強に H. G. Cole の Social Theory でも訳してみたらとお話だった。そこで僕は、三年の夏休み（大正十年八月）宮崎教授、小林、宮地兄等と向洞爺の唐神旅館に籠城し、各自卒業論文に勉強したが僕は専らコールの翻訳にとり組んだ。当時湖の向い側にまだ洞爺温泉のホテルなどなく近い内に温泉が開かれるという噂をきいた程度だった。

卒業を眼の前にした大正十一年二月八日午後十時三十分、大西教授は長橋町の伝染病院で腸チブスが悪化して亡くなられた。学生がこれを知ったのは翌九日の早朝、まさに青天の霹靂だった。

遺骸は規則で時を移さず病院から火葬場に移されるという知らせをうけて、弁論部員は取り敢えず避病院へ向った。小さい馬橋に四五人が詰めになったガタガタの長橋の雪道を走る間も皆はただ無言、悲しみの色が頬にあふれていた。激浪にほん弄さるる小舟のように馬橋は揺れながら、灰色のペンキ塗の病院に辿り着いた。どこをどう入ったかよく覚えていない。唯うす暗い廊下を曲り曲って歩いたことだけを覚えていた。

先着の奥さんとお母さんが相抱いて泣いておられた。僕等も唯貰い泣きするだけだった。

亡き骸は既に消毒室に移されていた。我々が眼の痛くなるようなホルマリンの臭いの強い室へ入った時は、もう消毒が済んで座したままの遺骸が白布を以てグルグル巻きに覆われていた。もうお顔を拝すること

が出来なかった。病院の規定で我々の自由にはならなかったのである。僕はただ暗然と袖をしぼるのみであった。

棺を担う人夫が二人と立合の警官が一人やってきた。寝棺ではなく三尺程の樽型堅棺に納められ棒に吊り下げて人夫が前後に肩で担ぎ、その後には警官がつき、その後には我々が従って雪道を歩いた。大熊先生が度々後を見返り男泣きに泣かれ、伊藤君はポツリ、

「今日は小樽で一番偉い人が亡くなったんだ」とつぶやいた。細い雪道を十人足らずの我々一行がトボトボと歩き、松林の鳥が悲しそうにないてくれた。長橋十字街から登って線路を横切り、長橋火葬場に着いた。

焼場特有の脂臭い臭気、隠亡が窯の前に棺を立てて僧侶が無神経なお経を読み終ると、窯の扉が開かれ棺が横に押し込まれた。

奥さんはただ黙然と見守っておられた。やがて火が入られパチパチと棺のタガの弾く音、パリパリと棺の板の燃える音、僕は思わず顔を突き出して鉄の扉の隙から覗き込んだ（ことほど左様に区営長橋火葬場は不完全であった）。

大西さん、大西先生、もう永久に教授の肉体の消滅だ。奥さんがいつまでも黙然と立っておられた姿が、今でも眼底にこびりついている。かくして若き学界の偉才小樽高商の至宝、大西教授は永久に去られたのである。

（大一一 昭産商事株式会社専務取締役）

大西先生の追悼会

大泉行雄



直行寺

小樽での在学時代には、大西先生の講義に魅了されたながらも、先生との個人的な接触をもたなかったわたくしは、先生についての私的なつながりや思い出をもち合せていないことを、残念なことに思います。しかし先生の最後の聴講生であったわたくしにとって、先生の他界を契機として、生涯の印象にとどまっている一瞬の光景があります。

大西先生が亡くなられたのは、ちょうど私も卒業を間近かにひかえた、二月八日であったと記憶しています。積った雪が、庭にも道路にも、まだいっぱいのところでした。親しくしていた学友の金森信愛君が、あたふたと訪ねてきて、わたくしに

先生の訃を伝えてくれました。二人は長いあいだ言葉もなく相向い、わたくしは突然にポツカリとあいた、大きな空洞を眺める思いでした。

いく日かの後に、全学をあげての追悼会が、たしか天上寺で催されました。型どおりの追悼の式がすみみ、やがて学校の先生がたの故人をいたむ言葉や、追憶の思い出がさげられました。そのなん人目かに、ちょうど一年前に赴任された大熊信行先生が立ち上って、靈前にすすまれました。大熊先生は、ひとことふたこと、今日の日の意味を述べられたようでしたが、たちまち絶句するのと、つぎの瞬間、まるで堰を切ったような号泣が満堂にひびき渡りました。うちならぶ人たちも、みんな、声を吞みました。係りの人たちが、先生をかかえるようにして、席に連れ戻されたようでした。

思うに人間の心理というものは、なんとも絶妙なものであります。一片の理論とか、学理とかで、単純に割り切れることは、なかなかできないものようです。大西先生の追悼会で、わたくしたちははずかすの追悼の辞や弔辞をきいた筈です。しかし

今となつては、そのときどのようなことが語られたか、わたくしの記憶には、そのあとをとどめておりません。すでに五十年にも近い過去のこともあれば、これは止むをえないことかも知れません。しかしそれにもかかわらず、大西先生を痛んで号泣された大熊先生の声は、いまにしてなお昨日のことのように、わたくしの心底にとどまっているのです。この心理に、わたくしは自分でおどろくのです。

その夜わたくしたちは、その日の感動を大熊先生に書きおくりしました。どんな文句であったか、まったく思い出されませんが、人生の一大事にかかわる法要に列し、そこでの深い感動を未熟な青年の思いながら、感激をもって認めたものであったのだらうと思います。大西先生の追悼という式を契機として、わたくしは大熊先生という若い学者・思想家の、心情の一端に、じかにふれたような気持であったのでした。わたくしに、誰よりもいちばん先に、大西先生の他界を知らせてくれた友人の金森信愛君も、いまはずでこの世の人ではありません。

わたくしのこの一文は、大西先生の特集号として、果してふさわしいものか、自分でも考えさせられまします。しかし大西先生への思い出に結ばれなければ、もともとこのようにな一文が書きつづられる機会もありません。なかつたことを考えれば、あるいは特集号の末尾につらなることを許されるかとも、心ひそかに思うのであります。（一九六八年八月）

（大一一 神奈川大学教授）



マックスファクター

北海道販売株式会社

社長 石崎 静 夫 (昭和8年卒)

本社 札幌市北6条東3丁目 電話大代表 (72) 1161番
営業所 札幌・函館・室蘭・旭川・帯広・釧路・北見・小樽

弁論部長としての大西先生

宮地 邦介



全国的にも小樽高商の誇りであり、学内でも喝仰の的であり、尊敬と親しみを持たれていた先生が、突如として病魔に犯され療養館に二週間にして他界せられた。時は大正十一年二月八日の早朝、この悲報を聞いて相沢、富盛両君と伴に轎馬車を駆って雪の曠野を避病院に馳つけ、消毒のにおいふんぶる白布に覆われた先生の御遺骸を拝した時の思い出は、余りに印象強く遂この間のことのように思われてならないが、あれから既に五十年の歳月が流れている。丁度私共が最高学年の時だったので、本願寺別院で行われた葬儀のことまで記憶に残っている。当時先生の御親友であられた飯島幡司先生や、その頃日本郵船小樽支店長をしておられた上野さん達はじめ、多数の方々から供えられた生花や御弔詞が勢佛として今にも私の脳裡に残っ

ている。若くして逝かれた先生でしたが、その頃から既に日本経済学界の鬼才と称えられ、神戸高商、一ツ橋専攻部時代から死の寸前まで書き綴られた日誌や遺稿が、後進の南教授やその他の教授達の御芳志と御配慮により、大西全集十一巻が集大成されたことは、余りに有名で後進学徒がどれだけ余恵を享けたかわからない。特に先生御存命中に発刊された「因はれたる経済学」や「伊太利亜の旅」は当時の紙価を高からしめ、伊太利亜の旅の麗筆に感動し、某女教諭の方などひそかに恋情をもやされたとか私共の間でも噂の種になっていた。勿論真偽の程は知らないが、先生の名論卓説はすべて流麗な筆になり、本職の経済学は無論のこと文明批評から紀行文に至るまで人の心を動かす情熱があり、その上弁説いともさわやかで、一度先生の名演説を聞いたものは老若男女を問わず魅了せられたものでした。

人間が生まれ変らない限りこの世の中から戦争は無くならないだろうと喝破されてきました。しかもその論旨をいとも身近な例を挙げて説明しておられた。軍隊は何物も生産しない、しかも一番の消費者である。一粒の米も作らないくせに一番多く飯を食う。従って本来ならば軍隊なんてない方がよい。

ところが困ったことに他国に軍隊があれば自国も自衛上軍隊をもたねばならない。ことは人間本質の問題になってくるが、仮りに子供に空気を銃を与えて見給え。彼は直ちに雀を打ちに出かけるだろう。女に美しい丸帯を買ってやっごらんないかい。彼女は直ちに芝居見物に行きたがるだろう。これを単なる子供の幼稚な心理と考えてはならない。これはまさしく自分の優越性を他に示したという人間本来の性質である。それに今一つ厄介な性質が人間にはある。それは自惚れという奴である。人が肺病を病んだらあの人は生命はあるまいと思わくせに、さて自分が病んでみたら俺は絶対死ぬことはないと考え。俺は選ばれた神の選民であると思われ。宝籤の売れるのもこの心理かも知れん。この優越感と自惚れが人間世界から取り除かれなれば、戦争は免れないと断言されたことがあった。

先生は地下で大東亜戦争の敗戦を聞かれて「だから言わぬことではなかった。日本は余りに陸海軍に優越感があり過ぎたし、国民はまた我が国は神国であるとの観念が強過ぎて著しく、神の選民であると思われていた。危い危いと思っていたが……」

と苦笑しておられる様な気がしてならない。与えられた紙数も少くなつた様だが、これから冒頭に掲げた弁論部長としての大西先生の外伝ともいふ可き二、三の話を諸君に紹介して先生の人のなりの一片を偲んで頂きその御冥福を祈って貰うことに致しましょう。

(一) 伊藤痴遊招聘のこと
痴遊は本名仁太郎、代議士になつたこともあったが本職は飽くまで講師であつた。専ら政界談義を得意としていたが、それがたまたま来樽しているというので学校に招いて一席談じて貰おうではないかということになり、相沢君と私が大西先生の命を受けて越中屋(当時小樽第一流の旅館)に痴遊師を訪ねて行つた。書生氏を通じて来意を告げると直ちに客間に招じて呉れた。痴遊師と対面したが短髪肥満、精氣溢れた赤ら顔に漆黒の鬚髯(すぜん)をたくわえていたが、両眼にえもいわれぬ愛嬌があり、これは大西先生をよく知っている人だと直感された。

無論快諾してくれた彼は翌日は学校へやって来て例の合併教室で凡そ二時間ばかり得意の弁を振るつてくれた。演題は忘れたが明治維新から征韓論あたりまでの政界の裏話の様だつたと思う。彼は如何なる明治の元勳諸公の話をする時も決して敬称を附けなかった。それが芸の至妙といふか彼の見識といふものか聞いて少しも不自然でなく、学生一同聞きはれたものだった。この間大西先生もニコニコとして例の御機嫌のポーズで羽織の紐をまさぐりながら聞き入っておられた。

(二) 郡山行夫招聘のこと

福島県郡山の産、世界探険家郡山行夫と申しますと自己紹介した。身長六尺有余、白哲の美丈夫、漆黒の鬚髯(すぜん)を尺余にたくわえ眼光あくまで炯々としていた。勿論大西先生の招きによって来校したと思ふが、本人の語るところによれば、身には短銃一つを伴としてただ一人南船北馬、或いはシベリヤの氷原を横断しては漆黒の鬚髯は銀線の如くなり、或いはアラビヤ、スマトラの原始林にては猛獣毒蛇と死闘したことも幾度か。特に思い起すは土人を雇って丸木舟に乗り無人島ともおぼしき孤島に着いた刹那、船先が蜂の巣に突きささつたのでたまつたものでは無い、たちまち船先に立っていた土人を熊蜂の大群が襲いかかって来た。難をのがれんと件の土人は海中に飛び込んだがたちまちあたり海面は赤い血潮に色どられてしまった。即ち哀れや土人は鱗のえじきとなつて再び海面に浮び上つて来なかつた。話は勿論針小棒大などところもあつたが一時余り面白く聞かせたのもあつたものだった。それが学校の合併教室で行われたところに意義があつたと思う。何れにしてもこうした特異の人物の話を聞かせて学生生活に潤いを与えてやろうと配慮して下さつた先生の太っ腹と温情が懐しまれてならない。

(三) 谷本富先生招聘のこと

文学博士谷本富先生は当時京都大学のある教授でしたが、大西先生の懇望もだし難く京都から遙々講演に来て頂いた訳だが、谷本先生は五尺の小身総べて是れ胆というよう

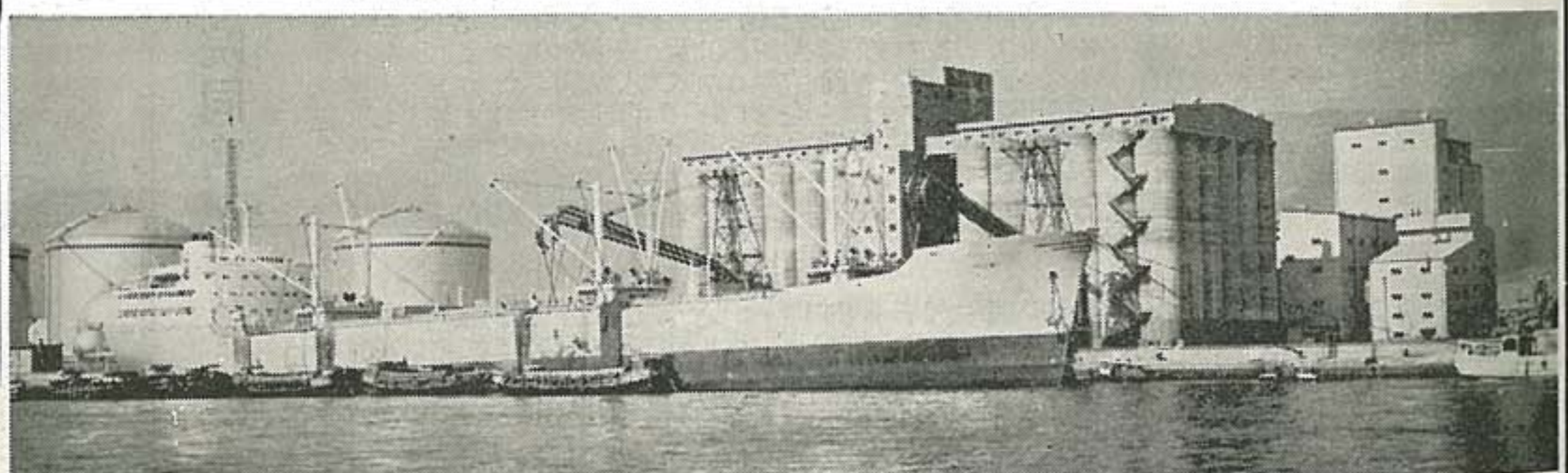
御人柄の人で、その雄弁には学生一同煙に巻かれた訳でしたが、神戸高商時代の愛弟子であつた大西先生の秀才振りを言を極めて激賞され、彼の答案には何時も許されるなら、一二〇点を与えたかつたと、傍らの椅子で聞いておられた大西先生を指さされたものでした。学生一同が爆笑して喜んだものでした。

四 永井柳太郎の演説

当時政友会議員に非ざれば人に非ざつたといわれた時代で、永井氏は野党憲政会の闘士として大隈ばかりで議政壇上で大いにその雄弁を振るつたものでしたが、彼が来樽して花園町錦館で演説会を催したことがありました。大西先生も弁論部員の連中を連れて聞きに行かれたものでした。永井氏の演説は「暁の鐘、暮の鐘」で、政友会の暮の鐘の鳴るとき憲政会の暁の鐘が鳴り渡る時がやってくるという大風呂敷だつたと記憶していますが、先生は聞くに堪えぬというよう不愉快な御顔をされて中座して御帰えりになりました。前三者の話の場合の先生の態度と対照して面白いではありませんか。勿論先生は政友人では露更々ありませんでしたが、月並みの経済学者ではなかつたようでした。当時朝日新聞社あたりから盛んに誘いの手が来ているとも聞いていました。返りに先生が長生きしておられたらジャーナリストとして堂々の論陣を張り、警世の名言を遺されたことでしょう。実に惜しみて余りある先生でした。(四三、九、二八)



昭和産業 は
食品コンビナートのパイオニアです



神戸工場

昭和産業株式会社

取締役社長 **松本浩三**

本社 東京都千代田区内神田2丁目2番1号
工場 鶴見・神戸・船橋・上尾・水戸・太田

事業部門

製粉・油脂・ぶどう糖
食品 飼料・倉庫

伊達 姿

神 沢 重 治

長橋避病院同病記

育ができるはずがない。今にして思うことは、我々は良き時代、良き環境で、良き教授について青春を謳歌

野 界 作 成

するを得た幸せである。
(大一一 砺波市教育会長)

私たちが緑丘に入ったのは大正八年で約半世紀前のことである。その頃は全国でも高商の数が少なく、教授の顔振れは今日の大学よりもそろっていたように思われる。その中でも特に光っていたのは学校長渡辺龍聖博士と大西猪之介教授であった。学殖のゆたかさ、人物のスケールの大ききといふこと以外に、両先生に共通しているのは、よい意味の伊達気が多分にあつたことである。

入学式の席上、白面の新入学生を前にして「吾輩は諸君を遇するに青年紳士の礼を以てする」と大見得を切られた学長。それが少しもキザでもおかしくもなかった。さすがに役者がちがうなアと度胆をぬかれて畏敬の眼をみはるのであつた。

大西先生にもそういうところがあつた。先生は一つ橋を出て小樽に着任当初は毎日フロックコートと講壇に立たれたときいていたのに、洋行から帰朝後は、一変して黒紋付羽織袴で終始おし通された。

大正八年四月から同十一年二月に先生が長逝されるまで、全学年を通じてその講義に列したので、恐らく大西先生の教えを受けること最も永く深かつたのは私たちのクラスであつたろうが、その間先生の洋服姿をみたものがなかった。

たつた一度だけの例外がある。それは、たしか母校の創立十周年記念講演会が市内公会堂で公開されたとき

きであつたと記憶する。プログラムが進んで、先生の出番となつた時、司会者の紹介に次いで演壇に現われたのは意外にもフロックコートを召した大西先生であつた。

一同啞然、しかし次の瞬間には風の如き拍手が沸いた。先生の講演は例の如く光彩陸離、満堂の聴衆を魅了するものがあつた。詳しい内容は忘れたが、何でも当時拾頭の軍備縮小論で、なまじ必要以上の軍備をもつていると、それを使つてみたくなるのは自然の理であります。例えて申しますと、坊やに空銃を買つてやりますと、すぐさま雀を撃とうとします。女性に新しい帯を買ひ与えてごらんない。早速それをして外へ出たがりませう」と一寸言葉

を切り、ニヤッと口辺に微笑をたたえて「私の女房もご同様でございます」とやつたから堪らない。演壇下にいた北斗寮のA君が躍り上つて喜び、私の横にいたN教授夫人も「マア」と万感こめて嘆息をもらしたのを覚えていふ。

ことほど左様に、先生の所作言動の二つ一つに血が通ひ肉がついていた。学生の心理をつかむツボの心得え方など実に心にくいばかりであつた。

今日東大はじめ全国に大学騒動が流行しているが、マスコミ化した「学生と称する群衆」に少数の血の通わぬ教官が対処したつて、生きた教

大正十年春四月、当時としては比較的富山とは経済的その他関係の深い地の、官立高商にあらがれて小樽へ、東京遊学が可能だつたのに地獄坂を登つて先ず驚いたのは、涯淵の残雪と新入生全員の入寮制度で校門内通路坂の東側の北斗寮入舎日の新入生歓迎ストームに加えて、先輩諸氏からの経済学の大西、コレポンの苦米地両先生の新婚朝者(当時在外研究から帰校される先生方をかく呼んでいた)としての名講義が拝聴されることの幸運さであつた。苦さんは入学試験の時「ヒアリング」の先生であつたが、両先生共一年生の受持が無いことになつてあの颯爽たる御兩人が有名なる教授かと英姿をかいま見ながら、三三五五残念がる次第であつた。

十月一日は北斗寮の開寮記念日で当夜は現在のパーティー式の盛大なる祝宴があり、田舎のポット出の中学生あがりには物珍らしく若さで開放感にあふれて暴飲暴食をやつた様に思ひます。一週間後に発熱して校医の河野病院に入院させられて血液検査の結果、腸チブスと確定直ちに小樽郊外の長橋村なる伝染病院に収容され、再三、四十度前後の熱のく

りかえしの、人の二回分を病んで

私は大正九年三月に小樽高商に入

学したのですが、確か翌十年から大西先生に経済学を学びました。二階の大講堂で講義を受け、講義が名調子で聞きはれて、また早口なので充分ノートすることが出来ませんでした。ところが、試験は講義そのものからあまり問題は出ず、一般的問題が主でありましたから、自由に書いて出しました。

私の日記から

当時の私の日記を見ますと次の様なことが書かれています。「大正十年九月十四日、今日は大西教授の講義の為に悩まされて気持ち落ち着かない。経済史の初めての講義だつた。昨日は経済史の時間に夏休み中の感想を書かされた。然し特別に読んで本で記憶に残っているものがなかつたので、殊に商業政策はちつとも目を通さなかつたので、倉田百三氏の著書の批評を書いた。自分ではなんだか浅薄なものなのに(事実浅薄なのだ)感じて書くのがいやになつたが、他に何も書くものがないので我慢して書いたが、先生は今頃これを読んでどんなお顔をしておられるかと思つた」

先生は常に手塚寿郎先生と同じ服装で即ち和服に袴をきき、学校は勿論妙見川附近を散歩されて居られるのによく出合いました。

先生が逝去になられたのは確か大正十一年二月八日午後十時であつたと思ひますが、母校の第一人者の

野 界 作 成



(大一一)

「伊太利亜の旅」とともに

中 田 新 平

点であるから落第である。一科目だけ落第させるのはおしい成績であるから、一人だけの追試験だが一対一の「さし」だが特別に追試験をするからとのことで受験して進級させて貰いました。当時は各年二〇一三名の原級生があつて進級者は成績

順に発表されました。大西先生の腸チブスと小生のチブスの人生のすれちがひ運命論と命のはかなさを思ひ出す大正十三年卒業生が教授を知る最後の学生かと駄筆を記しました。合掌。(大一一)

生が結婚されるそうだと、相手は栗林さんの娘であると放送されていたこととは忘れられない。(然し事実には栗林商船の水梨専務の令嬢であつた)御結婚されてから間もなくであつた様に思うが、東京の出張から帰郷されると発熱しそれが腸チブスで入院となつたと聞かされたが、その後それが仲々の重患であるとの噂が飛んだ。

御葬式には淋しい思いで参列したが、推名先生の弔辞は無事済んだが大熊信行先生は少し話されかかると声がつまり遂に、ワイワイ泣き入つてしまつた。そして誰れかに連れられて退場されて行つた様に思う。

その時大西先生は小樽には二度と迎えることの出来ない大先生であつたのだなあとと思つた。先生の学風に接することは出来なかつたが「伊太利亜の旅」は、朝鮮の各地や奉天など二十四も転動したが、その都度古本屋に渡す力なく今もわびしい書齋ではあるが、記念の愛読書として残っている。大分トジが切れているが。

大正十一年二月八日午後十時であつたと思ひますが、母校の第一人者の

小 橋 庸 三

先生を亡くしたことは生徒一同残念であり、また今後先生の名講義を拝聴することが出来なくなつたことは何にもまさる遺憾極まりないことでした。私は先生の名著「囚はれたる経済学」を熱心に読み啓発されたことが多大でありました。また「伊太利亜の旅」も拝見し、後日社用で世界一周旅行の際非常に参考となりました。更に先生の論文の内には異色ある「丸鬚の心理」等があつて非常に興味を感じて拝見しました。私の在校当時は渡辺龍聖校長の外、伴房次郎、中村和之雄、武田英一、高島佐一郎等諸先生が教授としてお顔を並べられて居り、また私の中学の先輩の椎名幾三郎先生が居られ海上保険の講義を受けましたので武田先生の推薦で無試験で海上保険会社に就職することが出来て爾來約四十年間同社に在勤し、円満退職をすることが出来ました。これ等の過去の事実を回顧考慮すると優秀な先生の方々の揃つた時代に学び、非常に幸福だつたことは言葉で表わせない感謝感激そのものであります。

(大一一)

恩師考

大西猪之介先生

神戸 健之助

夢多き僕の中学卒業の頃、三つ歳上の友人が、一橋の高商の四年に通っていた。彼は大西先生心酔者で、伊太利亜の旅の「君知るやレモン咲く国オレンジは緑濃き葉に照り映ゆる国」をいつも口吟み。又「囚はれたる経済学」もほめはやしていた。事実一橋の学生間で先生の評判は大変なものだった。

其頃の僕は高等学校志望だった。当時高校の受験は七月だったので、三月に官立にパスして、官報に名を出して見度い積りだったから、予備

試験の腹で、この一橋の彼に相談をもちかけた。彼は即座に「今小樽は教授陣が揃っているから神戸を受けよ、小樽を受けよ」と奨めて呉れた。

僕の入学と同時に、一橋を卒業した彼は、これでもよければと、彼の学帽を呉れた。僕はマキキョリーの徽章を星の高商に代えて入学した。一年間は夢中だった。やつと落付いた二年に、大西先生の最後となつた経済学の講義を聞いた。

「今日は……」との先生の一段高い声から、ノートにかかる。先生の講義は名調子なので、一言半句も漏らさじと、僕は糞半紙に鉛筆で速記し、下宿に戻って清書した。内容も充実しているもので、一、二時間分、どこで講演しても、聴衆を喜ばせる事確実である。清書したノート七、八冊は整本して、書架に約半世紀保存されている。

昭和になつて、先生の全集が沼尻先輩等の計で編集されたが、其以前に私は先生の単行本を蒐めた。先生の神戸高商の卒業論文「帝国主義論」は立派なもので、全集刊行前の絶版の頃は、古本界で市価を高からしめた。何でも神戸在学時代、帝国の文字有るものは、半片たりとも蒐めて資料とされた苦心の由である。最後の御著述「丸鬚の真理」は面

慾望

いつも低い声で前の時間の梗概を話す、合併教室がガヤガヤして騒がしいので、わざと低い声で話される。これで教室は静まりかえる。僕も大学や其他で講義する時は、此の方法を真似ている。

服部兵吾

容赦なく人生の終末が迫ってくるぞろろ身にしむ思いを過ぎ来し方にはせてみる。その照準は四十余年の懐古である。わが青春を謳歌し、一意向学にもえた小樽高商の学生時代は、世相、風物、人情、交友、師弟の關係といずれを逐つても、実に楽しく懐かしい。ここで薰陶を受けた諸先生の思い出は、それぞれに特異の面で、又感覚で、今も脳裡に浮かんでくる。さて大西教授というと、その燭眼

は武田教授と双壁だったという印象が第一である。いつも和装の覇氣満々の学者では、手塚教授とならぶものだったが、内に蔵するもの深く、経験ゆたかな大学の教授だったから、吾々大いに意を強うし、それだけに勉強心にもえ進取の氣風をつちかわれた。

先生の合併教室での講義は、時に教壇の椅子の背(もたれ)に両手を添えて、ややかめ腰、その慧眼は教室隈なくゆきわたる。熱のはい

丸鬚の心理

婦人問題の一考察

丸鬚先生の講義は、最初の二、三分はいつも低い声で前の時間の梗概を話す、合併教室がガヤガヤして騒がしいので、わざと低い声で話される。これで教室は静まりかえる。僕も大学や其他で講義する時は、此の方法を真似ている。

ときの独特のポーズであり、微笑さえ含む。教科書や参考書の指示もなく、時限いっぱい、吾々の胸にぐい入るように進められるが、黒板に向られると、瞬時緊張がほぐれることもある。そんなとき黒板に Furgot とか Hegel とか Carl Menger とか小さく横文字を書かれるのが、ノートに出てくる。吾々はこれらの学者や学説を、図書館で調べなければならぬ。ノートは殆んど走り書きだからあとで読み返し整理する。否応なしの復習だが、これを怠ると試験の成績に影響するのである。

先生の経済学は、哲学や社会学とも結びつくものだが、あるときは、ダーウイン説やメンデルの遺伝法則まで祖述され、生物学や歴史学、植物学の分野までも追究される。このことは、学術講演で地方にゆかれると聴衆はいつも会場に満ちあふれ、小樽高商に大西教授ありの輿望を高くらしむる所以でもあった。

先生の講義で私の興味をそそり、感動せしめたものが、マルサスの人口論であった。先生はまず「慾望」と黒板に書かれ講義を進められる。人間は慾望に出発する。人間の生存には食物は欠くことが出来ない。人間の性慾は必要であり将来も現状とかわらない。両性の結婚により人間を殖し、その集合が人口を構成する。女性の卵子は六億といわれ、男の精子は無数だといふ。この勢で人間が人間を生んだら正に恐ろしい人口増加を来す。他方食物はどうか。たとえ野山が花園のように耕されても、土地には限りあり、高度の技術を以てしても、食物の増産は人間の

増殖にははるかにおよばないことを知る。マルサスはその人口の法則で「人口は幾何級数的に増加するに對し、食物は算術級数的にしか増加しない傾向をもつ、この不調和は、窮乏と罪惡とによって均衡化される」という原文の一節に次の如く述べている。

It may safely be pronounced, therefore, that population, when unchecked, goes on doubling itself every twenty-five years, or increases in a geometrical ratio.

先生は「もし妨げがなければ、人口は二十五年で倍加する」の所を原文で書かれた。続いてこの妨げとは何か。それは天災人災である。即ち地震、津波、落雷、戦争、疫病、貧困などであり、これらは窮乏か罪惡に帰着するものである。更に結婚延期の道徳的抑制救貧法反對の如き予防的消極的なもの、食物不足の根本原因に飢饉あり、いずれも人口増加の妨げとなるものである。過剰人口は人間のもつ宿命的な自然法則によるものであり、そこから貧困と罪惡が必然的に発生し、今日いろいろ社会問題が起きてくる。つまりこれらの妨げは人口増加の自然法則から必然的に結果するものである。

マルサスはその人口理論に三つの命題を掲げている。一、人口は必然的に生存資料により制限される。二、人口は極めて有力顕著な妨げにより阻止されない限り、生存資料が増加する場合常に増加する。三、これらの妨げおよび優勢な人口増加力を抑圧し、その結果を生存資料と同

大西先生の御命日に

佐藤信雄

一水準に保たしめる妨げは、すべて道徳的抑制罪惡および窮乏に帰着する。マルサスは妨げを仔細に分析し各国々民の状況生活環境の討究により一つの理論に到達し、前記の一節を書いたものと思う。人間は幸福と困窮との間を永久的に彷徨し続ける

この宿命的ともいふべきもの、これを証明するのが人口論である。以上は大西先生の思い出の一端にもと人口論の講義に託し、題して慾望、猶尽さざる憾なしとしないが。(大一一三 三光電気株式会社)

二月八日——今日は大西猪之介先生のなくなられた日である。大正十一年(一九二二)のことで私は小樽高商の二年生であった。

当時大西先生は二年生の経済原論を受持たれていた。少しカン高い声で、早口に話される講義を筆記するのは、私などにはつらいことであつた。今でも覚えていたが、影響という単語がチョイチョイ出てくる。それをまともに書いてみるとノートにブランクが出来るので、影だけ書いて、そのあとを少しあけて先へ進んだものである。

二学期もソロソロ終りに近い頃に先生が教室で(合併教室といつて二百人位入れるものである)試験をどうするか、二学期と三学期と二度やるか、それとも三学期末一度にするかときかれた。皆で相談してどちらかに決めて、次回までに返事せよとのことであつた。

大西先生の試験は難しいというのが上級生の異口同音にいうところであつたから、そしてノートの分量も

相当たくさんあつたから、私などは二度にしてもらつた方がよいと思つていたが、大勢は一度の方がよいといふことで、採決の結果はそうきまつた。大西先生は次の時間に「勉強しないと危ないよ」と笑顔ではあるがチクリと痛いことを言われた。ところが一月末であつたか二月始めか、先生の休講の掲示が出た。そしてアツという間に先生の死が報ぜられた。腸チブスということであつた。はつきり記憶していないが、発病されてから十日前後ではなかつたかと思う。学生根性とはあんなものだらうか。試験を一度にした方がよいと主張した連中の中には「これで原論の試験はなくなった」と大きな声でいう者もいた。先生を失なうことが、自分達にとってどれほどの損失であるかという風なことをシミジミ嘆く人は少なかつたようである。当時第四寄宿舎にいた私は、先生の官舎がすぐ近所だったのと、弁論部でいくらか他の学生よりは親近感をもっていたので、その晩先生の家

大西随想

菅野祐治

にお伺いした。しかし書生つポの私はそのような場合にどんな風にお手伝いすべきか全然知らなかったし、又集まっていた諸先生も私達学生に用事を言いつけて下さるでもなかった。何となくバツが悪いし、足はしびれるので、私は程なく寮に帰ってきた。

お葬式は小樽の何とかいうお寺で行なわれた。たしか手木君であったと思うが、坊さんのお経がよくきこえるように一聞いたって分りはしないのに、前に坐ろうと分り、最前列に坐ったのはよいが、足がしびれるのに前の方だから膝をくずす訳にも行かなくて辛かった。

このお葬式で一番印象にのこっているのは、大熊信行先生が号泣されたことだが、前に誰かが書かれたので繰返すことをやめる。

それから数日たってからだったと思うが、学校でお菓子をいただいた。大西先生のお家で、学生の弔問を予想されて多量の菓子を用意されたが、思ったよりも少なくて菓子が大部分あまった。残りものでわるいようだが食べてほしいという遺族の御志だと告げられて、おいしいお菓子をつまみながら私はひどく恥ずかしかった。

原論の試験は行なわれた。大熊先生と宮崎力蔵先生との出題であった。どんな問題かすっかり忘れてしまったが、落第点はつけないだろうというのが大方の意見。これが又学生根性というものだろうか。

(大一一)

我が青春に悔なし

大西教授が我々に念願した事は楯の両面を見る事であった。そして私のようなやんちゃ者でも無条件で大西狂になったのも彼の此の物の観方のせいだった。例えばマルキシズムを取上げても、あらゆる角度から、あの人が十五分でしゃべる処を五分でしゃべるといふ怪弁で、とことんにやつつける。と話題一転、俊敏彼の如き人が如何にしてかかる誤りに落ち入ったのであらうか。眼を転じて我々は当時の時代精神を検討しなければならぬ。

其処で当時の時代精神を詳しく説明し、かかる時代精神を背景とする以上、俊敏彼の如き男でも、否俊敏彼の如き男なればこそかかる誤りを犯すのも実に当然といわねばならぬ。次に第二章に移る……という講義ぶりであった。九条武子の歌に「棄てられて尚咲く花のあはれさに、また取上げて水与えけり」と云うのがあるが、実にそれを想起させる位「花も実もある計らい」だった。あの取付きにくい顔の何処に、こんな人間味が隠されてあるのかと疑われる位だった。これでは妙見の芸者連中であらうか。「イタリヤの旅」を買って来て読む道理だった。「責むべき点があれば、反対に

褒むべき点を見付けて、極力褒めよ」と説く人がある。間違いではないが、どうしたらそう出来るか説明してやらない以上、それは無理な要求である。何と意地悪な人だらうと思つたら、悪口云ってかまわない。只どうしてあれ迄意地悪になつたんだらう。その探求も忘れられてはなぬ。あのような家に生れ、あのような環境に育つたら誰だって意地悪にもなる。意地悪さに同情、同感出来る。こうなると、責められなくなる。悪口が云えなくなつて来るのである。

要するに楯の両面を見る事である。こうした高い見地に立つて来ると、どうしたって一方的な言説が出なくなつて来る。「一見如何にも歯切れが良さそう、しかも其の実極めて歯切れの悪い大西の物の云ひ方は私は嫌いだ」と福田徳三博士が云い出すのも無理はない。しかし福田さんが好いても好かなくても、矢張り大西の云う事の方が本当である。「主張せず提案せず、只説明する」これが科学の始めであり、且終りである。と教える「科学の限界」と云う事をくどい迄に強調された。一つの政策の生れるのは何処迄も一つの人生観からであつて、兎もすれば人が誤るように、一定の理論から一定の政

策が生れるものではない事を懇々とさとされる親切な先生だった。学費の關係で、私は一橋専攻部にも東大、京大にも進み得なかったが、あのような、真に納得の行くような授業をして呉れた人は恐らく日本中何処にも居なかつたであらう。然も彼は三十四才で亡くなり、親しく彼の教えを受け得た人はごくごく稀なのである。

其のような人の中に我々が入り得たのである。彼を知り得た事によつて「我が青春に悔なし」と私が断言しても人々は決して反対しないであらう。実に「我等の教主大西さん、高天恩徳謝し難し」である。謹んで導師の御冥福を祈つて止まない。小樽に来て緑ヶ丘にのほりたれど

大西猪之介今あらずけり
(下村海南博士)

大西は道産子である

「大西は道産子である」などと云い出すと、また鬼面人を驚かすものと顔をしかめる人もあらうが、私は断乎として主張する。大西教授は飽く迄道産子である。彼を生んだ者は緑ヶ丘道産子であり、彼を育てた者は緑ヶ丘道産子である。謂わば小樽高商がなかつたならば大西猪之介はあり得なかつた。「我が輩」は信ずる者である。諸兄はこぼまれるかも知れない。しかし彼渡辺竜聖と、緑ヶ丘に於ける大西を本當に知る大熊信行先生は真に彼を知る者の言と認められるであらう。

実に大熊さんの云われたように、正直に云つて大西教授独りの小樽高商であつた。思う存分に勝手に振舞

い、又校長同僚市民こぞつてそれを許容し、それを側面から援護した。だからあの自然児、あの鬼才があつた。通り存分に延び得たのである。勿論彼を育てたものは津村秀松博士であり、左右田喜一郎博士である事は我等も否定しない。しかし此の文句の多い天才児を兎に角小樽に無理やり連れて来て、どのような要求も呑んで彼の天才を存分に發揮させたのは天下第一の名伯楽渡辺竜聖である。不幸にして彼は名古屋高商の創設の為に緑ヶ丘を離れたので「渡辺ザ・グレイト」と云う丈で、彼のひととなりは余りにも緑ヶ丘人に知られては居ないが、兎に角偉材を見出し、これを育て上げるに云う手腕に於ては海内第一だつたらしい。其の精魂を傾け尽した作品の随一が大西猪之介だったのである。

大西教授の見合いと新婚旅行

大西猪之介教授が恩師津村博士夫人に宛てて書き綴つた在欧通信集「伊太利亜の旅」を通読して感ずる事は早うお嫁が欲しいなりませぬと云ふ事である。いや主著「囚はれたる経済学」に於てさえ「さりながら其の苦惱は我を幽閉の闇より救ひ出すべき一人の騎士だになき醜婦の苦惱にあらずして、我が縁は既に深く自然科学と結ばれたるにも拘らず、新たに文化科学でふヴェルテルの現はれてむげには退げ難き熱き思ひをささやき寄るロッテの心情たるを看取されん事を乞ふ」と云つた調子である。

それかあらぬか婦朝早々お見合いの話が出た。相手は室蘭の栗林さん

の専務水梨さんのお嬢さんだ、処が其の当日も例によつて栗林さんに何か議論を吹き掛け、栗林さんをコテンコテンにやつつけて仕舞つた。やがて当のお嬢さんが静々とお茶を持って来られ、軽く会釈して其の傍にお父さんの傍に着座された。処が肝心の大西さん、今迄の騎虎の勢は何処へやら、青菜に塩のよう、下うつ向いて一言も発し得ない。仕様がなから止むなくお嬢さん其の傍中座された。後見送つて栗林さん「どうです。お気に召しましたか」と糺すと大西さん曰く「お気に召すも召さすもない。私は只膝頭のあたり少し見ただで……」栗林さん「日本一の経済学者も若い女の前ではさっぱり駄目ですな」と切り返したと云う。(苦米地先生談の記憶から)

其の大西さん目出度く新婚旅行に出たのは好いが、予定された日に帰つて来ない。どうしたんだらうと一同案じて居ると、翌日やつと帰つて来た。遅延を皆でなじると「冗談云つちやいけな。新婚旅行に出て予定通りに旅行する馬鹿があるか」と涼しい顔をして居る。

此の大西さん、点のからい事は苦さんと好一對。其の人が何を思ったか或る生徒の答案に、満点が百点なのに百二十点付けた。驚いた教務主任の武田さん理由を糺すと、予想以上に好く出来て居たからとの返事、いやそれで困る。百点に減点して貰わねばならぬと押し問答の末やつと承知させたと云う。

経済学者と云うよりも寧ろ人生哲学者と云つたような人だつた。我々に人生を觀る眼をつけて呉れた。こ

んな事も云つて聞かせられた。「世の中には自分を教える為に生れ合せて来たような人があるものだ。其の人にめぐり合った人が此の世で一番仕合せな人だ。例えば福田徳三博士。あの人があれ迄に成長し得たのは全く彼を教える為に生れ合せて来たようなブレントナがあつたからだ」と、後日金沢で眺鳥敏師に接した時、法然と親鸞の關係を説明して同じような事を説かれた。「親鸞があれ丈成長し得たのは全く親鸞を教える為に生れ合せて来たような師匠法然があつたからである。眺鳥がこれ丈延び得たのは此の眺鳥を教える為に生れ合せて来たような先覚清沢満之があつたからである。我生くるに非ず、清沢満之に在りて生くるなり」と。

さて我々大西教授の教えを受けた一同、果して「我生くるに非ず、大西猪之介に在りて生くるなり」と揚言出来ようか。先師の御名を汚さねば幸である。お互に頑張らう。

大西教授とはどんな人だつたか

河上肇博士を教えた登張信一郎さんが博士を評して「河上は詩人だつた」と云われた。同じ事が大西猪之介に就いても云えるのではなからうか。成程日本経済学界の鬼才と称えられ「学問の幅を広くした」と福田徳三博士から謂われ、「徹底的な近代人だつた」と恩師津村博士から惜まれた。然し我々直接教えを受けた者には teacher ではなくて inspirer であり agitator であつた。若き学徒に学問に對し情熱を燃え上らせた人であつた。

(大一一) 福岡・英教塾経営

これは彼自身も認め、公言して居た処である。現に私自身高岡商業で鈴木朝、根岸正一などの先生から津村さんの「国民経済学原論」に基く経済学を一通り教わつて小樽に来たのである。処が大西教授に教わつたお蔭で何が何だか分らなくなつて仕舞つた。尤もこれは御本人もよく知つて居られたようである。「一応こつて居られたようである。よく分らなかつたら津村さんの国民経済学原論をよく読んでおいたら好い」と注意された。佐原さんなども「大西さんの講義は一通り経済学を学んだ我々に聞かすべき講義で、君達に聞かすべきものではないのだ」と云われた。兎に角天馬空を往くとも云うべき授業だつた。何が何だか分らなかつた。然し学問への情熱を狩り立てられた事実は事実である。恐らくあの様な授業をする人は後にも先にもなからう。然し自分の不注意からではあるが、小樽に入学した為に私は肺炎に罹り、九死に一生を得た。然しそれ迄の犠牲を払つても大西教授に接し得たと云う事は決して無意味ではなかつた、と私は信じて居る。

大西さんのこと

「緑丘新聞」から

私が大西さんのことを書くといつたら變に思う人があるかも知れない。實際變なのである。そこにこの一篇の價值があるのだから、まあ読んで御覽なさい。

専門がちがうのであまり話をする機会もなかった、その上、大西さんの授業は大てい午後で私の朝の中にすんでしまうことが多かったから、教官室で顔を合わせることもさへ稀であった。その大西さんがある年の夏休みにひょっこり訪ねて来られた、積丹へ講演にゆく事を頼まれたのだが、一人では淋しいから一緒に行かぬかとのことであつた。準備の時もなし、材料のもち合わせもないのでお断りしたかつたのであるがなにか小説の話でもしてくれればよいという事だったので、ともかくお伴をする事にした。

余市で迎えの人に会って、濱から美園行きの發動機船に乗った。大西さんは船はあまり強くなさそうであつた。「洋行した頃は、若かつたから元氣だつたが」そういつておられ

た。

名士の來泊、というので美園の宿では心をこめて歓迎した。御馳走は文字通り山海の珍味であつた。盛裝したおかみが自ら御給仕に出た。亭主は看板を削つて大西さんに揮毫を懇願した。

これには大西さんも弱つたらしい。「僕は駄目だから君が書いてやりたまえ。」そういつて大西さんは私に書かせようとしたり。「折角あなたをあてにしているのに僕が書いては無意味ですから」私は固辭した。「何といつても僕は駄目だよ」と、大西さんは挺でも動きそうになつた。「何とかして下さい。もうこの通り看板は削つてしまつたのですから」亭主は泣き出しそうになつた。とうとう私が冷汗をかきながら悪筆を揮つた。

大西さんは私以上の悪筆だつたらしい。その晩町の有志に署名を乞われたときも大西さんはローマ字で書いてしまつた。

その晩の會場は暗かつた。ランプ

風の意味のことを、大西さんはこの席で、いろいろの方面から面白く説かれた。

その晩は町の有志の歓迎會があつた。大西さんは酒も飲まず、うたもうたわなかつたが、それでもつまらなさそうな顔もせず、快よく歓迎をうけておられた。

あくる日は前夜の夜更しがたつて大分眠かつた。私が眼を醒すと大西さんは起きあがつたままの寝巻姿でしきりに何やら書いておられた。「何をしているんです。」ときくと「なに、今日は科學の限界という題で話す豫定にしていたのだが、ゆうべの顔ぶれを見たらすっかり厭になつちまつたから別の話をするつもりで考えているところだ」といつ返事であつた。

その紙片には「不景氣—儲からぬ—」という様なことが書き連ねてあつた。朝食後馬車でその日の講演地古平に向かつた。町につくとところどころに講演のポスターが眼についた。「大西教授外一名」と書いてあつた。私が「僕は外一名と申すものであります」とやりますよ、といつたら、大西さんは「そんなことはよせ」といつて眞顔になつた。

會場は小學校であつた。晝間のことであり、主催者側では聴衆の少なむことを憂えて、小學校の上級生を残してあつた。それが大西さんには氣に入らなかつた。「僕の話は中學生にだつてわからないんだから、小學生にはとても駄目ですよ」といつ出した。小學校では「でもわざわざ

が二つほど吊してあつて、聴衆の顔は暗の中にぼんやりと浮いていた。大西さんの演題は「生の宗教と死の宗教」というのであつた。序論がすんで本論に移られるころ、演壇に近いところから「宗教學問に非ず」と怒鳴つたものがあつた。「道德は學問ではない。しかしそれを研究の對象とした倫理學というものが成立し得る。宗教それ自身も學問ではないがそれを研究の對象とした宗教學というものが成立し得る」、大西さんはさういつて即座にやり返した。三分、四分話が進んでゆくと、また同じ男から何だか彌次が飛んだ。「質問があるならあとにして下さい。そうませかえされては話が出来ないから」大西さんがさういつると、その男は幹事の人につまみ出されて行つた。

「生命はこの世だけで終るのではなく墓の彼方の世界に於て永久に繼續してゆく、と觀るのがキリスト教である。この世を假りの宿りとして見ると本來空、死後の世界こそ眞の姿であると説くのが佛教である」といつた

「君は何を讀んでるんだ？」大西さんは思ひ出したように私に訊いた。その頃勉強していたラティン語の本をみせると大西さんは、「ラティンか？僕はそいつはやつたことがない、だが伊太利語なら新聞や小説位讀むのは差支えない」といつた。汽車に乗つてからも大西さんは「ル・サンヌ・ド・ラ・モール」ばかり讀んでいた。一度だけトンネルで暗くなつたためかも知れない。本を下に置いて「俵給だけで生活費をまかなえといつても、僕の女房はそれは困るといつんだよ」といつて笑われた。

その本を、大西さんは小樽につく迄に讀みあげてしまつた。そして感想をきくひまもなくその翌年の二月にはもう大西さんはこの世の人ではなかつた。

「生の宗教と死の宗教」「ル・サンヌ・ド・ラ・モール」——大西さんはそのころしきりに生死の問題を考へておられたのでないかと思ふ。

大西さんが經濟學者としてどんなに偉大であつたかを私は知らない、しかし語學はたしかに天才であつた。

大西さんが亡くなられてからも十年になるのだといつ話をきいて、一寸思ひ出を書いてみた次第である。

古い切り抜きから

西川正巳

追記 言わでもの追記を書きしらす僭越をお許し願ひたい。

僕の古い切り抜きの「緑丘」に上の様な浜さんの文章が出ていたことを編集部にお便りしたら是非「大西教授特集号」に載せたいから写して送れとの御便りを頂戴した。僕は浜さんの原文を一字一句、使用漢字、仮名遣いまでそのままに忠実にうつし取つたものであるが、今日の印刷屋さんが、その通り印刷して下さるかは疑問である。學校ではなくて學校、變なでなくては變なとすべてが旧時代の書き方のまゝにして頂きたいと思つて、その旨御願ひはして頂いたのであるが、若し一部現代式に變つていたとしても御許しを願ひたい。

浜林先生のこの一文は大正七年頃「緑丘」がまだ學生新聞であり、同時に同窓會誌の役目を兼ねていた時分、同紙に載つた一文を切り抜いて保存しておいたものである。僕等が小樽高商に入学した年の前年、大正十一年二月八日に大西教授が亡くなつてしまつた。僕等は、大西さんを全然知らない。ただ先輩から話を伺つたり、「伊太利亞の旅」や、「囚はれたる經濟學」を読まざる者は小樽高商生にあらずとさえ言われた時代であつたから教室でこそ教えられることなく、大西教授の御名は僕

達には親しい名であつたし、浜林先生は日々御指導を受けた第四寮の寮監で、教室では一人一人、名前も顔も知り過ぎるほど知られていて、随分皮肉も言われまた可愛いがられもした先生だから、僕達には親代りみたいな親しみが感じられて、身辺の小々な瑣事まで、御心配をおかけした先生である。

僕はこの一文を写しとりながら、「大西さんが亡くなられてからも十年だ」と書かれた浜林先生が、既にもう亡くなつて二十一年あまりにもなると思ふと思はず、執筆の筆に思ひがした。併しまた一語一語浜さんの筆のあとを追ひながら原稿紙に写しつていくうちに、身は何時しか、小樽在學當時の己に返つていて、温情溢れる先生の声を直接耳にする心地がして、大西さんも浜さんもおち入つて、緑丘に學ぶ生徒のおち入つて、緑丘に學ぶ生徒のおち入つて、喜びをさへ感じた。思へばあれから四十五年、もう既に自分も六十四歳の老齡だと氣付いて、ハツとして己にかえるのであつた。

この一文、どこを讀んでも、大西さんと浜さんの面目躍如としていて、両先生を知る緑丘人は限りない興味と懐しさを覚えるのではないかと思つて、筆写の手に思はず心がこもる思いがした。

「どこを讀んでも」と書きまじつたが、實際そうなのであるから「まあ讀んで御覽なさい」と浜さんの口まねをして、この口上を終ります。

(大 一五 皇學館大學講師)

ざ残して置いたのですから」と困り出した。「それじゃ君なにか子供向きの話をしてやりたまえ」。大西さんは私にからかい出した。板ばさみになつて、とうとう私はおぼろ覺えのアラビヤ夜話をやつてお茶を濁した。

聴衆が少いので講演は裁縫室でやつた。大西さんは不況の原因を説明された。最後に「じゃどうすれば金が儲かるか、といえよそれは僕にも分らぬ。それが分る位なら教師なんて商賣はやらない。だから僕の話も聞いても一向金儲けのたしにはならない。だが不景氣の原因が分れば、多少は腹も立たなくなるだろうから「こいつつて話を結ばれた。ふたりきりになつたとき、大西さんは「僕はあんな話なら何時間でもやれる」といつた。

その夜の宿は床の間つきのが一室しかなかつた。それが大西さんの室、その次の私の室、と宿屋でぢやんときめていた。ところが寝る前になつて大西さんはくじ引で室をきめようといつ出した。私は極力反對したが大西さんはきかなかつた。くじを引いたら案の定、私が床の間を引いてしまつた。大西さんはさつきと次の間へ入つて寝てしまつた。

あくる日は余市までまた船に乗つた。そうして驛前の旅館でお晝をたべた。食後、發車まではまだ大分間があつたので、林檎島を見にゆきませんかと誘つたら、大西さんは「林檎が木になつて居るだけだよ」といつ返してしまつた。そうしてひっくり返つて本を讀んでいた。その本をの

思い出づる事ども

故相 沢正美



於て頗る慎重なものがあつたそう
だ。何でも学生時代野球をやつて胸
を痛められたとか聞いているが、常
々あらゆる方面に身の注意を怠られ
なかつたとは、S教授から伝え聞い
たことである。

先生の姿が小樽の隅々何処にも印
せられぬ所はないだろう、と思われ
る程先生が散歩好きであつたのも、
その意味に於てうなづかれる。も
っとも先生は別種の意味に於て我
々のように漫然と散歩するのでな
く、必ずや思索のため、考えをまと
められるために散歩されたものであ
るかも知れぬが――

よく私等は手宮の町はずれや埋立
の浜辺等に先生を見かけ驚いたこと
がある。しかもそれが毎日殆んど欠
かされたことなく、亡くなられる時
も依然として数日前まで続けられた
そうで、そこに先生の意志の強固を
見ることが出来る。私等は何かの用
事でよく私宅を御訪ねしたもので
が、その時ステッキの有る無しで
ぐ先生の御在宅を見分けることがで

きた。三時頃から四時頃までは大抵
不在であつたように思う。

経済学者であり、同時に哲学者で
あつた先生は、敢て小樽のカントを
以て任じられたのもあるまいが、
先生がケニーニヒスベルヒの哲人に私
淑された――と仄かに測断して――
如く、私共は今尚先生の面影を髣髴
し永劫に忘れ得ぬであろう。

私は辯論部の委員として、部長た
る先生の指導を受けることが大なり
したため、自然先生に接触する機会が
外の人よりも多かった。部長として
先生は実によく部の面倒を見て下さ
つた。

一言を以て言えば用意周到、計画
遠大であつた。北大併合辯論会、巡
回講演、名士の講演等皆先生の発意
に基くものである。而して必ず依つ
て来る利害を考慮し、絶対に弊害を
残さざるよう用意された。北大聯合
会の如き終るやすぐに明年度の選
手、講師を予定されるというように
先へ先へと計画を進められた。巡回
講演の場所を五ヶ所と限定されたの
も先生の深い考えから出たので、或
る年に安りに多数の場所を講演して
は翌年度に困るようになるだろうと
の御考えであつた。

そして尚私等の顔を見る毎に「何
々の件はどうなつてゐる」と反問せ
られ、若し放任しておいたような場
合にはひどく叱責されたものだ。何
時であつたか雪の降る寒い日、是非
今日行つて来いと言われて、内心少
なからず先生を恨んだこともある
が、時日切迫迄打棄ておいた自分の
責任であつたので、後で先生の気性

を知るに及んで自分の不行届きをは
じたことがある。

先生が演壇に立たれたのは在学時
代数回でその中フット教師の送別会
の時、独乙語で次は北大との聯合演
説会に「経済価値と倫理価値」なる
演題の下に、更に国際聯盟成立の時
「闘争の心理」と題して雄弁を揮わ
れたのは今尚記憶に新たなものが
ある。

しかも常に和服で通された先生が
この後二回とも洋服を召されたので
一層印象が深い。先生の演説は宏弁
博辯滔々として尽くることなく、歯
切れのよい、透徹した声で一時間
も二時間でも述べられる。実に聴く
者をして恍惚たらしめずんば止まぬ
概があつた。晩年先生は殆んど演壇
に立たれず練習会の際に必ずされた
批評も中止された。いつか弁論会
の時N君が引用したメーテルリンクの
死後は如何に就て、先生の批評を試
みられたのが最後であつた。そして
それが死生問題であつたのは、偶然
であるとはいへ、後に至り我々は
等かの暗示を感じざるを得なかつ
た。

晩年の先生は気のせい何か何となく
引込思案のように思われた。あれ程
周密な先生が弁論大会に当り、伊藤
痴遊氏を招かんとしてその招待費が
部にならぬので、これを先生に諮つた
所、生徒から何程かつつ微しては如
何と言われた時私は却て今後の悪結
果を来すことを恐れ、他から支出の
途を講じていたのだ程である。こ
のことは今に至る迄先生として進ん
でかく言われたのを私は不思議の一

つとしてゐる。

先生は極めて責任観念の強い方
であつた。これがため無理をされ、遂
に大切な身を失われることになつた
のだと思えば更に残念である。先生
が最後の講義は私等の経済史で丁度
封建制度から資本主義国民経済へ移
る道程を話されたのである。そして
何かの序に現代の政治の腐敗してい
ることを、その時痛罵されたことを
も私ははつきり覚えてゐる。

あの時、後で聞けば先生は発熱三
十九度以上であつたそうだ。そして
講義の終るのを待ち兼ねて――い
つより二、三分早く切上げられた
ようであつた。――宿直室でとてもた
まらんと言われながら休まれた――
噫それきり我等は遂に先生と再び地
上に接する日はなかつたのである。

或る時競技会のことでは生徒の委員
と――私もその一人として――先生
方の委員――大西教授は勿論その一
人――とが折衝したことがある。先
生は極力運動会の不要を説かれ勉強
すべき必要を力説された。そして反
対論者には大西がかく言つたと伝え
よと断言された。私は少なからず先
生の責任感に動かされた一人であ
る。自分が言つたと明言せよとは普
通の人にして言い得ざることであ
る。先生は事実生徒の間に受けは悪
かつたに違いない。しかも誰一人先
生に桶つき得なんだのは――先生と
我々の距離が余りにかけへだたつて
窺う由もなく、全く底知れぬ海その
ものであつたの言う迄もない――
。実に先生が自ら明言断定せられて

先生はよく人生観と云うことを口
にされた。講義の最後には結局人生
観の相違というのがよく出て来た。
先生の人生観はどうであつたろう？
私等は常にこれを知りたかつた。然
し自ら先生が自分の人生観らしきこ
とを我々に説かれたことはない。た
だ我々の推測に依るに、第一先生の
行動がこれを立証する。義務観念の
強烈すぎる程の強烈と、第二は前に
述べた潔く責任を自己に負うとのこ
と、更に我々の演説を評された時死
生の超脱――死後は如何ということ
を問題にするのは死にたくない一種
の証拠で、死そのものは苦痛でない
が、死の瞬間に伴う苦痛が苦しいと
いう人の説は一応聞こえるが、一体
それは切り離し得るかどうか、と言
われたように記憶する――それ等が
先生の人生観ではなかつたであらう
か。

決して責任回避をさるる如き、卑怯
の態度が微塵もなかつた点に存する
と思ふ。

先生はよく人生観と云うことを口
にされた。講義の最後には結局人生
観の相違というのがよく出て来た。
先生の人生観はどうであつたろう？
私等は常にこれを知りたかつた。然
し自ら先生が自分の人生観らしきこ
とを我々に説かれたことはない。た
だ我々の推測に依るに、第一先生の
行動がこれを立証する。義務観念の
強烈すぎる程の強烈と、第二は前に
述べた潔く責任を自己に負うとのこ
と、更に我々の演説を評された時死
生の超脱――死後は如何ということ
を問題にするのは死にたくない一種
の証拠で、死そのものは苦痛でない
が、死の瞬間に伴う苦痛が苦しいと
いう人の説は一応聞こえるが、一体
それは切り離し得るかどうか、と言
われたように記憶する――それ等が
先生の人生観ではなかつたであらう
か。

葬儀の済んだ後天上寺の住職に聞
いたのであるが、先生の御臨終に当
り御尊母が何か遺言はないかと問わ
れた時「無」と一言答えられたのみ
であつたという。死生を超脱した人
に非ずしてこの言はなし難い。偉大
なる哉その人生観。

噫！思えば先生逝いて正に三年、
空暗雲低く垂れこめて、風落葉松に
叫び、雪天狗山に舞う夕、巨星天の
彼方へ飛んでから三年の月日は過ぎ
た。然しながら年月の経過と共にそ
の記憶は新たに、そして先生の偉大

なりしことが沁々と感ぜられる。消
えなんとする蠟燭のまたたきをたよ
りに、我等五名が他の教授と共に恩
師の遺骨を拾つた光景はいつ迄もい
つ迄も消え去らぬであらう。――実
際私は身よりの者の骨一つ拾つたこ
とのない身である。

先生の学界に於ける功績は将来言
うべき其人は他に在るであらう。私
等の口にすべき限りではない。我等
はただあの透徹した哲理に、豊醇な
る文学趣味を取り入れ、先生独特の
純理より脱化した経済原論が如何に
展開され行つたろうか、ということ
に限りなき興味を覚ゆるのであるが
それも今は空しく仇となれるを恨む
の外はない。

私ははしなくも「小樽は大西教授
に依つて名を成し、大西教授は小樽
に依つて名を成した」と言われたT
教授の言を想起し、再び机上に飾れ
る先生の小照を見て、澄める瞳、広
き額、智そのものに輝ける先生の英
姿に接し得ざるを悲しむ。然り、そ
は我等にとつて限りなき悲しみであ
る。さりながら先生は小樽の人とし
て逝かれたるを思えば――しかもそ
の年既に中央に出でらるべき準備、
ほぼ整いつつありしと聞くに及んで
尚更――我等が恩師として葬り得、
永遠に緑丘学壇の明星たるを私する
を得ることは我等のひそかなる誇り
でもある。

茲に先生の冥福を祈り拙き一篇の
筆を擱く。
(一九二五・二・二十三)
北方日本社発行「大西先生の思
い出」よりV

技術革新時代を生きる

ナイス低温溶接棒



製造元
ナイス低温溶接棒株式会社
総発売元
協和商事株式会社
取締役社長 四谷宗義(大11)

本社/尾崎市北大物町1番地 電話(481)822180
富山出張所/電話(31)1425 東京支店/電話(52)871180 九州支店/電話(76)688580
名古屋出張所/電話(31)2063 仙台出張所/電話(22)9549 小倉出張所/電話(56)5648
高松出張所/電話(31)4747 静岡出張所/電話(85)2675 広島出張所/電話(21)1078
福岡出張所/電話(22)7331 新潟出張所/電話(66)2295 水戸出張所/電話(24)4611 長崎営業所/電話(44)6345



Mitsui O.S.K. Lines

大阪商船三井船舶株式会社

取締役会長 進 藤 孝 二

東京都港区赤坂5丁目3番3号

電話東京(584)5111番(大代表)

「伊太利亜の旅」 の複版を望む 西川正巳

大西先生の御亡くなりになつた翌年の春、はじめて緑丘の学園に入学した自分は大西先生のことが判るう管がない。津村博士(大西先生の神戸での恩師であり終生の友先輩、或る時は親とも慕われた友人)が伝統的な経済諸学説に痛烈に批判を加えたと評された「囚はれたる経済学」の内容に立入って、兎や角言葉を挟むことは、勿論一ことも出来ない。すすめにより大西先生が本業ではない非専門的著述といわれた「伊太利亜の旅」について、少しばかり読後感めいたものを書いてみよう。勿論「囚はれたる経済学」の一頁も緋かざるものは小樽高商生に非ず」といった一種の大西先生ブームの中にあって、自分とても判らぬままに、ザインだのゾルレンだのと先生に教えられた言葉の端々を、いまだに時々口にするほど、あの本に囚われた時代があったのであるが、いざ大西先生記念号に何かを書けといわれると、「伊太利亜の旅」以外にはないのである。

改めて本書を繕きながら感じたことを書きしるして、責をふさぎたいと思う。

小樽に来て緑ヶ丘のぼりたれど大西猪之介今あらずけり
と、大西先生を失つた緑ヶ丘への歎きを歌つた下村宏氏が、大西君はローマに来た当座はイタリー語は少しも話せなかつたのに、二三ヶ月するとかなり複雑なこともイタリー語で弁じ得るようになったと書いていられるが、この海南先生の御言葉を俟つまでもなく大西先生は語学の天才であられた。

その語学の天才が、「語学の時間のかえり」の中で、「何処の国の語にせよ三羽の鴉を完全に屋根の上にとまらし得、また猫をして誤なく兎を捕えしめ得れば、それはもう立派なもので云々」と書いていられるふしを読んで、今語学を教えることを看板にしている自分は顔から火の出る思いがした。英語教育への不信とさしづめ大学の英語教育を如何にあらしめたら良いのか、法科を出た太郎も、商科を出た次郎も、理工科を出た三郎も、国文科を出た花子も、日本語の新聞を読む二、三倍の時間はかかって、兎に角英字新聞が読め、高校一年程度の英語なら聞いて意味が判り、中学二年程度の英語なら自由にしゃべる程度までするためには、今日の大学の一般教養課程の英語を、どのように教え、どのようにドリルすべきかという問題は実は現実の大きな困難な問題である。うっかりすると先生も兎を逃がすかも知れないと大西先生に押揃されたい教師になるためには、どうしたら良いか——ということが当面の自分の(或はこれは自分独りの)大問題なのである。

この頃新聞紙面を賑わしている大学の紛争事件を耳にする毎に、教師の責任ということを感じないではいられない。

僕の講座に一人の学生がいる。眼が実に清らかで光りがある。みじろぎもしない端正な姿でじつと見つめられると、何か面はゆい気がするほどであるが、僕はこの青年に羨ましいものを感じる。大学院へ進んで専攻の学問に打ち込みたいのだという。若い人はいいなア、としみじみ思うと共に自分の責任を痛感するのである。

大西先生や、浜林先生、大熊先生や大野先生がいられた当時の小樽高商が学問的地位で決して中央に引けを取らず、北海道における学問の中心として重きをなしていたこと、学生がまた刺戟を受けて発奮し、業界のみならず学界に有為の人材を送り出したことを思うとき、教師の学生に及ぼす感化の偉大さを思わずにはいられない。実力のある、いい先生になれ——こう大西先生が伊太利亜の旅で教えてくれているのだなアと思つて、この第二信「語学の時間のかえり」を実に興味深く読んだのである。

イツ娘の純情に、それからまたそれを叙述する大西先生の筆の冴えに驚嘆する。その結びの一節には思わず涙の出るのを禁じ得なかつた。涙もろいのは老人の常と笑われる程、僕はまだ老いさらばえたとは思われない。大西先生の筆力が読む者をここまで引き込まないでは措かないのである。うそだと思つたら一度読んでみたまえと浜林先生の口まねでもしたい程である。

この三百頁あまりの旅行日誌、エッセイ、経済、哲学、芸術論がすべて皆、旅のつれづれに津村博士夫人にあてた私信であるという。恩師夫人にこれだけの真心溢れた私信を絶やさず書き送つた先生の御人柄にも本書を読んで感嘆するのである。

先輩の阿部芳治氏(第一回生、故人)はこの伊太利亜の旅に対して、実感の歪みと行文の不純を指摘されたそうであるが、才人大西先生の筆端、時に奔放、或は叙述の過当なところがあつても知れぬ。或はまた時に興に走つて多少のフィクションめいた叙述がないともいえない。併し現在市場に氾濫するドクトルマンポ一式の旅行記に比して、学問的価値は遙かに大きいことはたしかである。

僕は小樽高等商業学校教授の肩書をつけた大西先生の「伊太利亜の旅」初版を懐しむことしきりである。全集には勿論収録されているけれど、単行本としてもう一度何処かの本屋で出版しないものかと切望して止まない。

(大一五 皇学館女子短期大学・皇学館大学講師)

洋酒の中の個性派



〈城〉生まれの高級ブランデーがたっぷり。スッキリした飲みくち。飲みあきしない洋酒の個性派。あなたの洋酒棚に欠かせないユニークなお酒です。冷たくして、爽快に、愉快地、おたのしみください。



合同酒精

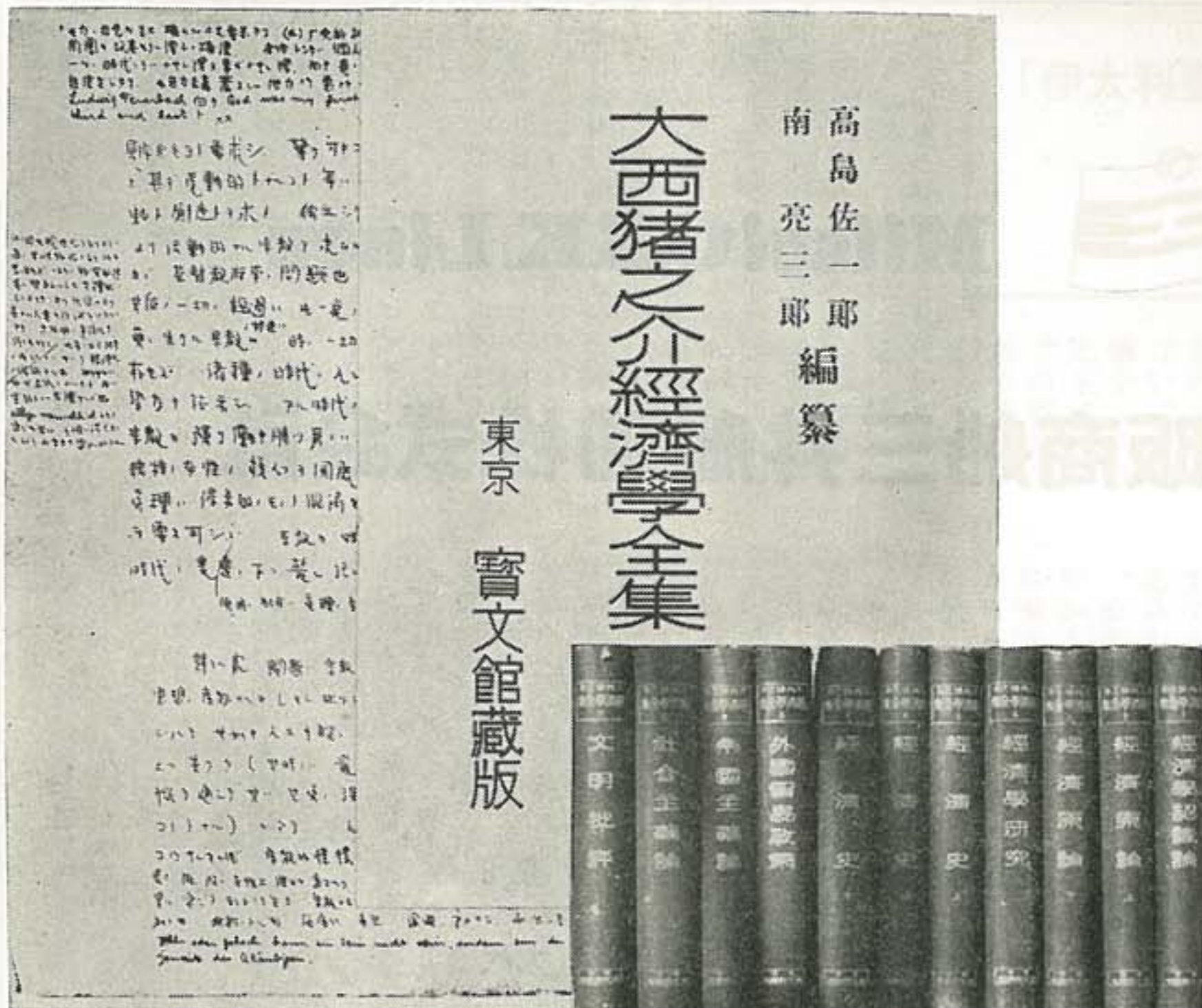
720ml.....500円

大西猪之介経済学全集

高島佐一郎 編纂
南亮三郎 編纂

大西猪之介経済学全集

東京 寶文館蔵版



(解説)



森川正明

(昭一一)

右の全集の構造をみると、先ず大西教授の基礎構造から出発されて、次第に上部構造への編纂方法が採用され、当時の高島・南先生の編纂者としての苦心の程がうかがわれる。この広汎な構造に対して「大西猪之介経済学全集」という題を冠したのは「教授の学頗る広汎に涉りその著作の、必ずしも経済学にのみ限られざるに拘わらず……、その大部分が経済学に係われる為めばかりではなく、教授の本領は何処までも経済学研究者であったので、如何に宏壯に取り扱われたる社会的、文化的諸問題といえども、教授の結論にして凡そ、経済学的認識に帰趨しないものとして勉いからである」

- 第一巻 経済学認識論
- 第二巻 経済原論(上巻)
- 第三巻 経済原論(下巻)
- 第四巻 経済学研究
- 第五巻 経済史(上巻)
- 第六巻 経済史(中巻)
- 第七巻 経済史(下巻)
- 第八巻 外国貿易政策
- 第九巻 帝国主義論
- 第十巻 社会主義論
- 第十一巻 文明批評

第一巻 経済学認識論

経済学認識論

本巻は大正九年一月刊行の「因はれたる経済学」を本文とし、附録として「学説及伝記」哲学と宗教の二部を添えて、教授の取り扱われた研究主題を明示するために「経済学認識論」と名づけられた。即ち、「援を哲学に乞うこと」に依て、経済学に一新生面が開かれ得るや否やは正直にいつて今日なお未決の問題であ

る」時代において、「哲学史と経済学史」とを連絡せんと企図されたものである。換言すれば、左右田博士によって提起された「経済哲学」という分野の経済学界に占める地位の解明には「経済学の過去の全部を認識論的に分析討論する必要がある」として「全経済学史の哲学的解剖」を試みられたのが本篇である。附録一は、大正二年刊行の「経済大辞典」(同文館出版)第五巻に執筆せられた学説及び伝記を、附録二は「宗教と科学特に経済学」「奴隷の道徳と貴族の道徳」「生の宗教と死の宗教」の論題の講演を採録されたものである。

第二巻 経済原論(上巻)

経済原論 上巻

大西教授の遺稿「経済原論」の前半を収録されており、「教授の研究方法は著しくレアリスティックな色彩を帯び、その中心概念としては国民経済生活の根源としての「純生産物」が置かれてある。但し、本巻及び次巻を通じて注意深く識読せら

るる人は、教授の「経済学認識論」の根本思想が例えば「人口」に、例えば「財」に、また例えば次巻の「貨幣」に、如何に如実に表現されているかを看取し兼ねて、教授の学風の如何に多く世に知られざるヒストリーリッシュ、レアリスティックなものなりしかの一面を窺われるであろう」と、編纂者は紹介されている。

第三巻 経済原論(下巻)

経済原論 下巻

第二巻に引き続き遺稿「経済原論」の後半を収められている。編纂者は遺稿の整理に際し、本巻が最も困難を感じたと報告され、小樽高商における教授の経済原論講義のノート

第四巻 経済学研究

経済学研究

本巻は一般経済学(第一編経済学研究)及び戦時経済学(第二編戦時経済研究)に関する諸論文が収録されている。

「第一編のうち「財の意義に就ての研究」及び「人口論」は教授が初めて学界に出でられし頃の著作、いわば理論経済学に関する教授の処女論文である。特に「人口論」はそれに続く「人口の歴史及び現状」と共に人口現象の経済学的及び統計学的

の基礎研究であって、それが立論の出発点を人口論に求めむとする教授後年の、最も特色ある経済学(本全集第二、三巻)をうち樹てしむるに至り、他方に於ては「人口と国力」「生活難は人間宿命である」「勤儉の意味」等の諸篇を生ましむるに至ったもの、また少くともその構想の礎石となつたものである。」「第二編のうち最初の二長篇(「欧州戦時の経済」「英国戦時の経済」)は、留学中図らずも際合せられたる欧州大戦の齎らせる当時の経済的擾乱及び社会的動揺を具さに観察記述したものであり、これら戦時経済の「事実を録するの傍ら、微妙なる経済社会の機構を究明し、労働問題に対する独自の見識を披瀝せられ」ている。

第五卷 經濟史(上卷)



大西教授は經濟發展の歴史を左の通り区分される。

- 一、家族經濟の時代(古代)
- 二、都府經濟の時代(中世)
- 三、國民經濟の時代(近世)
- 四、最近世史

本巻は「家族經濟の時代」と附録二篇(猶太人と經濟生活、猶太人の將來)を収録されている。教授は「經濟史」の諸論においてその史観を次の通り名文を以て述べられている。

「芸術は全体としてある纏れるものとして現われ、科学はこれに反して断片として現わる。芸術は結び、科学は分つ。芸術は形づくり、科学は崩す。

科学の偉大はその客観性にあり。それは世界の外に立つ。そこに科学の弱点あり。芸術は世界の中に立ちてその感じに基いて世界を形づくる。これその主観性也。自由なる創造を行ふ天才也」

「現代を理解するには現代に生き居れる処の過去を解せざる可からず。歴史を解するとは現在より發展せしむる事也。偉大なる人間または國民に於けるが如く、更に説明す可

からざるもの前に立つ時にも、これを過去と結合して始めて理解し得たりとなす。この現在と過去とを引離せば一切の理解は不可能となる。現在に過去の子供也といふは時に當らず。子供は新たに生を始む。現在にむしる過去の直接の所産也。数学的にいへばその合計、生理的にいへばある年齢也。我等は過去の知識、

第六卷 經濟史(中巻)



本巻は「經濟史」第二編都府經濟の時代(中世)と、第三編國民經濟の時代(近世)の一部(國家、技術、貴金屬の生産の三章)を収録されている。

「本巻の中心部分はいうまでもなく第二編中世史である。試みに今、前巻所収の第一編古代史を経て中世史に至る脈絡を辿つてみるならば、古代史の記述の筆は先づ、原始民族の家族關係及び經濟状態に始まって古代國家興亡の跡を探ね、都市中心の典型的國家として永く世界文化の中心たりし希臘及び羅馬に及び、基督教の文明史的考察に、叙述の筆を擱いたのであるが、第二編中世史に入

能力、思想、經濟力の一定の配分を繼承しそが血と肉となり居れり。」
「先づ研究すべきは一つの時代が前の時代より何を繼承せるか、また何人がこれを繼承せるか、その繼承せる人々の間には如何なる争いがありしかと云う問題也。蓋し我等の有する最も尊きものは我等自ら作りしにあらざりて、我等の悟性も我等の行為する形式もみな昔より伝はれるものなれば也。」

識を作るに至ったかの研究に在る。」
「従つて、本巻における教授の筆は、中世初期に於ける原住民族の定住形式の問題、即ち村落団体が莊園制度かの詳論と考証とに始まり、交易及び市の發祥地としての中世都府の組織及び政策の記述を経て、當時の都府商業及び手工業の組織並に特徴を究明し、中世經濟心理の概括的説明に終つてゐる。」
「蓋し第一編(第五巻)及び第二編(第六巻)は予ねて、經濟史をもつて文明史化せむと意圖せられたる教授の立場より察しては、その最も得意とせられたる部分なりと推測せらるる。」

「ついで第三編近世史の中心問題はいうまでもなく、國民經濟の根本特徴としての資本制の研究に在る。この國民經濟の動力としての國家、技術及び貴金屬生産の三條件の研究に充られたものである。」

第七卷 經濟史(下巻)



本巻は經濟史第三編國民經濟の時代第四章以下終末まで及び第四編最近世史と附録二篇(歐洲大戰記、闘争の心理)が収録されている。「本巻に収録の「國民經濟の時代

」の続きは、前巻に掲げた三章即ち國家、技術及び貴金屬の生産——國民經濟の動力としての資本制精神の擧つて立つ三條件——のあとを承けてこれら三要因が相集つて作り上ぐる「市民的財産」及びこれが資本に転化するに依つて、更に新たに形成する財の「新需要」を叙述し、進んで資本制社會の成立——即ち賃銀労働者對資本家のいわゆる資本關係の成立——機構を究明して、資本制企業の本質に迫り行つたものである。」

「第四編「最近世史」は仏蘭西革命及び英國産業革命を發足点として、これを中心に展開せる歐羅巴諸

第八卷 外國貿易政策



本巻は遺稿「外國貿易政策」が収録されている。

「外國貿易政策もまた小樽高等商業學校に於ける講義の稿本にして、年度により講述の順序範圍に幾分の相違が見うけられ、且部分的には相當広汎なる彫琢をなお向後に期せられたる箇所すくなくならざるを認められるが、体としての構想行論に至つては驚くべき思想統一が示されてお

國戰近の經濟的・社会的動向を跡づけたものである。」

る。即ち裏に「經濟原論」殊にその所謂分配論上に示されたる、鮮やかなる自由主義的立場の標榜は、本巻に於ては実に自由貿易主義——然し必ずしも單純絶對的なる抽象的な主義ではない——の基調となつて現われているのである。本全集九卷所収の「帝國主義論」に横溢せし、保護貿易主義的傾向より全く離脱して、よく經濟政策上の自由主義に堅たく立脚せられたるは、これを現実的にみては固らず長く体験されたる英國經濟生活より示唆せられたるもの、而して思索的にいつては滞獨の日特に私淑されたるドイツ教授への深き傾倒より由来せるものと推察されるに於て、興味多しといわねばならぬ。」

第十卷 社會主義論



本巻は第九卷所収の「帝國主義論」刊行の直後に起草され、特に「未定稿」と冠し、明治四十四年六月東京高等商業學校專攻部卒業論文として提出された「社會主義論」を本文とし、添うるに附録五篇(「ゾムバルトの観たるマークス」外)が収録されている。

教授が神戸高商を卒えて、東京高商專攻部において同校教授岡一博士のゼミナールにおける二ケ年。その專攻部第一年の「アルバイト」として前巻の「帝國主義論」を、專攻部第二年の「アルバイト」として、この「社會主義論」を岡博士の「机下に捧げ」ているのである。前記岡博士への献辞の中で、教授

は、自ら「夫れ社會主義の思想大なるや、その起る所深遠にしてその及ぶ所や広大なり。学浅く識足らざるの一學生、僅に数ヶ月の研鑽を以てしては、その要領を擲み來らむさえ難し。況んや、その叙述をや。更に況んや、批判をや。足下、今にして余は私家の甚だしく微力を顧みざるの処置なりしを悟りぬ。」

「抽稿題して社會主義論という。要は社會主義的思想の起因とその變遷とを論ぜむと欲するのみ。従つて社會主義的運動の記事に至つては、社會主義的思想の解釈上、これを欠く可からざるとせし僅少の部分を除き殆んど全くこれを略して論及せず。更に抽稿固より社會主義者列伝にあらざり。故にラッサールを欠き、ロイドベルッスを欠き、ヘンリー・ジャウジを欠き、またルイ・ブランを欠く。期する處はただ一貫せる社會主義的思想の根本的潮流の説明にあり。何んぞ、その支流を問わんや。また何んでその末流に拘わらんや。足下、幸にこれを咎めずして可な

第九卷 帝國主義論



本巻は明治四十三年九月元神戸高等學校教授、津村秀松博士編纂「國民經濟叢書」の第一冊として刊行せられた「帝國主義論」を本文とし、

附録三篇(「帝國主義研究の榮」「独逸の海軍擴張と英吉利の關稅改革」「報復關稅論」)を収録している。

明治末期における帝國主義に対する思潮は、教授の「帝國主義論」が刊行の翌年五月までに早くも訂正三版を重ねるに至つたことでも覗い知ることが出来るのであるが、教授の同書の序文がその当時の風潮を端的に示している。「一樹高く、雲を抜いて立たば風

り」
誠に、日本資本主義の成長期にお
いて、逸早く、帝國主義論、社会主

第十一卷 文明批評

文明批評



本巻は大正八年十月刊行の『伊太
利亜の旅』を首篇とし、文化批評と
名づけるべき評論七篇を収録してい
る。
『伊太利亜の旅』は欧州留学の期満
つる頃、永年憧れのその国を心ゆく

義論に挑みかかる若き経済学徒の姿
が彷彿とするのである。

まで旅せられたる折の紀行文である
が、それは昔に欧州文明の批評と
してのみならず、教授個性の端的な
一表現としての意味を有つ。蓋し
伊太利亜におくられたその半歳は、
教授の後生涯——不幸にして短かく
あったが——に對し、恐らく最も深
い内面的影響を与えたものであつ
て、その個性、思想發展の相は、い
とも大担克明に、そこに描写され
ておるからである。この一篇に於いて
こそ、読者は、赤裸々なる、人とし
ての教授の、片影に直接的に触れら
るることであろう。

大西猪之介経済学全集発刊のころ

—「学府緑丘」を意識して—

水垣敏正



昭和二年四月残雪のまだ深いマチ

ナカ(町中—マッキンノン先生のだ
じやれ)の港町小樽に、北は樺太か
ら南は沖繩—いわゆる昔の日本全国
から難関突破して入門した青年達に
は、何かしら高度の学校に入ったと
いうあこがれと喜びとで胸をふくら
まして、色々な形の夢を抱いてい
た。
安房反對を叫ぶお祭騒ぎの今の全
学連とは違つて、当時は軍国主義、

「大西猪之介経済学全集」に
ついての、一応の紹介を終つた
のであるが、紹介は殆んど全部
全集各巻に収められている南教
授の手になる「小引」の引用に
終始した。引用の不足拙劣によ
る不十分なる点は、御容謝願
たい。
引用については、漢字、送り
仮名共に原文のままとした。そ
のままの方が昭和初期に於ける
雰囲気を感じていただけると思
つたからである。
(一九六八・一二・九)

忠君愛國絶対服従の情勢下にありな
がら、学内の軍事教練反對の闘争を
打ち立て、一躍勇名を全国に馳せた
高商、そんな気骨のある先輩の顔を
拝みたいという夢もあった。都会の
学校では軟派がコンコンする時代に
マチナカの小樽高商の気風は吾々若
人の情熱の炎を燃やすムードが十分
だった。

吾々の時代もその気風をついで軍
教は受入れるが、北の守りのために
する冬の教練は室内で行うことに反
對し、全校スキー教練にすべきだと
主張し、全学生会を開き、教授会
をパスさせて佐藤大佐教官殿にスキ
ーのイロハを学生が手ほどきしたり
して快哉を叫んだりした。
また一番学生思いの学徒卜部若太
郎学生監が時代を反映して、学生の
長髪禁止令を出して強要されたのに

對しては、明治百年の歴史を説き起
こして「断髮令廢止」の勝利を得た
り、市民婦女との交際を心配され
て一寸今の時代では想像がつか
ないが、花園公園での運動会が長
中止されていたのを、健全な「市民
運動大会」に理屈をつけて、山の
運動場開きをして小樽の若い娘さ
んや女学生をバスを仕立てて、女
禁制の地獄坂まで運んだり、何でも
反抗してみたかつた青年共の精力の
押え処には、先生方もチトも余し
気味だったようだ。そんな時代に、
「諸君を本日より紳士とみなす」と
初の講義の開口一番に紳士論をぶ
つて、ネクタイの結び方だけを教
えて講義を打ち切り、さっさと引き揚
げてゆく英文学者、浜さんのユーモ
ラスな話術には硬派の学生も態よく
かわされてしまった形。

「経済学」学とは……は是に依つて
是を視れば……の名調子の南先生
の半眼を開いて、静かに迫る無心
の講義振りにはあはれ者の吾々も、
何時とはなしに魅了せられてしま
っていた。

その名調子の中に度々引用された
のは「吾が緑丘学園の誇り……大西
猪之介先生の……によれば」「また
彼の有名な伊太利亜の旅の一節に……
……」等名句名文をふんだんに繰り
広げられ、大西先生に關連する話題
の時の先生は得意然として紅潮さ
えせられ、夢を見るような口調にな
つておられた。むづかしい先生の講
義は判らなくとも、兎に角小樽高商
というところには経済学、英語、商
業実践等權威ある教授がおられ、特
に経済学では一派を為しておつたのだ

ア、という誇りを感じ、吾々はそ
つながらであるという自負心を持
つようになっていた。

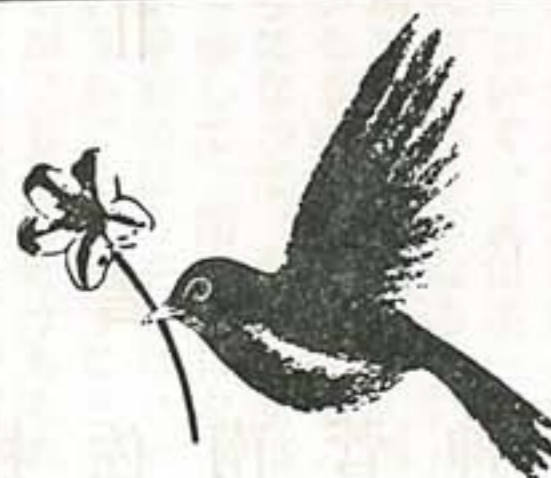
その頃先生の講義の中で「大西
経済学全集」刊行の計画が発表され
た。編集委員の南先生は勿論、手塚
先生、室谷先生、大谷先生等が中
心となり、本来の講義以外の時間を割
いて全く献身的な努力が続けられて
いることが判ってきた。併し一方一
番大きな問題になるのはかかる学
問的な全集だから(当時円本全集ば
やりの時代)一般に売り出しても売
れるはずがない。どうしても最低の部
数は吾々緑丘の關係者により確保せ
られねばならぬと、切々と訴えられ
る先生の口調も時を経て予定数に満
たないという懸念が生じた。終期に
至つては全く涙ぐましい訴えに變つ
ていた。

吾々在校生としては発奮したのは
この時だった。軍教反對の主謀者だ
つたといわれる先生の情熱は今も「
緑丘学園を学府として打ち建てる」
学者としての良心、それに僻地にあ
る緑丘を中央にもまかり通る学校に
仕上げようとする母校愛、そんな先
生の熱情が吾々若人の心を燃やさぬ
はずはない。やがて「学府緑丘」の
一員として全学生会は購入すべきであ
るといふ運動が学内にみなぎつた。
併し五十銭本や円本とは違つた。全
十一巻三十三円(特製三円八十銭、
並製三円)といえ、当時吾々一ケ
月の親元からの送金額だった。古本
屋に流しても一般向きはしないもの
だし、どうせ書棚の飾りが落ちだ
なして見通しのよいグループもいる。
一時払で買える余裕のある学生は妙

見川筋の料理屋や、そば屋の支払の
方が優先する。併し編集に當る諸先
生方の減私の努力に依つて吾々の為
し得ることは、この大西経済学全集
の予約注文が予定数に達して、兎に
角刊行が出来る運びにすることだと
思った。先輩の板垣さんなどは上級
生を、吾々一年生は吾々グループを
ということ、買ひ易い分割払の方
法や分冊購入の出来る方法もとられ
た。五銭の銭湯を一週間飛ばしたり
日に一度顔を出さねば寝られない
「喫茶越治」通いも、この一年中止
だなど悲愴な決意をした学生もいた
はずだ。今の学生アルバイトのよう
な手軽な収入働きを恥とし、またそ
んなことが受入れられる時代でな
かつた当時の学生としては、この大西
経済学全集刊行の時に遭遇したのは
個人として、大きな負荷であった。

従つて吾々は消極的に一銭でも倅
約して全集購入資金に当てるより道
はなかった。それなのに少しもい
ましさを、淋しさはなかった。むし
ろ田舎町ながら小樽という伝統ある
学園で初めて「学」を学ぶという意
識と、立派な先輩を載っている緑丘
に籍をおく自分に誇りと悦びを感じ
て、全校挙げて全集発刊に力を合
せたものだ。
全く緑丘ならではの友愛溢るる一
コマは、今思い返しても若々しい
すがすがしさを覚える。

(昭五 MCC食品株式会社社長)



楽しいくらしのショッピング

東急百貨店

電話本店・東横店(463)0111日本橋店(211)0511木曜定休
贈りものに東急百貨店の商品券を
新宿小田急 函館棒二森屋 札幌五番館でも
お使いいただけます

大西猪之介教授追悼座談会

|| 大西教授、大西経済学全集発刊に

まつわるエピソード||

- 司会者 大谷 敏 治氏 (学習院大学)
- 大西 美穂子氏 (大西教授夫人)
- 村井 貞 子氏 (故教授令嬢)
- 者 佐々木 周一氏 (緑丘会理事長)
- 席 南 亮三郎氏 (駒沢大学大学院教授)
- 菅谷 重 平氏 (東海大学教授)
- 出 神田 正 英氏 (緑丘会事務局)
- 墓 目 英 三氏 (緑丘編集部)



(向側右から) 村井夫人・大西夫人・墓目編集担当・神田緑丘会事務局長
大谷先生・菅谷先生・南先生

この大西猪之介教授追悼座談会は、緑丘会理事長佐々木周一氏のご好意により、昨年十月十四日の夕べ、三井倶楽部で開催されたものである。大西美穂子未亡人は今なお若々しくお元気なお姿で、令嬢村井貞子夫人とともにこの会場にお見えになり、南教授、菅谷教授も大変ご多用中にもかかわらず開会前からお出された、大西夫人や貞子夫人らと近況を語っておられた。

会場には大谷敏治氏のご好意により、航空便で小樽商大図書館から「大西猪之介経済学全集十一巻」、国民経済叢書「帝国主義論」、「人口と国力」、「伊太利亜の旅」のほか、大西教授愛読の書、数冊などを取り寄せて飾り、必要に応じて参考にするための配慮がなされていた。「大西教授の思い出」北方日本社版は小樽・越崎宗一氏提出、「囚はれたる経済学」は墓目英三氏持参。佐々木周一氏は原子力船会議終了と同時に、通産省からこの会場に駆けつけていただき、大谷敏治氏の司会で約二時間にわたる座談会を終えた。

(緑丘編集部)

(司会) 私お許しをいただいて進行係を勤めさせていただきます。

もう奥さま、お嬢さまご存知でいらっしゃると思えますが、小樽の同窓会といたしまして、緑丘会というのがあります、単純な親ばく会あるいは回顧の情にふけるというだけのことではございませんので、同時に母校の学問の盛んなることに少しでも役立ちたいというふうなことで、時々集まっております。

その例といたしまして、例えば、ずっと昔でございますが、ここにいらっしゃる南先生が、編集委員の一人としてひさしく「商学討究」という研究発表の雑誌を、小樽の研究室で出しておりました時に、緑丘会というものが、広い面に大いに貢献したりいたしておりました、それから後に単独の大学になりました。これは組織が違いますが、大学後援会というのがございます、資金の募集などもいたしております、それを運営いたして、大学のいろいろ学問の研究の発展に役立ちたいということ、ここにいられる神田さんが、いろいろ事務とか、こういうようなことをやっております。

そういう意味で、創立以来長い共同体としてますます発展するようにということ、その縦の流れ、横のつながりをつなぐコミュニケーションの主役といたしまして、大学で学生が出します「緑丘新聞」という新聞がございます。

す。それから大学自体から出る研究雑誌もございますが、その外に「緑丘」というこれは非公式の隔月に出る雑誌でございますが、先般墓目君の方からお届けしましてごらんいただいたものが、もう六〇何回出るのでございます。

その方の企画としまして、だんだんと先生方の思い出、あるいはお仕事などを紹介したりするような特集号というものをしております。

その中で大西猪之介先生の特集を出したいという企画がございましてもう一年以上前から計画があったようでございます。

創立以来、学校におられました先生方、影響を非常に与えられた先生方、沢山居られますが、その中のお一人として、とりわけ広い影響を今も尚与えられている先生として、大西先生の特集を是非出したいという企画でございます、特にそれは申しあげましたように、緑丘会として公の企画ではございませんが、緑丘会の理事長をしております佐々木さんが、非常に熱心にこれをすすめておられます、だいたい前でございますがある週刊誌に、こういうことを計画しているんで、江湖の方で、材料、資料をお持ちの方は是非お分け願いたいということを書かれまして、相当に反響がございまして、来ているのでございます。

それで佐々木さんの肝いりで、今日先生の奥さま、お嬢さまにお越しをいただいて、先生に特にゆかりの深い南先生、菅谷先生、それから後援会の本部でいろいろと仕事をやって下さる神田さん、「緑丘」の編集

者をしていてる墓目君。いろいろのお話し合いを願いたいというところで、ご案内を佐々木さんのお名前を出しました。おいで頂いて大変ありがとうございます。これから早速中味に入りたいと思います。どうぞよろしく願います。こういうのは非常に不慣れでございます。どうもどうもありがとうございます。考えております。

まず何をおきまして、学界に残された一つの財産といたしまして、

大西経済学全集発議から企画・刊行まで

(南) すいぶんもう年も経ちましてね、記憶もはっきりしないんですけど、

(大谷) 最初にいろいろの前後のこと、何といいますが先生が亡くなられたあと、かたづけなさいました後でたしか講義案原稿というふうなものについて、武田英一先生か何かの手にお預かりになるということ。

(南) はあ、最初何か大西記念会か何かそういうふうな名義のものをお作りになって、そして原稿用紙を何か準備して、図書館においた事務の方が浄書のほうをおはじめになったというか、そういうことがあったんですか、しかしどうもそれがはっきりしない状態です、何時どういう形で出すのかということについて、全然見当を立てていない状況であつたですね。

私、小樽へ赴任しましたのが、大正十二年春からですね、この翌年の二月に大西先生の三回忌の記念講

また当時の学界の人々に影響を与えました全集につきまして、お話を承りたいと思います。

この全集の刊行についての企画、あるいはそれに関連する原稿の保存とかいうふうなことににつきまして、まず南先生から一つ思い出していただきたいと思っております。

それに先立つ悲しい話の方は一寸後まわしにさせていただきますかと思

演会をやった。たしか大正十三年:

(大谷) 十三年、そうです。

(南) で、記念講演会をね、高商の講演部の主催で小樽でやったんですがね、その当時から何とかしなければならぬという気があったんです。

片方では原稿の浄書がはじまったりしております、成り行きを見るのと、それから武田さんその他を通じてどういふふうなメドをたててやっ行って行かれるのかということ、うかがったのですがね、それがはっきりしてない。

そんな際に、一橋でお世話になった左田先生が、大西のあれどうなっているかとお尋ねがありました、こういう状況だしそのままにしていますと申しあげたら、それやろうじゃないかという訳で、ご自分から発議された私どもの着手したのが、大正十五年だっと思っております。

もうその時は一部浄書のできてい
るのを借りするというところもあり
ましたけれど、全面的に新しくやり
直そうということではじめました。
(大谷) そうしますと大西先生がお
亡くなりになって、奥さまが原稿を
武田先生を通じて、図書館にお預け
になったというかつこうになるん
でしようか？

(南) 最初そうだったでしょうな。
(大谷) 武田先生は年譜によると、
大正十二年三月に商大の専門部に
ついていらっしやるんですね。
(南) そうですか、もう私の行った
時はおられなかったんですね。
(大谷) その時は原稿は図書館にお
預かりになって……。

(南) まあ、あのままでは後どうな
ったか分らんですね。
(大谷) それでその当時、だれでし
ょうね、実際に預けられたのは。
(南) 橋詰さんが預かっておられ
て……。

(大谷) 主としてやっておられた。
橋詰益弥という助教授で。「名義は
法律担当の、実際は図書館の司書」
(南) こうして遺稿整理を急速に進
めまして年を越え
た昭和二年一月か
二月頃だったかな
あ、奥さんと高島
さんと一緒に左右
田さんのお宅へ行
ったことがあります。
(夫人) そうですね、行ったことが
あります。



田さんのお宅へ行

(南) はじめての編集会議でした
ね、月は覚えてませんけれど、丸ノ
内ホテルとかがあったところに高島さ

んが泊っておられて、一緒に左右田
さんのところへ原稿を全部持って行
ったです。そして万端の打ち合わせ
をして同時に出版社は宝文館と決ま
ったんですね。
出版社のほうとどういう契約を決
めたか記憶してませんが、宝文館
の大葉久吉氏が同席して大変な力の
入れかたでした。
(大谷) それは、大西先生の生前に
お出しになった本も皆宝文館ですか
ら。

(南) それでその縁故でやったんで
す。でないとも具合悪いと思っていま
すけどまあ親分が左右田先生で、
著者が大西猪之介、もう文句ありま
せん。それに非常に都合のよいこと
は当時円本時代で、もうあっちこち
で経済学がはらんして、やれ改
造社や評論社の経済学全集、それで
今度は大西全集とかいう話になって
きたらね、大西(オオニシ)と読ま
ないで、大西(タイサイ)全集とか
いう訳で、こりゃたいしたものだと
いう訳で、大変な評判になりました。

(大谷) そうすると先生はずいぶん
早くに、企画から発表まで……。
(南) 早ようございましてね、それ
だから今考えてみてよくまああんな
仕事ができなあと思いました。
(大谷) その時にはまだ浄書が全部
できてないでしょう。

(南) できてませんね、まだ……。
(大谷) 私先生のおとまた小樽へ帰
ったのが、昭和二年四月、その時に
はもうすでに先生、大変な評判宣伝
でしたね。
(南) そうですね、もう四月からの

出版です。最
初は一〇冊の
計画でしたが
そこえ例の社
会主義論が忽
然と福田さん
の手元からう
ごいて来た
という訳です。
とにかく大
西猪之介とい
う人は、神戸
出身の津村の
門下であり、
一橋に入っ
て先生にお
つきになった。
ただで経済原論とい
うのは、まあ、福田徳三、それで最
後の一橋時代の産物としてできたの
がその社会主義論という論文ですが
それが福田さんのところへ回って行
ったらしいんだ。そしたら机の底に
入れたままほったらかしていたん
だ。
(菅谷) いや、それはね福田さんが
机の底へはったらかしたのか、福田
さんが勝手に持って帰ったのか、そ
れがはっきりしますか？
(南) 福田さんが持って帰った
って？
(菅谷) 持って帰って……。
(南) 持って帰ってそして机の底に
置いたのかな。

(菅谷) いや、あの論文は関さんへ
出したものです。机のところへ置い
たのか、関さんが大阪の助役になっ
たのはね、大正の四五年の頃で
す。大西先生が一橋を出たのが明治
四十五年でしょう。でね、この話は

「大西経済学全集 御豫約の方々へ」

益々御社健に在らせられ御同慶に存じます。却て今同配本の経済学研究は
大方の好評を博する事と今から大いに期待致して居ります。次回第九回外
貿易政策の配本は来る正月二十六日頃発送の手筈と成つて居ります。其
れまでに御費料三圓八十銭並規定の送料を挿入の振替用紙を御利用され左
記當館口座に御送込みの程願ひます。
尙當館以外の各地書店に直接豫約御申込みの方は御費料送は其の方の書
店に願ひます。
昭和二年十二月三十日
東京市牛久保本町三丁目
大西経済学全集編輯部
電話二八〇番
宝文館内

大西経済学全集豫約係

昭和になっての話でしょう。大正か
ら昭和にかかっている話でしょう。
で、それを福田さんのところにそん
なに置いておくはずはないでしょ
う？
(南) いやいや、置いてあったん
だ。関さんはいないんだ、大阪へ行
っていた。
(菅谷) だから、福田さんが、先生
の社会主義論をこっそり持って帰っ
ていたのです。あの人自身は社会主
義というものは知らないんですか
ら、こっそり読んでいたんじゃない
かと思う。これは実に面白い話だ。
(大谷) 忽然として出て来たんです
か、福田さんから送って来たんです
か。
(南) いいえ、それはやっぱり名古屋
の高島さんがね、話してくれたん
です。それは福田さんの手許に寝
かせていると、前から分っている訳
なんです、それで一つ今回全集を出
すから出してくれないだろうかとい
うか。



(左から) 南先生・菅谷先生・大谷先生

ので、お下げ渡しを願った。
(菅谷) こりゃ意外でしたね。
(南) そうしたら序文もちゃんと書
いてくれた。
書いてくれた序文を見たところ
が、俺はきらいだというんだ。好き
きらいなどあるはずはないと思っ
たけれどね。ところがあの先生やっ
ぱり人間的な好き嫌いを露骨にい
間だなあ。そういうので長いこと置
いといたんだなあ。
別に人間的に大西が悪いとか何と
かいうことではないに、ありゃ津村の
門下だという訳でね。
(菅谷) そうなんですね。社会主義
論に書いてあるのはそうですね。
(南) そういうことになって、一冊
増えた訳でね、にわかにかつ十一冊にな
ってしまった。
(大谷) しかしいたい、私共あの

当時はお手伝いもしたり、あるいは
学生が購読したり、我々も購読して
判ったんですが、頁数なんかも計算
なすって、ああいうふうなうちにま
くできあがりましてたんですね。
あの当時としてはやはり、個人の
全集しかもあの経済学界の動きと
しては、画期的なものであったので
すね。
(南) 個人としては一寸外に例がな
いでですね。
(菅谷) いや、遺稿としてはそれで
す。その頃福田徳三全集は出ていま
したけれど。
(大谷) そうそう、それも一冊か二
冊ね。「経済学講義」と「流通経済
講話」あの二冊まで出ていた。二冊
か三冊出ました。
ありがとうございました。それで
当初の計画としては、その頁数、そ
れから全部で一〇冊、変って十一
冊、おおよそその位まで出るとい
う予想をされてましたか。
(南) そのまあ、またのんきな編集
でして、何部出ているのかわらな
い……。そりゃ、奥さんのとこにね、
検印紙を持って行くという約束して
あったのですから、私のほうの手が
離れると奥さんのほうへきつと本屋
から行ったんでしょ。検印紙く
ださい何枚と。そういうところで部
数は分るが、それは私聞いてない
です。
(菅谷) しかしいれば大西貞子さん
が版權を持っていることになってい
る。
(夫人) 何時もおじいさんみたいな
人が来て、判を捺して持って行きま
した。

(南) 全集の奥付には大西貞子さん
と書いてあります。
(大谷) それではまあそういうこと
で。途中で監修の左右田先生が亡く
なられて、第何巻かに非常にその
ことを惜んで、また左右田先生の
大西先生に対する哀惜というものを
みごとに書いておられて、我々それ
を拝見した訳ですが、南先生は当
時、もう一人の編集者でいらっし
やった高島先生との間には何回位手紙
を往復なさいましたですか。
(南) そりゃまあ限らない。高島先
生という方、手紙を書くのが好きな
んでね、何十通ですけど。今のお話
の中に途中で左右田先生が亡くなっ
たというところ、あれは昭和二年？
(菅谷) 金融恐慌の年です。
(南) 金融恐慌の時、全集のほうの
スタートをした、まあ直後といえ
ば直後ですね。
「自分はいつさいの公職を辞任する
から、この全集のほうの監修者をや
めさせてくれ」というんだなあ。そ
れが全集のスタートをする時とほと
んどいっしょなんだ。そして、その
年の八月に亡くなられた訳ですよ。
その時一番困ったのは、それでし
ょうね。途中でね、先生のお名前が
抜けてしまふといろんな面であら
う思っ、何とかしてともかくお名前
だけは残してくださいたいってがど
うしても聞かれない。
後から状況を伺いますと、左右田
さんは、津村さんと相談したそうで
す。それから大阪の関さんにも相談
したそうです。そして「俺がやめる
から津村お前やってくれんか」とい
って頼んだらしいんです。

さんさん相談した結果、これはど
こまでも左右田がやるべきだとい
う結論を持って津村先生が来た。それ
で左右田先生は、そのままい
やむをえんという訳で、最後まで名
前を使わしていただくということに
落ち着いて来たんですけれど、これ
が一番困りました。
(大谷) それで第三巻「原論(上)」
で、先生が亡くなってその弔辞が
……。
(南) 八月ですね。「原論(上)」は
早やめて刊行した。
(大谷) で、編集あるいは編集の進
行途中で、いろいろおぼつかしいこと
があったんでしょ。うが、とくに「原
論」にはもとの原稿から浄書の原稿
なんかで、で、先生、学問上は別と
して大西先生に一番近くいらっし
やるから判読なすったでしようが、
そういうことで高島先生に相談な
すったことは沢山ございませうか。
(南) ずいぶんお世話になりました
ね、高島先生ね、全十一巻の編集用
紙に二百通位手紙の往復をばげしくや
りました。
(大谷) 当時編集事務は、私共が存
じあげてからは、あその事務の本
館の真中の廊下をすつと入って、左
側の小さいところ、今の緑丘会
務室になつて居るところだったと記
憶するのですが、最初からあそこ
でございましたか。
(南) そうです。はじめからあそこ
だったです。しかし考えてみますと
あの当時は伴さん「校長」がおりま
した。
「先生頼みますよ」といってあれを
占領したんです。

(大谷) そういつちやなんですが、使うことは無理であつたんですね。編集事務にはどの位のスタッフないしは人をお置きになりましたか。浄書は学生をお使いになりましたか。

(南) 学生はたくさん手伝わってくれました。常任には一人いました。

(大谷) 桑田さんという女の方がおられましたね。

(南) ええ、そうでした。卒業生もお手伝い願うということ、いろいろ出てもらって、それからまあ大谷さんもちょうどいらつしやつたから、大谷さんのお力をお借りしようといつてお願いしてね。

(大谷) その編集はそういうことで全く先生が全部浄書を読んで直して誤字や訂正をなさいまして、それを印刷へお廻しになる時の割り付けなど、全部南先生がおやりになつたと、私は拝見しているんですが。

その前に今度は少し宣伝、広報のほうなんです、これは先生、どういう方法でおやりになつたかご記憶でいらつしやいますか。

(南) 校内はずいぶんやりましたなあ。

(大谷) 何かポスターを作つたり、リーフレットを作つて?

(南) ポスターは作る、看板をたてる。途中でだれか叱られたり、まあいろいろありましたけれど、お医者さんからお小言をうける、まあそんな中で……

(大谷) しかし、当時校内に非常なセンセーションを起こしましたね。

(南) そのようでした。

(菅谷) お医者さんから叱られたつて、何ですか。

(大谷) また申しあげますがね、その前に宣伝広告のほうを先に、一橋大学の板垣一教授なども最上級の年で、私の知っているクラスはその次の昭和三年卒だから、三年、四年の水垣君らが入つて来られた時です。非常なセンセーションで、申し込み用紙がございまして、振込用

横濱正金銀行におりましたが、上海から手紙をよこしましてね、どうしてもお前の名前を注文してくれといふことが来ましてね。

それからさきほどのノートというのは、私なんかよりもむしろもつていねいに書いた方がありまして、私の知っているある人などは、先生の講義を全部ノートにとって、それをもういっぺんノートに書き直していた人がおりました。ですからね。そういうふうなもの……

(菅谷) そうすると大谷さんだけのノートを使ったというのはどういうことなんでしょうか。頁がバラバラになつちやつたのかなあ。

(大谷) そうでなしに、原稿の中で何か意味の、通らんとところがある時に、私のノートなんかで筋を通すといふふうになつて南先生が一寸参照してくださったのです。

(菅谷) そうですか。

(南) 弱つちやつてね、その時ノートを借りましてね。

(大谷) 片側だけ書きまして、片側のほうはあけて置きまして、ときどき勉強したことを書きまして、というのが原論で六冊位、それが先生貸せとおっしゃるから、非常にきたなかつたのですけれど、私だけではありません。私の次のクラスのかたがたも……



菅谷 今こまでのところ、私疑問としていたのは、経済原論の原稿のほうに、大谷さんとそれからだれかのノートを借り

講義の手記ノート

紙がありました、みなあれは学生が編集事務室のところへ直接に持って行かれたんでしょか。

(南) そうかもしれせんね。あそこで宝文館の取次ぎをして。

(大谷) そうしてあとは、緑丘新聞を通して、卒業生にやつた。一般営業新聞なんかにも勿論お出しになつたんですか。

(南) そりやもう。相当立派な代表的新聞に……、しかしそういう宣伝はみんな本屋がやつたんですね。だが、今から考えますと、先の話のようにずいぶん急いでやつたといふことで、校正あたりも非常に意に満たないところもあるしね、それからこの当時の出る全集はたいして書簡とか日記とかあつて、ほとんど文学者はそうですね。

それもね、左右田先生にご相談したんですよ。大西先生にこんな日記もあるんですがどうしようかと。するとプライベートなものを出さなといふのが方針でね。いっさい手をつけなかつた訳です。

(大谷) また、新たにもういっぺん「闘争の心理」などできると困りますから。いづれにしましてでも当

時、大西全集の編集に関連して、校内に入室をお持ちになり、そのほうとして人をお入れになつておやりになつたといふことは、当時としてはやつぱり異例のことといえます。異数のことで、南先生のお力も勿論ですが、大西先生のご遺徳に、自然にそれを黙認するといふかっこうであつた。

勿論、当時の校長と申すか、首班の非常に寛容なリベリズムというの、または大西先生に対する一つのやはり学問上の認識というものが、いろいろ行き方は違つたかも知れませんが、おありになつたんだらうとこれは私の推察ですが、そういうこととでございまして。

私は実は勝手に第一巻の校正表をお送りいたしました。南先生が一寸手伝えといわれましてあの部屋へしよつちゅう行きましてお手伝いをしていました。……

それでまあ全集発刊のいきさつはだいたいそういう事情でございまして、菅谷さんはその当時それを知らんになつてどういふような感想でございましてか。

らみえていますと、小さい文字を切り貼りしているようなふうに見える時もあったんだがなあ。それでいぢい文章にはなつていなかったんですよ。

(南) それでね、私今考えてみて、大西さん偉いなあと思うのは、中味があつちこつちの本から来ていることは、だれでもやるんですけど、それがいまあなたのおっしゃる通りに、のりでつぎはぎするということをしてないでね、ずっとそのまま先生のシステムの中心に入つてくるんですよ。だから頭の中にシステムがちゃんとできていてね、そういう芸当は一寸凡人にはできないですよ。凡人は材料が沢山集まらつて来たら困つてしまふよ。そこらやつぱり……

(菅谷) そうですよ。

(大谷) 私はその元原稿というものを拝見したのはいっぺんしかないんですよ。一つ一つの編くらしい長さなんです、ずつと書きながしですよ。私なんか、分るようには書き抜いたのを、このことにはめまますといふようにしますが、こういうことはないと思ひます。

(菅谷) そうですか。いや僕はそれを見たのは、じゃ講義じゃないんだ。「伊太利亜の旅」だ。

(大谷) で、外で、先生、その発表をこちらになつてね、その企画発表をやつぱり大いに待つていたといふふうな……

(菅谷) そらそうです。そうでしたなあ。

(大谷) 私、今も覚えがあるんです、私のクラスの者が当時、上海の

学界内外の反響

(大谷) 当時先生、大西全集をお出しになりました、出版界全体の反響としてはいかにがなもんでしたか。

(南) 先に申しあげたように、当時

の出版界は非常に時期的によかつたと思ふんですが、まあ一方改造社その他から円本が出る。そしてやつぱり経済学中心のものが出はじめて来たんですよ。

それ以前といふものは、全然そういう社会科学一般についての出版物がなかつた時ですね。そして時期は大正の中頃からは、まあご承知の例の米騒動が起つたり、社会が非常に動揺しておつた。

そしてみんなが、社会科学の知識を求めていたと思ひます。丁度その時にまとまつた経済学全集の全集が出るというので、世間が歓迎してくれたんじゃないかと思ひます。

あの全集の中に当時の学界の代表からのいろいろの寄稿をいたしたいと思ふんですが、最後の巻でしたか。それをみましても、ほとんど当時の全経済学者、小泉信三さん、上田貞次郎さんまでみな入つています。

それもみんなやつぱり大西という人物を学問的に注目をして、殊にこれがまとまつて見れるということにみんな期待したのです。

(大谷) 最後の文明批評には、そのほか附録IIとして、赤松要先生と宮田喜代蔵先生とが書いていらつしやいます。

(南) そういう訳でまあ時期的に丁度よかつたと思ふんですが。

(大谷) その当時、同じ個人のものとして出ておつたものは、今の福田徳三先生の全集が、「経済学講義」と「流通経済講話」と。

(菅谷) 「経済学研究」といふのもう我々学校にいるとき、上、下二

冊の本で出ていたね。

(大谷) その他にはあまりそういうふうなものもございせんのでしたか。

(南) ありません。ただ財政金融とかいふことになつてくると幅が広いんだ。田尻稲次郎とか財部静治とか、だれど経済学としてはないですよ。

(大谷) そういうことで、学会の雑誌その他で書評というか、その学問上の批評というものは出ましたでしょうか。

(南) だいたいお出まして、たいしていめほしいものはあそこに集録しましたですよ。

(大谷) やつぱり「国民経済雑誌」それから「経済論叢」などでしょう。

(南) 「経済論叢」京都大学でしょう。京都は出せんね。中心は「国民経済」ですね。赤松要さんとか宮田喜代蔵さんとか、当時の優秀な方が……

大谷さんね、私、小樽を引き揚げて東京へ来たのが、昭和二十七、八年ですけれど、その時森田優三という人がいるんですが、統計の泰斗だつた。後に一橋大教授で、その書齋へ行きましたらね、大西全集がずらつと並んでいるんですね。「あんな、たいした物持っているんだね」といつたら、「当時読むものないさあ」といつたら、「買ったさあ」といつたら、「そんな話をしてるんですね。だからやつぱりね、人は注目してみてたんですよ。」

(大谷) そうですか。さきほど一寸途中で、編集者としてお困りになつ

たお医者さまのこと、これは編集者として南先生相人に人知れぬ苦心をなすったんです。ただね、言葉の点ではかに、いっぺん使われた言葉を、先生、そのまま踏襲なさったんです。

(南) そうです。それもはじめ苦さん「苦米地英俊教授」にいわれてね、叱られたこともある。「細目はお医者に聞け」とかいつてね。そしたらお医者から呼び出しをうけた。「お前さん三文文士か」とかいつてね。

(大谷) 「人口と国力」(評論集大正十五年夏後刊)の中にね、「医師また之を悟らず」「これを知らず」という言葉があったんです。それを先生が、そちらのほうの略伝の中にも、それを引用なすったんですが、そこがひっかかったんです。

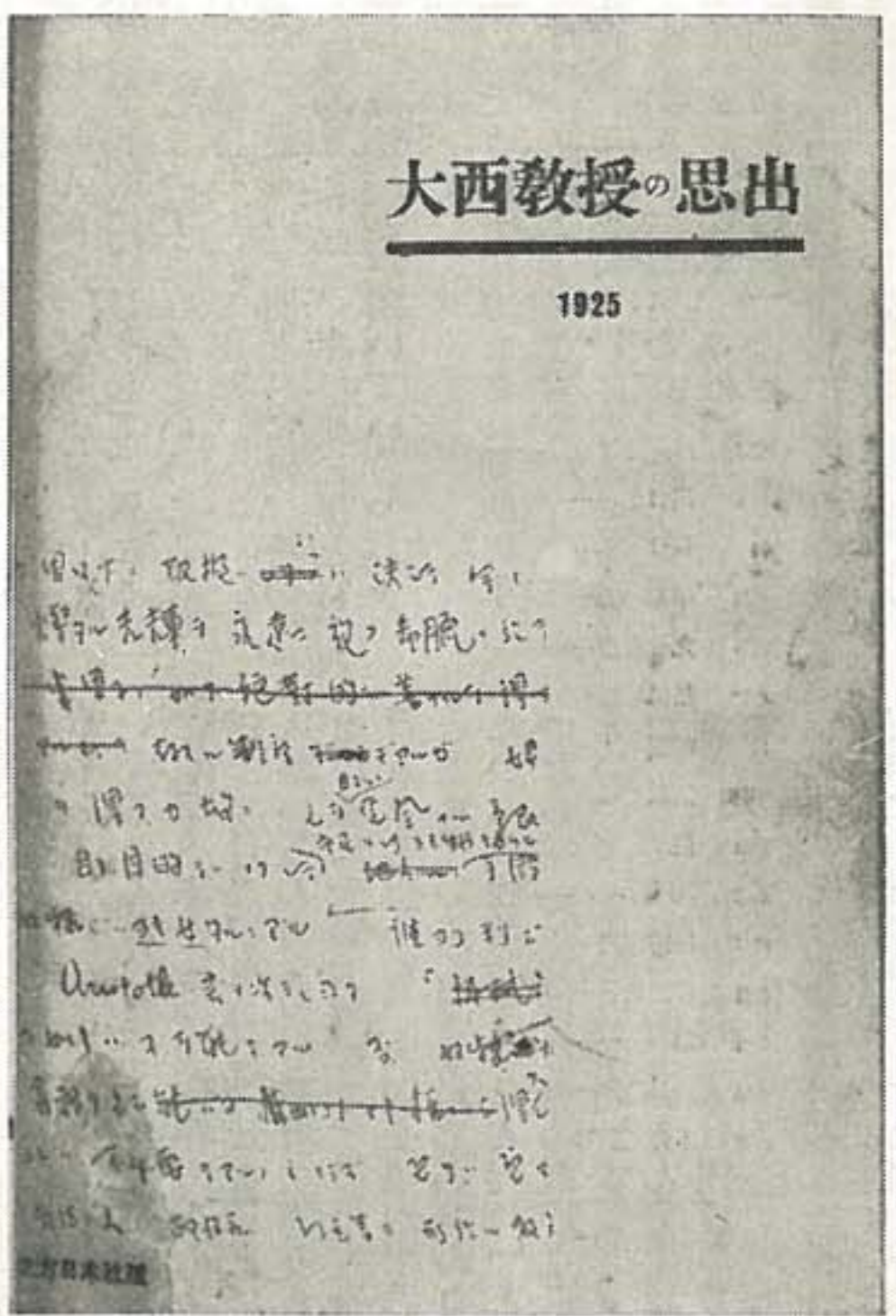
(南) 病名ですね。はじめは分らなかったというところですね。(大谷) つまり、先生も医者も風邪をひいたと思っていたんでしょ。そういうところを「医師また悟らず」と「人口と国力」の序文に、あの編集者が書いてるんですよ。それを先生、まあそのままそこを借りて「医師またこれを知らず」、「悟らず」とお書きになったところがひっかかった。



(菅谷) それで、僕も分らんなあ、と思ったところが、分った。河部病院へ入院したんじゃないんですか。(大谷) 入院なすったかどうかは私よく存じあげない。(夫人) 入院しないです。すぐに隔離のほうへです。(大谷) それで、それまで長く治療なすってるんでしょ。完全な、風邪ということの治療であつたようですよ。(菅谷) それなら「医師また悟らず」じゃないの。(大谷) そうなんです。(夫人) 期間がだいぶんかかりましたから。(大谷) ですから編集者がその文句を使われたのです。(菅谷) それがどうして悪いというんだらう。

大西教授の思い出 (北方日本社刊)

(大谷) それではその先へまいりまして、その後先生いろいろ経済学そのものについてのものお書きになつた外に、当時経済学の周辺と申しますか、経済学から出た評論をお書きになりました(その原稿はすべて全集に取り入れられておりますが)それだけを別個に取り出して「人口と国力」というものが出版されたのです。(菅谷) 大正十五年じゃなかったか。(大谷) その以前に、「大西教授の思い出」というものがすぐ出ており



(南) あらかじめ連絡しなかったからです。(南) これについては南先生ご存知でいらつしゃいますか。(南) うん、私持っていますね。いつ出たんですか。(大谷) 大正十三年。(南) そうですか。(大谷) 北方日本社ということなんです。これはあなたが主として。(南) それは例の出口(豊泰)さんと高田(治作)さん。(大谷) ずいぶんたくさんのかたからの思い出を集めておられますね。(菅谷) 汽車の中でそれ読んで来たんだけど、そうしたら若い時の南さ



いま話題の「大西教授の思い出」については、これはいわば私家版みたいなもので、市販はなかつたんでしょ。やっぱり奥さまのほうへ相当部数が届きまして、奥さまのほうからご親戚やほうほうへ、これをお分けになりましたんでございます。(夫人) さあ、それははっきり分りません。(大谷) その外には、これの寄稿家として、さきほど申しあげた、高島

先生、津村先生方の外に、教えを受けたました阿部芳治さん、松田新さん、三田村俊雄さん、西尾清一さんと、それから南先生、相沢正美さん、佐藤光一さん、関与三郎さん、それからフランクさんなどが、寄稿しております。(菅谷) これが出ていないから、僕が持って来たんで、「ストラスブルグ引き揚げの記」というものはね、遺稿と書いてあるんです。遺稿には違いないけれども、どうも僕は、その亡くなられる前の二月頃のものじゃなく、これはもう、第一次大戦のことなんです。中がね、先生が留学中のことなんです。だから、遺稿といつても、遺稿といふときは、その残った中から何十年も前のものも遺稿には違いないんですけれども、もっと接近しているような気がしているんです。中は非常に古いものです。(大谷) そうですね、そういう意味でいえば、たとえば「関一夫人へ」という第一戦争のときの、マルヌの会戦記など戦記のようなものは、何編かありますよ。そういうふうなもの、全く発表していらつしゃらない。そういうものが相当ある。つまり先生が、留学中にお書きになって、そのまま筐底にお置きになって、どこへもお出しにならなかつたものが、何編もおありになるように思うんですがね。それをまあ遺稿と申す

書斎のお仕事

べきか、最後の稿ではないけれども未発表のどこも出すあてがなく、お持ちになつたというふうな。それは第一次戦争中に新聞か何かに出たんじゃないですか。(菅谷) いや、国民経済雑誌には出た。(大谷) そこで一寸、今度はご家庭の生活との結び付きになる訳でございますが、このようなものを、奥さまがおいでになられたら、お書きになって、どういふ時間にお書きになっていましたか、ということをお聞きがってよろしゅうございますか。(夫人) たいいてい午前中は何か読んだり、書いたりしておりました。お屋から学校へ向うときと、それから散歩に出るとき、それからまた夜。(大谷) だいたい、私共の承知しますところでは、先生の講義は何時も午後でございましたから。(菅谷) そうでしたかなあ。(大谷) 午前中そういう原稿、講義の原稿及び、今の評論のようなものを書く、午後学校をおしまいに、あつて、あと散歩をなすつて、また夜原稿を書く。(夫人) 学校へ出ない日もございましてどうですか。(大谷) そうですね。だいたい三日位しかお出にならなかつたように記憶しますが。(夫人) 午後は散歩か学校。(大谷) 夜非常に遅くまでお書きになつておられることはございせんか。(夫人) いいえ、特別に遅いことは

ういうことははじめでうかがいまして、高い机でおやりになったんですな。ストーブは当時薪のストーブをお焚きになって……

(夫人) 薪ストーブです。

(大谷) それでは、編集のお話がす

お見合と結婚

(大谷) 菅谷さん、先生のご結婚ということについて、菅谷さんが在学中ですなあ、まあいろいろなお話があるいは菅谷さん方の中で、いろいろおありになったと思うんですが、だいたいご記憶でございませうか。

(菅谷) そう、あのね佐々木栄五郎、佐々木栄五郎というのはあの。

(大谷) 佐々木勇之助さん(当時、第一銀行頭取)

(菅谷) 弟で東京海上の重役していた人のせがれですよ。佐々木が先生と奥さん結婚されて小樽へ帰るときに、汽車でいっしょであつたんですかなあ。佐々木が大西先生の奥さんというのはいくらも奥さんだということ、一番先にいふらしたんです。

(大谷) 当時南先生はもうすでに東京一橋でございませうから、その結婚の当時は……

(菅谷) いやいや、南さんはわれわれより一期上だったんだが、いっしょになつたんだよ。その話は非常に面白い話なんですけど、僕はそれをほかの人に上手に説明しているんですかね。大西先生が小樽にいらるとね、そこに飯島幡司さんがたずねて来たんです。飯島先生はもうそれ

みまして、評論集のことと原稿をお書きになる時間、一日のだいたいの時間、スケジュールがうかがえまして、今度奥さまとのいろいろな前後のことを、うかがいたいと思

り一寸前にね大阪鉄工所のほうへ行って支配人になったのです。それで小樽に来てね、社用にかこつけて出て来たでしよう。

そしたら、大西先生が飯島さんを呼んで、何かそこで講義をさせた。僕もそれを聞いた。そうしたらもうあの人もやっぱり津村先生の門下でね、この「帝国主義論」の次の津村秀松叢書の中の第二巻は飯島先生です。

「社会問題の根本概念」というのが第二巻で出ています。それが、その飯島先生の神戸の卒業論文です。小樽へ来たのはちょうど米騒動のあとでした。

「これから日本の社会問題というのは、面白くなるんだ」と、関さんと神戸の米騒動を話し合ったことからは、警官が民衆を剣でおどかし、突くさまを身振りを入れて盛んにやっただけですよ。

でこれは、南さんに訂正してもらわなければならぬのは、僕が今日少しデマをいっているかもしれないからその点を訂正してもらいたいね。与謝野晶子までもが騒動について「太陽」の中で評論をやっていたんだなあ。

すると情熱の南青年は、まあ、飯島さんの話にも感銘する。また大西先生は新思想を吹き込む。与謝野晶子は女ながらに書くようになってくる

それで、これは南さんも黙ってない。それは権利なり」ということを書いて、新聞は発売禁止になった。

さあ、そうなる、その刑法上の罪になるような人を直轄学校には置くわけにはいかなくなった。南さんは大秀才だ。それをこんな小罪で、なんのこともなつてそれで、あと一年図書館の手伝いをしてね、南さんは一年学校卒業されるのが遅れたんだって、だから。

(南) そうか、その時はそうだ。

(菅谷) もし違ふところあればみんなの前で直して欲しい。

(南) だいぶ旧悪が出て来たね。いろいろ覚えてるよ。

(大谷) 私は一年の時でございませうね。

(菅谷) 私は昭和二十四年にね、小樽へ行って南さんのこの話をしゃべったんだ。みんな大拍手した。こういう南青年を……

(大谷) 菅谷さん、その意味でちゃんと、「公務員の道、会社員の道」という、小樽でなすった講演の中に堂々と書いていらつしやる。「贅言」という創元社から出たのに。

(南) 飯島幡司さんが来たのが、大正七年の十一月頃ですな。

(大谷) 着物を着て白足袋はいて、壇の上へ立って。

(南) その題目がふるっていているんだ。「揺るぎつつある日本の社会」

とかいってね。

(大谷) そういう題でしたな。

(南) しかし、私の事件はもっと前なんだ。

(菅谷) そうでしたか。

(南) 僕は飯島さんの、その講演を聞いてないんだ、全く。あの大正七年の米騒動ですわ。その当時私三年におつてね、大西さんの指導で卒論を書いていんだ。参考書にベルンシュタインやゾンバルトなんか読んでいた。たまたま社会主義をけしからんという官憲に抗してね。何がという訳で。

(大谷) 今それを検挙する前にいろいろ考えることがあるという、そういうことを小樽のある新聞にお書きになったんだそうです。しかしその時、いや一寸、これ理事長、こうなんです。私その時は一年生で、知りませんでしただけで、何とかいう偉い人がおつて、上級生にね、何か事件があつたらしいというんです。

それで、木村ピカさんが(木村善太郎教授) 参考弁護人として陳述したということぐらいしか私共知りませんでした。私非常に子供でしたから。あとで教師になつてからか、中村和之雄先生から聞かされて、ね、あの時に、渡辺龍聖校長から、南は見どころがある男だからこうしよう、と、そして先生のところには、当時は何々主義なんて本があつたの

(南) それだけしかないんですから……

(大谷) そういうものを引き上げて生徒監室へ持って来られたそうです。「中村和之雄教授―当時生徒監」

(菅谷) そうですかね。その一年休んだ間、図書館でとにかく勉強してたんですな。

(大谷) 本を先生のところから引き上げて来たということをおっしゃいました。先生ご存知かどうか知りませんが、それも一冊か二冊か知りませんが、自分ごとにかく預かって置くと、そういうことをね。

(菅谷) 南さんのうちから本を引きあげましたか。

(南) 何もかもみんな持って行った。

(大谷) 何もかもみんな持って行ったのですか。

(南) それから、私そのあと東京へ出たのですけど、その間に特高がつけ回しててね。

(大谷) それから後のことは別としましてね、渡辺龍聖先生という方はね、そういうやっぱり度胸があつたというか、あの小心翼々たる中村和之雄先生が校長にいわれたからとはいえ、その職にあつてね、その時代にご自分で、そういう本をしぼらくお預かりになったということ、これは私、中村先生から直接聞かされた。

(南) 私、大西さんにね、卒論の時のテーマを相談に行つて、社会主義やるといつたらね、大西さん曰く、「それでは喰つて行けないよ」といわれてね。

(大谷) さて、佐々木栄五郎さんが先生方のご旅行の時に……

(菅谷) そうそう、だから奥さんはそれ気づいてたかどうか知らんけれど、佐々木さんが。

(大谷) あの私の記憶で、私は子供

でしたし二年の時ですから、先生は非常にきちょうめんで、一回もお休みにならないんで、講義、授業、一寸もお休みにならない。

ところが、十一月と思ひますが、二年の時に、何とおっしゃつたか、この講義とおっしゃつたか、これでもう一回だけがつくんだけども、明日は休まなければならぬなあ、とおっしゃつたんですな。

それでわれわれも、当時ですから年配のもおりますから、年の多い連中が、前々からきつとおうわさしておつたんでしようね。ああ先生のご結婚は明日だということね。ウワァーとはやしたてたのを今思い出すんですかね、私は当時、通学でしたし、寮にはおりませんでした、あまり知りませんでした、それが十一月末じゃなかったんですか。

その当時、菅谷さん方は三年でいらつしやつたから。あの、こういうプライベートのことをうかがつたはいへん相済みませんが、まあこれ半ば公のごとでございませうが、どちらでお式をおやりになつたんでございませうか。

(夫人) 北海ホテル。

(大谷) 北海ホテル、ご披露は。

(夫人) ええ。

(菅谷) その時、先生は和服でしたか。

(夫人) いいえ。

(菅谷) モーニングでしたか。

(夫人) モーニングですか、フロックコートですか、あの頃の……

(菅谷) ああ、そうでしたか。

(大谷) 式は神社でいらつしやつたのですか。教会でいらつしやつたです

辞を厚くして小樽赴任を乞う

文学博士 渡辺龍聖 (小樽高商初代校長)

想へば小樽高商創立の当時、余は学校が僻遠の地にあるため、特に人材を容れて大いに校名を宣揚する必要を感じ、経済学の方でいろいろと人物を物色したのであるが、相当の人で北海道まで出掛けて来る勇者はなかなか見つからなかつたのである。それで余は種々の難から育てあげるに如かずと思ひ付き、当時の東京高商専攻部在學生の中に之を物色して遂に大西君に白羽の矢を立てたのである。専攻部の方からも又君が出身校たる神戸高商からも、稀に見る逸材だとの折紙を貰つたので、余は辞を厚うして君が小樽のために一肌ぬぐべきを乞うたのである。君はそれを快く諾してくれ卒業と同時に君は小樽に出て来たのであつた。

余は約東通商に先づ洋行の機会を与へた。

四ヶ年半遊学の後、小樽の講壇に立つた君は、外に對しては学校の名声を、内に對しては學生の聲望を一身に負ふたかの觀があつた。當時は経済原論の講座の如何に依つて高等商業の名声が決まるやうな傾向の時代ではあつたが、とにかく大西君あつて小樽は輝いたやうなものであつた。

学者と言ふものは時に常識を逸し奇矯に走るやうなことがあるが、然し大西君はあの純爛たる才氣を持ちながら、仲々常識にたけてゐた。学校の事務などにも非常な理解をもつてくれ、図書館主幹として非常な熱意をもつて毎日かかさず事務に對する熱心さに於てもまことに天才的であつた。此れは余の忘るる能はざる感銘である。

理論家であつた大西君は又決して技術的な教育の方面を輕視しようとはしなかつた。小樽で或る學生が大西君を訪れて大いに商業実践の無用を論じた事があつたさうだが、大西君は學生の予期に反して、商業実践の必要を懇々と説いたさうである。斯う言ふ事は君が一方に偏せず、大局からものを観る活眼をもつてゐた証拠である。

余は君が大成の後、東京或は神戸に出て日本の経済學界を双肩に荷ふべきことを心秘かに期待し、又その機会も作りたと思つてゐたのであるが、惜しい哉不意に斃れた。君が小樽に活動した間は短かつたが、その割に非常に大部な業績を残している。それがいま、全集として刊行せらるるに至つたことで、君も瞑することが出来るであらう、而して又余に於ても君を失ひし遺憾の幾分を慰むる所以である。

(大西全集紹介文から)

か。
(夫人) どうだったですか。

(大谷) それはですね、実はその前か、その年か、講演旅行に、最初の第一回の地方講演旅行に、私共お供して、旭川を振り出しに行きました。時に、まあ先生非常な自由主義者でいらっしやいましたし、いろんなお話をうかがって、上川神社とか、招魂社というところへ行きました。時に、もう亡くなりました西村久蔵という熱烈な求道者で、あとでキリスト村等を作ったクリスチャンがおりましてね、先生いったい神社へいらっしやるかとき、いったい手を合わせるかどうかと、みんないろいろ問題にしておったもんですから。

(夫人) 小樽には何とかいう神社があったでしょう？

(菅谷) 住吉神社。
(夫人) そうかも知れません。住吉神社ですかね。

(大谷) そこで、お式が。そして披露が、北海ホテルでやられた。こういうことかかろうかのお許しいただけるものか、当時は渡辺校長でございますね。みなさんご列席でいらっしやいましたんでございませう。

(夫人) そうですかね。もちろん。

(佐々木) 渡辺さん非常に大西さんをおかきかかっていたね。

(大谷) そりゃもう、創立最初の採用の教授でございますからね。

(佐々木) ああ、そうですね。

(大谷) その前にも、二三人はいらっしやいます。採った方は。しかし開学後すぐに約束なすったのは大西先生。そしてすぐ旅行にお出

ましになった？

(夫人) ええ。

(菅谷) 大西先生のことには沢山あるけど、奥さんのことがないので、それをお聞きしてくれませんか。
(大谷) ご縁組みなさいましたのは水梨家であらう。うかがいましたので、その当時は室蘭のほうでいらっしやいますか、函館のほうでいらっしやいますか。
(夫人) 室蘭です。
(大谷) 室蘭でいらっしやいましたか。
(真子) 栗林さんの家でお見合いしたんでしょ。

(大谷) 栗林さんの先代の時です。

(夫人) 先代がおつてね。会わせな

った。
(大谷) 栗林、今の徳一さんのお父さんの五朔さん。

(夫人) 五朔さん。

(大谷) 五朔さんのご親戚でいらっしやいますから。

(菅谷) あの水梨家の、奥さんのお父さんが。

(佐々木) 奥さんのお父さんが。

(真子) いいえ、栗林というのはおじです。栗林五朔さんの妹がおばあさん。母の母です。

(菅谷) そうですか。

(真子) たいへん本を読むのが好きな娘だからといって、会わせたいことですか。

(大谷) では、先生はその時室蘭までお出ましになった訳ですね。

(夫人) そうですね。そういう話は

子弟の教養と学問の研究とに捧ぐ

伴 房次郎
(小樽高商二代校長)

故大西猪之介教授は明治四十四年東京高等商業学校専攻部を卒業するや、直に我が小樽高等商業学校に來任し、大正十一年二月職に殉ずるまで十有餘年、青年子弟の教養と学問の研究とに身を捧げたり。思ふに君、天資卓犖敏而して精勵刻苦、英仏独伊等の諸國語に通じ、泰西の文物に就ては該博なる学識と卓抜なる見解を有し且つ頗る多方面の趣味を抱けり。然るに君は年齒、尚壯にして易簪せしは惜みても余りあり。而もその短日月の間に於て活躍したりし君が生命は之を三部に大別するを得べし。其の一は——教師としての大西教授——精緻なる知識と懇切なる指導とに由り後進を誘掖せしを以て学生の敬慕措かざりし所。其の二は——演壇上に於ける大西教授——弁論風發条理井然として論旨を進め聴者をして帰服せしめざれば止まざるの概あり。其の三は——著者としての大西教授——豊富なる才藻と暢達せる筆致とは克くあらゆる題目を捉へて討尋検覈、細を穿ち微を極めて余蘊なからしめき。さればにや君が絶えず發表したりし学説及評論は常に学界より推重せられたり。然るに精力の絶倫なる日夕手に巻を釈かず、その造詣計り知るべからず。夫の君が特有の経済学の如きは大に面目を異にして他の類書に対し一異彩を放てり。

聞くならく、君が才能は独り学問芸術に止まらず、否寧ろ実務の処理運用に於て、より非凡の手腕を有せしと。顧ふに君は、もと白雲郷、瓢然帝旁より降りしもの、鈞天人無く巫陽を遣はして詠吟下招せられしなからんや。

更に君の遺徳は夙に知友武田、上野、橋本等の諸君の斡旋と君の同僚門弟等との協力により、君が愛読し手沢を印せる貴重なる一切の圖書を大西文庫として永久に保存せられ以て無窮に後進にまで及ぶに至れり。終に臨んで、余は老大なる遺稿を整理公刊するに当り献身的努力を払はれたる左右田法学博士、高島名古屋高商教授、南本校教授に対して感謝の意を表す。

(大西全集紹介文から)

びっくりなさいました？当時の小樽の住宅では、ああいう程度でございましたから。

(夫人) 北海道はわりあいとね。

(佐々木) 奥さんはずっと、北海道でお暮らしになっていましたか。

(夫人) そうでした。

(大谷) そして翌年、お嬢さんがお

社会政策学会——旅に病む

びっくりなさいました？当時の小樽の住宅では、ああいう程度でございましたから。

(夫人) 北海道はわりあいとね。

(佐々木) 奥さんはずっと、北海道でお暮らしになっていましたか。

(夫人) そうでした。

(大谷) そして翌年、お嬢さんがお

びっくりなさいました？当時の小樽の住宅では、ああいう程度でございましたから。

(夫人) 北海道はわりあいとね。

(佐々木) 奥さんはずっと、北海道でお暮らしになっていましたか。

(夫人) そうでした。

(大谷) そして翌年、お嬢さんがお

びっくりなさいました？当時の小樽の住宅では、ああいう程度でございましたから。

(夫人) 北海道はわりあいとね。

(佐々木) 奥さんはずっと、北海道でお暮らしになっていましたか。

(夫人) そうでした。

(大谷) そして翌年、お嬢さんがお

びっくりなさいました？当時の小樽の住宅では、ああいう程度でございましたから。

生まれになったということですね。その間に先生、学会に、当時は今程学会が多くないから、お出になるとすれば、社会政策学会だけでしょか？
(菅谷) そうでしょうね。
(夫人) 同じような時期ですね。寒い時で。
が、先生お一人で伊豆のほうへおいでになったんですか。
(夫人) ええ。伊東へ行っただけです。
(大谷) 伊東へ。
(菅谷) 全部あそこあたりのものを読むと、何か奥さんがいっしょのようにとれるところもあるんだがなあ。いっしょじゃないですか。
(夫人) ええ。
(菅谷) そうですか。
(夫人) 帰りがけたんですね。そうしたら栗林の先代がちょうどやって来た。
(大谷) 伊東で？
(夫人) 会ったんです。そしてまた逆もどりして、そしてそちらのほうの旅館「暖香園」へ行ったらいいです。栗林のほうもチブスにかかっています。
(菅谷) それは東京ですか。
(大谷) 伊東です。
(菅谷) 伊東で偶然にも会った？
(夫人) 会ったんです。二人共チブスになった。
(大谷) 栗林さんの先代が、チブスになられたということ、聞いたこと



鋼所から第一にいらっしやいて後に国会におでになつたと思ひます

まあ、栗林さんの当主は小樽出でもいらっしやるんですが、やはりあれでしようか、これは私の個人的な推察でございますが、例えば、橋本博介さんあたりが、お話になりました。海運保険業、後の橋本組社長。大西教授の小樽での生活で、学校内外で一番の友人。

(夫人) 橋本さんとね、岡本さんで

いらっしやいましたね。日本製

鋼所から第一にいらっしやいて後に

国会におでになつたと思ひます

けれども、岡本幹輔さん。

(大谷) そうですか、岡本輔介。

(夫人) 社会党からお出になつたか

し、室蘭から国会にお出になつて

もうお亡くなりになりましたけれ

ど。

(大谷) 当時、橋本さんをみなさん

ご存知で、先生方ご存知ですか、橋

本博介さん。小樽で何というんです

か、海運業。

(南) あそこは息子さんが跡取って

やっていますね。同じ商売。

(大谷) 海運業。やはり神戸「高商

」出身で海運業というか。
(南) お父さんの博介さんは先生と同級だったんだらうか。
(大谷) 同級だったか知りませんが先生と非常に懇意だったでし

ょう。
(夫人) 同級らしいですね。
(大谷) 奥さまおいでになるまでの独身時代のすべての相談相手じゃなかったんですか。それは私、啓明会

もありました。そのうちに、熱があることが分ったんです。その前からあったのかもしれないですけど。

(佐々木) 腸チブスは、潜伏期間があるんです。二週間か三週間。その間分らないんですよ。

(南) だれにも分らない。

(佐々木) 腸チブスになっていて、ということが。



(佐々木) 僕等もそのように聞いておった、水梨さんと。そうじゃないんですか。

(大谷) 社会政策学会が済んで、ご自分お一人で伊豆のほうへ。

(夫人) 一人で行きましたね。そうして帰ろうとしたところで会ったんです。それでまたもどって、今までの旅館と違う旅館へ行った訳です。

(大谷) 当時は、伊東などまだ沢山旅館がないときでございました。もうね。あの、先生はそういうご病気になると、そのときにご病気でずっと東京からお帰りになったんですか？

(夫人) そのまま、小樽へ帰ったんです。

(大谷) そうしますと、だいたい当時ですから、二日目か三日目ぐらいです。お帰りになっておぐあいは悪かったんでございますか。

(夫人) そのとき、帰ってすぐには別に。あと学校へ行って帰ってからは何か非常に疲れたとか何とかいって

巨星墜つ・光芒絶ゆ

(大谷) 記録によりますと、「風邪ひきそむ。爾来気分すぐれず。自らその悪疾をさとりず。医師又しらす。たんに感冒の手当をなし」……

(佐々木) たいてい感冒ぐらいに思う。

(夫人) 寒いときですから、よけいに風邪のほうを考えたんです。

(大谷) 「つとめてよく喰い、その病を推して登校、平生に異ならなかった」と、こうあります。先生、非常にきちょうめんです。絶対にお休みにならなかつたですからね。

(菅谷) 分りますね。

(夫人) 学校休んでからですね、お医者さんにかかったのは。ですからそこで一寸、お医者さんが……(医師またしらす、のこと)。

(大谷) 学校お休みになつてから……

(夫人) ええ。

(大谷) 年を越してから、お休みになつたんです。一月になつてからきつと。

(夫人) 一月ですね。

(大谷) 一月下旬、「病兆歴然。伝染病院に入る」と、こうありますから。

(菅谷) そりゃ、一月三十日か、三十一日ですよ、それ。三十一日かな

(夫人) ですから、熱のあるのを気が

がつくのも、相当遅かつたでしょうね。学校へずつと出ていましたから。

(菅谷) 学校をお休みになつたときは、もうチブスが分つたんですか。

(夫人) 分りません。それから何日か、四日、五日ぐらい分らなかつた。

(大谷) 二月八日「病革まり」。何日ぐらい伝染病院のほうにおいでだったんですか。一週間ぐらいたつたんですか。

(夫人) そうですね。はっきり覚えておりませんけど。

(大谷) 「病革まり、腸出血一日七回」とありますから。

(菅谷) 四回というのもあります。

(大谷) そうですか。

(菅谷) だがおそらく七回はほんとうだろうね。

(大谷) そういう病院ですから、奥さまはおつきになつていられたらなかつた。

(夫人) ついておりません。

(南) 行かれないうね、あそこ、入れませんよ。

(大谷) 長橋でした。

(南) 長橋です。

(夫人) 一番ひどいときに……。

(大谷) もう、急を聞いて。当時です。そりていらつしやつた訳ですか。

(夫人) 人力車のそりみたいなの

(大谷) やはり、夜中でございますし

んじやないですか。もう風邪と思ひこんでいたんです。お医者さんも私共も。

(南) そうでしょうね。

(佐々木) 死ななくてもいい病気でした。

(南) まあそうですね。

たんですか。

(夫人) 夜でした。

(大谷) それで、越崎君と宮地君などが駆けつけたときには、もうすでにすっかり消毒が済んで、身体をすっかり別室へ納めて。

(夫人) 大熊先生がいらつしてくれました。

(大谷) 大熊先生がおいでになり、それで宮地君に越崎君に、もう一人だれがお供したと思う。そのままお宅のほうへお引き揚げに……

(夫人) 伝染病院ですからね。そのまま火葬。

(大谷) そのまま、茶毘に火葬場へお越しになりましたの？ 当時の火葬場というのと、やっぱりあの洗心橋の奥のほうの？

(菅谷) 我々は東京にいるんだから分らない。

(大谷) 私も当時茅ヶ崎の療養所にいましたから、分りません。

(菅谷) 長橋の病院。

(大谷) そして、お骨になすつてから、お寺でございますか。

(夫人) 天上寺。

(南) ありました。

(大谷) 天上寺といひますと、入舟

町のガス会社の横のほう。

(夫人) 何か高いところで。それから話は戻りますが、伊豆に行きましたときに、卒業生の方で、日魯漁業のどなたか……

(大谷) 日魯漁業の板倉さん？

(夫人) 網代かなんかあるんじゃないですかあの頃、日魯漁業。そういうかたなんかもだいたいお歓迎して下さつたんじゃないですか。

(大谷) 当時、日魯には宮崎さん、板倉さんなど。

(夫人) 板倉さん。

(大谷) で、お葬式は天上寺でござ

いますか？

(夫人) たぶんそうだと思います。

(大谷) そうしますと、そのときの天上寺の方丈さんというんですか、十年位前まで、九十何才かでご存命だったんですか。

(夫人) そうですか、あの声のいい方ですね。お経の声のとていい方だった。

(大谷) そうですか。もっとこの座談会を早くすれば、その方丈さんにもいろいろ聞けたでしょうに。そして、そのときにはお嬢さまは？

(夫人) 一年二ヶ月。

(佐々木) 大西さん亡くなられたときに？

(夫人) はい。数え年三つでございますけれど、十一月に生まれて一年回つてからの二月でございましてから

(南) 何もお父さんの面影は、

(貞子) 全然ないです。

(佐々木) 四つ



いならなければ

分らんです。

(菅谷) 僕はね。お葬式はどうであつたかということ、小樽から帰つて来た人に聞いたんですよ。

そのときにね、お嬢さんが、何も、お父さんが死んだことが分らんでね、そしてむしろ、キヤキヤ騒いでいたと、こういうことを、それが涙をそそつたというふうの説明されていたんですよ。ああ、そんなもんだろうなと思つたんです。ところがね、この本を見ると、貞子さんが何も分らないで、むずかつていたと書いてある。むずかつていたというほうが、ほんとうに子供らしいか、そのキヤキヤ騒いでいたほうが、子供らしいか、何かそれがね。それとね……

(夫人) むずかつてないんです。ね。

(菅谷) むずかつていたんじゃない？

(夫人) つたい歩きができる頃で、何だかあつちへ行つたり、こつちへ行つたりして歩いていました。

(菅谷) それで、抱いていた人は、大西さんの妹さんだったといつていました。

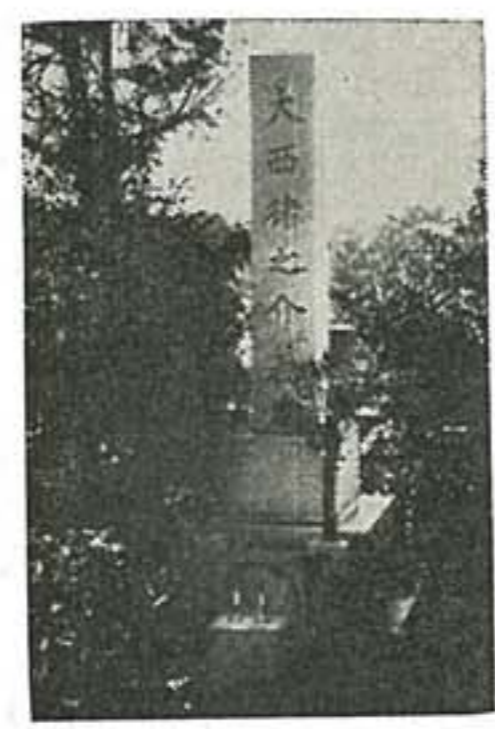
(夫人) そうでしたかしら。あの妹が来てくれましたから。

(菅谷) そうですか。だからね僕はそういうことを、実は今日まで聞きなかつた。それでよく分りました。

(大谷) 当時、先生のお妹さんと、お母さんもお見えになりましたか。

(夫人) ずつといましたから。

(大谷) してあの青山墓地にお墓を造りになつたとおっしゃるのは、ずつと後にお造りになりましたので



すか。そのときにすぐに、間もなくに。

(夫人) 私共東京へ参りましたね、それからすぐに。

(大谷) 青山墓地のどの辺ですか。

(夫人) 墓地下といひますか、あの停留所から桜通りを参ります。そして、坂を上りきつたところ、左へ入る広い道があるんです。元三連隊前とか、裏とかいいう停留所のあつたところを上つたところ、だいたい左へ行きましたね、坂がまた下りるよう

大西先生と女性

(佐々木) 南さん、僕はね、小樽で堺町の甲中上旅館という旅館におつたんです。それが親戚なんです。僕はそこを四階におつたんです。そうするとその下がね、四階だから見おろすと何とつかいう料亭なんです。

(南) 堺町で？

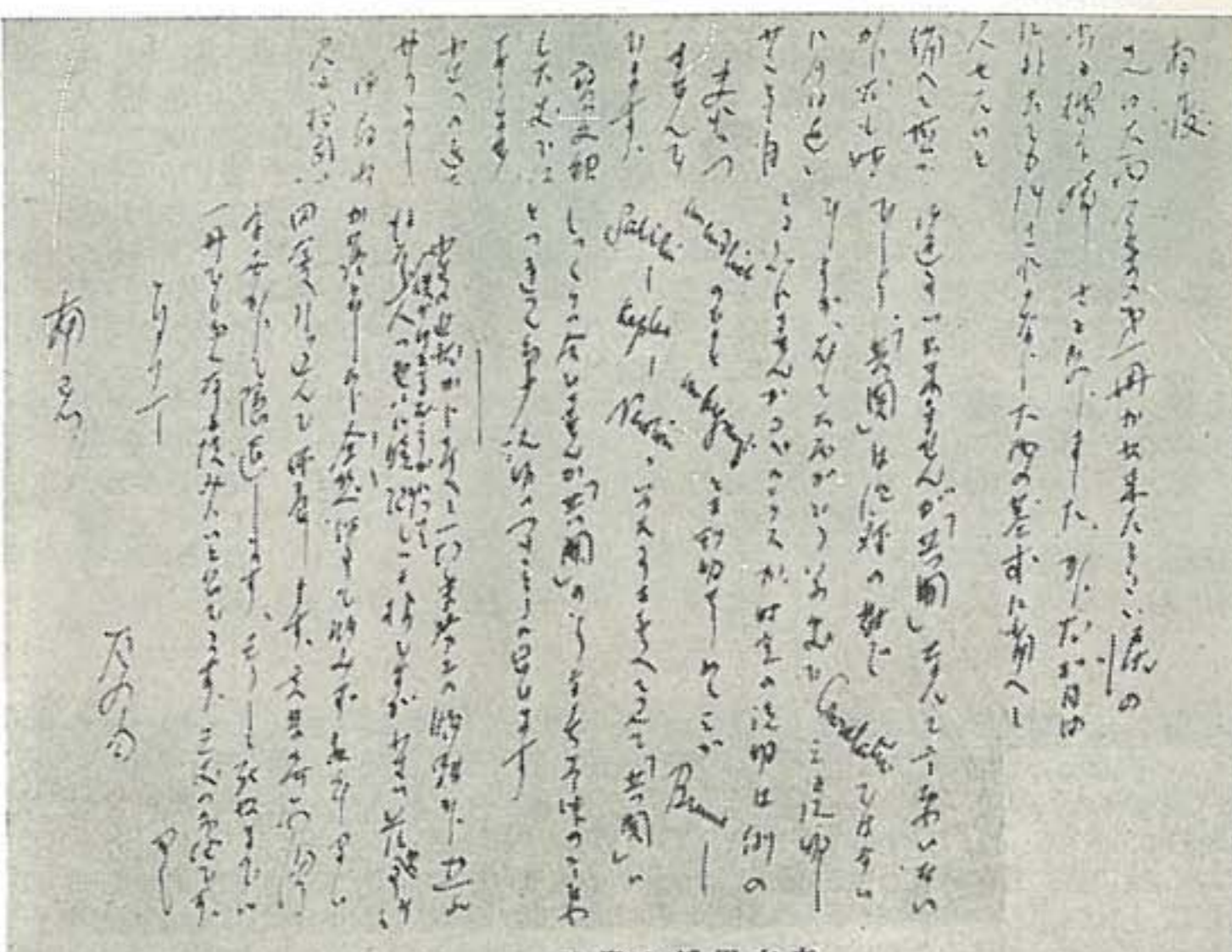
(佐々木) 其の料亭の御座敷へ諸先生方が来られ、大西先生も来ておられて芸者達を呼んで大騒ぎをしておられる。私は学生ですから妙な気持ちで見つたものです。当時三年生位になると、学生でも蕎麦屋へ芸者を呼んだ者もあつた筈です。

(菅谷) それは、中島屋というんでしよう。

(佐々木) 中島屋です。僕の部屋から見下ろして先生方の芸者を交えての会合がよく見えました。当時、このようなことは口外すべき事ではないと考へて誰にも話はしませんでした。

(大谷) はじめてうかがいます。

(佐々木) 当時大西先生の講義の中に「三つ違いの兄さんと」とか「お前の姿を絵にかいて」とか浄瑠璃のさわりの文句が出て来て、先生が単なる石仏の頑くかな方ではなく、相当



贈葉士博田右左

(南) そういう文章は省く。だいたいそういう文章の中に大西という署名が入ってないんだ。名前がみんな別名でしてあるんです。

(佐々木) 先生あの「伊太利亜の旅」なんか読んでみてね、相当やっぱり、イタリアなんかでロマンスを持っていたというふうなことを、ほうふつさせられるようなものがありますね。

(大谷) そうでしょうなあ。

(佐々木) あの文章を読んでみて。

(大谷) 「或る友人の話」というのは、菅谷さんから私がかがったんだけれど、山県(憲一教授) そうです。

(菅谷) そうそう。

(大谷) だから、お友達の話に托して、というんではないですか。

(南) 佐々木さん、あのね、それね、実在のように考えるんだけどね、そう書かないとね、読者が承知しないんですよ。書いて書くところも。

(佐々木) だからね、先生は僕が聞

いたんでは、朝日新聞から非常に懇望されていたんでしよう。どういふ訳か行かなかったらしいんだけど、ただね、僕なんかね、何とどうのですか、あの時分滑稽新聞というものがあつたけど。そのときの読んでいられる雑誌のバラエティの広いこと。

(大谷) そうですね。

(佐々木) あらゆるものを読んでおられましたよ。

(菅谷) あのね、僕これは奥さんでも、お嬢さんでもどちらでもいいんだが、ききたいです。佐々木さんから、さきほど芸者の話があつたでしょう。それから大西先生の書くものの中へ、その婦人が出てくる、南さんがそれをそうしなければならんこともあるんだと、いうんですが、私も、そうだと思うんですよ。

大西先生の書いたものの中で実在の女性というのは、パンタレオニのお嬢さんだけじゃないかと思うんです。あとはみんな先生の筆先です。

神戸の学生であつたとき、校内雑誌にね、バルチック艦隊が、カムラン湾に寄港する。そこに艦隊は、長い間停泊していることが歴史に書かれてある。ここではロシアの士官とベトナム女性が恋仲になり艦隊が出港するのを見送っている姿を綿々たるロマンスと共に書きあげている。

これは非常な名文でしたから全校あげてびっくりしたものです。調べてみると、それはあの色の黒い目のぎよろつとした大西先生が書いたんだというので二度びっくりした話があります。

それから「伊太利亜の旅」の最初

に出てくる、あのボンの大学で、講演会が済んで帰って来るとき、その晩は非常に冷たい晩で、靴の先も凍るような晩であつた。ちよつと瓜ざね顔のその講師夫人が、ゆるやかに Kennst Du das Land wo die Zitronen blihen (……君知るやレモン咲く国、オレンジは……)と、あの詩を口ずさみながらね、瓜ざね顔の長い顔をちよつとまげて「行きたくない？」とこういつたって、それで私は、行きたくなつたんだなどと、いうふうな解釈している。あれも僕はフィクションだと思う。

それからもう一つ、「ストラスブルグ引き揚げの記」に、ルーエという女性が出てくるんですよ。何時も張りのある目だと思つて、書いてある。みんなも架空の女性だと思つたんだなあ。

それでほんとうの女性は、パンタレオニのあれ一人だ。そこで、奥さんは結婚される一寸前に「伊太利亜の旅」が出るんですからなあ。おそらく結婚前にあの「伊太利亜の旅」を読んでいられるだろうと思うが。

(夫人) 送ってもらいました。

(菅谷) そうするとあそこですね。パンタレオニのお嬢さんが出てくる。先生がこういう女性ならいいんだがなあ、ということをして、いつているでしょう。そうすると、奥さんは大西先生のところへ行つたら、わたしもパンタレオニのお嬢さんのように一つやっつてあげよう、こう思つたんじゃないかという、その辺がどうお嬢さんそれどう考えられますか？

あそここの感動しませんが、感動したでしょう。あれはね、私も

どういうぐあいであつたんですか。

(佐々木) 僕ときは経済原論の講義聞いたですがね。

津村先生あり、高岡(熊雄)先生あり三浦新七先生ありで、そりやもう実にラッキーな状態であつたんですね。ただね、非常に、僕等三年生、あの時分、先生の講義に出ていると、何か先生の電氣にかかっているようなんですね。それでただ心酔してね。

とにかく、大西先生が、僕等に勉強せよ、なんてことを一言だけいってしたことないんですよ。ただね、先生に会って講義聞いてるとね、何となく勉強しないといかんという。どうも不思議ですね。

それだから僕は、追憶の記事に書いて置いたんですが、私共はもう夜を日について、先生の経済原論は、原書ですからね。それを五頁も、六頁もやっつてしまつたから、だからとていつて行けないんですよ。

ただ、もう夜十一時、十二時まで部屋でいっしょうけんめいやって、ようやくついて行くんですからね。今の大学生は、ようあんなことをする暇もなかったですよ。大西先生の講義聞いただけでも時間が足らないんですよ。先生はすぐく速く読んで講義して行くんですからね。

(大谷) そのときはどういふものをお使いになりましたか。

(佐々木) 名前は忘れましたがね Political Economy 何とかいふのでした。

(南) あのさっきの、全集の推薦文はほとんどみな書いてくださったん

非常に感動しましたね。

結婚するなら、こんな人と結婚したいと思つたね。でね、僕もイタリアへ行くときがあつたらね、いっぺんあのお嬢さん尋ねてみようと思つた位ですね……。

(佐々木) レモン咲く国なんてね。(菅谷) ところがね、私もその後イタリアに行きましたからね、その前に私と全く同じ思いを持った人がやっばりいました。あの、関西大学の学長をされた。

(夫人) 岩崎さん。(佐々木) 岩崎卯一。(菅谷) 岩崎さんね。

(夫人) 本を送っていただきまして、イタリアへいらつしやつたとき。

(菅谷) そうでしょう。その岩崎さんは、あの大西先生が歩いたところを歩いて行ってパンタレオニの娘さんと会つたです。ところが、すでに建築家に嫁つがれて行き、二人のお子さんの母であつて、がっかりしたようなことを書いてある。僕はこれを読んで、こりや訪ねて行つても駄目だなあ、と思つました。が、しかし先生はやっぱり、架空の女性を書いても、上手ですね。今佐々木さんがいわれるように、たぶんそういうことがあるだろうと、想像するもんですからね。

(佐々木) そうでしょうなあ。

(大谷) 今佐々木さんがおっしゃつたようにですね、私共今にして思いますが、たぶん教育会議が済んでからだと思つてますが、先生方がお揃いで、坂をおりてよくおいでになりましたですね。

私、図書館から出ますと、先生方が、先生、国松さん、武田さんとかね、そういうかたがたね、三、四人でね、実に楽しそうにおりていらつしやるのがね、どうも私当時十七才でございましたからね。

まあ先生、エビキュリアン(享楽人)でもいらした。このことはまたあとで……。

(南) では留学前の話をどうぞ。(大谷) そうすると、先生が小樽へいらつしやつて、すぐ講義をお聞きになつたんですか。佐々木さん。

(佐々木) そうそう、あれはね「囚はれたる経済学」というのはね、私が二年生の後半になつてね、留学が決まつたね、いらつしやる時に送別会席上で「囚はれたる経済学」という、題で講演があつた。そしてあの時分寄宿舎で送別会をやつたんです。寄宿舎別にね。

そうすると大西さんが、講演を済ますとね、経済学者でない渡辺龍聖さんが、批評する訳です。その次に僕等今でも覚えていますが、渡辺校長による校閲、訂正をうけて、訂正第二版の「囚はれたる経済学」を話していられる。

その次の寄宿舎では、訂正第三版になる訳です。訂正第三版ですね。もつとも囚われることなき状態にいてのお話をする。行きしなに「囚はれたる経済学」、帰つて来てから「放たれたる経済学」。そりやね、もう必死にね、何とどういふか、その奔放さ、つまり何か走つて行く悍馬というか、才能が走るといふような勢いでしたよ。講義は奔放自由な講義でした。

いたんでは、朝日新聞から非常に懇望されていたんでしよう。どういふ訳か行かなかったらしいんだけど、ただね、僕なんかね、何とどうのですか、あの時分滑稽新聞というものがあつたけど。そのときの読んでいられる雑誌のバラエティの広いこと。

(大谷) そうですね。

(佐々木) あらゆるものを読んでおられましたよ。

(菅谷) あのね、僕これは奥さんでも、お嬢さんでもどちらでもいいんだが、ききたいです。佐々木さんから、さきほど芸者の話があつたでしょう。それから大西先生の書くものの中へ、その婦人が出てくる、南さんがそれをそうしなければならんこともあるんだと、いうんですが、私も、そうだと思うんですよ。

大西先生の書いたものの中で実在の女性というのは、パンタレオニのお嬢さんだけじゃないかと思うんです。あとはみんな先生の筆先です。

教師として

(大谷) 先生の年々の講義の題目は

ですが、その内上田さんの文中に、大西先生がね、小樽で非常にインスパイリングな空気を鼓吹したと書いていられるが、私あれだけはほんとうに、インスパイリングという言葉があてはまりますね。

(大谷) そりゃ自分でこう勉強しろとは、何もおっしゃらないんだか……。

(佐々木) そりゃやっぱ奥さんむろんそうかも知れないけれど、僕等見るとやっぱいいわゆる、天才ふうの顔してられましたね。天才の顔ですよ。一寸ない顔ですよ。

(大谷) そりゃインスパイリングといいますが、特にあの本を読め、この本にこうあるなどとはおっしゃらないんだけど、とにかくみな本を読み、考えなくちゃいけないと思わせる。ほんとうにインスパイリングな……。

(佐々木) 人でしたよ。

(菅谷) そのインスパイリングが幅が広がったと思うな。で、それが一番感化を受けたのは大谷さんだね。



(大谷) そんなことないですよ。そりゃもう菅谷さんですよ。

(菅谷) 大西先生の影響を受けたのは、先生がいちばん矚目した大谷敏治君ですよ。だからね、僕はそれを「緑丘」へ書いて送っている。福田先生が小樽で、大西から教わった連中はみんなだいたい答案を書いたらすぐ分るといった。「囚はれたる経済学」をみんな暗記している。先生の文章というのは非常に暗記しやすいから。

(佐々木) 名文ですからね。

(菅谷) 非常な名文で直ぐ暗記できる。それを答案に書いています。今の学生はもう少し自分の文章を書かんと答案にならないと思う。

私は幸にも牧野英一さんに法律を教わったときに、牧野英一さんをこっぴどくやつつけた。

「囚はれたる経済学」の中から、それをひっぱって来たんだなあ。あの中に、自然学派と歴史学派との違いで「血をみなぎらせ、脈をうたせてこそ、小野の小町であり」という。「しかし死んでしまったらみんな、榎正成も、風呂屋の三助も」という。「それなら自然学派も、歴史学派も同じだ」と書いた、それを違うというのには牧野英一である。と書いた。すると牧野先生は非常によい答案が出来たとして、一二〇点をつけてくれた。昔の先生は一二〇点といううんとできのよいものには点数を加えてくれた。点数を惜しまなかった。

(大谷) しかし、僕等のクラスでも先生にプラスした連中もいるのですよ。竹村とか、杉田とか、沼尻と

か、野村とか。ただ先生もそっけなかったし、ほんとうに菅谷さんなんかよく先生には近づいておられたが、我々ももうこわかったし、とても近寄れない。

それに僕は不勉強で、ただ先生の妙なところだけ心酔して勉強はしない。その結果が先生にマイナスになってほんとうに申しわけないんです。

ところで、奥さま、啓明会の講演会へおいでになったことごさいましたか、小樽クラブで。結婚なさいましてから。

(夫人) ……。

(菅谷) しかし先生の講演会は面白かったなあ。

大西先生の文章の中に脂肪粉のにおいがありすぎるというでしょう。それをみながら大西先生の悪口いうんですよ。あのおしろいつけたり、紅ついたりするとね、何といても女性が出てくる。だから、おしろいつけたり、紅つければいい、こういうんですよ。そりゃたくさん出て来ます。

(佐々木) ほんとうですわね。

(菅谷) そこで「ある友人の話」のあどきに、あれ実際に敬虔なクリスチャンの女性ですわね。一人はどうしてもドイツのドクトルの学位をとって帰ろうという。辰(かねたつ)鈴木商店から、奨学金をもらっているんだからそれをしないと帰れんという。

そうすると、非常な咳をする。よく医者来てみてくれる。どうも思わしくない。「この病気にはね、一つ禁止しなければならぬものがある。君の時分に、寺田という先生おっ

た？

(菅谷) いいえ。

(佐々木) これはね、商業地理を教

えていて、京都大学をいっばんで出たんですけれどね、こりゃ偉い先生だと思つて、いつも京都大学のフアンでね、一番で出たつていばつて

いるんですよ。「寺田貞次教授。明治四十四—大正十五年在任。商業地理担当、のち高松高商創立とともに転出」

(南) 何年までいらつしたのだらうね。

(大谷) 大正十一年か、十二年ですよ。

る。」とこういつたところが、その女性が泣きくずれる。その女性はあなただけが、そういうふうには、私を思うんですか、という。

泣きくずれて、それから南のほうへ、結局転地させることになるという。するとまた、「殊に夜にでも、男が苦しめはじめれば、駆け入って介抱もしてやりたいが、よる夜中独

身者の部屋に、入る訳にはまじりませぬ。雪かともう純白の寝衣の上、外套一枚はおっただけの女が男の部屋の戸の前で、板敷の廊下にひざまずいて、寒気に震えながら泣きの涙で、神様に祈りして夜を明かしたこともある」という調子で書いたりしゃべったりする。そういうスピーチが、実に芝居を見ているようにして聞かれます。

だから読んでみると、それが一層引き立つんだ。私なんかそういう先生の脂肪粉の香ばかり読んでいたという。その影響がある……。それもそうなんだ。

(大谷) 「ある友人の話」を聞いても、僕たちほんとうに感動しましたね。あの主人公、山県憲一教授、菅谷さん知らして下さったんだ。

「山県憲一教授。当時神戸高商よりヨーロッパ留学。スイスにて客死」

経済学者として

(南) 先生がお帰りになったのは。(大谷) 大正六年八月です。私たちの前のクラス、南さんがた講義を聞いていらつした。

(南) お帰りになつてね、その頃私たしか冬休みだったと思いますが、

郎さんです。東京電気通信大学の教授です。

東大出られましてね、やっぱ先生に似てね、それで風ほうは奥さんに似て背が高いんです。外国語大学に講師に来ていただいています。

(佐々木) 大西先生は精力家でしたね。精力絶倫という感じで。

(菅谷) そうそう精力が身体から湧き出しているようでした。

(大谷) お食事はどんなものをお好みでしたか？

(夫人) 別にないですね。

(大谷) 何でもお召し上がりでしたか。お酒は？

(夫人) お酒は全然、たばこも……。(菅谷) 大西先生の伝記書くにしてそれが分らん。津村先生と、大沼公園でね。ビール一本のんで二人共まっかになつて寝ころんじやつたという話は聞いたですよ。

何時も卒業生を連れて、のみに行ったというのを卒業生に聞くんです。

(夫人) とくにしりませんけれど。(佐々木) いわゆるお茶屋という。ほどのその旅館に下宿して。置いてくれる。僕の部屋からよく見える。偶然であるかもしれないけれど、伴さんなんかもね。

直行寺というお寺に行きました。お寺に下宿していられたのですわね。(佐々木) 僕等も先生のお宅へ訪問したときは、そのお寺です。

(南) 大正七年に三年生になったときに先生の講義が商業政策。経済原論は一年と二年続いていたのですかね。

(大谷) 私達は、ミルの経済原論。講義は先生方(南、菅谷)だけで、我々の頃は、(大正七年入学のクラス)一年、原書講読、二年、経済原論講義と原書講読、三年で、商業政策と経済史。

(南) 最初は原論、原書講読は二年、我々のときも、三年では商業政策。

(菅谷) 一年で経済原論。原論、経済史、商業政策の全部を講義したのは、大谷さんの組から。

(大谷) そうです。それから次の相沢正美さんの組。ただこの組の一年の原書講読は手塚先生で、リカー

ド。(南) すいぶん手広くおやりになりました。(佐々木) すごかったですよ。(菅谷) その頃先生の服装は？(大谷) 着物を着ていらつしやいましたね。

(南) その後はどうなんです。(大谷) その後は、二年、原論、三年の経済史か政策二つの講義。新入生一年の原書講読は手塚先生にやらして。(南) しかし、今から考えてみると、昔の先生はすいぶん科目が多かったですね。あれほとんど講義です。経済原論、経済史、商業政策

(菅谷) 経済学史。(佐々木) 私は山の中の学校を出たんですが、それで無試験であの学校に入り、しかも田舎の学校を出てね、行ったところが、商業英語というの、英語で教えるんですよ。英語さえ分らんに、商業英語のことなんか分らんですよ。商業算術が分らんのを、英語で教えるんですよ。こ

大西先生の経済原論は原書でどんどん、どんどん読んで行く。もう無我夢中でしたよ。あの時分に商品実践も英語ですよ。フランクだったなあ。L・H・フランク。大正二年—十五年、小樽高商在任。商品学、商品実験担当。(菅谷) そうですか。(佐々木) しかも分らんことは、ドイツから来た人なんです。日本語はもちろん知らない訳ですよ。それでドイツ人が英語でやるんですよ。変てこな英語でしょう。

とない。自由にしゃべる。高島さんは何と云ったって速い言葉でしゃべるんだから。(高島佐一郎教授。大正三十二年任。国際金融論担当。名古屋高商へ転出。のちに経済学博士。明治四十四年七月、大西教授(貿易科)と同期に専攻部領事科卒業)

(大谷)大西先生のはね、書いたものは非常に形容詞が多いけれどね、講義には何もありません。

(菅谷)例えば、この「若くして死んだ」ということが、かりにいうでしょう。そうしたら「若くして死んだ」といわない。あの人(高島教授)は、「老いずして逝ける」とこういうふうにいふんだなあ。

「帝国主義論」・学界の鬼才

(佐々木)「帝国主義論」というのは、卒業論文なんですよ。

(菅谷)神戸高商の卒業論文です。私は、医者になろうと思ったんですがね。大正五年の暮に家へ帰らないで勉強して、神田であの本を見て、感動して、これならという訳で私はそれから、経済学に入るようになった。

(佐々木)「帝国主義論」でね。

(菅谷)それで買って来て、私その翌日昼すぎまでずっと読んでね。するとあれほど啓発された本がないね。あの本はほんとうに、血沸き肉おどるもんだなあ、ということを感じました。

(佐々木)そうなんです。

(大谷)留学前その時分先生、洋服

みんなノートとれぬから何だろうなあ、というね「若くして死んだ」、そうかというふうには。

大西先生は、それは率直だ。だからね。大谷さんが一つのノートが六冊になったとか、七冊になったとかいうでしょう。それはねスピードが非常に速い。

(大谷)ほんとうにいっしょけんめいにとつたですよ。そしてあと読んで見出しをつけて、整理して。たいてい勉強しなかつたけど……。

当時、すではじまっていたわゆる経済学的な勉強をね、やっぱりしなかつたですよ。まあ、マーシャルなんか読んでいりゃよかったんだけどね。

ですか。

(佐々木)和服。洋服のときもありましたけれど、だいたいにおいて和服でしたよ。自由奔放なものでしたよ。あれ奥さん、襟が大事なんですよ。

(夫人)そうですね。

(南)佐々木さんね。当時、同文館から「経済大辞典」を出版してしましてね。その中に大西さんがたくさん原稿書いていますなあ。

(佐々木)その当時?

(南)一橋出てみてもいいものね。今から考えてみてもね。

(佐々木)今大学出て、それだけのものを書くということはない……。

(南)できないですからね。そしてほとんど当時の世界の経済学者の伝

「大西猪之介 経済学全集」紹介

大内兵衛 経済学博士 東大名誉教授

記みたいなのを、調べて……。(佐々木)それがね。専攻科を出たてですからね、たいへんですよ。

(大谷)先生は本読まれるのがすごく速かつたんですね。先生の読まれた本の中に、ドリアン・グレイの画像(The Picture of Dorian Gray)という、オスカ・ワイルドの本、先生あれ非常にお好きな作品だったらいい。たった二日で読んでおられる。

というのは、それは自分の顔を鏡に映して、どんなに映ろうとも、鏡に責任はないという、先生よく使われた句があるでしょう。あれ、この本からとつたんですね。これをシャトルへの汽車の中なかにかで、一日

ぐらいついで読んでいらつしやるんです。とても本読まれるのが速かつた。

(菅谷)大内兵衛さんが学生でいらつした頃、「帝国主義論」が出たというんですね。

「はあ、こんな学生がいるかなあと思った」というんですね。ところが、東大の先生になったときにね、「囚はれたる経済学」が出たというんで、「わしは、これは先生になる資格がないと思った」というんですね。大内さんの本の中に書いてあります。

(大谷)でも先生、ああいう本にあらわれた文体というか、はなやかな文章、考え方は、のちにはだいたい変

私が学校を出る頃、やはり学校を出たばかりの、大西君の『帝国主義論』が出た。当時学問をして見たいと云ふ希望をもって見た私は、この書を読んで驚いた。その博引とその文章の力強さに。そして私は考へた。吾々のやうな鈍頭が学問で身を立てるなど云ふ事を考へるのは学問への冒瀆であり、天才への侮辱であり、私の非望である。

数年の後、不図したことから俗務をやめて学窓に帰ったとき、大西君の『囚はれたる経済学』が出た。之はまたいたく私をこまらせた。このやうに哲学的に、このやうに高所から、このやうに一掃一からげに論じなければ経済学と云ふものはやれぬものだらうかと云ふのが私の疑問となつたのである。その当時、私は初

めて大西君と相識り大に談ずるの機会を得た。そしてまことに一見舊知の感を得た。そのことを得た。また花やかな君の講演をも聞くことを得た。そして甚だ失礼ながら、「この才人おしい哉、経済学に囚はれずして経済学を囚へんとす、それは非望なり」と思ったのであった。

ヨーロッパの旅中、私は大西君の『伊太利亜の旅』をなつかしみ読んで。さすがの大西君でもヨーロッパを囚へやうとはしない。それ故にこの方が『囚はれたる経済学』よりは囚はれてゐない大西君の様に思へて、とてもなつかしきを感じたのであった。

つい近頃、君の遺著『人口と国力』を西尾君から戴いて、私はそれを非常に愉快地読むことを得た。その

なんで、まあ福田という人は、非常に口の悪い人だったと思う。みなさん僕はこう思うんですがね。我々が学生の頃に、あの時点で、津村さんは「国民経済原論」という、あの立派な本を出しているの、あのおきに福田さんが何を言っているかという「経済学講義」ですよ。マーシャルの解説ですよ。福田さんは本がないですよ。

(佐々木)そうですね。ないですよ。

(菅谷)そうすると、津村さんのほうがクラスからいえば上だ。津村さんも、わしが日本でいちばん偉い経済学者だと、こういう自惚があるんですよ。

ところが、福田さんは今こそ日本

内に展開しつつあった大西君はたしかに『囚はれたる経済学』から自分を放ち、自分を経済学の内におきつつ事実を直視してその経済を覗やうとする態度の学者となつていた。そこには、大きい結果が生れて来るのではないかと思はれる経済学上の新方向がいろいろの方面に暗示されてゐる。私は、巻を措いて「吾が国の経済学界最も有為にして多望な才人を失へり」の嘆を久しうしたのである。

志をいだいて逝く人は哀しい。しかも若くして逝いたこの人に、学界に数多い追従者があるのを思ひ合せて見るならば、人のいのちは此世で数える年の数でないことはたしかである。(昭和二年三月四日)

(漢字かな使い原文のまま)


鋼・鑄鉄の品質向上に!

Mo

高純度硫化モリブデン
酸化モリブデン(ブリケット・クリンカー)
フェロモリブデン
カルシウムモリブデン

高級金属の立体経営

精鈹◇鉄鋼用酸化物◇工業薬品
フェロ・銅・アルミ系母合金
KSブロンズ



太陽鈹五株式会社

Nb

フェロニオブ

Ti, B, Zr

フェロチタン
フェロチタンボロン
フェロボロン
フェロジルコニウム

R.E

鉄鋼用希土類添加剤(サン・メルト)
鑄型塗剤(サン・キヤスト)

本社 神戸市生田区京町72 (クレセントビル 6階)
電話 神戸 (33) 3 2 8 1 ~ 8

大阪支店 大阪市東区北浜3-5 (大阪神鋼ビル 9階)
電話 大阪 (231) 7 5 3 5 ~ 7

東京支店 東京都千代田区丸の内3-2 (新東京ビル 8階)
電話 東京 (216) 6 0 4 1 (代表)

経済学の創設の大御所の一人と仰がれるが、その頃は一種のデマの製造家だよ。それでこれは「解放」という雑誌にこういうゴシップが載っている。

福田さんね、「先生は世界の経済学者の中で、何番目ですか」と聞いたんだそうですね。それをね、「十八番目だね。マーシャルの下で、セリグマンの上で」とこういうんだなあ。で、「フィリップ・ヴィッチャンてものは、二十一番目だ」と、そして「慶応の気賀勘重なんっていうのは、あの翻訳やっているんだからそりゃ気がしれん」とこういう。「世界では十八番目だ」なんていうことは、学生をだましているんですよ。

それだから津村先生のほうでも、大西さんに、「あんな福田みたいなところへ行くな」とこういったんだと思う。それで「関がいい、関がいい」といって「関のところへ行け」と、こうやったんだと思う。それから読んでみると、まあ大谷君が、その大西さんのけんらんたるところに凝っちゃって、先生をまあ非常に悲しませたと僕は思う。

(大谷) ほんとうに申しわけない。(菅谷) そこで同門として、福田さんのところを降ろさなきゃならんということになったんだなあ。

(大谷) いや、私はあの頃、東京商大なんか受ける資格がなかったんですよ。(菅谷) 大谷君そのようにけんせんされるけど……。(大谷) しかし、英語については、私たちがほんとうに大西先生に鍛えられたまね。もちろん普通の英語の

先生方にもいろいろ教わったけれど。なにしろいきなり、ジョン・スチュアート・ミルの原論でしよう。アッシュレー版の最初にちよっとミルの経済学史上の地位を説明されて「例の「囚はれたる経済学」の中に展開されたお考えー経済学はミルにおいて、自然科学派と歴史科学派に岐れるというーをちよっといわれた、いきなり講読でしよ。あ、その小さな活字で、毎日五、六頁くらい、二、三人生徒にあてて、あとは先生ひとりでどんどんやっつけて、十七のときです、あの本半分読んでから。

そして、一章済むごとに抄訳をださせられる。二年のときに、ヴェブレンの Theory of Business Enterprise Part. 講義のほかにです。三年になってから、クラスでの英語講読はなかったんですけど、私、ホップハウスからはじめて、マクドナルド、ロード・セルと英国社会思想の入門書を読まれて、コール、ラスキーそういうものを毎月一冊読まされた。

一冊読めば、報告を書いて出す。こうしたものを普通の英語のように読まされたんです。いま思うとありがたかったですね。(菅谷) だから大谷君が、東京商大の入学に失敗したことは、先生を非常に悲しませた。大谷君は先生のいちばん臆目していた学生でした。それだけにまた、大谷君も先生に傾倒されていた。それはまた、東京商大の試験官福

当時、私は学生でしたがませっ子であったので社会政策学会にはいつも出席していました。本郷での社会政策学会が済んでから、松竹の大船撮影所の見学があった。先生も参られました。その帰りにどこであったか一杯やった。もちろん左右田先生のご馳走です。そのグループは、福田、坂西、左右田、大西でした。あのとき、この五人は年からいったらそういうつも違わなかったかも知らんが、何か世間から見ると、大西先生は若い小僧で、他の四人は既に当時の日本で一家をなしていたものであった。この席上で福田先生はだいぶ気炎をあげた。大西先生もまた、如才なく福田先生のとりにしをした。この席の様子は先生から詳しく聞いた。

田徳三先生が、大谷君の答案をだめにした理由でもあった。こんなことを回顧すると、悲憤やら闘志やらが続々とわいてくるのを覚える。大西先生は何としてでも、福田先生のごきげんを直しておかねばならないと思っただけでしょう。

あの、先生が伊豆へ行かれたのはいつでしたかね。(大谷) 大正十年です。(菅谷) そうそう、十年の社会政策学会が本郷の東京帝国大学で開かれた。そこへ先生は例のとおり和服姿で出席していました。

若くして長崎高商の校長になった山内正瞭さんが、東京商大の先生に返り咲いた。これは当時、一寸注目されたものでした。山内さんは、H. Dietzel について勉強されたのでした。大西先生も H. Dietzel について学ばれた方です。年は山内のほうが、十いくつ多いでしょう。

しかし、H. Dietzel の門弟としては大西先生のほうが兄弟子です。しかし、最初 H. Dietzel の学問を持って帰られたのは山内さんでした。だから先生は山内さんの報告に期待をもったんでしょう。

山内さんの題は「経済二元論」ということでしたね。一寸アトラクティブな題ではありませんか。するとね、これが資本だけでない。労働も資本と同じ立場に立っているのが新しい経済学だ。ということをお話しました。するとあとは聞かなくても分った。というようになかった。常に出でた行かれました。先生は非常に鋭い頭の持ち主ですね。

大西先生に現われた6人の女性



菅谷重平

編集部から、先日の三井クラブで話した「大西先生に現われた六人の女性」に話を絞ってまとめたくれと依頼をうけました。

先生の書かれた女性像は、いつも美しくもあり、惻巧でもあること。漱石の小説にでてくる女性のようです。特にわたくしは「伊太利亜の旅」の中にあるパンタレオニーのお嬢さんを、先生が激賞していると確信があります。パ氏と先生の話とは「経済法則とは何か」ということが主題でした。先生のイタリヤ語がまだ十分でなかったのでしょうか。「お父さん独乙語で話しておあげ」と助け船を出してくれたことを非常に気が利いているといっています。

またあの娘さんはまだ二十を幾つも越していないだろうが、英語も独乙語も仏蘭西語もわかる。こんな娘が学者の許に嫁ぐなら外へ出たうえで新刊書も買ってくるであろうし、校正もしてくれるであろう。といっています。この女性にわたくしは非常に心をひかれて、いつか伊太利へ行く機会があったら、新聞へ広告を出してで

も探し出して会ってみたいと思っていました。

ところが関西大学の学長をした岩崎卯一さんが、このお嬢さんを訪ねた話、同氏の「社会学の人と文献」の中にあつたのを見て驚いたのです。岩崎さんもわたくしと同じ思いを、このお嬢さんに寄せていたのではないかと思つたのです。

すると、大西さんの奥さんから、それは送って貰つたので読みましたという意外なことを聞かされた。そこでわたくしは「奥さんやお嬢さんの貞子さんが、あそこをどうどう考えますか、奥さんは結婚前にあの本を先生から貰つたでしょう。」「ハイ貰いました、パ氏のお嬢さんのようにやってみようなんてことは考えませんでした」とおっしゃいました。

そこで、わたくしは話のついでに先生の書かれたものの中に六人の女性が出てくるが二人は実在の人ですが、アト四人は、どうも先生が筆を走らせての産物のようにだと申しました。もう一人の実在の女性は「ある友

人の話」の中に出てくる独乙の女性です。「日本の留学生(山県憲一氏神戸高商、先生より一年下)が、夜中にセキで苦しみます。独身者の部屋へ這入って行くわけには参らぬ。純白の薄い寝衣の上に外套を羽織って、板敷の廊下に跪つて寒気にふるえながらお祈りをしていた」というこの女性です。

この女性の写真は、この「ある友人」が亡くなったとき一緒に会葬者達を写したものが、武田英一先生の処にあつたので、それを複写して、わたくしも所蔵していたが、西宮で戦災に会つて失くしてしまいました。が実在の人です。写真は小形のもので、姿だけしか判かりませんが、この女性がほんとうに献身的に異国の留学生を世話する姿がよく書かれています。

さてアトの四人の女性を先生のお筆先きと断定するのですが。

その第一は伊太利亜の旅の最初の方にでてくる。ボンの大学で、ある講演会が済んで、先生の奥さんを送ってゆく一月の夜「靴の先も冷える寒さでしよう」というと、軽うなずいて、暫らく歩いたあと、ケンス・ト・ツ・ダス・ランド・ヴォ・デ・チトローネン・ブルーヘン「君知るやレモン咲く国」の詩を唱って「行くきたかない」と斜めに傾けた瓜ザネ顔に、ボダイ樹の枝をもれてくるガラス燈の蒼白い光……というようにこれが書かれてありますが、どうも、これもすこし筆の勢のような気がします。

その次は「南欧の思い出」の中に出る二十二才の優しい小柄の気高い

娘チナ。「一体あなたは論理的に恋を始める積りなの」とつめよる。男から女への手紙として何回も往復するのがあります。どうも、これもフィクションです。大体、大西先生は、手紙の形で自分の考えを発表する手法のあつた人です。津村秀松夫人や関先生へ宛てた書簡形式のものも幾つもあつた。

第三のフィクション女性とは、「ストラスブルグ脱出の記」に出てくるルウィズという女性。第一次大戦のとき戒厳令下の独乙を背景にして、先生との話のやりとりが書かれています。「独乙に居られる間はいらつしやるつもりか?」「まあ、そのつもりですがね?」「ぢやいよいよ危くなれば?」「なるでしようか?」「どうもなれば?」「男はただ女の美しい目を見詰めている。」「いつ見ても、張のある美しい目かなと思う」というような一節があります。

南欧の思い出にしても、このストラスブルグ引揚げの記にしても、「男」という第三人称を使っているが、この男は誰が読んで大西先生です。この中の女性は先生の恋人のようです。三十才前の先生も女性には関心をもちました。しかし、思想をよりよく表現するために、持ち出して、一種の手法である、と思ひます。

第四の女性は、先生がまだ神戸高商の学生であつたとき、学友会報に載せた「カムラン湾の夕べ」という随筆です。バルチック艦隊がベトナムのカムラン湾に無断碇泊して、二週間以上も過ぎたので抗議がでました。仏蘭西政府の抗議で、バルチック

大西全集の複製版を

(佐々木) あの大西全集というのは今どうなっているんですか。もう絶版ですか。

(南) 絶版です。

(佐々木) もう宝文館じたいがないんじゃないですか。

(南) ありますね。昔の行き方と違いますが、

(佐々木) あれ十二冊ぐらいあったんですか。

(大谷) 十一冊です。さつきおいでにならないときに、うかがったのですが、その「社会主義論」というのが、福田先生のところからにわかに出て来て、それであれ十一冊に。あれでまあ、たいへんなものですからね。

(佐々木) あれ、もう古本屋でも探すより方法ないんでしょうね。小樽の図書館にはあるんですか。

(大谷) 図書館には二セットあったんですが、どうも全部そろわらないです。

古瀬大六先生(小樽商大図書館長)に今日電話しましたが、二セットもなかったけれど全部そろってないそうです。

(夫人) 残念ですね。あの当時ならさしあげられたのですが。

(墓目) 古本は東京にありますか。大阪ではもう見あたりませんか。

(菅谷) とまどき出ます。

(佐々木) 全集で?

(菅谷) 全集です。

(佐々木) 墓目さん、たしかにね、

複製はどうですか、大西全集というのは、こうだったんだと、ずいぶん出ると思っているんですがね。

(墓目) 特集出したらく売れるかも知れません。

(菅谷) 何かね、今月古書展があるんだ。それに「帝国主義論」だけ一冊出ていますよ。一冊は千円と書いてありますね。

私はよく神田の書店を歩くんですよ。そうするとときどき見るようですよ。

(大谷) あの先生、ここでまたその全集の編集苦心話を。それで第一冊に入って、これはしまったとおっしゃったことがあるようなこと、ご記憶でございますか。

(南) ありましたかなあ。

(大谷) 阿部芳治さんから来た手紙に、扉と写真と、それから原本の扉で、何か入れ違いがあるとかいって

留学資金の出どころ・「伊太利亜の旅」

(佐々木) 僕は留学から帰ってこられた頃は知らないです。僕はもうイギリスへ行っていたから。

(南) それがね。奥さんあるときは、文部省は三年しか留学を認めてないんです。

(佐々木) それはそうですね。

(南) それをね、四年もいるには金がかかる訳なんです。金はどこから出たのか?

「商業及び経済研究」第十七冊の新刊紹介欄に「伊太利亜の旅」と題して紹介、筆者は同校教授。数年前死去。

そりゃやっぱり「伊太利亜の旅」は、南さん、あのゲーテの「イタリヤ紀行」からでしょうね。

かくされた一面

(佐々木) 僕等まあその時分には学生でも分らなかつたが、今から考えてみると大西さんは、むしろ文学をおやりになれば、夏目漱石以上の文学者になられたでしょうね。

(菅谷) そうと思うんだが、さつき僕がいったその「囚はれたる文芸」というものが、このいちばん先へくるような……。「一冊の本。島村抱月著「囚はれたる文芸」を一同に示す」

(大谷) その本ですか。

(菅谷) これは僕が記念文庫といつてね、大正六年三月八日と書いてあるでしょう。つまり私は先生に恩をうけたけれども、何も報ゆるところがなかつた。

それで、亡くなられてしまったので、僕の書齋の一隅には大西先生記念文庫というものを作らんだといつて、その第一冊目はこれです。大西先生ゆかりのものがね、十五、六冊あるんですよ。この「囚はれたる文芸」がどうも大西さんの生涯を支配しているだろうと思うんですが、その囚はれたあゝの経済学。

ク艦隊は出て行かねばならなくなりました。この時ロシアの海軍士官と情熱にもえるベトナムの若い女性の訣別を惜しむ、優艶な情話がある。これはもちろん誰が見てもフィクションであることがわかる。先生には若いときから、こういう書き方が好きであった、といつてもよいでしょう。

最後に佐々木周一氏のご好意で大西先生を偲ぶ会が催された。先生の奥さんの髪には白毛が殖えていたが、昔の面影はそのまま残っていた。お嬢さんの貞子さんは、少し下品な言葉になるが「女盛り」の美しさを姿にも頭の回転にも、立派な近代女性に育っているのを見て非常に来て……。

(南) 原版の扉が、あの写真が……

(大谷) それで先生、ここがこう並べてあったと手紙に書いてあり、先生が私にしまったとおっしゃった。

(夫人) 渡辺校長先生がうまくしてくださったんじゃないですか。

(佐々木) そうですね。僕等もそう思っています。

(大谷) あのときは、今村財閥だね。「当時、今村銀行の主。今村繁三氏」

(佐々木) 渡辺さんは、今村さんと親戚でしょう。わりあい金のほうは先生ゆとりがあったでしょう。

(大谷) でもね、やっぱりあれが身にしみついているのか、イタリヤへ行っても、フランクフルトへ行ってもですね、ゲーテ・ハウスへ行きますとね、ああこれを先生がいったんだなあ、というぐあいに思い出しますね。

(菅谷) そのときにもうすでに放たれたと、こういうでしょう。

島村抱月が「囚はれたる文芸」を書くのは明治三十九年ですよ。これがやっぱり当時の時代を風靡したもので、そのうち最後をみますとね、放たれたる文芸といふ、

「ああ、抒情的、宗教的、東洋的この関係論はなおあるべきなり。放たれたる文芸を説いて、更にわが思いを練らん」とこう書いてある。

(佐々木) そりゃその時分にね、「囚はれたる経済学」及び「放たれたる経済学」など、とつぴな命題ですよ。つまり、題目としてはね、一寸我々が考えられない題ですから。

(菅谷) 三十九年の一月ですよ。先生が神戸高商へ入った頃?

(大谷) やっぱこれこれ感銘をうけたんでしょうね。

(菅谷) そうだろうね。文学青年でもあったんでしょうね。

(大谷) そういいいますと、大西文庫の中か、単独の寄贈か知らんが、学校の図書館の蔵書の中に、無名氏という名が何冊かありなんです。

愉快であった。

大西猪之介伝をものしたいと、何度も考えたが、資料が十分に集まらないのと、わたくしの怠惰で、出来ない。ただ、この集りは三時間余りの時間であったが、先生が伊豆で病を求められたのは、岳父の水梨さんと一緒であるとばかり思っていたが、それは奥さんのお母さんの兄さん栗林五朔さんと一緒であった、ということを知ったことと、青山墓地にある先生の墓標「大西猪之介墓」は達筆に書かれてあるので、誰が書いたものかと思っていたら、先生の妹さんの主人、日本画家の高瀬春暉氏の筆であることがわかった。

(貞子) うちの娘がね、父(大西教授)の書いたあの本(「伊太利亜の旅」のこと)を持ちまして、イタリヤを巡りました。それで私は、イタリヤへ旅行するといふので、すぐさま航空便で送りまして、主人あてに持って参りまして、そしてローマに泊。フィレンツェはもうほんの日帰りでした。まあ、二時間半でとばしたそうです。百四十キロを、それからフィレンツェも見て非常に感激して……。

(大谷) 今「伊太利亜の旅」のお話が出ましたが、私よく知りませんが、今も、今は紀行文がたくさん出まされたが。

(夫人) 半年かかっているんです。いますから。あの頃。今みたい二、三日で簡単に見ると違いますが。

(大谷) あの前後まで、ヨーロッパ旅行記というふうなもので、あるといえは、特にイタリヤなんかについては、鴨外の翻訳「即興詩人」それから「伊太利亜の旅」、浜田青陵先生(京都大学文学部教授)の「希臘(ギリシャ)紀行」それから何年か後の、外交官をやった柳沢健「南欧游記」。これはもつとあとですが、そんなもんだつたでしょう。「大西先生令嬢。現村貞子夫人その令嬢——大西先生には孫娘——の写真を一同に回覧して」

(貞子) どうかよろしく。来年帰って参りますからお願いたします。今年、芸大を出まして一年だけパリのほうへ行かせまして、四十四年夏帰らせます。

(大谷) 南先生、「伊太利亜の旅」についての批評というものは、左右田先生の「囚はれたる経済学」といっしょの批評がやっぱり唯一のものですか。

(南) そうでしょうね。

(大谷) 一般書評というものは出なかつたんですか。

(南) 気がつかなかつたですね。

(菅谷) いやいや。それは載つたなあ。それはね、大阪高商から、雑誌の中に。小西寅雄というペンネームでね。

(大谷) ペンネームでね。

(菅谷) あ、「伊太利亜の旅」が出てね、小西寅雄はその大を小にして、猪を虎(寅)にしたんだと。そのくらい頭が回れば、とつぱに分つたんだらうなあ、というのがね。大野辰見という人が書いているんだなあ。「大阪高等商業学校機関誌



東栄段ボール株式会社

本社・工場 埼玉県越谷市大里688番地
 電話越谷 (0489) 62代表2111番

東京工場 埼玉県草加市弁天町482番地
 電話草加 (0489) 2-3320・3330番

その無名氏という署名が先生の筆跡なんです。

その筆頭第一が、志賀直哉「荒絹」それから「夜の光」菊地寛「啓吉物語」芥川龍之介「傀儡師」それから何か、何ですかね。それはみな先生「南教授」ご記憶ですか。無名氏という名前で寄贈なさった。それでいつか、何かのお言葉の中に、「わしもまあ、文士になったならば菊地寛なんかよりはうまくなるなあ」ということをね、教室でおっしゃったことがあると記憶してします。

(佐々木) 僕等の講義の中にね、ずいぶん芝居、浄瑠璃の文句や、狂言の話が出てくるんですよ。

だからやっぱり芝居が非常に好きでね。

(夫人) 芝居は好きでしたね。

(佐々木) 浄瑠璃の文句で、三勝半七のさわりなんかもずいぶん出るんですから。

(夫人) 一時うなっていましたね。あのさわりというんですか。ところどころをね。

(菅谷) それ、講義の中にも出てくる。(佐々木) ずいぶん出てくるんですから。

(菅谷) 講義の中に出てきて、そのときやっぱり肩を動かすんです。

(大谷) 声色でうなるんですか。

(夫人) いいえ。

(大谷) 文句だけを。

(夫人) 身体を振りながら。何か浄瑠璃を一寸。

(大谷) そうですか。

(夫人) ほんの一部分ですが。

それを伊藤整氏が、何かでひょっと、勘違いをして、中村賢二郎さんが、「中村賢二郎教授。大正八―十三年在任。商業英語担当。高松高商創立とともに転出」図書館長の時代にこういう方針をとったと書いてあるんです。

私はその本を読んでから、伴先生のところへ送ったことがあるんです。というの、伊藤整氏の本を伴さん読みたかったです。

自分では買いにいらっしやらない。私が読むと、先生、今度こういうのが出ましたといって。すると批評を書いて私のところへよこされるのです。はがきで。

大正日日にスカウト

その中に伴さんが、この伊藤整氏のこれにしかじかとして、中村君の名前を書いてあるが、それは誤りな

り。大西猪之介君の建築によるものであると、訂正がいっぺん来たことがあります。

それで、先生図書館長時代、ほんの一年半ぐらいでしょうけれど、そういう方針をおとりになったこともあつたか。

(菅谷) ああ、そうそう、あの小林多喜二とかね、伊藤整とかいう連中は、いづれも大西先生が出てからの学生ですからね。

しかしまだその余じんが、その緑丘にみながらいる時代の学生ですよ。大西余じん、ああいうものは大西先生の文学的面的ばかりを、とりあげた人じゃないかと思うんですが、ああいう型やぶりの人間というのは、高等商業には少ないでしょう。

件で、みんな出られたときに、大正日日新聞を興そうとして、大西さん……。

大西文庫と無名氏

(佐々木) だからね。そういう点からみるとすね、経済学者というよりもね、むしろその文芸、浄瑠璃、芝居でしょう。

そういう面に親しみのあつた人じゃないかと、僕等その時分にそんなことも何も分らない。ですけれども今になってそう思うんですね。

だから、あの人は夏目漱石以上の文豪になれたと思う。

(菅谷) それ、脂粉のおいがあつたというの、そこなんだなあ。

(大谷) あのバーナード・ショーの全集をどこの版知りませんが、お

(菅谷) 大谷さん。大西文庫というのは、六五〇冊あると記憶しているんだが、そんなもんなんでしょうか？

(大谷) いやいや。

(菅谷) それね、無名氏というのがその中に入っていないんだ。きつ

(大谷) 入っていないでしょうね。それは文学です。私そういう話を聞いたことあるから、覚えてるんです。

(菅谷) だけどやっぱり、藝目さんが書いてくれて、その無名氏がやっぱり大西さんで、大西さんがそういう本を読んでおいでになつた。そうでないと、思想形成というのが分らなくなってくるから。

(大谷) 無名氏という名前。

(菅谷) 文芸書はほしい、大西さ

持ちでいらっしやう。先生ご記憶ですか、私大西文庫全部はみたことないから知らないですけども。

(南) 私等の講義のとき、ショーの一節が出ていましたね。

資本家と労働者がけんかしてね、最後にシエック・ハンドとやるんですよ。そして、資本家と労働者の握手、それが講義の最後になるんですよ。

(佐々木) なかなか芸当やられますよ。そりや。

(大谷) そういうことありました。

(南) 俗人の気がつかないような

んが読まれたもんなんだな。

(大谷) 無名氏という名前で寄贈されてる本がね。

(藝目) 学校へ行って、文庫の目録を借りようと思つたんですが、ないんです。

(大谷) ないんだ。だつて文庫そのものがね、みんな解体されてね。文庫だけでちゃんと揃ってないんだ。

だから今私の記憶しているのが、そういうふうなもんなんだ。「傀儡師」……。

(南) その寄贈というのは、そりやあのご留学前でしょうか、後でしようか。亡くなられてからじゃないですか。

それは無名氏の寄贈ですからね。

(大谷) そうですね。そしてその文字が、私記憶でどうも先生のお書きになった文字のように思えるんです。

すが。

(南) だから前だなあ。

(大谷) いや、留学の後です。

(南) ああ、後だ。

(大谷) ちょうど、そういう本が出たのは、大正七、八、九年頃です。新思潮の連中が。それからもう一つそういう意味で、私の卒業する前後に大西先生、図書館長になられた。

(南) そうですか。

(大谷) 十年、十一年図書館長になられた。

(南) 私はないわ。小樽に。

(夫人) 娘が読んでびっくりしたの、あの本じゃないですか、文庫本。小樽高商にいた有名な方の。

(大谷) 伊藤整氏ですか。

(夫人) 伊藤整さんが書いてんのね。図書館に、大西の手紙があつた。苦米地さんの名前が出てきて、何でもなく見ていて、びっくりしたといってました。

(大谷) 先生は非常に忠実に、整理のため毎日夏休みにも、お出になつたということ聞いたことがありません。

その整理は、唯今のデュイ式の十進法による整理にしました。ただの整理に行かれないすつたのか知りませんが毎日お出になつたことを高島佐一郎先生が書かれています。

もう一つ、伊藤整氏の本の中に、図書館長のごとき書いてある。その前にこれは、伴先生からうかがったんだが、学生を図書館にみるべく来るさせるためには、専門書以外に、一般的本を集めなきゃならんといつて、文芸的なものをたくさん入れたのは、大西さんだということなんです。

哲学者「大西」

法学博士 下村 宏 (海 南)

「大西はどちらかといへば哲学者でした、頭のよい男でローマに来た当座はイタリア語は少しも話せなかつたが、二三月月する中に可なり複雑なることも、イタリア語で弁じ得るやうになつてゐた。経済学についても屢々議論をしたが、独逸で仕入れた批評哲学でイタリア経済学を批評しやうとする彼の態度にはどうしても賛成出来なかつた。然し何と言つても惜しい男だつた、宅の娘とも仲が好かつた。一家のものとも親しかつた。大西が肺炎で死んだといふ報知を得たとき、一家を挙げて暫くは悲嘆の涙にくれた」

これは学友関西大学の岩崎卯一君が、羅馬にイタリア経済界の権威たるパンタレオニ教授を訪ふた会見記の一節である。いかにも恩師津村博士を眼の前に置いて、博士の国民経済学原論を興味増にコキ仰したり、「囚はれたる経済学」を公にして虹の如き気焔をあげながら、しかも其恩師に深く愛着せられてゐた大西猪之介その人を見るやうな気がする。相違ふ事何んぞ少くして相識る事何んぞ深きやとは、大西と下村の事である。大正四年リオンからの客旅から台湾に転任せる僕にあてて、

「今のやうに高い砂糖を喰はさぬ様にしたいだきだ。好い政策をお取り下さるなら喜んで提灯持をします。いつも悪口計り云ふてより、誉めた方が私にだつて気持は好いのですから」

と祝辞をよせた大西教授が死んだと聞いて夢かと計り気落ちしたのは、大正十一年歐洲の客旅に君から贈られし「伊太利亞の旅」を手にし、其才筆に酔はされてゐる時であつた。なんで気落ちしたか？それはどうしても君を操觚界に引張り込みたかつたからである。聞くところによれば鳥居素川君新に大正日日新聞を創刊するとき、君を経済部長に招聘したといふ。君の筆致に傾倒せるものは僕ばかりでは無かつたのである。大西君に就ては既に拙著「欧米より故国を」に「新聞に入りて」に、大に提灯を持ってある。否大に僕の方から君の夭折を悼んである。その若い若い大西君の著作が十一巻の経済学全集として公にされるといふ、以て如何に君の想の深く筆の到れるやを知るべきである。

君の経済学全集は所謂世間月並の経済学と経済学がちがふ、万人よろしく此徹底したる新人哲人哲人たる新人哲人たる君の書に親しむべきである。(大西全集紹介文から)

流れを汲む

副社長におなりになったときに、大西が生きていたらとおっしゃった。ということは何かで読みましたけれども、片腕になつてもううんだったのにとつていうように。

(南) 海南が、小樽高商をたずねたことがあったんだ。そのときに歌を作つてね。その歌今私覚えていないけど。大西を詠んでるんです。

(大谷) 下村海南。「名は下村宏。法学博士。通信省にて、現在の郵便振替制度創設。台湾民政長官。内閣情報局総裁。朝日新聞副社長。大西教授歿後小樽に来たとき「小樽に来て緑ヶ丘に登りたれど大西猪之介は今あらずけり」と詠んだ」

(南) 小樽へ来たけれど、大西はいない」という趣旨を詠んだんだなあ。海南は好きだったんだなあ。



南亮三郎教授

(菅谷) それでね、海南は大西先生がいなくなつてしまつたものだから大西先生の代替で採つたのが、飯島幡司さんと、わしは思うんだ。飯島幡司さんがね、朝日新聞へ入るんですよ。あの人、大阪鉄工所をやめて、あれは全く大西先生の身代わりですよ。

(菅谷) 私はあの何年か、つい最近小樽へ行ったときに時間があつたら、商大へ行ったですよ。で、いちばん見たかつたのは、あのオーストリアのメンガーが、パンタレオニに、グランドゼツツェという、彼の経済原論を贈つた。その本はパ氏のお嬢さんが地下室からとつてきたものですよ。君が持つていないならこれをあげようといつて、今度は「パンタレオニより大西へ」と書いてあるといふ。それでね、僕は、あれは、その本の扉のあたりに書いてあるのかと思つたら、そうじゃなくて、あれは手紙でした。

先生もそれでやっぱり、我々と同じだなあと思つたのは、その手紙が、あの本の上へ貼りつけて、左側のほうに大西美穂子寄贈と判を押してあつたですよ。

パンタレオニの自筆がそのまま、あそこの図書館に残つてるんですよ。今日コピーを持って来ようと思つたが、持つて来られなかつたです。

(大谷) 非常に語学がおできになつたと思つてますが、私もその後、英語もろくすぼでできないですが、英語、ドイツ語、フランス語、またイタリア語もおやりになつた訳ですね。

(菅谷) 非常に速いんだなあ。そのマスターのしかたが。フランスへ行

つたときはパンが買えなくて、左右田先生が一週間分買つて、それで預けて置いたというじゃないですか。だけれども、もう三ヶ月ぐらゐ経つてしまつと、日常のフランス語がもつになつちまうんじゃないですか。

(大谷) まあ、最後に、南先生のおやりになつた勉強のうち、特に人口論で出発する、その人口という一つの嚮導概念でおやりになるのも、普通と違い、ちゃんと立派な学問的なその道をおつぎになつていらつしや

員として、非常に大西先生に私淑していらつして、先生の口吻を伝えていらつしやるのは、口ぶり等のお伝えは菅谷さんがいぢばんだと思うんです。

先生のきびしい躰

それから、菅谷さんは講演部の委員

「公務員の道・会社員の道」という、講演がございましてね、小樽でおやりになつたんです。

(大谷) きびしいことと申しますのはね、こういうことがあつた。あの講演部。私も三年になつてから、先生のはじめられたのに、北大の全大と、小樽との間の、知的な交流、競争ということ、講演を両方で学生がやる。

私なんか出もしない。ただもう済んだからの先生の批評が面白いんですよ。

先生も毎回一人ずつ出つてという計画。それから、夏休み、地方の巡回講演というものを、先生がおはじめになつた訳ですが、まあ、大学の拡張講座みたいなものです。その北大との交流の、行つたり来たりして、講演やりますときにね、済むとお茶が出る訳です。

あるとき、札幌へ行きましてね、みんな、私共はいわば応援団の、

序言 (大西猪之介経済学全集)

大西君の此の論文は若し公刊する価値がある様なら随意に其の手筈をして呉れても宜しいと云ふ口添で関博士から私の手へ託されたのは既に二三年前の事である。私は一度ならず此の論文を細読したが、之れを直ちに公刊することを決し兼ねて在再今日に及んだのである。然るに此度、高島佐一郎教授から大西君全集発行の趣を伝承し、左様な次第であるならば、出来得可くれば此の論文も収録して頂きたいと思つて此を同教授の手許へ発送した。同教授は仔細に此の論文を通読せられて今愈々収録に決定せられた由の報に接し、私は重荷を卸した気がした。其は第一には故大西君に對し第二には同君の眞の意味にての恩師関博士に對し、私が永く負つて居た責任が高島君の肩代りによつて解除せられることになるからである。

(中略)

正直に云へば大西君の学風も人物も余り好きではない。同君の余りに一方的に鋭い而して余りに細い物の見方や歯切れが善い様に見えてその実余り歯切れのよくない物の言ひ方は、私の決して共鳴し得ない処である。然し其の大西君が個人としては私に取つて忘る可からざる貴い記憶の主であることは、私は敢えて断言する。同君が関博士ゼミナールに於ける隠忍の二ヶ年の学問的生活の賜である。

大西全集が完成せられた暁、恐らく私の愛読禁じ能はざるであらうと思はれるものは、何れも関博士の感化に帰す可きもので、其以前其以後のものは、到底然る能はざるものであらうと思ふ。大西君が津村博士の感化を最も多く受けられたことは同君の爲めに残念此上なき事と私は確信する。又後に至りて左右田博士の影響を其の善い方面よりは寧ろ悪い方面に於て——左右田博士の善い方面を悟得し得る人は、今の世には殆んど絶無であらう——甚だ多く受けられたことも、残念な事である。私は其の最も善い時代に於ける大西君の一著作たる此の社会主義論——其は大西君の著作としては決して第一位に置かるべきものでないは言ふ迄もないが——が、同君の全集の中に組み入れられることを衷心の喜を以て歓迎するものである。

昭和二年二月二十四日

福田徳三 記

経営の人 — 緑丘新聞のきつかけ —

「君達は何もやらないのに、何で入つて来たんだ。ご馳走になるのか……」。「入れといわれたものですか。」「そういうときには、遠慮するもんだ」といつてね。」「それでなければ、今度こちらでやつたときに、やっぱりそうしなけりやならん。こつちにはそんな予算はないんだ。」と、「そういうところは、けじめをきちんとつけなきゃならん」といわれましてね。

と違つて、先生に個人的にお目にかかつたことは、まあありません。(菅谷) 僕ははじめでだなあ。今日、あなたがそうであつたといふことを聞くのは、そりや目の中へ入れても痛くなかつたのは、あんななん

(大谷) そうだ。もう一つ、大西先生のおやりになつたこととして、例の昇格問題のときにね、第一回の、大正八年、中橋文相が専門学校大拡張をやつたとき、菅谷さんなんか熱をあげられ、南先生が、図書館から着物袴姿で出てこられて、あの古い屋内体操場で熱弁をふるわれた。あの昇格運動、あれは渡辺校長の一喝で二転して「内容充実運動」になつた。

(大谷) 年四回に分けてましてね、小さな形、いまの週刊誌の大ききの三十六ページ建てくらいにして出すことになつた。やっぱり大西先生のい

あのときにね、大西先生、学校と卒業生と学生との交流、コミュニケーションをもちとよくしなくちゃいけないんで、それまで年に一回出ていた校友会雑誌を、南先生知つていらつしやいますか。

それからもう一つ、その時に、学長の、いや校長の、自由に使えるお金を、こしらえなけりやいけないと、こういうことを教室でおっしゃつてたみたいでした。

(南) ああ。



「大西猪之介経済学全集」に寄す

関 一 上 田 貞次郎
小 泉 信 三 手 塚 寿 郎

大西猪之介君の経済学全集刊行の計画が愈々実現せらるることを聞いて喜びを禁じ得ないものは私一人であるまい。大西君が明治四十四年東京高等商業学校専攻部の業を卒りて大正十一年二月に突如易簪せられた迄の歳月は僅に十一、二年に過ぎない。此短日月間の労作は積んで十一卷六千数百頁の全集となったことは君の日夜斯学の研鑽に努力せられたことを如実に語って居る。然し君の労作は量に於てのみならず、質に於て優れて居ることは勿論である。

文明批評家としての大西君

法学博士 関

(元東京商大教授・大阪市長・故人)

せむとしたのである。後年公刊した『囚はれたる経済学』中には其書名と同じ題目の前篇よりも実は後篇『生と学との距離』が主要部分を占めて居る。之は君の留學中の收穫であつて、君は此基礎觀念の上に経済学を築かむとしたのである。全集中に採録せられた講義稿本の原理や経済史、貿易政策は未だ一読の機会を得ないが、此根本思想の上に展開せられた研究であると信ずる。

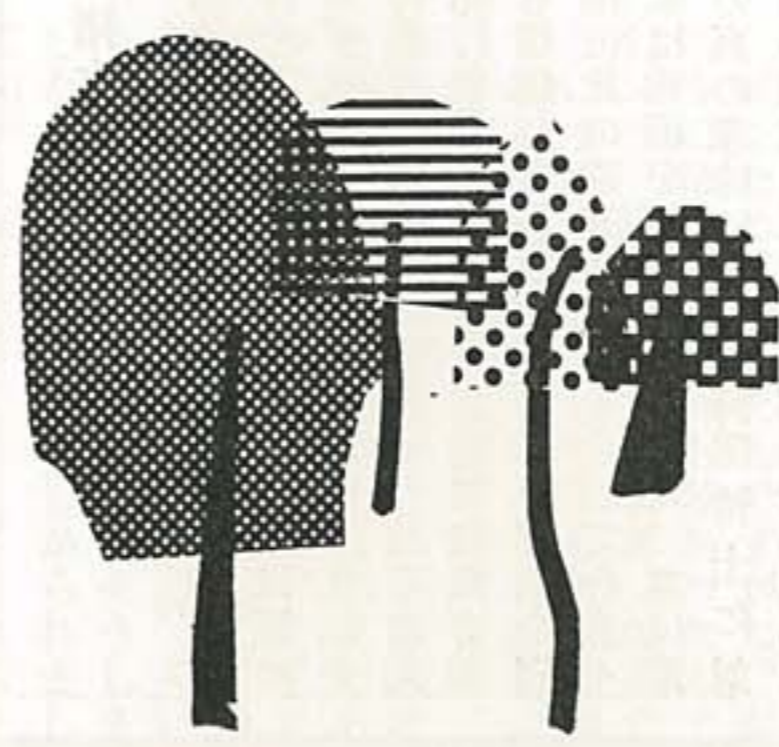


(左から) 大西夫人・村井夫人・佐々木理事長

座談会のあとで

それでどうも、お話はつきないと思いますけど、あまり遅くなりなると、奥さんたち、お帰りが……どうも本当に不行届きで。

(菅谷) 佐々木さん、週刊誌へ、大西先生の書簡を集めていたの、あれ集まりましたですか。
(佐々木) 最初二つ三つね。なにか手紙をもらいましたけどね、案外効果なかったですなあ。
(菅谷) ああ、そうですか、さっき私出そうと思つてた。
(佐々木) あなた、ごらんになりました?
(菅谷) 見ました。先生が病気になる直前私も先生から一通もらつたと思つた手紙がありました。ところがね、出口さん「出口豊泰氏、小樽啓明会の推進者「人口と国力」編集刊行の一人」僕の家へ来て、これは先生のじゃない。奥さんが書いたんだと。先生の字と、奥さんの字は、一べんみると、直ぐわかると思つていました。それで佐々木さんの集めた手紙の中にね、奥さんの代筆が混つてやせんかと思つていたので、さうか。
(佐々木) 二つか三つ位ね、手紙をもらいましたけどね。そりゃ何か、大西全集の中の一つあるがとか、いうのが一つと、それから奥さんがね、ここに、東京にいらつしゃるといふこととの、なにかそんなことでしたよ。余り効果なかったですよ。
(菅谷) そうですか。
(佐々木) ただね、これはね、もう少し実際にやろうと思えば、同期生です。つまり、神戸高商の卒業生のね、現存の人にです、すれば多少効果があるんじゃないかという印象を受けましたね。大西さんの同期生の人で、もしか生きていたら、恐らく八十近いでしょうからね。
(菅谷) それにしても、あの、例の三菱の上野さんもう亡くなつて居るでしょうなあ。「上野福三郎当時三菱商事、小樽支店長、大西教授と神戸高商同期」
(佐々木) それから、何はどうですか、あれ日商の会長やつた高畑誠一さん、あれ同期じゃないですか、あ、「高畑誠一、辰鈴木ロンドン支店長、のち日商株式会社社長、会長、神戸高商卒」
(菅谷) そうかな。
(佐々木) いっぺん、高畑君に会つたら、きいてみようと思つてますがね。石井光次郎さんは、一回生です。
(菅谷) そうですかあ、いや私は知りませんが。
(佐々木) そうだと思つて、よかつたですなあ、こんなの見せてもらつて。
(大谷) こつちで、いっぺんに揃わんと思つたから、図書館に頼みまして、送ってもらいました。
(佐々木) そうですか。
(大谷) あと、先生のお使いになつた本も、急にあとで思い出して、今



朝来たんです。
(佐々木) そうですか、写真にとつておきゃね。
(大谷) しばらく借りられますからそれに、あれね、こういう「本を示しながら」先生「大西」お読みになつた、このように、この横にかいてある、こういう感想文や何かを、全集の中にいれられなかったのですから、何かの機会に、二つ、三つ、抜き書して発表してもらおうと思つて居る。
(佐々木) これらの本は貴重品だから、よく、なくならんと来ましたね。
(大谷) 本ですか。いや、そりゃ、やっぱりの、間に合わんと思つて、ね、図書館から札幌の日航の事務所に、届けてもらひましてね、札幌の日航に、卒業生がいるもんで、から、これは間違ひなくこつちへ届くようにと。みんな卒業生のおかけです。
(八時終る)
(令嬢貞子氏は大蔵省国際金融局長村井七郎氏夫人)

下宿を訪ねて語る

小泉 信三

(元慶応義塾々長・故人)

大西教授とは同教授の渡欧前にも面識はありましたが、親しく往来談論するやうになつたのは英吉利で事です。一九一四年八月幾日であつたか歐洲戦争後開戦数日の事です。伯林日本人倶楽部で、ミュンヘンからの上京途上兵士に銃剣を突き付けられて身体検査を受けた話を人々に聴かせて居る人がありました。これが大西君でした。それから更に数日後同じ船で倫敦に逃れ、年の暮更に私の居った劍橋に来るといふので素人下宿などをさがして、同君を待受けました。それから三三ヶ月の間殆ど毎日のやうに相往來してよく議論をしました。後の著作にも現れてゐるやうに同君は実に多趣味の人でしたから、それに引込まれて此方も色々の方面の話題をつかまへて議論することにになりました。辺幅を一向飾らないことは御承知の通りで、午頃下宿を尋ねて見ると、日本のドテラを着たままベットの上に引くり返つてゐる。傍に投げだしてあるのが、Kantstudienの一冊とバアナアド・ショウの小説だといふやうなことでした。

大西全集は永遠の芸術品

法学博士 上田 貞次郎

(元東京商大教授・故人)

大西君は全く天才的人人であつて鋭い推理の頭脳を有すると共に又文藻に富んでゐました。又非常な勉強家で読書の範囲の広いことは常に私を驚かしたものです。同君が今日まで生きてゐたら無論我学第一流の人として一般から認められたであらう。かくして小樽高商が北海道における学問の中心として重きを為さんとしつゝあつたことは私の実見した所でありませう。

私に於て大西先生は先人未発の経済学の方法を提示しようとしたのではないのであります。只一己の方法論上の立場を明らかにして置きたかつたのでありませう。それにしても新しくもない方法論を何故に公にせられたのでせう。

考ではなく、之を読んで益する人が多からうとの希望があることと思ひます。

又大西君は自分が極めて旺盛な研究心の持主であつただけに他人の研究心を鼓舞する力に至つても亦非凡なものがあつたので同君の教を受けたために奮奮して学者たらんことを志した学生も少からずあつた。又小樽高商の弁論部が催した講演を通じて同様の刺戟を受けた人は現に北海道全体に多数あることでありませう。

(大西全集紹介文から)

「囚はれたる経済学」と遺稿について

手塚 寿郎

(元小樽高商教授・故人)

「囚はれたる経済学」が公にせられて間も無い或日、大西先生は飯島氏より宛てられたと云ふ書信を私に見せて下さいました。もし私の記憶に誤がないなら、それには新著の「Homage」に答へての御札が先づ述べられてあり、次に新著に対しての略評が述べられてあり、最後に其略評が一口に纏められてあつたやうに存じます。其一口とは「大西教授から貰つた新著は石橋五郎さんから貰つた南洋みやげの珈琲に等しい」と云ふのであります。大西先生は此言葉を註釈して下さいました。石橋さんが南洋からわざわざ携へて来てくれた珈琲は大いに有りがたく頂戴したが、其味は氏が吹聴したほど特別なものではなくて、ありふれた日本のものと少しも相異がない。そんな味

な味の珈琲ならとうの昔に日本にもあるし、味つてもゐる。大西先生の著書も同様だと云ふのです。贈られて読んで見ると総て既に知つてゐることばかり、包装は花々しいが別に新しい味はないと云ふ意味であつたさうです。

註釈を終つた後、先生は此批評は慥かに正当だと云はれました。私は此時先生の此断言によつて驚かされ且つ怪しみました。先生は予期せられが如く此飯島氏の批評をたち所に承認せらるるが、かくも致命的批評を予想しつゝ、何故に此書物を公にせられたのであるかと。私はそれを敢て先生に問ひませんでした。私の推測によりますと「囚はれたる経済学」はそれ自体として先生が存在の意義をもたせしめようとしたもので

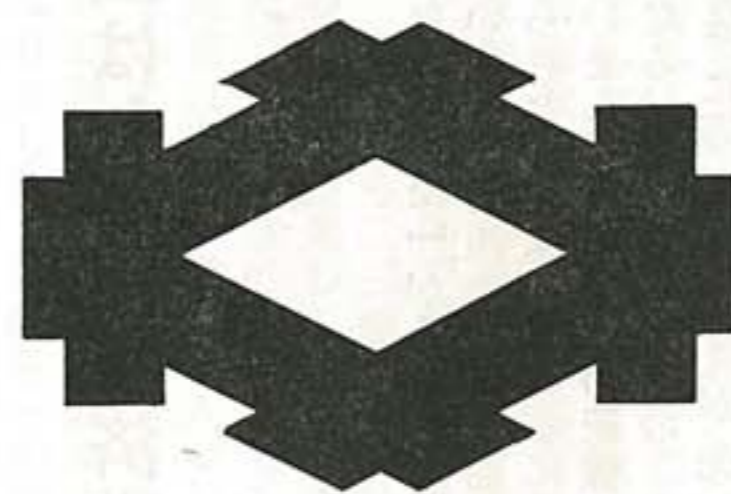
はないのであります。言ひ換へればそれに於て大西先生は先人未発の経済学の方法を提示しようとしたのではないのであります。只一己の方法論上の立場を明らかにして置きたかつたのでありませう。それにしても新しくもない方法論を何故に公にせられたのでせう。

ここに新しくもないと云ひ、又飯島氏が新しくもないと云ふ其方法は文化科学としての経済学の方法でありまして新しくないとは時間的に古いと云ふ事を意味しません、只独自の見でないといふ意味であります。時間的には文化派の方法は今も尚新しいものであるかも知れません。仮りに時間の問題を取り除いても、文化派を以て自ら任ずる学者達が其独自の方法により新なる経済学の組織を打ち建てた事実を未だに耳にしません。大西先生がねらつたのは実に此組織の建設であつたのです。先生が創見に非る方法論を公にしたのは次で公にせらるべき経済学原論が此文化派の方法を以てせらるべきことを暗示せんが為であつたのであります。解つてゐる方法も一己の探る方法なりとして前ぶれして居られたのであります。尤も大西先生の方法が純然たる文化派の方法であるか否かは御存知の如く疑を容れ得ますが、それは別の問題です。――ですから先生が学界に問ふて自らの経済学上の力量を問はせしめんとしたにせらるべき経済学原論や経済政策であつたに相違ありません。

先生が夭折せられて此らを完成せられなかつたことは、返す返すも学

ぶ者の遺憾とする所でありませう。然るに幸にも講案の残されたものがあり、そして今左右田博士、高島先生、南教授の御尽力により、それが今出版されようとしてゐます。文化派の将来に向つて興味をもつ私共は今回の出版物によつて教へらるる所が甚だ多いものと考へるのであります。私は此出版物に文化派のシステムを教へを乞はんとして鶴首して其出版を待ちつゝあるのであります。同時に文化派の組織を信ぜざる者の批評の的とならねばならぬものでありませう。ですから、私は総ての人々に此全集を御すすめたいのです。只呉れ々々も御了解を第三者として御願ひしたいのは此出版物は過半数に於て遺稿であります事情であります。今私の当面の研究の対象となつてゐる例で申せばチルゴの遺稿「貨幣と価値」の如きがあります。それは遺稿であつたが為めに、即ち充分に考へ尽してから残されたものでなかつたがために残されたと思はるやうな矛盾が沢山あるのです。大西先生はチルゴの如く俗事に關係した人ではありませんし、敬服にたえないほど厳格な方でありましたから遺稿であるが為めに存在するであらうやうな欠点は極めて少くであるかと存じます。然し大西先生が残されたのは印刷の爲めの遺稿ではないのでありますから、幾分の欠点がないとも限りません。それらはそれらとして御読み下さるならば先生の地下の喜び――あり得るとしつゝ――は必ず大きいでありませう。

(一九二七・三・九)



伝統！ 堅実！ 新技術！ 明日の建設 松村組

株式会社 松村組

本社 大阪市北区空心町1丁目70番地
電話 大阪 352-1311 番(代表)
支店 東京・札幌・名古屋・広島・福岡

北方日本社刊

「大西教授の思い出」から

「大西教授の思い出」(一九二五)は大正十四年三月、北方日本社から「北方日本特輯号」として発表されたものであるが、大西教授の思い出として纏められたものはこの雑誌が唯一のものである。

いい答案には一四〇点など

宮崎省三



大西先生の教を受けたのは私達が一番先でした。先生も初めて教鞭を執られた訳で、大変な意気込で、下宿へお訪ねして質疑しても真剣に教えて下さったが、一体に講義が難しいので遂に噛みこなせずじまいしました。

先生の講義はクラスの一番出来る者を標準とするのだと度々先生にきかされました。先生自身非常な勉強家で、何時お訪ねしても必ず本を読んだ居られました。私が東京の予備校へ通って居た時分高商の専攻部に居られた先生が、下宿を探しに行っ

て、其処のおかみさんと室代の事など、本を読みながら交渉した、といふ噂をきいて驚いたものでした。学生としての先生の勉学法は、総ての学課を甲のとれる程度に勉強し、自分の好きな学課はそれ以上に深く勉強するといふ仕方だったそうです。これは先生からききました。

先生の文章は技巧沢山で講義にも多くの美辞麗句が並べられましたので口の悪い学生は、植物園の様だと言ったりしましたが、言葉——ひいては語学については多分の才を有って居られたやうです。郷土の訛は余程洗ひ落されても最後にアクセントに遣るやうですが、先生の言葉にはそれも無く、唯稀に「行きまほか」といふ語をきく文でした。イタリ語なども直ぐ覚えられたといふ話ですが尤もの事と思ひます。

先生が百二十点とか百四十点とかいふ点を付けたといふ事はよく話題に上りますが、私が函館商業に居た時分、田中逸平先生といふ支那語の

先生がゐて、此先生もよく百十点などといふ点を付けたものです(此先生も非常に偉い人で、漢学の造詣も深く、豪傑といった風格の先生でした)斯ういうのは謂わば割増付のようなもので、学生にとってこんな有難い事はありません。校規がゆるすならばどの課目でも成績の特に優秀な者へはどしどし割増をしてやって貰いたいものだとも考えて居ります。

天折した才人としては、先生の外に石川啄木にも親しく話する機会を私はもちましたが、若くして有名になる位の方は、才の外に多分の「熱」があるやうに感じました。此の「熱」ばかりはひとへ移せないものと見えまして、先生の教えを親しく受けたにもかかわらず、徒に長命して為すところの無い私の如きは、正に慚愧に堪えない次第です。先生の教えを受けた者も、私をはじめ多くは碌々として、凡庸な生活をしてゐるのはお恥しい次第です。

追記(昭和四十四年春)
右原文の「噂」は、残念ながら今記憶に在りません。「帝国主義論」などの噂が記憶に遺って居ります。

先生の最初の講義は「歴史学派の泰斗ヴィルヘルム・ロッシヤール曰く経済学は人に始まり人に終る」という冒頭の句から始つた経済原論でした。そして、その第一章は、多分「人と欲望」というのでした。経済原論に引續いて、当時門外不出だった先生の「社会主義」の講義を受けたのは多分二年の時であつたと思ひます。先生は、スピノザの稍短命なりし

と対比してカントの長命をよく称えて居られました。先生が若し今日迄ながら居られたならば、恰もスピノザの年齢を加えカントと略同年齢になられた筈。感無量です。(大三)

プロフィール

☆全集を読むとよくわかるが、先生は、「自分は学者だから、かくかくの前提、条件ではかくなると説明はする、しかし主張はしない、自分は諸君にかくかくせよとはいわれない」と仰っているが、しかし、先生は真の意味の教育者であった。「人、世界をえんとも、生産者の魂を失はば何かあらん」とか、「顔がいかにうつればとて、鏡は責任をおわぬ」とか、「義務としてではなしに本務としてなせ」とか、はなはだ倫理的であった。

☆先生は、額ひろく、眼はつぶらで、まことに特徴ある風手であり、そのものごとく、独特のものがあつた。ひとごとくいうと、歩きぶり、颯爽というところ、そのうちに貯えられたもの、おのずから外に、にじみでるといった風があり、独特の澄んだ声で談論風発であつたらしい。しかし廊下などで、先生の方から学生に話しかけられることは、なかつた、いつもある距離があつた。

しかし、小樽啓明会の指導者として、また弁論部長として、その委員たち、わけて菅谷重平氏、西村久蔵氏、鈴木義雄氏、岡田良太郎氏などは、どういふ間柄であつたか、ずいぶん親しうに話をしておられたといふ。

ボ
ン
に
て

故早川三代治
(元小樽商大教授)



玄関を入って右の客間。大西さんに托されて来た二葉の写真を手渡すと、老主人は左右の手にそれを展げて繁々とそれに見入ってゐた。やがて、

「大西教授もこれで幸福だらう」と老主人は満足気と言葉をもらした。老主人は、ボン大学のディーツェル教授である。老教授の眼は、新婚当時の大西さん、パパになった大西さんの姿を繁々と見くらべられてゐた。

宿の女中が勢込んで三階にある私の部屋の戸を叩いた。下にディーツェル教授が訪ねて来られてゐる、と伝へた客間には、宿の主婦が老教授を迎ひ入れて、無沙汰のわびを相互に言ひ交はしてゐる処だった。

「マルクス批評を大西教授へ送ってやるのだから日本語でアドレスを書いてほしい」

老教授は黒い帽子を手にしたまま、私に薄い印刷物の包みを渡された。部屋へ戻ってアドレスを書いて玄関へ降りて来ると、それを郵便局へすぐ持ってゆくのだと云って、さつさと元氣のよい足取りで去られた。あれは「マルクス価値論の価値及び分配論の根本的誤謬」だった。

ゲートを偲ぶワイマールの旅からボンへ戻ると、留守の間の机の上に、大西さんからの久しぶりの手紙を見つけた。一月廿三日附。手紙には、私の送ったリッケルト、ジンメルの本が届いた事、日本の学界の淋しいことが書かれてあった。

「依然福田対河上の時代にして、之れに匹敵すべきものは現はれ来らず、又現はれ来る必要もなきなるべし。一橋にては三浦氏、左右田氏、然一頭地をぬく。小生はもう一度東京へでも留学したい位なり」とあった。

「十二月より約一ヶ月間東京伊豆の方面へ旅行せし処、其地に在る間は身体甚だ順調なりしが、帰りに十日ほどは全く妙に氣力ぬけて、何も手につかず。不思議な事でした。氣候のせいでしょうか。どうしても小樽は暗すぎますね」ともあった。

「文壇にては、例によって倉田百三氏中心人物なりと云ふ。何んでも一度書くと素敵な原稿料をもらう由、近頃小説家万々才なり、福田さんでも二円の本が千円になった事ありといふ。恐らくうそにあらざる可しと思ひます」ともあった。

「札幌麗沢会は十二月以来大いに再興の由、小樽の啓明会は二月に自然科学で記念講演をやるとの事です。まあ、かういふ運動も氣永くやってゐれば何かになるんでせう。ボンあたりでは僕の居た時分にはよく、夕、土曜の講演会があつて僕なんかよく顔見に行つたんだが、此頃でもそうですか。独乙学界も先輩連凋落、一向淋しいものだが、目ざましい偉才が出て来ませんか。ディーツェル先生も近頃はよほど人につきがよくなつたようですね。年のせいですかね」ともあった。

やがて出口豊泰兄からの便りに「大西さんは腸チブスで長橋の避病院へやられました。此手紙があなた

の手に入る頃にはもう癒つてしまふといふやうな調子にした。生命の危険、幸ひに癒つたとしても、頭がこわされて綿密な思索に困る様になりはしまいか、戦慄をつづけた。病中、或は病後に長い手紙をお目に入れる事を心配して一度認めた手紙の投函をやめて、新に二枚の絵葉書にお見舞を最も簡単に認め直した。それが済んで淋しく夜の休息を求めた。

○ 明けた朝。女中に呼び起された。日本から手紙が沢山。その中に一枚の黒棹の葉書、それが大西さんの計報。私は驚ろいて、その他に誰れかが詳しい便りを大西さんに就いて送ってくればしまいか。それを咄嗟に感じた。出口豊泰兄からの手紙が二通。

○ 二月九日。大西さんの急を聞いて認めた出口兄の手紙には「不取敢、この事をあなたに御知らせします。悲しんで下さい。嘆いて下さい。惜しんで下さい」とあった。「北海道も、もう寂しい」ともあった。

十二日に葬儀が済んで十三日に認められたらしい手紙には「貞子さんが何かしら不安にむづかつたのと、大西令妹の白い被衣から見える面ざしが余りに大西さんに似てゐるのが新たな哀愁をそそりました」とあった。その他に、病氣の経過が詳しく認められてあった。「八日午後二時から十時まで四回にわたる腸内出血が致命的にしまし

た。」とあった。そして、遺稿の事なども認められてゐた。

○ 床から起き上る元氣もなく、ちつと黒框の葉書を見つめてゐた。もう十時半。やつと心なく起きた。前夜の星空はもう灰色で雲ですっかり包まれて、冷い風が吹いてゐた。天氣が私の心を一層沈み勝ちにした。あの朝もしも天氣が前日の様に晴れ晴れと春の光りに満ちてでもゐたら、気分はかへって混濁してしまつたであらう。鈍い曇りに心地は少しく静められて、外套の襟を立て乍ら三階の部屋から街へと下りて行つた。玄関を出ると、はしなくも其処を新しい寝棺が何処かの不幸の家へ運ばれて行くのを見た。私の足はディーツェル教授の家へ向つた。

○ 客間で待つ間もなく、階上の書齋から降りて来る老教授の足音が元氣よく鳴つた。御挨拶の後ですぐ私は尋ねた。「大西教授から何か便りは御座いませんでしたか」「いや、別にない。わしも十一月に「マルクス価値論の価値」を送つてやつたが、その後は無沙汰をしてゐるんでね」と云ふ返事だった。黒棹の葉書を私は老教授の前に無言でさし出した。

「誰れのだ」「大西教授が死なれました」「病氣は何んだつた」「チブスでした」「チブス？チブスがまだ日本に在るか？」老教授は非常に驚かれた。椅子か

ら飛び上つて驚かれた。私はかくしから計報の手紙を取り出して展げてゐる間、老教授は黒框の葉書を手にとつて、ちつと見つめてゐた。葉書をさかさまにして、日本文字をさかさまにして、老教授は一字も親しみのない筈の葉書を、倒まにして凝つと見つめてゐた。もし私がだまつてゐたら、誰れかの死を意味してゐる事は黒棹によつて察しられはしても、それが誰れの死を告げるかは解らなかつたらう。

○ 「大西教授が死んだか！」

○ 発病から最後まで経過を語る間、老教授は黙々として聞いてゐられた。話が一段落に來た時に「学問のために惜しい事をした。わしのマルクス価値論々難に何かきつと云つて寄こすだらうと待つてゐたのに。まだ若かつたな。それに若い夫人に、幼い小供に」と言葉を切れ切れに云つて黙つてしまわれた。約半年ほど前に、丁度此の日の様に、対座して「大西教授もこれで幸福だらう」と喜ばしげな批評を写真に浴せかけられた事を思ひ浮べた。「家内もこれを聞いて、どんなに驚ろく事か！どうか、遺族の方々によくよく伝えて上げてくれ。わしと家内とから深くおみやみ申上げると云つてやってくれ。日本語が書けるといいんだがな！」

○ 甲電にディーツェル教授の名を入れたる事を許して貰つて老教授の伝言を御預りして辞去した。大西教授が「春はうれしく秋は淋しい」と書かれたボンを去つて一冬

広告マツタと美術印刷・紙工品



株式会社 三優社

京都市下京区寺町通松原下ル
TEL (361) 8171 (代表)
取締役社長 山村 太兵衛 (昭12)

是非一度皆様からの御用命を……特別奉仕

監査法人 池田昇一事務所

代表社員 池田昇一 (昭4)
島谷喜明 (昭18)
北野市久 (昭33)
野村清市 (昭35)

札幌市北4条西20丁目3番地 電話 (61) 4201 (代表)
東京都千代田区内神田2丁目5番19号 電話 (252) 2741 (代表)
共同ビル (神田橋) 7階

を羅馬で過した私の旅靴には「伊太利亜の旅」が在った。春雨の一日、それをサロンでひもといてみると居合はせた或る一人が

大西君に就いての思い出

故坂 西 由 蔵

(元神戸高商・神戸商大教授)

大西君は明治三十八年三月京都商業を卒業し、同年四月神戸高商に入身せられた。私も京都商業の出身者(大西君より一年前)でありますので、神戸高商学生中の京商出身者によりて組織せらるる同友団の会に出席して、大西君を識るに至りました。同君も時々同友団の人達といっしょに私の宅に遊びに来られました。

大西君は雄弁の人でありました。明治三十九年の春私は学友会の講演部長になりましたが、当時部の委員中に大西君が居られました。「茲に万国歴史の一頁は吾人に命じて曰く、汝雄弁なれ」と——かく大西君は絶叫せられました。忘れること出来ぬのは其の年十二月十五日に開かれた講演大会であります。其の計画には大西君の与かる所頗る大なるものがありました。各学年各組の選手が、試みた十分間演説を数名の教授が審査して優良なるもの一等より五等までと定めました。其の時の大西君の演題は「希臘を論じて吾

て来た時には、もう立派にイタリア語を話したって。」

私はサロンの窓から春雨に煙つてゐる向ひ側の骸骨寺を眺め乍ら、大西さんの新しい墓の上に、春雨が静かに暖かくふり濺いでくれる事を願った。(一九二五・紀元節)

人の使命に及ぶ」というのでありましたが、審査の結果、第一等は八十九点、第二点は八十八点で、大西君のは第二等でありました。大西君は意志の人でありました。そうして押しの強い人でありました。

私は教室に於て大西君と会する機会を得ませんでした。というのは、当時私は本科三年で商業史を予科一部(中学出身者の組)で経済通論を担当して居りましたが、大西君は予科時代に第二部(商業学校出身者の組)に属して居た為私の経済通論の講義に列せず、大西君が本二の学年を終らんとしつつかつた明治四十年三月に私は留学の途に上つたからであります。私の留学中に大西君に取つて面白くない事件が起りました。それは、如何なる理由に基いてか同君が同級生からボイコットせられたこととあります。大西君は当時ミュンヘンに滞在中の私に之を知らせて来ましたが、私は「理由の何たるを問はず同級生から絶交せられ

るといふのは君の不徳の成す所である。君は同級生の前に立って許して呉れといふことは出来ぬか」と答えてまた「君の名の猪の如くに突進する前に一寸でよいから考えて呉れ」と云つてよこしました。大西君は、私の忠告を容れて同級生に謝したようですが、少くともミュンヘンと神戸と手紙を往復した二箇月余の間は黙々として図書館の閲覧室に勉強した筈であります。同君の処女作「帝國主義論」の基礎は実に此の間に築かれたと伝えられて居ります。

大西君は明治四十二年に神戸高商を卒業し、転じて東京高商専攻部に入り、四十四年卒業後小樽高商に赴任せられました。同君は時々小樽の寒さを訴えられました。私は、自分が若し神戸高商を放逐せられたならば、寒威凜烈なる小樽へ行きたいものだと思つて居りました。けれども、今にして思えば、私は寒い小樽を望んだのではなく、我が大西君の居る小樽を慕つたのであります。

大西君は学生時代から時々私の宅に土産を持って来て呉れました。私は「どうも京都の人は土産物なんか持つて来ていけない」と申しましたら同君は「態々土産物を持って来て、怒られては引き合はぬ」と笑われました。小樽に行つてからも、相変わらず北海道名産を送られました。燻製の鮭だの、鮭の筋子だのの味は之に依つて教へられたのであります。今も此の筆を執りつつ神戸の「氷室」といふ冷凍魚の売店から買つて来た筋子で一盞を傾けて、ありし昔の追憶に堪えかねて、酒と共に落つる涙を飲みました。

大西君が海外留学の途につかれたのは、大正二年のことでありました。私は同君から当時巴里滞在中の左右田君に紹介状を書くように頼まれました。私は其の紹介状の中に「僕と大西君とは、師弟の関係がない」と書いてやりました。さうすると大西君は「師弟の関係とは教室に於て一人は高い所に立ち、一人は低い所に座つて居ることですか」と詰問せられました。それでも大西君は其の紹介状を持って巴里で左右田君に会せられました。其の時に未だ仏蘭西語の話せなかつた大西君は独りで食事することが出来ぬからと云つて、左右田君に数回分のパンを買つて貰ひ、それを兵糧として、毎日毎ルーブルに通われたさうであります。

大西君は、また文の人でありました。「囚はれたる経済学」の著者はまた「伊太利亜の旅」の著者として広く知られて居ります。但し私は大西君の文体を好まず、殊に「小西虎雄」といふ変名を用いられた、ことが気に入らませんでした。私は此のことに就いて時々大西君を攻撃しましたが、其都度同君は哄笑するのみでありました。

私が大西君にお会した最後の機会は、大正十年十二月東京に於ける社会政策学会に出席した時でありました。会後東京帝大の門を出て、本郷通りのカフェーで大西君、高島君及び神戸高商の福田君、平井君と快談したことを想ひ起します。其の翌々日社会政策学会委員は松竹の活動写真映画の撮影所を縦覧しました。其の帰りに福田先生、左右田君、大西

君、及び私の四人が食事を共にしました。あの時にも大西君の文章に就いて三人でさんさん油を取りました。私は其の夜神戸に向つて帰りましたが、東京駅まで見送られた時が大西君との最後の別れでありました。其の後大西君は伊豆の伊東に遊び、一月小樽に帰任し、からだの工合が悪くからとて約束の国民経済雑誌への寄稿の延期を求められたのが同君自筆の最後の通信でありました。それより二年前の事です。私は小樽高商には済まない事でありましたが、大西君を是非神戸高商へ迎えたいと考えまして、水島校長に頼みました。前教授津村君も予てより同様の希望を持って居られました。そうして水島校長も御同意になりましたので私は大西君の都合を聞いて見ました。私は大正九年四月から大西君

不思議な思い出

橋 本 博 介

然とした……

「世界の耳目を掠めて二旬余香として其の消息を断つたバルチック艦隊が突如仏領カムラン湾頭に勇姿を浮べたのは明治三十八年四月十四日であつた。泊すること十幾日波静かな夕仏蘭西政府の形式的抗議に錨を抜く露西亞艦隊の青年士官に、情熱に燃ゆる若き婦人を絡せて袂別を惜むドラマチックな情緒をものした優艶な一篇がカムラン湾の夕へと題して学友会報に載つた。それが色の真黒気な、目ばかり光らして居る大西猪之介の筆に成ると聞いたとき一同啞

が神戸の人となり得ることと楽しんで居りましたが機遂に熟せず、此の話しも中絶の止むなきに至りました。若しあの時に大西君が転任することが出来て居つたならば、大正九年の伊豆へ遊びに行くという様なこともなかつたかも知れません。恐らく京都にでも行つて居られたでせう。伊豆に行くことさえなかつたならば、チブス菌を宿して帰るといふこともなかつたのであります。私は此のことを思い出す毎に残念でたまりません。大西君は小樽高等商業学校教授として逝くことを満足せられたに相違ありません。けれども、私は、大西君がたとい小樽と其の高商とに背くの批難を受けられても、母校に帰つて天寿を全うしてほしかつたのであります。

(大正十四年二月二十四日夜)

人がみんな馬鹿に見えたのだから——そんな都合だから学校を了へる頃クラスから絶交された。大患で寝て居る上野君がそれを知つて我事のやうに口惜しがり全快後一同に挨拶して和解した筈である。上野君はいつも陰に廻つて、大西を取りなしていた。帝國主義論は絶交期間の産物である。

「大正十年の夏頃、やはり同期の友で久原商事の東京支店長をして居る岡信吉、日露興業の専務三浦良治、会計課長の米津喜九郎の諸君が、大西を東京へ出して勉強させやう。或る筋から年額六七千近くの金を出させ得る自信もあるし、又僕たちも出来るだけの事をしやう、そして住む家も建ててやう。衣食の保障を与えて、大西の頭を専心学問に……向けさせやうとして博士に……この様な計画を具体化させようとしたとき東京海上に居る同窓の先輩鈴木祥栄君や総務部長の堀内泰吉君が僕等と呼んで「大西を東京へ出そうと奔走して居るさうだが、やつと今名が売れて居るさうだが、やつと今名が売れて居るさうだが、やつと今名が売れて居るときだ。そのとき東京へ出すのは恰も墮落に導くに等しいものだからもう二、三年小樽で辛棒させ、東京へ出て学校も相当な地位に就ける様にしてからでないと駄目だ。博士になるには学校と云ふことも従的に関係するのだから……その時がきたら僕もまた、君方に劣らず運動もせう力も注がう。今暫く見合す事を大西の爲めに勧告する……」その事を大西君に話したら「君等の好意は非常に感謝して居るが、僕は今まで随分迷惑をかけてるんだから此上諸君の御



みんな健康
粉食で……
小麦粉なら
ハートED
(ビタミン)

東京都渋谷区千駄ヶ谷5丁目27番5号

日本製粉株式会社

副社長 伴 素彦

大西猪之介君は私の最も愛着した弟子の一人であった。私だけではない。私の妻も私の子供も、深く大西に愛着して居った。大西の話では今でも尚ほ、春の宵秋の夕に食後の家庭を賑はすのだ。広い意味で、大西は正しく私の家庭の一人であった。

いふことでは大西は大したものであった。然し横着といふことが、決して大西の特色でない。世にも稀なる俊敏さであったが、俊敏といふことが、大西の特色でない。旅行殊に温泉廻りが好きであったこと、一般に芸術趣味が豊かであったこと、話が好きで、興に乗ると一晩でも二晩も親切にさると、無暗に嬉しがったこと、理の道を辿ることを本職としながら、どちらかと云へば、情の世界に遊ぶことを喜んだことなど、大西の特色の一部であったが、

決して全部ではなかった。大西はあく迄も、「徹底した近代人」であった。人若し我が日本に、厳格なる意味に於て「徹底した近代人」を求むるならば、大西は確にその一人であった。それが何よりも、大西の特色を發揮してゐる。

人口と国力(評論集) 大西猪之介君を追懐して 津村高商教授

大西が小樽高商の教授になつてからのことである。私は大西に伴はれて小樽へ講義に行つた事がある。その途中函館の近郊大沼公園の旗亭で、夜の更くるまで語り合った。その時大西は盛んに私の旧著「国民経済学原論」を攻撃した。大西は先づ此書を目標として、之を仔細に吟味し研究し、その欠点を指摘し、その誤謬を叱咤することによつて、原論の研究を始めたといふのであった。私は言下にその意見に賛成した。言ふ迄もなく、学問は私のものでなく、公のものであるから、如何なる論難攻撃も決して厭忌するところではない、それは頗る痛快な研究方法であるから、遠慮なくやることを勧めた。すると大西は、更に、独り私の原論文だけではなく、当時日本に於て発表された総ての原論に関する著書に対し、徹底的検討を行ふ心算であるとして、虹の如き気焔を上げた。「因はれたる経済学」の著者として正に当然の考へであり、そこに大西の大西たる価値が存するのであると思つた。

工業用プラスチックのすべてにかけて20年の経験が生きている 田中弥商事株式会社

世話になるのは、たいへん苦しい。水梨の親爺が儲けた金でも出して呉れるんら兎も角だが...御好意だけは受けやう然し期待に背かぬ様折角勉強して居るよ」と辞退したので時機を待つ事になった。所が間もなく僕の家へ遊びに来た大西が「今土地を探してる、家を建てたいと思つてね大工の好いのを世話して呉れんか」「君に家が要るのかい?」「要るかいつて母の為に建ててんだ。僕が五百や六百の金で母を満足させれば此上もない親孝行だから」と言つて居た。それで「いつたい大西君は小樽に尻を据えるつもりかナア、今からそんな料見を起されては困るぜ。二年も一年も待てはしない早速何んとかしなけれや」上野君との間にそんな相談も出来た。

はう、北海屋へ出かける途中何心なく保険の話が出て、「それ程位ぢや足りないからもう一万円もつけて置け、金は僕が出してやってもいいから」と云つたが人のからだに保険をかけて金を貰ふのはあまり面白くもないと大西君は笑ひに紛らした。その夜は三橋君も入つて三人晩くまで話し込んだ。大西はそのとき既に発熱して居つた由である。

いる旨附加へてあった。快方の二字に一切の安心をもたせて居た所...ふしぎぢやありませんか。寝て居る部屋には仏壇があった。附添の看護婦に頭を揉んで貰つてねむらうとしたとき、音もなく仏壇の扉が開く。誰かが来たのかときいてみたら否いと云ふ。閉めさして眠りに就かうとするとき再び扉が開く。一夜の中にそんな妙な事がたしかに四回。あく朝十時頃、大西昨夜死んだと云ふ電報で色を失ひました」(大正十二年二月五日 小樽新聞追悼号談話転載)

前略 橋本リツ宛御書状頂きまして、御主旨はよくわかりまして結構なこと存じます。一月四日に流感にかかりまして、約四十日全床につきまして、一度に老花致しまして、御依頼の件には、勝手乍らお断り申上げるよう、本人が申しておりますので、あしからず御諒承下さいます。

「不思議に見えてならない事が二つ三つあるんですがね去年の一月でしたよ...湘南地方の旅行から帰つた大西君が僕の所へ土産物を持って来た。曾つてなかつた事であるし且つその中に家内へ椿油が一瓶あつた」「年はとりたいたいものだ君にも椿油が氣のつくやうになつたから」「ばか云へ俺にだつて金さへあればナンでも買つて来るさ」「そんな冗談を云つたりした。僕が上京する四、五日前突然大西がやつて来た。

二月二十二日、日本貿易学会関東部会で、筆者が研究報告をして、討論がすんで雑談のおり、会員遠藤浩一博士が突然言われる。「大谷さん、大学はスト巾だし、意屈したんで、このあいだ大学の図書室へ行ったんだ(農業経済の)。みるともなく本棚をみてみると、大西猪之介経済学全集という大きなものがあるんですよ。原論をとつて、いまの近経や、マル経ともちろん違つて、昔の原論ともちがうパラパラ頁をくつてみると、先生(大谷)のノートを参照したつてあるんだよ。びつくりしてね、編纂者を見ると人口論の南さん、監修が左右田さん。びつくりしたなアもう。小樽ってたいしたもんだね」

遠藤浩一博士は、東大農学部農業経済の出身、東畑精一、川野重任教授の門下、農業関係の国際貿易で学位をえられた俊秀。現在は日本大学獣医学部助教授。(大谷記)

大西猪之介経済全集が存在していることは誠に有難い事です。この編集の実務に当られた南亮三郎さんや高嶋佐一郎教授に対する感謝の念で一杯です。この全集の「経済原論」は私が講義を受けた時分のものに筆を加えられ、一層深く、懇切に述べられていられるように思われます。若し大西先生が生きながらえておられたならば、必ずや更に加えて度も書き加えられ、書き改められたであらうと思われます。(大三)

日本貿易学会関東部会席上 大西猪之介経済学全集が話題に

大西猪之介経済学全集に思う 宮崎省三

て、屢々問題となるのである。大西の洋行中、関博士なり、又私なりが、学界を去ったが為に、大西は帰朝後学界に於て、將又教育界に於て、少からず寂寞を感じたのは事実である。小樽高商では非常に優遇され、学生には慕はれ、市民には敬はれ、学者として、先生として、何に不足ない身分でありながら、心は常に南に走って居った。神戸に帰りたい、東京に行きたいといふのが、大西の切なる願であった。その神戸から私が去り、その東京から関君が去ったのであるから、大西として、堪らなくなつたのは、決して無理でない。学界や教育界に対する未練も、一時は薄らいだことであらう。大阪で元大阪朝日の主筆であった鳥居素川氏が主宰して、新に大正日日新聞を創刊するとき、大西を其社の経済部長に招聘したいといふことであつた。素川君の知己に感じて大西も意が動いたか、私に鳥居君の手紙を送り越して、何うしたものかとの相談であつた。私は、今暫く学者として学界に留るべきであると返答した。それに対する意見は遂に聞かずに仕舞つたが、大体は同感であつたと見えて、その事は実現せず終つた。然し大西の学才なり、文才なり、又は其俊敏にして多智多芸なる性質、殊に其「徹底した近代人」たる特色なりから判断して、若し同君が学界を去るとすれば、其上の最も適した仕事は、正しく新聞記者であつたと思ふ。学者としての大西も前途頗る有望であつたが、大新聞記者としての大西も随分興味多いものであつた。無味乾燥にして而も不徹底

なる現在の新聞紙が、大西の靈筆によつて、如何に興味深い読物となつたであらうか。それは独り経済記事だけでない。各方面の思想問題乃至社会問題が次第に重大なる政治問題化せんとする今日、大西の此方面に於ける旧著が、如何程人心を刺戟したであらうか。想像するだけに面白くないことである。この事は嘗て下村宏君にも話した。その後下村君が凶らずも、大阪朝日新聞を主宰することとなつたとき、大西の夭折を今更ながら強く惜んだのは、独り下村君のみではなかつた。私が斯様な感慨を懐くに至つた一つの原因は、私が色々錯雑した事情の為に、大西を東京の商大にも、又その母校である高商にも、教授として迎ふることが、到底望み得られぬと感じたからである。商大の三浦博士や、左右田博士は、何とかして神戸高商へ大西を入れるやう屢々注意された。私としてもその事は非常に熱望したのであるが、大西の性質の或点が禍したのか、その希望が遂に達せられるに至らなかつたことは、返す返すも遺憾である。大西は生来余り健康体ではなかつたやうだ。自身でも肋骨が一本足らぬといふて居つた。病身と迄はなかつとも頑健といふ方ではなかつた。然し大西が神戸に居つたならば——之は今となつては甲斐なき繰言に過ぎぬが——その性質も幾分和さ、又その健康も害せらるることなく、かの悲惨な運命も見舞はなかつたことであらうと思ふ。

つた。冬の休暇になつたといふて、小樽から東京へ出て来たとき、東京の会社で会つて、錦町の風月堂で昼食を共にして、復た会社まで附て来られ、これから伊豆へ行つて同地で正月を迎へるのだといふ話であつた。その時、帰りには復た東京で落ち会ふて、正月の歌舞伎で好きな梅幸を一所に見やうじゃないかと約束して別れたが、それが永の別れとなつたのだ。伊豆の帰りには遂に会はずに仕舞つて、間もなくその訃報に驚かされたのだ。何でもそのとき伊豆で得た病が基で、無理に雪の小樽まで帰るには帰つたが、遂に復た立たなくなつたのだ。

大正十五年二月記 (故人)

脳卒中、心臓病、交通傷害……いずれも社会の進歩とともに増える「現代病」です。私どもは、ゆたかな社会への歩みがつくり出す現代の宿敵に、いどみ、すぐれた治療薬を開発。「現代病に挑戦する——日本新薬」として、独自の地位を築きつつあります。

NI-74

日本新薬KK 日本新薬株式会社
本社 / (601) 京都市南区西大路通八条




一樹高く雲を抜いて立たば風自ら多からざるを得ず。帝國主義亦正に此の如し。或は之を迎ふるに天使を以てし、崇拜惜かざるあり。或は之を遇するに惡魔を以てし、罵倒止まざるあり。欧州に在て然り。米國に在て然り。日本に在て亦然り。

高島佐一郎 編纂
南 亮三郎 編纂

大西猪之介全集 刊行配本順序(巻)

昭和二年	五月	経済学認識論	1
六月	経済原論上	2	
七月	社会学論	10	
八月	経済史 上	5	
九月	帝國主義論	9	
十月	経済原論下	3	
十一月	経済史 中	6	
十二月	経済学研究	4	
昭和三年	一月	外国貿易政策	8
二月	経済史 下	7	
三月	文明批評	11	

全十一巻 菊版黒クロス装幀 (特製本は背皮) 各巻平均五八〇頁

然も毀譽の紛々たるに關せず、吾人は端的に斯主義と相對す。其果して惡魔なる天使たるに拘らず、斯主義の高潮は吾人の四周に澎湃たり。國を極東の一角に立つるもの、永くその繁榮を誇らむと欲せば、宜しく先づ此の思潮に對して立國の大策を確立せざる可からず。立國の大策を確立せむと欲せば、即ち先づ列強の大勢に一瞥を投ぜざるを得ず。國を思ふの一念、自ら揣らず、帝國主義論一篇を以て世の識者の教を乞はむとする所以なり。

明治四十三年九月
千駄谷に於て
大西 猪之介

大西先生の著作の批評
大西教授著「囚はれたる経済学」と「伊太利亜の旅」
法学博士 左右田喜一郎
大西教授個性・業績の回顧
高島佐一郎
「囚はれたる経済学」に対する一小疑問
南 亮三郎
(以上全集第一巻経済学認識論収録)

大西猪之介教授の「経済学認識論」を読み
赤松 要
大西教授「経済原論」出发点としての人口
宮田喜代蔵
「大西猪之介経済学全集を推奨す」
法学博士 関一ほか諸家
(以上全集第十一巻文明批評収録)

編集後記

半年にわたる編集を終つてここに大西猪之介教授特集号をお届けします。さきには大野純一先生退官記念特集、浜林生之助教授追憶特集、苦米地英俊先生特集そして手塚寿郎教授特集(二月)、米國國會図書館からの要望(寄贈)を統刊して来ましたが、さらにこの一冊を加えることは私たちが緑丘人のよこびとするところでございます。

大西猪之介教授特集号の計画は私たちが若い世代の者にとって果してこの「神代の物語り」を再現することにどれだけ意義があるのかと一時は疑問を持っておりました。

今は亡き板倉誠氏(大九)は自分の死を予感してか執拗にこの特集の発刊をすすめ、自ら同期を中心とした緑丘人に執筆を依頼し、手塚寿郎教授特集以上のものをと期待されておりました。しかし毎号の編集に追われていたものには発刊のためには確かにありました。この熱心さに少しづつ心が動き出しました。

その頃たまたま「週刊新潮」に佐々木理事長の「大西猪之介教授の資料蒐集」の記事が掲載されて大いに元氣付けられました。昨年帰省を機会に勇躍母校を訪ね、実方学長はじめ麻田教授のご案内で新築になった図書館に大西教授関係の資料を見せていただきました。

また上京時には日経金会長草野義一氏(大七)などの激励も得て計画の構想もおぼろげながら纏り、原稿依頼に踏み切りました。執筆依頼を受けた方々も五十年前の回想にはほどほど弱つたらしく、その回答は一概にも満たないという誠に悲惨な結果となり、再び暗礁に乗り上げた気持でした。

このように心の迷いのあつた時、唯一の支えになつたのは大西教授の教え子でもある菅谷重平先生、大谷敏治先生らの

激励であります。大谷先生からは来阪の都度特集について色々ご示唆をいただきました。「伝統ある母校のためだ。私も手伝いしよう」「小樽卒業生の中には、学生時代に大西教授の薫陶を少なからず受けている方もありだろうし、また受けつがれた伝統の中に育つた方もあろう。いまこそ当時の母校の雰囲気を感じて、後進者に伝える責務があるよ」「国会図書館に残るものであれば中途半端なものにせず多少遅れてもよいものを出したい」などはげましの言葉をいただきました。編集担当者として上梓していく過程において何回か大西全集の頁をめくり、神代の大人物のその偉大さ、その感化力に心打たれるものがありました。

この特集号のために原稿・資料を提供下さつた諸先輩はじめ、特に高垣寅次郎博士、猪谷善一博士、津村秀夫先生など緑丘外からの御協力に心からお礼申し上げます。

校正に当り大谷先生、札幌・戸谷太三氏(昭一三)のご協力も得て上梓にこぎつきましたことや佐々木理事長にはこの特集追悼座談会開催の申し出で心よりお引受けいただき場所までご提供下さり、ご出席いただきました理事長はじめ大西、村井お二方ならびに南、菅谷、大谷の諸先輩にも紙上をかりて厚くお礼申し上げます。

故板倉誠氏にも経過と上梓を報告し併せてご冥福を祈る次第です。

尚この特集号ご一読の後、皆様のご感想をお洩し下さいますようお願い申し上げます。

次の特集号は長い間ペンダングになっていた「伴房次郎先生の書簡と追憶」です。この特集号も精彩を放つよう皆様のご協力ご支援をお願いいたします。

(編集部)

「緑丘」44年度申込者氏名

(一)

(四月一〇日現在)

あなたのお名前がここに!

四十三年度はこの号をもって終了しました。次号からは四十四年度に入ります。左に掲載の方々は昨年度からすでにお申込みいただきました。また、全部掲載しております。四十四年度第一号を印刷する場合毎度申し上げます。途中から即ち今すぐお申込みない場合、第一号からの送付が困難です。ありますので御承知下さい。五月一杯で一応切らせていただきます。このチャンスをお願いしますと、何月に申込み下されましても来年の三月号で四十四年度はおしまいですからその点も御承知下さい。振込用紙をお使いになって御申込み下さい。

申込者氏名は緑丘誌上に発表させていただきます、領収に代えさせていただきます。お申し込みも予め御承知下さい。四十三年度申込みあった方は是非引き続きお申込みいただきますようお願い申し上げます。

(あ) 青田滝蔵、阿部保、浅田厚、安達常夫、阿部隆

(い) 井本二郎、今井四郎、稲田憲、市橋宏一郎、今坂朔久、石原和昌、板垣与一、今西信之、五十嵐世次、五十嵐良一、石部敏雄、一柳悦蔵、岩本寿雄、今井徳弥、石田健、猪俣二郎、岩沢昌世、池田孝一

(う) 内崎隆雄、上田一喜、魚谷源兵衛、植山幹夫

(え) 遠藤周寿、江口信一、(お) 大久保鹿式、岡本喜智子、岡田春夫、大倉五郎、大塚武雄、大野陽之助、小沢松次郎、奥原貞三、大竹政雄、大泉行雄、大島重男、小川愛策、大場寅太郎、奥出博、小川義、小川幸夫、大田宮吉、奥田直

(か) 加地幸一、河上鎮男、金岡達郎、神沢重治、兼子清一郎、加藤一幸、加藤利雄、河西辰男、加納光

加藤昌市、加藤勇、鎌田隆、門脇逸司、門脇利次郎、神谷彰一、香川清夫、金榮西吉、加藤正善

(き) 北住卓二、木内喜右衛門、紀野重仁、喜多村久盛

(く) 栗生豊、国安猛司、桑田喜久男、功刀素重、工藤久吉

(こ) 小山俊勝、越崎宗一、越崎清二、小林憲、小島典春、河野祐二、小島和夫、小林房男、後藤秀雄、小林正雄、小橋庸三、向当賢一、河野通雄、古関周蔵、後藤栄一郎、小佐々正規、小柴嘉雄、小林英一

(さ) 雀部秀吉、真田達男、酒井誠、佐々木成彰、佐藤武市、佐藤忠夫、笹島康平、佐藤正夫、佐藤一郎、佐竹繁寿、讚良博、坂井貫二、坂井喜一、佐藤第三、沢村重一、斉藤利一、沢井道成

(し) 白瀬治三郎、柴田静一、進藤真一、紫竹徑津視、篠田正男

(す) 角栄、杉中弘吾、杉山昌作、鈴木博、菅野祐治

(せ) 瀬尾幸三郎、清尾英夫

(た) 武岡達良、竹尾政雄、高木光孝、玉井武、高木重信、堂城不二人、高山貞一、高橋正敬、高橋正也、高田正明、竹山博、田口俊夫、田中滝一、谷本朋次、竹山涼一、高橋健次郎、高島源一郎

(つ) 坪井敬

(と) 戸谷太通三、土井誉雄

(な) 夏村三郎、中尾弘、中島与市、仲谷石多郎、中田新平、中川春雄、中津正之、仲谷泰郎

(に) 西野嘉一郎、西川正巳、西田英夫

(の) 能代鉄雄、野村正巳、野村信一、乗金林之丞

(は) 長谷川旭、林崎二郎、林源太郎、浜井清一、萩田梅三、花房弘貢、萩原栄、長谷川逸郎

(ひ) 広川博久、久富鯛輔、広島進、樋口幸治、東口環

(ふ) 藤谷明憲、藤沢静雄、福原省吾、古川敬治

(ほ) 堀池善弥、北條恒一、本間房二

(ま) 松沢実、増山昭雄、松村克巳、松本迪夫、前田良章、松浦英一、松井勲、松浦文太郎、松岡俊一、前田次啓、真野潤造、三上四郎

(み) 三浦栄、嶺川富市

(む) 村山重三郎、村木真三

(も) 百田嗣郎、森川正明

(や) 矢野正康、山口恒四郎、山中晴雄、山口保栄、山口民男、山口重男、山田孝三、山崎安兵衛、山吹芳英

(ゆ) 湯川勲

(よ) 吉田博、吉田剛、米田隆吉

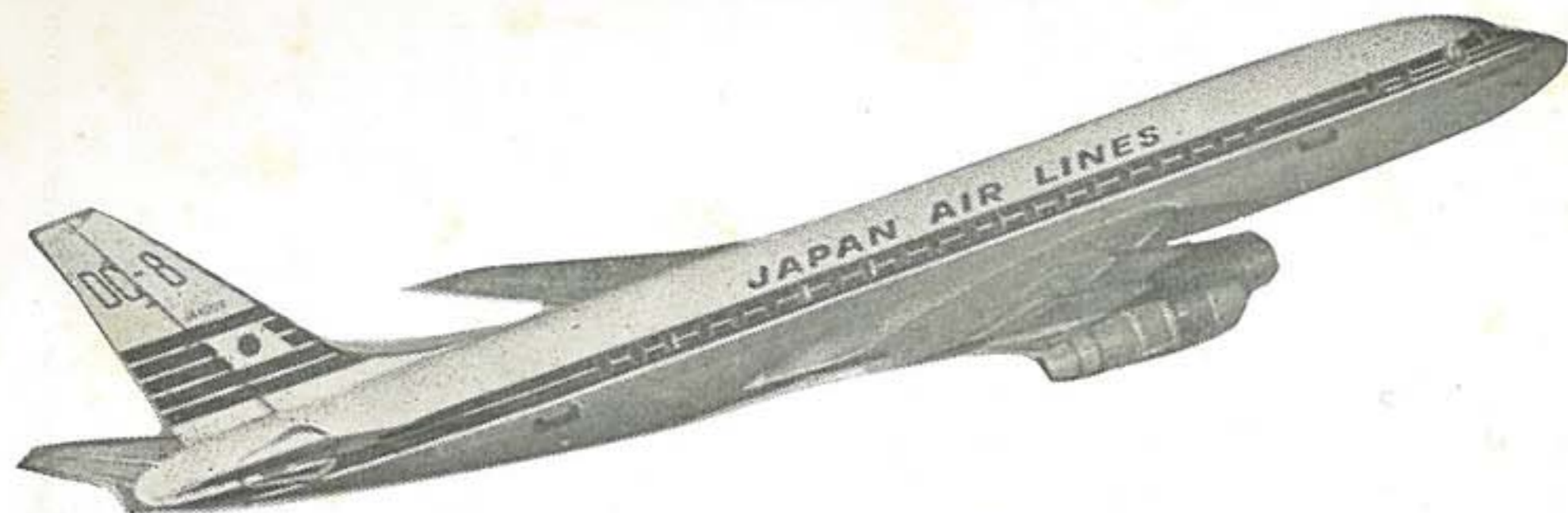
(わ) 渡辺羊三、若林敏、渡辺祥吉、渡辺徹

四十三年度申込者氏名

(い) 伊藤静雄
(た) 高木光孝
(な) 中尾弘

四月一〇日到着分迄を紙上発表いたしました。それ以降は次号で発表いたします。人手不足のため紙上発表をもって領収に代えさせていただきます。

世界のどこへでも お好きなときに!



ジャルパック新コース発表

コース名	期間	総計費(円)	<出発日>
ヨーロッパ文豪の足跡をたずねて	21日	595,000	7月31日
ソ連・東ヨーロッパ	20日	589,000	9月4日
カナダ・アメリカメキシコ	16日	555,500	8月8日
ハワイ	7日	208,800	8月17日・8月24日

お問合せお申込みは 太平洋観光へどうぞ

IATA (国際航空運送協会) 公認代理店

世界中の航空会社の代理店です。日航、全日空、国内航空はもちろんです。

JATA (国際旅行業者協会) 会員

ASTA (米国旅行業者協会) 会員

PATA (太平洋観光協会) 会員

UFTAA (国際旅行業者連盟)

太平洋観光株式会社

本社 / 東京都千代田区丸の内2の18 岸本ビル TEL(281) 9864~5
 銀座営業所 / 東京都中央区銀座5丁目7番1号 TEL(573) 5416 代
 札幌営業所 / 札幌市北2条西3丁目(越山ビル) TEL(24) 7913
 大阪営業所 / 大阪市東区北久宝寺町2-13(マエダビル) TEL(271) 6481~2